阪神、優勝への記録

野球　捨てがたく候

廣岡 明 著

はじめに

私の年賀状も、年金を貰うために出す生存証明のようなものになってしまった。

そんな年賀状に返事が来た。去年のことである。夫を早く亡くして、長男と東京で暮らしている八十近い姉からである。

怠惰な日々を送っているという近況報告へのお叱りである。老いて昔の説教ぐせがでたらしい。日記をつけなさいという。手紙に般若心経の写経を、同封して送ってきた。年がいっても腕は衰えていない綺麗な字である。

日記をつけることにしたが、閉門蟄居の身で、テレビの守りだけをしている身には、日常茶飯事のことしかない。

天候、雲の形、食事の内容、南天、山茶花、ろう梅等冬の花のことなどで、一ヶ月ばかり続けたが、変化のない日常生活に、かえって我が身が哀れになった。

そんなこともあって、参考にするつもりで、永井荷風の「断腸亭日乗」をひもといてみた。荷風散人七十三才（昭和二十六年）私と同じ年での日記である。

さすがの荷風大先生も書くことがないのか、その年は、毎日一行ですましておられる。そのなかで、「夜淺草」との記事がなんと二二六回、二日に一回淺草へ行ってることになる。まことに、うらやましい限りだ。

日記をつけるのを止めてから、私はテレビで阪神、巨人のオープンニングゲームを見た。好投を続ける井川投手の姿が伐折羅大將のようだ。

その映像が一幅の絵となって感動を呼ぶ。そして、どうしたことか、井川投手が水戸商校出身であることから、桜田門の変の水戸の浪士達を想像し、思わず藤田東湖の正気の歌を口ずさむ始末である。

試合が終わったあと、井川投手を抱きしめる星野監督の姿は、喜怒哀楽を鮮明にして闘う監督らしい。このシーンを見て、私はこれだと思った。日記の代わりにこの感動を書けばよいのだと思った。野球は筋書きのないドラマだといわれている。ヒーローとなる選手もおれば、バイプレーヤーに徹する選手もいる。そんな選手達が織りなすドラマを書こう。幸い阪神は人気球団であり、殆どの試合がテレビに映る。テレビのない時はラジオがある。

そんなことで、私は昨年、阪神タイガースの一四〇試合を全部記録した。今年は優勝への記録であってほしいものだ。

最後に、昨年の私の年賀状を書いておこう。私のプロフィールになればと思う。

あけましておめでとうございます。

ご家族お揃いで初春をお迎えのこととおよろこび申し上げます。

「勝ツマデハ欲シガリマセン」人生二五年と覚悟を決めていた少年は、戦争に負けて心のよりどころを失いました。手のひらをかえした大人達の俄か民主主義になじめず太宰治に心酔し「生レテキテスミマセン」と飢えの時代を送ってきました。

やっと高度成長の思恵にあずかった男が、今や老いを迎え、生きておれば、いい事もあるだろうと、無為な日々を送っております。

なにとぞ、ご指導のほど、お願い申し上げます。

雑煮喰い　入歯ずれたる　夫婦かな

野球 捨てがたく候／目次

はじめに・・・・・・1

1　おめでとう山下新監督・・・・・・16
2　伊良部選手への手紙・・・・・・18
3　ムーアは今年も健在・・・・・・20
4　広島ファン金本に拍手・・・・・・22
5　10回サヨナラ負け・・・・・・24
6　矢野怪我はないか・・・・・・26
7　脅威の下位打線・・・・・・28
8　浜中2発5打点・・・・・・30
9　ミス続出逆転負け・・・・・・32
10　ツキのなかった阪神・・・・・・34
11　藤田が涙の白星・・・・・・36

12 川上に完封負け・・・・・・38
コラム／富島球場（一）・・・・・・40
13 不可解なり投手交代・・・・・・44
14 胸撫でおろす星野監督・・・・・・46
15 矢野代打で勝利打点・・・・・・48
16 藪が四回３失点・・・・・・50
17 幼馴染み対決・・・・・・52
18 矢野の好リード・・・・・・54
19 桧山のサヨナラ打・・・・・・56
20 三拍子揃ったムーア・・・・・・58
21 下柳初勝利・・・・・・60
22 浜中８号満塁弾・・・・・・62
23 中日の継投に打撃陣沈黙・・・・・・64

24　またも川上に・・・・・・66
コラム／富島球場（二）・・・・・・68
25　監督も驚く大逆転・・・・・・82
26　下柳いきなり6失点・・・・・・84
27　代打八木が勝利打点・・・・・・86
28　水戸っぽ井川・・・・・・88
29　巨人に5連勝・・・・・・90
30　関本守備で貢献・・・・・・92
31　監督も認めた継投ミス・・・・・・94
32　ムーア完封・・・・・・96
33　井川の捨て身のスクイズ・・・・・・98
34　エラーで藪の足引張る・・・・・・100
35　藤田乱調・・・・・・102

36 神話再び3連発・・・・・・104
コラム／ぜいろく魂・・・・・・106
37 バントの3連発・・・・・・110
38 浜中絶好調6打点・・・・・・112
39 連日の12得点・・・・・・114
40 巨人に完封負け・・・・・・116
41 ムーア投打で活躍・・・・・・118
42 ウイリアムス3人斬り11セーブ・・・・・・120
43 好事魔多し浜中怪我・・・・・・122
44 赤星足で投手を崩す・・・・・・124
45 金本逆転2ラン・・・・・・126
46 ムーア47球でKO・・・・・・128
47 2死からの逆転劇・・・・・・130

48 代打浜中が∨打・・・・・・132
コラム／山野さんのこと・・・・・・134
49 横浜に10連勝・・・・・・138
50 伊良部13K完投・・・・・・140
51 ムーア7失点・・・・・・142
52 九回11点の逆転劇・・・・・・144
53 打たれても格好いいウイリアムス・・・・・・146
54 ご当地選手八木大活躍・・・・・・148
55 華麗な阪神野球・・・・・・150
56 素晴らしい、伊良部の投球術・・・・・・152
57 巨人とのゲーム差10・・・・・・154
58 下柳一発に泣く・・・・・・156
59 好投の久保田はドラフト5位・・・・・・158

60 信じられない40勝・・・・・・160
コラム／六甲おろし・・・・・・162
61 藪余裕の6勝・・・・・・166
62 浜中負傷・・・・・・168
63 下柳の好投に片岡のサヨナラ打・・・・・・170
64 矢野のサヨナラ三塁打・・・・・・172
65 速攻の阪神・・・・・・174
66 巨人の喜びも束の間・・・・・・176
67 久保田、下柳の白星を守る・・・・・・178
68 井川今季初完封・・・・・・180
69 久保田、藪の白星つぶす・・・・・・182
70 阪神の本塁打攻勢・・・・・・184
71 横浜に15連勝・・・・・・186

72 球団最速の50勝・・・・・・188
コラム／若林投手・・・・・・190
73 桧山サイクルヒット・・・・・194
74 二死満塁、今岡のセーフティバント・・・・・196
75 連日のお立ち台今岡・・・・・198
76 アリアス2本塁打、M49・・・・・200
77 久保田の一人芝居でサヨナラ負け・・・・・202
78 安藤二回パーフェクト・・・・・204
79 四回に一挙8点・・・・・206
80 先発全員得点・沖原4安打・・・・・208
81 リガン、初勝利投手・・・・・210
82 黒田の前に打線沈黙・・・・・212
83 ベテラン久慈、健在・・・・・214

84 井川10連勝・・・・・・216
コラム／「天晴れ！」と「喝！」・・・・・・218
85 一球の悪戯・・・・・222
86 剛腕、ルーキーの投手戦・・・・・・224
87 八木大活躍・・・・・226
88 師弟コンビの前に今季初大敗・・・・・228
89 井川好調・・・・・230
90 伊良部二回KO・・・・・232
91 金本復活か・・・・・234
92 心の隙をつかれて・・・・・236
93 甲子園初の連敗・・・・・238
94 井川投打に活躍・・・・・240
95 勝ってVロードへ出発・・・・・242

96 赤星の本塁打も、下柳で敗戦・・・・・・244
コラム／退団する人々・・・・・・246
97 神宮で4連敗・・・・・・250
98 今季初の3連敗・・・・・・252
99 井川で4連敗・・・・・・254
100 確かな素質、久保田投手・・・・・256
101 藪復調、片岡決勝打・・・・・・258
102 上原に完封される・・・・・・260
103 井川完投で15勝・・・・・・262
104 新人久保を打てず・・・・・・264
105 広沢の一発だけ・・・・・・266
106 ロード負け越し・・・・・・268
107 2度目の4連敗・・・・・・270

108 井川で5連敗・・・・・・272
コラム／少年の目・・・・・・274
109 ベテランの活躍・・・・・・278
110 ロード最終戦も黒星・・・・・280
111 久々の甲子園で勝利・・・・・282
112 41才の青春・・・・・・284
113 下柳完封・・・・・・286
114 戻ったつなぎ打線・・・・・288
115 福原復活・・・・・・290
116 アリアス2発4打点の活躍・・・・292
117 片岡の意地の一打が石毛を勝利投手に・・・・・294
118 下柳の力投報われず・・・・・296
119 矢野サヨナラ本塁打・・・・・298

120 杉山惜しい黒星・・・・・・300
コラム／渡辺オーナー　御許に・・・・・・302
121 アリアス満塁弾・・・・・・310
122 伊良部五回に崩れる・・・・・・312
123 11回、変なサヨナラ負け・・・・・・314
124 延長12回ドロー・・・・・・316
125 九回の反撃届かず・・・・・・318
126 アリアス、桧山大暴れするも・・・・・・320
127 4安打シャットアウト負け・・・・・・322
128 夢に日付をいれた日・・・・・・324
129 井川には次がある・・・・・・326
130 ムーア復調？・・・・・・328
131 どうした巨人軍（1）・・・・・・330
132 阪神に消化試合はなし・・・・・・332

133 どうした巨人軍（2）・・・・・・334
134 ムーア好投・・・・・・336
135 どうした巨人軍（3）・・・・・・338
136 今岡選手について・・・・・・340
137 桧山の16号満塁本塁打・・・・・・342
138 井川20勝へ王手・・・・・・344
139 原監督、甲子園で引退のあいさつ・・・・・・346
140 井川20勝、藤本3割・・・・・・348
あとがき・・・・・・350

おめでとう山下新監督（1試合目）

柳桜をこきまぜて、春も錦となりくれば。

山口高等学校（旧制）の寮歌である。友達の兄さんが山口高校生で、その友から教えてもらった。そして、プロ野球を初めて見たのは、その兄さんに連れて行って貰った阪神の試合である。それから、投手で監督だった若林ファンになった。１９４４年敗戦の一年前阪神の優勝した年である。

柳はしだれ柳のことだろうが、私は雪柳ではないかと思っている。私の好きな散歩道に桜並木の堤防がある。川沿いには雪柳の真白な郡落だ。毎年雪柳がまず春を告げ、追いかけるように桜が咲いて春を謳歌する。錦となるのはもうすぐだ。

解説の中村さんが六回までは選手の仕事、七回からは監督の仕事といったとおり七回の阪神の攻撃、一死後アリアス、矢野が四球、好投してきた吉見投手の顔に不安の表情が走る。代打広沢の2―0からの集中力と気力がすごい。ファールで粘った11球目、三遊間を破って1点、井川の代打八木もベテランらしく吉見投手の心の動揺をよんで初球ねらい、石井の右を抜いたと思ったが、横飛びの好守に阻まれる。代走斉藤の併殺逃れの好走塁でなお二死一、三塁。続いてベテランの域に達している今岡、

広沢と同じく2―0から6球をファールして、ねらい球を中前安打して2点、続く赤星がボテボテの二ゴロ、力走、ヘッドスライディングするも塁審の右手が上った。

昨年は、この横浜戦、藪投手の2年ぶりの完投勝利に感動した。今年は、井川で開幕戦を飾れなかったのは残念だが、山下新監督へのお祝いとしよう。長いペナントレースだ。負けからスタートすることもいいだろう。

三回、無死中前安打の種田の一球目からのいきなりの盗塁、そして鈴木尚の右前安打で1点取ったあと、なお無死一、二塁、当然バントと思ったが強行策、小川の一打は3ゴロ併殺打に終わったが、その積極策に、昨年と違って選手の顔も明るい。勝利監督のインタビューに、山下監督の目が潤んでいた。

2003年3月28日
横浜ナイター
①横浜1勝

毎日テレビ

横浜	阪神
0	0
2	0
1	0
0	0
0	0
0	2
1	0
×	0
4	2

投
●井川
谷中
吉野
金沢

打
今岡 1
矢野 1
広沢 1
斉藤 1
4

伊良部選手への手紙（2試合目）

伊良部さん、勝利投手おめでとうございます。七年ぶりの日本のマウンドに、随分緊張されたのでしょう。２四球、そしてウッズに打たれ、尽誠学園の一年後輩の佐伯にまで打たれて、２点取られた時は、正直いって駄目かと思いました。

四回には、桧山の不慣れの守備とバント処理の失敗から無死満塁、絶体絶命のピンチです。監督は動かない。二人の間で、七回までとの男の約束があったとは、翌日の新聞で知りました。このピンチを矢野の好リードもあったのでしょう、阪神戦には不思議と曲者ぶりを発揮する種田を併殺打に打ちとり、五回には、気を良くしたあなたが、主軸打者を三者三振に打ちとった右腕は、全く見事なものでした。

あのズシンとミットに響く音が聞こえてくるような一五〇キロの豪速球は影をひそめましたが、大リーガーでピッチングの組み立てを学ばれたのでしょう。阪神ファンは、あなたの円熟味を帯びたピッチングに満足した一日でした。

テレビでは七回で終って、ポート、ウイリアムスは見られなかったが、吉野投手の左殺しは、早く

も佳境に入っている。今日は鈴木尚を三振、これで5人に投げ4三振といったところ。

打つ方では三回、二死走者なしからの集中攻撃は、ドミンゴ投手が二回のボークで気が動転していたとはいえ見事なものだった。そのボークを引き出した赤星の三塁強襲安打から始まり、金本の左への初安打、浜中四球、桧山の初安打の二塁打、アリアス四球、当たっている矢野の満塁でのタイムリーで4点というもの。蚊帳の外は浜中、四番の重圧か。去年の横浜二回戦で5打数4安打、その内の一本は本塁打という猛打ぶり、やがてその勢いを取り戻すだろう。

テレビで見たベンチ。広沢の後ろに伊良部が座っていて、二人の頭だけを画面一杯にクローズアップ、そのユーモラスな風景を演出したカメラマンに拍手しよう。

2003年3月29日
横浜ナイター
②阪神1勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
2	0
0	0
1	4
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
0	2
3	7

投
〇伊良部
吉野
ウイリアムス
ポート

打
矢野3
赤星2
アリアス2
金本1
桧山1
藤本1
今岡1
11

ムーアは今年も健在（3試合目）

昨年の巨人二回戦、ムーアのデビューは、今も鮮烈な印象として残っている。その時、黒沢監督のことなら老若男女の共通の話題になると、ムーアを「七人の侍」の宮口精二にたとえた。端製な面立ちも、助っ人という役柄も似ている。

昨年の子供の日、テレビのテロップに、阪神の選手の少年時代に抱いた夢が流れた。どの選手も「プロ野球の選手」。そんな中でムーアは「父のようになりたかった」と。行き届いた家庭の躾（しつけ）が忍ばれて、私のムーア選手への思い入れは深い。そのムーアをキャンプ巡りをしてきた評論家が、調整の遅れているムーアが心配だという。

今日のムーアは、六回6安打3失点7奪三振、どうやら昨年の調子は持続しているようだ。

体格に合わないフルスイングの反省からバットをひと握り短く持った藤本のバッティングは好調だ。逆転された直後の六回、アリアスの二塁打、矢野の投ゴロで二塁を飛び出したアリアスを見て、若田部が投げた球を古木が後逸して同点、三塁に矢野を残して、藤本の右前タイムリーで勝ち越した。四回には、一死から矢野、藤本、ムーアの連続3安打で満塁、今岡の浅い右飛でタッチアップした矢

野が三本間で立ち止まる。それを見て二走者の藤本が三塁へ、ライトからの返球を中継したウッズが一瞬しゅん巡した。その瞬間矢野が生還同点とした。

岡田コーチによれば、練習を重ねたトリックプレーらしい。下位打線は絶好調だ。それに反して浜中は今日も無安打だったが、九回、足で稼いだ赤星を三塁において初打点をあげた。ほんのさ細な事がバッティングの契機になることもある。

星野監督の手堅い九回最後の守り、一塁にアリアス、三塁に秀太を送る。一、三塁とも守備のうまいアリアス、攻守にわたって活躍する予感がする。

2003年3月30日
横浜ナイター
③阪神2勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
1	0
0	1
0	0
0	1
2	0
0	2
0	0
0	0
0	1
3	5

投
ムーア
谷中
ウイリアムス

打
アリアス2
藤本2
今岡1
赤星1
金本1
桧山1
矢野1
ムーア1
10

広島ファン金本に拍手（4試合目）

拙宅の前はお宮さんの参道で、松の老樹と桜が対峙（たいじ）し、書斎から満開の桜が見える。

「サクラサイタ」

数年前まではやっていた合格祝いの電報であるが、今や過去のものとなってしまった。

浜中にやっと待望の安打が出た。執念のこもった球が右翼の前にぽとりと落ちた。今季18打席目。これには金本のお膳立てがあった。金本は、ブーイングを覚悟していた。ところが、広島ファンの暖かい声援に気を良くした金本はすでに2安打。そして七回、親友、佐々岡との四度目の対決にフルカウントから5球をファールで粘り、11球目に四球で出塁。バトンを浜中に渡した。金本との対決で気力を使い果たした佐々岡の甘い初球を浜中は右前へ2点タイムリー。「サクラサイタ」。

今日の見所は七回の阪神の攻撃だろう。カメラは和田コーチを囲んだ円陣を写し、そのあと浜中を追う、元気のない顔がクローズアップされる。先頭打者のアリアスが三振して手袋を投げつけ、ベンチに緊張のムードが漂う。矢野が左中間へ二塁打、藤本の中前安打で矢野が好走して1点。藪の犠打で二死走者二塁、今岡四球、赤星が内角変化球を右前に巧打して勝ち越し、さらに金本四球で二死満塁、

そこへ浜中の嬉しい初安打、続く桧山の好運な安打がでて一挙5点。見事に打線がつながった。

八回の裏、好投の藪をつないだ谷中が低めの球がきまらず2四球、新井の中前打で1点を献上、代わった吉野が今季始めて前田に巧打され、一球投げただけでポートにつないだ。ところが、藤本の手痛いエラーがあったあと、森笠に打たれて1点差に詰め寄られた。しかし、九回に再反撃する。先頭の赤星が右中間を破る三塁打、金本、浜中の連打、さらに、二死から八回のエラーを帳消しにする藤本の中前打で4点を追加した。その裏、ポートは広島の打者を三人で押えた。守りでは四回センターへの大飛球を背走好捕した赤星のプレーと、藪の好投が光っていた。

アメリカでも「サクラサイタ」。松井のメジャー初打席の左前タイムリーと野茂の完封そしてもう一人田口。君にも日本のサクラは咲いている。気を落とすなよ田口。年がいっても学校の後輩は気になるものだ。

2003年4月1日
広島ナイター
①阪神1勝

テレビ大阪

広島	阪神
0	0
0	1
2	0
0	0
0	0
0	0
0	5
3	0
0	4
5	10

投
〇藪
谷中
吉野
Sポート

打
金本3
矢野3
藤本3
赤星2
浜中2
桧山1
14

10回サヨナラ負け（5試合目）

楽勝と思っていたが、五回以降急に流れが変って、揚げ句のはては延長十回サヨナラ負け、後味の悪い試合だった。

監督は七回、下柳の変わりばな、木村拓のフラフラとあがったライトフライを、今岡と浜中の連携ミスで安打にしてしまったことを叱る。こんな見方はいかがだろう。

勝負事にはツキがつきもの。この試合、木村という名前にツキが廻った。七回、浜中がポトリとやった球を打ったのが木村（拓）。町田死球、移籍後初登板の下柳が動揺している無死一、二塁で、五回に初安打が本塁打で気を良くしている西山が犠打をきめる。そして代打の木村（一）が右へ同点タイムリー。投手が谷中に代った十回、シーツのボテボテの内野安打、緒方の犠打で一死二塁、新井死球、好手の矢野がパスボール、満塁策をとって前田四球、そこで出てきたのがあの木村（拓）。下柳が矢野のサインに何度も首を振る。嫌な予感がした。案の定、2―0と追いこみながら左へサヨナラタイムリーを打たれて万事休す。

絶好調だった矢野が六回以降、ツキを落してしまった男のようになっている。六、八、十回と走者を

置きながら3三振、そして捕逸と明日の矢野が心配だ。ぼやきはここまで。

金本のこと。田渕コーチが激賞していたことが今日の試合でよくわかった。只者ではない。攻走守の三拍子の選手だ。五回、栗原の大飛球をフェンスに激突しながらの好捕。四回、中前打で出塁、浜中の安打で一挙三塁へ走った足。そのうえ桧山の一ゴロを一塁手が二塁へ送球した瞬間、迷わず本塁へ突進する好走。打は今日も2安打、打率３５０、いい選手をいただいたものだ。感謝、感謝。

藤田投手、初回のピンチに、落ち着いたプレーと度胸は去年には見られなかった。滝に打たれたことは無駄ではなかった。いずれ花が咲くことだろう。谷中よ、試合は終わった。いつまでもベンチに座っていないで、悔しいのはよくわかる。勝負は時の運。明日がある。

2003年4月2日
広島ナイター
②阪神1勝1敗

サンテレビ

広島	阪神
0	0
0	0
1	2
0	2
1	0
0	0
2	0
0	0
0	0
1×	0
5	4

投
藤田
下柳
ウイリアムス
●谷中

打

赤星2	金本2
浜中2	ｱﾘｱｽ2
矢野2	藤本2
藤田1	今岡1

14

矢野怪我はないか（6試合目）

広陵高校、優勝おめでとう。

広島球場の横、平和記念公園の３３０本のサクラが満開だそうだ。いずれも被爆後の桜である。広島市内には、市役所前の三本の桜、碇神社の桜等、市内に被爆した桜の樹が残っているらしい。それらの樹々も満開のことだろう。そして、桜の花は人間の愚かさを悲しんでいることだろう。私達は原爆でなくなった二二六、八七〇人の人達を忘れてはならない。イラク戦争の映像を見ながら、ふと思った。ノーモア広島。

井川にも「サクラサイタ」。４安打９三振に広島打線を抑えた。技術論はさておき、お立ち台での発言が良かった。二回、無死一塁から前田の強い打球を左ヒザに受けたことを聞かれて「降板したら後の投手に迷惑がかかりますから」と。さすが〝水戸っぽ〟らしい。広島の放った４安打のうち３安打までがピッチャーがえし、注意してほしい。

昨日までは、下位打線が活躍していたが、今日は打つべき人が打った。まず浜中のソロホーマー。三回、猛打賞の今岡が三遊間を破って出塁、赤星四球、金本が二遊間へゴロの安打で同点、そして七回、

井川が先頭打者安打、すかさず今岡がライト線の二塁打で二、三塁、赤星一ゴロ、金本敬遠で一死満塁、浜中の犠打で井川が生還、1点ではと思っていたところへ、桧山のレフト線ギリギリの技の二塁打で今岡が帰って2点。2走者をおいて、3打席とも長谷川の変化球にやられているアリアスに打順が廻ってきた。4打席目、緩いカーブが高目にきた。一呼吸おいて振り抜いた打球がレフトスタンドへ一直線、試合を決めた。何回だったか、矢野がファールチップを肩にあてて、うずくまった時、カメラが達川コーチの心配した顔をクローズアップした。

「矢野が一四〇試合出場できたら阪神の優勝は間違いない」

達川コーチのセリフを覚えていた、カメラマンのファインプレーだ。

2003年4月3日
広島ナイター
③阪神2勝1敗

サンテレビ

広島	阪神
0	0
2	1
0	1
0	0
0	0
0	0
0	5
0	0
0	0
2	7

投
〇井川

打
今岡3
金本1
浜中①
桧山1
アリアス1
矢野1
藤本1
井川1
10

打の〇印は本塁打をふくむ

脅威の下位打線（7試合目）

昨夜来の雨が朝まで降り続いている。桜が心配で窓を開けた。大丈夫だ。散る気配もない。俳句では花の雨というのだろう。

横浜戦の伊良部は、変化球中心に配球を組み立てていたが、今日はストレートが主体だ。体重の移動がスムーズで、バランスのとれた奇麗なフォームだ。打者の手許で球が伸びているのだろうフライが多い。

横浜戦の時もそうだが、伊良部はよくロケーションが良かったからという。Location といえば、映画用語で、スタジオやセットではなく野外で撮影することだと思っている。どうもふに落ちない。スポニチにはカッコ書きで〝配球と制球〟とある。ロケーションを場所や配置が良いということからとったのだろうが、これも釈然としない。自分のことでなく、捕手や野手が良く守ってくれたことをいっているのだと思いたい。

〝伊良部クラゲ〟といったのは大沢さんである。クラゲは飄々（ひょうひょう）として海に漂うだけで、はっきりものをいい過ぎて誤解を招いた伊良部にはむかない。

おそらく大沢さんは日ハムの監督時代、伊良部にさんざんやられて海水浴で、電気クラゲに刺されたことを思い出したのかも知れない。語呂はいいが意味が不明だ。

昨日は上位打線、今日はまたもや脅威の下位打線、矢野と藤本で5打点。二回、二死から矢野が左中間二塁打で出塁、続く藤本の2球目のタイムリーで生還。ホームでクロスプレーとなったが、古田が球をはじいた。岡田コーチの積極的な走塁指示が目立つ。六回、金本の二塁打、浜中四球、桧山三振、アリアスのボテボテの三ゴロで、走者二、三塁となったものの五回に今岡のバント失敗もあり、ツキは逃げたかと思っていたが、矢野が初球をセンター前にはじき返して2点。八回に稲葉の3塁打で1点、九回、ラミレス四球のあと古田の二塁打で一打同点のピンチを迎えたが、ウイリアムスが見事後続を断った。

2003年4月4日
大阪ナイター
①阪神1勝

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
2	0
0	0
0	1
×	1
3	2

投
〇伊良部
Sウイリアムス

打
金本3
藤本3
矢野2
桧山1
9

浜中2発5打点（8試合目）

桜日和である。桜の樹を見上げると、満開の花の間をぬって青空が見える。海の色と白に近い淡紅色の清楚なコントラストが美しい。

昨日の嬉しい興奮が、一夜明けても酔いとともに残っている。

お立ち台へあがるとわかると、選手もいろんな事を考えるのだろう。三年前の広沢の〝六甲おろし〟も良かったが、昨日の浜中もよかった。

「ファンの皆様、今日はおいしいお酒をたらふく飲んで下さい」

16安打、12打点、ファンにとって、こんなありがたい試合はない、再々あってほしいものである。なんといっても、浜中の3安打2四球五打点の活躍だろう。初回、二死走者なしから戎の内角直球をバックスクリーン左へのソロ。続いて三回、一死三塁から、ワンバントで三塁頭上をこえる二塁打で2打点。そして四回、二死一、二塁から前田の外角直球を右中間へ見事な3ラン。阪神の四番はオレだと叫んでいるような本塁打だ。浜中は「オレは走者を進めるバッティングをするから、あとは四番のお前にまかす」といってくれた金本の言葉が励みになっているという。その金本、今日も打つべき

ときはタイムリー、走者を進めるときはチームバッティングと兄貴分の役割をはたしている。

その金本の活躍を連日にわたってベンチから見ている昨年のＦＡ選手片岡、八回から守備につき、代打八木の左翼線二塁打のあと、松田の初球をバックスクリーン右へ復活のアーチ。試合がきまった後とはいえ、猛烈な拍手だ。ファンは片岡を忘れていない。

もう一人、忘れられないのは、好投、好打、好走のムーアの活躍ぶり。投手としては七回５安打１失点に抑え、打つ方は２安打、とくに四回右前打のあと、今岡の左前打で二塁へ、続く赤星の中飛で、果敢な三塁へのヘッドスライディング、野手なみの走塁だ。ムーアは阪神野球に興趣を添える貴重な選手だ。

2003年4月5日
大阪
②阪神２勝

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
2	0
0	0
1	1
5	0
0	0
0	0
2	0
2	4
×	0
12	5

投
〇ムーア
中村泰
金沢
ポート

打
浜中③　今岡２
金本２アリアス２
ムーア２　赤星１
矢野１　八木１
片岡①　桧山１
16

ミス続出逆転負け（9試合目）

風もないのに、桜の小枝がゆらいでいる。見上げると、目白が花の蜜を吸っている。林檎（りんご）の輪切りを突き刺した庭のろう梅の木に、ここ二、三日来ないと思っていたら、こんな所に来ていた。いつも目白を追い拂う椋鳥までも一緒になって花の蜜を吸っていた。都に上がってきた田舎者のことを椋鳥というらしい。椋鳥とは、そんな鳥である。

六回、アリアスが五十嵐の151キロの速球を見事はじき返した特大の2ランで逆転。七回、金沢が同点とされたところで、両外人のいずれかと思ったが、吉野だった。来週からの中日、巨人戦に温存したのだろう。その吉野が飯田に左へ二塁打を打たれ、宮本が送り、一死三塁のピンチを背負った。ベッツの強いあたりの一塁ゴロを、一回に2ランを打って気を良くしている桧山が好捕、素早いバックホームで、好スタートした俊足の飯田を本塁で刺す美技で二死。ピンチを逃れたかと思ったが、矢野の手痛いパスボールで、吉野のリズムが狂い、ラムレスに二塁打を打たれて勝ち越された。内野安打で出塁した矢野をおいて、あわやホームランと思うファールをはじめ10球粘った八木が手に汗を握るシーンを演出してくれたのが、せめてもの慰めだった。

走者三塁において、初先発のよる緊張としかいいようにない下柳のボーク。ピリッとしない和製中継ぎ陣、矢野のパスボールと嫌な面もあったが、桧山の好守、とくに藤本の再三にわたる好守は見逃せまい。二回、宮出の三塁よりゴロを好捕、三回は鎌田の二塁よりのゴロを好捕したあとの一塁への好送球、八回、土橋のセンター前に抜けそうなゴロを好捕した時は、ベンチの星野監督も大きくうなずいて拍手をしていた。岡田コーチが早くから藤本を推していて、せっかく四人が競争しているのに早いのではないかと思っていたが、今になると岡田コーチのけい眼に恐れいる。

2003年4月6日
大阪
③阪神1勝2敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
3	0
0	0
0	0
0	3
0	0
2	1
0	1
0	0
0	1
5	6

投
下柳
金沢
●吉野

打
赤星4
金本1
浜中1
桧山1
アリアス①
藤本1
広沢1
10

ツキのなかった阪神（10試合目）

小説は、最初の一行できまるという。こういうのはどうだろう。

碁、将棋は強い者が必ず勝つが、麻雀はツキがあれば弱い者でも勝てる。そのツキを誰も説明できない。勝負の神様のいたずらとしかいいようがない。そのツキが阪神になかった。

一番手は桧山、二回の痛烈なショートライナー、四回の三遊間、九回の一、二塁間を抜けるようなゴロ。3安打損をする。

二番手は矢野、打球がレフトフェンスのラバーではね、グランドに落ちた不運な二塁打と、右翼手の正面をついた七回の強烈なあたり。三番手は四回、金本の左中間を破ってもいいような痛烈なあたり。四番手は八回、八木の右翼へのあたりと計6安打損をしている。裏を返せば、中日の守備力が勝ったのだろう。最後のしめは、十一回、先頭打者の井端の打球がボテボテの内野安打になった。その瞬間負けたと思った。案の定、勝負強い谷繁にポートが打たれた。最後の攻撃で金本が出塁し、一死で浜中に打順が廻り、夢をもう一度とファンは手に汗を握ったが、近鉄からトレードされた大塚に、併殺打で終った。

阪神の4得点のすべて浜中が叩き出した。四回、赤星四球、金本のセンターフライのあと、すかさず盗塁、二塁手の荒木が赤星の足を気にして二塁ベース寄りになったところをねらって打った浜中の技の安打で1点。あとの3点は、九回、田渕コーチの現役の時を思わせるような滞空時間の長い起死回生の同点3ラン。田渕コーチのガッツポーズをカメラがとらえる。この浜中につなぐ金本のチームバッティングは素晴らしい。中継ぎの藤川が二回を好投した。

あえて、敗因というならば、七回まで中日打線を無得点に抑えていた藪が、クルーズに3ランを打たれた失投だろう。そして、十回関川のボテボテの内野安打のあと、荒木の左中間を破る三塁打による追加得点が命取りとなった。

2003年4月8日
甲子園ナイター
①中日1勝

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	4
0	0
3	0
0	0
0	2
4	6

投
藪
谷中
藤川
●ポート

打
金本2
浜中2
赤星1
矢野1
6

藤田が涙の白星（11試合目）

藤田投手、六回無失点、今季初勝利おめでとう。

前回の広島戦の時とちがって、今日は安心して見られた。女兄弟で育ったことで、軟弱になった心を鍛えるために、岐阜県の不破の大滝で冬の滝修行をし、その時修得した〝不動心〟がマウンドの落ち着きとなったのだろう。

２００１年、巨人との開幕戦で中継ぎ登板したがストライクがとれないで、自責点7，そしてその年の防御率が１４・1だったことが、まるで嘘のようだ。

「強いチームより強いチームを倒す投手になりたい」入団時の発言を忘れないで、次の巨人戦で、２００１年の開幕試合の雪辱を果たしてほしいものだ。昨年の広島戦でプロ初勝利をあげた時、同期の赤星選手が5安打5打点（二塁打3）の援護射撃、昨日も赤星選手は3打数3安打。ドラフト4位の同期の桜がすでに大活躍している。藤田投手には、〝切磋琢磨（せっさたくま）〟の四文字を送ろう。

最近の監督は一人の投手の完封勝利よりも、今日の阪神のように藤田、藤川、ウイリアムス、ポートの完封リレーの方が嬉しいに違いない。

中日の山本投手は六回に降板したが、ヒット性のあたりは金本の一本だけに、不本意だったろう。四回の桧山、五回の赤星、六回の藤本と内外野間に落ちるポテンヒットが、すべてタイムリー、たまったものでなかったに違いない。

一昨日阪神は6安打損をしたが、昨日はポテンヒットの3安打がすべてタイムリーという好運が阪神に味方した。

今日は赤星、金本の足が、つなぐ野球の流れを作った。四回、中前打の赤星が、金本の右前打を福留がもたつく間に生還する。続く浜中が三振、その時金本が三盗、中日が前進守備を敷かざるをえなくなって、桧山の二塁を越える安打がでた。定位置なら、安易なセカンドフライだ。そのほか、投では藤川の中継ぎ、打では三塁打の矢野が活躍した。

2003年4月9日
甲子園ナイター
②阪神1勝1敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
2	0
1	0
2	0
0	0
0	0
×	0
5	0

投
〇藤田
藤川
ウイリアムス
ポート

打
赤星3
今岡2
矢野2
藤本2
金本1
桧山1
11

川上に完封負け（12試合目）

今にも降り出しそうな花曇りである。

八日の風を道連れにした激しい雨で、花も半ば散ってしまった。鈍色空の下の桜は、草色の芽が交り、髪の毛の薄くなった白髪まじりの初老のようで見栄えが悪い。満開の時がまるで嘘のようだ。むしろ足許の花むしろの方が人の目をひく。土足で踏むのも気になる。

拾ってきた花びらを、原稿用紙の上においてよく見ると、色づいている場所や色の濃淡が、それぞれ異なっている。なかには眞白いものもあった。一枚一枚見ると淡紅色というよりも薄紫色に近い。集まると色が変わるのだろう。花が散ったあとの若葉の季節が待ちどおしい。

次々と三振をとる井川を奪三振の新記録を作るかも知れないと思っていたが、四回と六回にアレックス、谷繁に打たれて失った3点が命とりになった。いずれも、低めにきまらないチェンジアップが餌食になった。

好投する川上に、あたっていた打戦が沈黙したのが敗因だが、六回、藤本の内野安打と代打上坂の初安打で無死一、二塁のチャンスに、今岡の強烈なピッチャーライナーと赤星のライト線ぎりぎりの

ファール。タラとはいいたくないが、くやしい。七回も左翼左への二塁打で無死二、三塁となったが、大塚にチャンスの芽をつみとられた。

テレビに映る声をあげて投げる大塚投手の追力は物すごい。その顔は悪役大塚といったところだ。充実している中日の中継ぎ陣をさらに充実さすことになる。走者三塁で打者一人に大塚をもってくることもあるだろう。１５０キロの速球とフォークは脅威だ。中日はいい落とし物を拾ったものだ。

昨年は1対1の引分け試合。星野が先発で七回まで、八回から十一回まで伊藤、最後はバルデス。伊藤が二死三塁から、絶好調の井端に真っ向勝負した。その雄姿が今も印象に残っている。この時の三人は、もう阪神にいない。

2003年4月10日
甲子園ナイター
③中日2勝1敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	2
0	0
0	0
0	0
0	3

投
●井川
金沢
吉野
谷中

打
赤星 1
浜中 1
桧山 1
アリアス 1
藤本 1
上坂 1
6

コラム／富島球場（一）

母親に縫ってもらった布のグローブとバットで野球をしたのは、戦後育ちの少年達で、私達戦前の少年野球は、ゴムマリと棒切れだった。私達の自慢は私の家のすぐ近くに野球場があったことだ。

町の人々は〈富島球場〉と呼んでいた。当時、安治川には川上に向かって渡しがあり、最後の渡しが〈富島渡し〉で、そのあとは橋で両岸が繋がっていた。

最初の橋が船津橋で、名前のとおりそこまでは、最高三〇〇頓ぐらいまでの船が航行し、中央市場をはじめ両岸の倉庫群へ荷物を運んでいた。

球場の場所が十六町（現在福島区野田五丁目）なのに、渡しも球場も、川向こうの富島町（現在西区安治川一丁目）の名前で呼ばれていることが、少年達には不満だった。

富島町が外国人の居留地だった川口町の西隣りで、私達の町より古いことと、語呂の良さから、そう呼ばれたのだろう。

安治川沿い中央市場の西門を西へ、二〇〇米程行くと交番所があった。その前の道〈妙見筋〉を北へ少し行くと、安治川に停泊している船へ、小舟に乗って重油を売っている油屋があり、その隣りに球場の狭い入口があった。そこから北へ約二十五米、煙草屋まで板塀が続いていた。球場のライト側で、

レフト側は川沿いの道に沿った人家のうしろに板塀が続いている。

その距離はおよそ四十米、その奥は草ぼうぼうで、球を探している間に走者はホームインし、野球をしている者には魔の場所だった。それに引き換えライト側は極端に距離が短く、右翼手がいなくても野球ができるほどだった。打球が塀を越えてもルールは二塁打とした。

関西電力の空地を利用しているため、変な形の球場だが、バックネットもピッチャーズマウンドもスコアボードもあった。ただ、ベンチは三塁側だけで、呉越同舟といったところだが、一チームのグローブとミットですむ便利さがあった。

私達は、球場北の端と煙草屋の間のわずかなすき間から球場へ入った。二人だけの時はゴムマリでキャッチボールをした。人が増えてくると棒切れのバットを持ち出して野球の真似事をする。

一番よく遊んだ友に門戸君がいた。彼は運動神経が抜群で野球のこともよく知っていた。三人で遊ぶ時、よく狭殺プレーをした。門戸君がランナーになると、追いつめてタッチしようとしても巧みに体をかわされた。

彼は天王寺中学（旧制）へ進学して、体は大きくなかったが、持ち前の柔軟な体と足が速いことから、ラグビー部に入り、一九四三年、全国制覇したチームの一員だった。そして、同志社大学から近鉄へ進み、オールジャパンの名選手として活躍した。野球場がラグビー選手を育てたことになる。

球場の付近は戦禍に会うとともに、一九八一年に、中央市場が関西電力の土地を買収したので、昔の面影は全然残っていない。ただ球場の入り口にあった、〈福田屋〉だけが、大阪中央石油株式会社となり、ガソリンスタンドとして、今も活躍している。

環状線の野田駅のホーム南西の方向に、一九九二年に完成した十六階建ての中央市場の業務管理棟がみえる。その西に、富島球場があったと思ってもらいたい。具体的にいえば、中央市場の旧館から妙見筋を越えて、新館へ通じている陸橋の下あたりである。

大阪のどの辺りかと問う人には、大阪市の地図を広げていただこう。そして、大阪の北、毛馬の閘門（こうもん）で別れている旧淀川の川筋を見てもらいたい。女の人がふかぶかと椅子に座っている恰好をしているのが、おわかりになるはずだ。首筋が毛馬橋、背中が源八橋のある桜の宮で、大川にかかる天神橋、中之島公園辺りが、女性の最も恥じらうところ、そこを過ぎれば、堂島川、土佐堀川が、スマートな脚となって流れている。その脚をあわせた踵（かかと）のところが、中央市場であり、富島渡し、富島球場のあったところである。

不可解なり投手交代（13試合目）

阪神は九回二死まで、7対1でリードしながら、追いつかれてしまった。〝野球はツーダンから〟その見本のような試合だった。

4点リードの九回、二死一、二塁の場面で吉野が仁志を2―0と追いこんだところで、ベンチから監督とコーチが飛び出して来て藤川を告げた。予期していなかったのだろう吉野も驚いた表情をしている。藤川は仁志に初球をいきなり打たれて3点差。なお、走者を一、二塁に置いて代打後藤、2―0と追いこみながら、ボールにするはずのフォークが落ちず、3ランを打たれて同点とされてしまった。立ち直った藤川が、巨人の主軸打者を押さえた。阪神十二回、赤星が二塁打、金本四球、浜中の犠打で二、三塁、アリアスの左翼フライで勝ち越した。ドラマは終わったかと思ったが、頼みの高橋由に谷中が本塁打を打たれて、せっかくのリードをふいにしてしまった。

不可解なのは、九回二死、2―0からの投手交代である。監督は引き分けてよかったというだけでその理由はいわない。佐藤コーチは「藤川は準備していたし、吉野にも問題はなかった。監督のひらめきでは」と。遠山さんは「監督の殺気」という。私はこう思う。

最近の阪神投手陣は、二死から、また、2―0と追いこんでからの四球や、安打が多い。注意しているのに、今日も直らない。監督は、いらだちと胸騒ぎを覚えてマウンドへ向かったのだろう。満開の桜は、人を狂気にするといった作家もいる。

監督はベットの上で、のた打ちまわって眠れない夜を過ごしたことだろう。

同点となったために、活躍した選手が忘れられないよう記録しておこう。

清原とは直球勝負し、七回まで1点に押さえた伊良部投手。二塁打2本と本塁打の金本。片岡の2ラン。アリアスのソロと犠打。赤星の2安打と盗塁。藤川には、今日の試練を糧にして、一層の飛躍を望むことにしよう。彼はそれができる選手だ。あの名投手だった小山さんが、背格好、体重、俺と同じ、コントロールのいい投手になるよと、昨年、サンテレビで解説されていたことを、藤川につたえておこう。

2003年4月11日
東京ナイター
①巨人1分

読売テレビ

巨人	阪神
0	0
0	0
0	0
0	1
0	1
1	0
0	0
0	2
6	3
0	0
0	0
1	1
8	8

投
伊良部
ウイリアムス
ポート
吉野
藤川
谷中

打
金本③　赤星2
今岡1　ｱﾘｱｽ①
矢野1　藤本1
片岡①　10

胸撫でおろす星野監督（14試合目）

二回、浜中の四球、桧山の二塁打で無死二、三塁の好機に、後続の三人が凡退し、昨日のことが尾を引いて嫌な予感がしたが、三回、その予感は見事に粉砕された。

ムーアの好運な左前打のあと、これまた好運な今岡の右翼フェンスぎりぎりの2ランが出た。今岡の久しぶりの笑顔がテレビに大写しになったあと、ＮＨＫのニュースに場面が変わってしまった。ラジオが見つからず、スイッチを入れた時は、ムーアの右翼フェンス直撃の二塁打に、アナウンサーが絶叫していた。ムーアに始まってムーアで終る8点を先取した三回の攻撃だった。

カメラがそんなムーアを追う。ムーアとアリアスの顔がクローズアップされた。ヘッドスキンの顔は、さながら比叡山の僧兵だ。高下駄をはかし、薙刀を持たせてやりたい。それと好対照なのは、左横のキリストにも似たアリアスの優しい目だ。

五回にバッティングのいいムーアをカメラが追う。空を切る音が聞こえるような、ものすごい素振りである。そして二死というのに、力をこめた打球は投ゴロ。スポニチで大野さんは、五回2点を失ったのは、その時の手のしびれが原因だという。「2アウトランナーなしで打つんだから、もうちょっ

と大人になってほしい」という佐藤コーチの気持ちもよくわかる。

そんなこと、おかまいなしで、七回二死、藤本がランナーに出ると、最後のバッティングチャンスが廻ってくる。ムーアがベンチの中を右から左へ、うろうろしている。ヘルメットを探しているのだ。案の定、二死満塁でムーアに打順が廻ってきた。大振りした打球は、あわやグランドスラムというような大きな中飛だった。今日は試合終了後の星野監督の談話が嬉しい。

「選手がオレのミスを救ってくれる時もあるし、その逆もある。信頼関係や。阪神は本当に強くなっとるぜ」

2003年4月12日
東京ナイター
②阪神1勝1分

ＮＨＫテレビ

巨人	阪神
0	0
0	0
0	8
0	0
2	0
0	0
0	0
0	0
0	1
2	9

投
〇ムーア
ウイリアムス
吉野
金沢

打
今岡②
赤星2
桧山2
アリアス②
ムーア2
浜中1
金本1
11

矢野代打で勝利打点（15試合目）

矢野選手は、平野区の瓜破中学出身で、リトルリーグ時代から注目を集めていたらしい。年勘定をすると、その頃、私は平野区役所に勤めていて、リトルリーグの大会に、区長の代理として、あいさつに出向いたこともある。また、出身校の桜宮高校は普通校に初めて体育科を設けた高校で、１９８２年、春の選抜で甲子園に出場している。矢野が入学する前のことだ。大阪の市立高校でもあり応援したが、一回戦で負けてしまった。そんなこともあって、矢野選手のことは、とても気になる。

今日は下柳ということで、バッテリー経験のある野口が先発、矢野が初めてスタメンからはずされた。疲れ気味の矢野への配慮でもあったのだろう。その矢野が代打に出て、八回二死、アリアスを三塁において、気はくでもっていったような左前打で勝利打点をあげた。

テレビのレポーターが矢野のタイムリー談話を報告した。

「今は九回の守りのことで頭が一杯ですから答えたくありません」

四月四日のヤクルト戦で、好投した伊良部と一緒にお立ち台に上がった時、バッティングをほめられても、守りを大切にしたいといっていた。また、捕手は八人の選手と向い合っているので、暗い顔

をしているとみんなに伝染するともいう。巨人戦で工藤が矢野にぶつかった時、矢野は次打者で二塁走者の金本を本塁に誘導していた。チームを中心に考える矢野の活躍は頼もしい。

アリアスの止どめの一発が三日続いた。去年本塁打を打つとベンチでペンダントにキスすることを発見したが、今シーズン初めて、カメラがうまく捕らえた。レポーターに是非とも理由を聞いてもらいたいものだ。

この試合、今岡が4安打、桧山が二塁打と三塁打。打つべき人が当りを取り戻し、吉野、藤川、ウイリアムスと終盤のリレーが成功し、監督もひと安心したことだろう。仁志と元木の衝突事故、二人の一日も早い回復を祈ろう。

2003年4月13日
東京ナイター
③阪神2勝1分

読売テレビ

巨人	阪神
0	0
1	0
1	1
1	1
0	0
0	1
0	0
0	1
0	3
3	7

投
下柳
〇吉野
藤川
Sウイリアムス

打
今岡4　金本2
浜中2　桧山2
藤本2　ｱﾘｱｽ②
野口1　下柳1
矢野1

17

藪が四回3失点（16試合目）

巨人戦のあとの阪神は弱い。そんなジンクスが生きていた試合だった。スポニチによれば、監督は試合前に注意したそうだが、それでも直らないのが、ジンクスというものだろう。こういう時は、巨人戦に参加していない投手陣が頑張ってほしいが、先発の藪、初回いきなり稲葉に一発を浴びた。

この一発は出会い頭で仕方ないとしても、三回ベッツを一塁に置いて、シュートにねらいをしぼっているラミレスに、レフトスタンドへ持っていかれたのは、いただけない。

試合終了後、テレビ大阪の〝江夏の一球〟というコーナーで、江夏さんは、一回古田への初球、矢野がはっきりとボールを要求しているのに、ストライクを投げる藪の無神経さを指摘した。

五回の阪神、アリアス四球、矢野三遊間安打、ホッジスのボークで無死二、三塁、藤本の二ゴロでアリアス生還、なお二死二塁で今岡のショート左へのヒット性のあたりを、宮本に好捕され、一点にとどまった。そのあと、これからという時、二番手のポートが試合をつぶしてしまった。

稲葉の内野安打は不運としても、次のバント処理を失敗して動揺、一死、一、二塁からラミレスの二塁打とボークで2点、さらに、鈴木の2ランを浴びて4点を失った。巨人戦のあと、アリアスがポー

トを夕食に誘って、慰めたらしいが、その効果はなかったようだ。

金沢が七、八回と無失点に抑えたが、打撃陣がヤクルトの二番手のリリーフ陣に抑えられてしまった。

今まで不動のオーダーできたが、今日は、あたっている片岡がスタメンで2安打。浜中は風邪を引いたらしい。

昨日、二軍戦を見に行った。甲子園球場の一等席で見れるのが嬉しい。中日と引き分けに終ったが、最後に出て来た、気合いで投げる伊代野投手が面白そうだ。掛け声がバックネットまで聞こえてきた。

2003年4月15日
神宮ナイター
④ﾔｸﾙﾄ2勝2敗
毎日放送
テレビ大阪

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
0	0
2	0
0	0
4	1
0	0
0	0
0	0
×	0
7	1

投
●藪
ポート
金沢

打
金本2
片岡2
赤星1
矢野1
6

幼馴染み対決（17試合目）

敗戦処理投手とはいえ、昨日推奨したばかりの伊代野投手が登板したのには驚いた。

七回、吉野が鈴木の左前打のあと、古田に2ランを浴びて降板、続く藤川が今岡のエラーのあと、四日にベンチ入りしたばかりの福川に二塁打を打たれ、八回には、ラミレスの本塁打を打たれて降板した。そのあと、左対策で日ハムからトレードされた柴田が鈴木に死球を与えて降り、一死で2点のビハインドをせおって伊代野が登板した。

古田を迎えて、0―3、どうなるかと心配したが、ストライクを一つ取ったあとのショートゴロの併殺打に仕止めた。横からの140キロは魅力がある。

七回までは、藤田（185cm）と石川（169cm）の緊張した投手戦だった。二人は秋田県出身で幼馴染みだったらしい。藤田は五回不運な安打で1点取られたが、ヤクルト打戦を六回まで4安打に押えた。一方、石川は古田の好リードもあって、6安打無失点。古田さんに受けてもらいたいとヤクルトを希望しただけに、古田捕手を信頼しきっている。

均衡を破ったのは、七回、阪神の見事な攻撃である。

藤田の代打上阪が気のない三振のあと、今岡が右中間を破る二塁打、赤星が足の内野安打、次の金本に石井の１５２キロの球が手首にあたり、ベンチは長期離脱かと肝をつぶしたが、金本の鍛えた体はびくともしない。不死身だ。一死満塁。浜中のセンターへの犠打で今岡が本塁へ果敢なヘッドスライディングをして同点。二死、二、三塁から桧山が二塁右へ執念の内野安打、土橋の体勢の崩れを見て、二塁走者の金本は古田のブロックをかいくぐって本塁へ好走塁。３対１で逆転。藤田の笑顔がクローズアップされる。それも束の間、その裏に逆転されてしまった。スポニチの長池さんは、古田は、阪神打線が内角に弱いことを知っている。阪神は古田に負けているという。

2003年4月16日
神宮ナイター
⑤ﾔｸﾙﾄ３勝２敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
3	3
1	0
×	0
5	3

投
藤田
吉野
●藤川
柴田
伊代野

打
赤星３
矢野３
桧山２
今岡１
浜中１
藤本１
11

矢野の好リード（18試合目）

昨日、今日と温度は25度、五月中旬から七月上旬の気候といわれている。家の前の参道が、あっという間に、若葉のトンネルとなった。

ヤクルトに2連敗して、阪神はエース井川の登板である。二回、ラミレス四球で、今のところ4割打者の鈴木を迎えた。徹底して外角への直球勝負である。横浜戦でチェンジアップが低目に決まらなかったことも、中日戦でチェンジアップが高目にはいって、アレックスに本塁打にされたことも、矢野の記憶に残っている。一発のある鈴木に、チェンジアップが高目にいくのが怖い。抜けて高目にはいったチェンジアップは、ただの半速球だ。鈴木は6球をファールで粘る。根負けした矢野が12球目に出したサインがチェンジアップだ。球が幸い高目に思い切り浮いて四球。無死一、二塁で好打者古田を迎え、矢野の苦心の配球が始まる。

右打ちは常識である。ただ、鈴木と徹底的に直球勝負したことで、古田は、井川のチェンジアップが調子悪いと考え、ストレートにしぼってくるだろうと矢野は読んだ。古田は一球目の直球を空振りする。カモフラージュかも知れない。矢野は容赦なく思い切って2球目で勝負に出た。チェンジアッ

プである。うまく外角低目に決まった。右打ちに徹していた好打者古田も、絶妙の緩急に思わず引っかかった。三ゴロ併殺打でピンチを脱した。

八回、直球を多投した井川にヘバリがきた。城石、宮本に打たれて1点を与え、なお、走者二、三塁で、強打者ラミレスに打順が廻ってきた。直球で勝負できないと思った矢野は、チェンジアップを要求したが、球は高目にぬけて、ラミレスのバットが火を吹いて3ラン。同点とされたが、打撃がヤクルトを上回った。三回、矢野、藤本の連打と、バントを失敗したあと、井川の絶妙の二ゴロで上位打線とつながり、今岡、赤星の三遊間をゴロで破る安打で2点。そのあと浜中のソロ、金本の2ランと打線は好調だったが、5点をもらったあと、井川の八回の乱調はいただけない。

2003年4月17日
神宮ナイター
⑥阪神3勝3敗

サンテレビ

ヤクルト	阪神
0	0
0	0
0	2
0	1
0	0
0	0
0	0
4	2
0	0
4	5

投
〇井川
Sウイリアムス

打
今岡1
赤星1
金本①
浜中①
桧山1
矢野1
井川1
7

桧山のサヨナラ打（19試合目）

阪神がサヨナラ勝ちした時は、一面の写真を楽しむために、二社のスポーツ新聞を買うことにしている。

スポニチの一面は、両手を上げ、小躍りして帰ってくる桧山を出迎える選手達の表情をのせている。万才する者、拳を突き上げる者、拍手する者。秀太が、矢野が、上阪が、浜中が、野口も、顔半分写っているのは八木、85は顔が見えないが長島コーチだ。

ニッカンは、桧山の左手に金本、右手に頭ひとつ高い、大きな伊良部が桧山の頭を撫で、伊良部の肩口のところに、赤星の横顔が写っている。ハンサムな桧山の笑顔は、まさに千両役者といったところだ。

不慣れな一塁守備に黙々として、取り組んでいる選手会長の努力に敬意を表した浜風が、打球をレフトスタンドに運んだものと思いたい。

伊良部の１３２球、４安打、11三振の完投。その緩急自在の慎重で大胆、粘り強い投球に、サンテレビで解説している小山さんが絶賛する。「若い投手よ、伊良部を見習え」と。

日刊スポーツに矢野の伊良部評がのっている。「アイツ、大きな体でふてぶてしい態度をとるけれど、実際は実に細やかで、優しい男なんです」と。

なるほど、尽誠学園で同室だった一年後輩の佐伯によく打たれるのも、そんな優しさが原因かも知れない。今日も二回にタイムリーを打たれ、今までに、7打数、4安打3打点と打たれている。

一回、阪神の攻撃で赤星と金本が、1イニング3盗塁で作った一死、二、三塁の好機を見逃した上位打線を下位打線がカバーした。

二回、アリアスが二塁内野安打で出塁したあと、矢野が中前打、アリアスの好走塁で一、三塁、藤本の二ゴロで1点を先取する。さらに、五回には藤本が中前打を放ち、今岡のセンターオーバーの2累打で同点とした。下位打線が不振の上位打線を助ける。

2003年4月18日
甲子園ナイター
④阪神3勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
1	0
0	0
0	2
1	0
0	0
0	0
0	0
1×	0
3	2

投
〇伊良部

打
今岡2
矢野2
桧山①
藤本①
アリアス①
7

三拍子揃ったムーア（20試合目）

三拍子とは、小鼓、大鼓等三種の楽器で拍子をとることらしいが、遊びをきわめた人を三拍子がそろっている人ともいう。飲む（酒）打つ（ばくち）買う（女）の三拍子である。そして、三拍子がそろうと命がなくなるともいわれている。

野球の三拍子といえば、打者は三冠王。野手は3割、30盗塁、30本塁打。投手にも投走打の三冠王の賞を設けてはいかがだろう。打の中には、バントの巧拙も参考にする。

コーチの方々から、怪我でもしたらどうするとお叱りをうけそうだが、ムーアが登板する時、野球がなお一層面白くなる。甲子園へ来る人はムーアの登板する日を選んでいるとか。昨日のムーア、本業の投では、制球の甘かった序盤に3点を失ったが、同点になってからは、四回以降、球を低目にきめ、許した安打はわずか2本。見事軌道を修正した。

走打では、脅威の下位打線の矢野、藤本が安打で出塁し、ムーアは巧みなバントで走者を進めて上位打線へ継いだ。そして、今岡の犠打と、浜中の2点タイムリーで同点とする。

圧巻は、同点で迎えた七回である。ムーアは斉藤の決め球１２５キロのスライダーをすくい上げて

右中間を破った。無死からの二塁打。今岡のバントは一塁前の小飛球、取れなかったのか、それとも、あえてワンバウンドでとって走者を三塁で刺そうとしたのかわからないが、ウッズは三塁へ送球した。ムーアは好判断で三塁へヘッドスライディング、手が三塁手のタッチをかいくぐった。無死、一、三塁となって、赤星が前進守備の三遊間を破ってムーアが生還、勝ち越した。そのあと、金本四球で無死満塁、引き離すチャンスだったが、かわった富岡投手に、浜中、桧山、アリアスの三者三振はいただけない。

ムーアの三拍子は、彼の強い集中力の賜物だろう。完投ペースだったムーアも、九回二死、一、二塁のピンチを迎え、ウイリアムスが登板、気迫のある投球で石井を三球三振、5セーブをあげた。

2003年4月19日
甲子園ナイター
⑤阪神4勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	1
3	2
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
×	0
4	3

投
〇ムーア
Sウイリアムス

打
赤星2
浜中1
矢野1
藤本1
ムーア1
6

下柳初勝利（21試合目）

ネオユニヴァースとサクラプレジデントの一騎打ちの皐月賞は見ごたえがあった。両馬は、これから良きライバルとして、競馬ファンを喜ばすことだろう。

皐月賞を見終ったあと、6チャンネルにきりかえると、甲子園球場は雨で中断していた。浜中が一回に3ラン、三回にソロと2本の本塁打で4点をリードしている。カメラは心配そうな顔をして、ベンチで待機している浜中を写していた。

小降りになって再開した四回裏の阪神の攻撃、下柳が三球すべてを空振りして三振。今岡は初球をレフトフライ。赤星は初球をチョコンとバットにあてる。球は三遊間を抜ける。運良くというより運悪く出塁したが、すぐ二盗してアウト、最小時間の攻撃にする。五回にはいってゲームが成立、浜中は元気良くライトの守備に走った。

大観衆と阪神での初勝利に力みがちになる下柳を抑える野口の好リードもあって、のらりくらりした投法は、横浜打線を4安打に抑えた。「柳の枝に雪折れなし」といったところだ。

テレビ中継が七回に終ってしまったので、楽しみにしていた下柳の移籍後初勝利の声を聞くことが

できなかった。あくる朝、一番でスポーツ新聞を見た。

「頼りがいのある四番が、頼りない投手のために打ってくれてよかったです。」

照れ笑いのひげ面を見られなかったが、その言やよし。

タイガースでの初勝利おめでとう。

昨日の試合は、浜中の2本の本塁打と八回の2点タイムリー、そして下柳の好投につきるが、六回中前打の藤本を一塁において、代打にでた矢野の勝負強いタイムリー二塁打も忘れがたい。よく打つ下位打線と上位打線の歯車がかみ合った時の阪神は強い。昨日は何より降雨コールドゲームにならなかったことを、天に感謝しなければなるまい。

2003年4月20日
甲子園
⑥阪神5勝1敗

朝日テレビ

阪神	横浜
4	1
0	0
1	0
0	0
0	0
1	1
0	0
3	0
×	1
9	3

投
〇下柳
金沢
柴田
伊代野
吉野
谷中

打

赤星3	浜中③
今岡2	桧山①
野口1	秀太1
藤本1	矢野1

13

浜中8号満塁弾（22試合目）

昨日は、今シーズン初めてテレビ実況のない日だった。昨年阪神を退団した伊藤さんと元監督の中村さんが解説しているＭＢＳを聞くことにした。伊藤さんは、「鶴の恩返し」という名言をはいて、中継ぎ投手として活躍した。今も阪神の若手の投手陣を励ましているらしい。藤川投手がグローブで口をおさえて「先発で投げたいです」と伊藤に心の内を話したという。微笑ましい。

今年の阪神の選手を、伊藤さんは去年までは星野監督に踊らされていたが、最近は選手の足が地についているという。昨日は、そんな選手達が星野采配にこたえた試合だった。

初回いきなり藪が4点とられたあと、二回に1点を返し、なお二死、二、三塁で藪に打順が廻ってきた。監督は中日の強力なリリーフ陣を考え、早目に勝負とでた。代打はヤクルト五回戦で気のないスイングで三振して監督に「アイツにはもうチャンスはない」とまでいわれた上坂である。星野用兵の妙だろう。

上坂は期待にこたえて三塁強襲安打で2点。この回はさらに暴投と赤星の中前安打で4点差を一気に追いついた。

三回は桧山の4号ソロで1点勝ち越しなお3四球でえた一死満塁で、伊代野の代打として登場した八木の中犠飛で2点をリードした。

五回、無死から藤本の絶妙のバントヒット。パリーグから移籍してプロ初打席の投手柴田、2球続けてバントの構えから見送る。2球目、バントに気をとられている中日の内野陣の裏をかいて藤本は二盗に成功。2―0から代打に淺井を送る。淺井の叩きつけるバッティングがボテボテの投手ゴロとなって、走者を三塁へ進め、監督の期待にこたえる。これが効いて、あとは一気呵成にたたみかける。今岡が適時打、そして浜中の満塁本塁打が中日の息の根を止めた。伊代野、柴田、金沢、谷中、吉野、藤川の中継ぎ陣も好投。三番手の柴田が移籍初勝利となった。

2003年4月22日
ナゴヤナイター
④阪神2勝2敗

毎日ＭＢＳ

中日	阪神
4	0
0	4
0	2
0	0
0	5
0	0
1	0
0	0
0	0
5	11

投
藪
伊代野
○柴田
金沢
谷中
吉野
藤川

打
赤星2　浜中②
桧山②　矢野2
藤本2　今岡2
上坂1　金本1

中日の継投に打撃陣沈黙（23試合目）

私の家の東側は、天竺川の堤防である。

天竺川は箕面川の支流で、北から南へ神崎川に合流する。名前のとおり、川岸には村の共同墓地が多い。一番大きな墓地は、緑地公園に隣接している大阪市の服部霊園である。阪神大震災で、この堤防が崩れ、改修工事が行われた。幼い時から馴染みの樹が多いので、なるべく残してほしいと説明会で注文をつけたが、松の木を残して殆ど伐られてしまった。

甲虫取りに夢中になった楝や、アオバズクが巣を作っていたクスノキが伐られしまったのが悲しい。そのかわりとして、菜の花の種をまいたのだろう。毎年四月には満開となり紋白蝶が舞う。菜の花もいろんな種類があるらしい。堤防の菜の花の正式な名称はカラシナで、日本人が昔から油を取り、食用としていた菜の花はアブラナ科らしい。「菜の花や月は東に日は西に」そんな一瞬を家から見ることができると思えば有難い。大阪市の服部霊園の敷地は、甲子園球場の約5倍、東側に桜並木に囲まれた大きな池がある。その桜の樹にまじって〝柳は緑花は紅〟の故事にちなんで、数本のしだれ柳が植えられている。ところが、その柳は湯上がりの老婆の髪のようで、桜にはどうみても不似合いだ。

やはり柳には白衣の足のない人がふさわしいのだろう。桜の季節に訪れるたびに、そんなことを思

い、冒頭で書いてくどいようだが、柳は雪柳だとの思いを強くする。

平凡な試合だった。

五回、藤本が右前打のあと、藤田の犠打で二塁へ、今岡の左前打で二死、一、三塁、金本の久しぶりの左中間を破る二塁打で逆転、阪神のペースは、そこまでだった。その裏、藤田は投手に打たれ、福留の2ランで逆転された。変化球が生きる藤田の低目をつくストレートがない。

五回以降の阪神は、中日の強力なリリーフ陣にノーヒットに抑えられた。阪神の朗報はここ4試合わずか1安打、打点ゼロの金本に2点タイムリーがでたことと、今シーズン初めて登板した安藤に手応えがあったことだけだ。

話は変わるが、開幕20日で石毛監督の解任はひどい。去年の不成績を監督のせいだけにするのは卑怯というものだ。チームのかなめだった田口を放出し、どれだけの選手を補強したというのだ。大リーガーの経営を眞似たところで野球は強くならない。石毛監督もさぞかし無念だろう。

2003年4月23日
ナゴヤドーム
⑤中日3勝2敗

ＢＳ7

中日	阪神
0	0
0	0
0	0
1	0
2	2
0	0
1	0
0	0
×	0
4	2

投
●藤田
柴田
安藤
藪
伊代野

打
今岡 2
赤星 1
金本 1
藤本 1
5

またも川上に（24試合目）

どうした井川。初回いきなり4点と取られるなんて藪と同じだ。テレビを見ながら一昨日の見事な逆転劇を思ったが、川上のもとでは駄目だろうとあきらめた。

あたりのでてきた福留を三振、井端を右飛と、調子の良かったのはそこまでで、相性の悪い立浪に右前打を打たれたあと、アレックス、クルーズの一発を怖がるあまり、2―0から四球をだしたのが命取りとなった。続く関川は、左投手だのに大西にかわって先発メンバーに選ばれてハッスルしていた。チェンジアップを引っかけるようにして打った打球は右中間を破る2点タイムリー二塁打。動揺したところを、中野が追い打ちをかけるようにして、左中間を破り、さらに2点を追加した。

井川の井川たるところは、2ストライク取ったあと、ボールになるチェンジアップを外角に決めてこそである。井川の生命は、直球とチェンジアップのコンビネーションである。リードする矢野の頭には、ヤクルト六回戦のことが残っていたのだろう。その日も昨日と同じようにチェンジアップが決まらず、直球中心のリードをしたが、後半へばりがきて、八回高目にきたところをラミレスに3ランを打たれて、万事休した。

この中日戦も、矢野はなんとか井川本来のチェンジアップを取り戻さそうとするが、思うようにならない。ＮＨＫ衛星放送の解説している今中さんは次のようにいう。スローカーブでカウントを稼ぎ直球で勝負した今中さんがいうことは説得力がある。「変化球を打たれたことが頭に残っているかぎり、腕を思い切り振れないものです。忘れることです」

先取点が何よりの薬だ。打撃陣が井川の心に余裕を持たすことだろう。余裕を持った心でチェンジアップを投げさすことだ。

スポニチの一面は、珍しい井川のしかめ面がのっていた。

その横には、鬼門、悪夢、金縛りの３文字が踊っていた。早く立ちなおれ井川。

2003年4月24日
ナゴヤナイター
⑥中日４勝２敗

ＢＳ７

中日	阪神
4	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
1	0
0	0
×	0
6	0

投
●井川
安藤

打
藤本２
金本１
桧山１
片岡１
５

コラム／富島球場（二）

人との出会いもあれば、本との出会いもある。富島球場のことを想い出しているうちに、ある日古本屋で一冊の本を見つけた。

吉田留三郎著【漫才風雲録】である。

藤沢さんが、杉山さん、木津川さんとの座談会で、著者について、こんなことをいっている。

「留ヤンにふさわしい亭号を、あの人に言われましてね、わたし〈流水亭〉とつけたんです。その頃、うちの親父がたまたま自分に親しい者に、なかばふざけた号をやろうと言いよって、僕は辰年生まれだから〈竜仙〉。みんなに仙人の号をやろうというわけ。そして留さんは〈市仙〉。街の仙人という意味だね。うちの年とった親父さんでも留さんにはやっぱり市仙的イメージをもっとった」

本の表紙も、そんな言葉にふさわしい加藤義明さんの切絵による砂川捨丸さんの肖像である。

私は本を開いた途端、お金を握って、店主のもとに走った。一頁に私が少年時代に過ごした町の、ひと世代前の大正時代のことが書かれていた。長くなるが引用したい。

「私の遠い外戚に野田生まれの人間がある。根っからの下町人間で、自分からは〈野田の地下のクスブリ〉と称している。一夕、このジゲのオッサンと会談する機会ができて、おぼろげの私の記憶を

確かめるとともに、昔の端席の状態、つまりは大阪芸能界の側面を覗き見ることができた。

野田で第一に浮かんでくるのは〈十六館〉という妙な名の寄席である。これは今でも残っている。中央市場の西、昔はここに富島の渡しというのがあって、野田から九条へ行く近道になっていた。〈十六館〉は、現在の中央市場の大冷蔵庫か、それに隣接した辺にあった。

立地条件も規模も、端席の見本のような小屋であったが、例のジゲのオッサンの言によれば、内容は相当のものだったらしく、当時の真打の大物が全部足を運んでいたことがわかる。松鶴、染丸、春団治、円枝などの名が出てくる。顔ぶれから考えるに、吉本が大阪の演芸会を制覇した後の時代、つまり大正末期から昭和初期にかけてのことを考える」

そういえば、祖母から初代春団治が、赤い人力車に乗って家へ来たことがあるといっていたのを思い出した。その時は、そんな一流の人が家へ来るはずがないと信用しなかったが、家の近くに寄席があったとすると、祖母のいったことも、あながち嘘をついていたとはいえなくなると、本を読んで思った。

十六町は私の生まれた町である。正確にいうと、私の本籍地は、福島区（当時此花区）十六町二四番地である。住居表示法という悪法で、十六町は現在野田五丁目となっている。

大阪の町で数字をそのまま読む町は少ない。淀川を渡ったところに十三という町名の町があるが

「ジュウソウ」と読み「ジュウサン」とはいわない。淀川の十三番目の渡しがあったところと、はっきりした意味がある。十六にはどんな思いがこめられているのか、かねがね気になっていた。そのうえ、入学した中学校が新設校で、十六番目に出来た学校ということで、〈府立第十六中学校〉と呼ばれていた。入学するとすぐに、天王寺から池田へ移転、今の池田高校である。

そんなことも重なって、ますます気になった。近所で小さい時から可愛がってくれた、源さんに聞いてみた。十六中学に入学した年である。彼は町で一番の物知りといわれ、いつも緑のベレー帽をかぶっていて、なんで生活しているのか、誰も知らない。その源さんはしばらく考えていたが、おもむろにこう説明した。

ばくち打ちがよく口にする言葉に、〈いちろく天地さいの目〉というセリフがある。そこから、一と六で十六。もう一つは、ばくち打ちの多いところには必ず質屋も多い。一と六をたすと七で質屋だ。そんなことから十六町になったという。

そういわれてみると、銭湯で背中にいれずみをした人を見かけたし、安治川沿いに賭場が開かれる長屋があって、町の人々は昔の色里のあとだといい、大人達は子供達が近づかないようにしていた。

源さんは話を作るのがうまい。どうせ、まゆつばものと思ったまま今まできたが、これを機会に町名辞典を調べてみた。やはり十六町については何の記載もなく、ただ数字のついた町名として、ほか

に十八条（淀川区）、十二軒町（東区）が分かっただけだった。それに反して、向こう岸の富島町（西区安治川一丁目）については、安治川に大仏島という州があって、のちに開発されて富島新地となり、江戸期は大阪三郷天満組にはいったとある。渡しも球場も、川向こうの先輩の町名を拝借したことになる。

空襲で焼けるまで、私達が住んでいた家は、さきの富島球場のところで触れた煙草屋、そのあと北に、うなぎ屋、駄菓子屋と続き、そして町の人々が〈ハイカラ筋〉といっている幅五米ぐらいの道が、西北に五〇米、八軒道路（旧安治川北通り）まで、やや斜めに通じている。普通の道で何がハイカラなのか、わからない。

その道の北隣りの三角形の角地に、私の家があった。そして、同じ棟続きに銭湯の〈百足湯〉があるという風変わりな家だった。百足湯の名前は、字のとおり足が百本、人が多く来るようにと名付けられた銭湯で、人に貸していた。

六畳の父母の寝室が、女湯の脱衣場に通じていて、冬の寒い日、祖母と母は扉をあけて銭湯に行った。また、便所の扉の向こうは、女湯の湯船で便所にはいると湯水の音、桶の音、女達の嬌声が夜遅くまで聞えた。

ある日、いたずら心を起した私は、持っていたナイフで扉を突いてみた。長年の湯気ですっかり腐

食している扉は、いとも簡単に穴があいた。

中学校（旧制）へ入学したばかりの私は、通学に富島渡しに乗って、川向こうからやってくる女生徒に淡い恋心を抱いた。そして、彼女は夕方になると母と一緒に渡しに乗って、百足湯へやって来た。女生徒の湯浴みする姿を穴から覗けると思うと胸がときめいた。

私は不安と期待を抱きながら、おそるおそる覗いてみた。ところが湯煙りで人の姿らしい物がぼんやりと見えるだけだった。

異様な興奮は途端に失望と安心感にかわった。安心感というのは、もし見えたとしたら、気になって勉強もできなくなるだろうと心配したからだ。

このことが教訓になって、それから私は夢のような希望は持たないことにした。

〈百足湯〉の隣りが平田医院で、魚釣りの好きな先生は診察が終わったあと、富島渡しの浮桟橋でよく夜釣りを楽しんでいた。

私が始めて人の死を見たのは、平田医院の土間である。その人はふぐを食べ、ものすごいケイレンしながら死んでいった。

中央市場の正面入口をはいって南側の魚市場のとっかかりに、ふぐの調理台があった。その人は知っていて、その美味に命をかけて、あえて挑戦したのか、それとも知らずに臓物を食べてしまったのか

わからないが、命を落してしまった。

平田医院から二軒の仕舞屋が続き、西に曲ると突きあたりに妙見宮があった。祖母の話では、祖父が安治川の工事をしている時、川の中から仏像が出てきて、当時能勢の妙見さんの信者だった祖父母が、小さなお宮さんを建てて、その仏像を祭ったという。

その妙見さんも井戸と桜の木を残して、空襲ですっかり焼けてしまって、今は地元の婦人会の人達が、小学校の泰安殿を利用して、お宮さんのかわりとしている。泰安殿には三方の上に、三巻の巻物と摂州能勢のお札を祭っている。私はお参りする度に、巻物を広げてみたい誘惑にかられる。「教育勅語」ではないかと思ったりしている。

私の家の前の〈いよ屋〉は、愛媛県出身の人で、立ち飲みもできる酒屋だった。町は中央市場で働く人が多く、夜明け前から働き出し、昼の三時頃には仕事を終えた人達が集まった。

仕事が終わってすぐ飛び込んできた人達、前の〈百足湯〉で一風呂浴びてきた人達が、入り交って酒を酌み交した。

手鉤（てかぎ）を刀のようにして腰に差している人、鱗のついたままのジャンパーを着ている人、ゴム長の人、鉢巻きをしたままの人、鉛筆を耳にはさんだ人、湯上がりで洗面器を持って、さっぱりした身なりの人、そんな人達の中で源さんの緑のベレー帽は、ひときわ異彩を放っていた。

そして、客がたてこんでくると、誰いうとなく壁に立てかけてある床几を店の前に並べ、たちまち宴会場になった。そんな時、店の前を通ると、私はよく源さんに呼び止められた。

「おい!!ぼく、あれ頼むわ、きゅんとしたやつ」

あれとはこんにゃくのことで、私は妙見さんへの露地の入口にあって、子供達の間で一番人気のあった駄菓子屋〈妙見〉へ走った。

そこで煮つまって縮かんでいる三角形のこんにゃくに、芥子をぬり串にさして、源さんのところへ走って帰った。そして二本を源さんに渡し、一本をお相伴に預かった。〈妙見〉の関東だきと一銭洋食は大人達の間にも人気があった。とくに昆布出しのよくきいた関東だきを、近所の人達は夕食のおかずにした。

また、ハイカラ筋に面した家の板塀に、川向いの九条茨住吉神社の敷地にあった映画館〈高千代座〉〈住吉館〉から広告のポスターを張りにきた。そしてそのお礼として、二枚の招待券をくれた。私はその一枚を源さんに渡して映画館へよく連れて行ってもらった。

源さんに教えて貰った遊びとして印象に残っているのは、将棋や百人一首もあるが、何といっても中央市場で遊んだことが一番深く記憶に残っている。

〈いよ屋〉のうしろは、中央市場の板塀で地面とのすき間を這って侵入し、〈いよ屋〉の幸雄さんと、

大きな生け簀の鯉をすくいに行った。横の大きな建物で働いてる人々が、帰るのを確かめて、すくいにかかったが、網の柄が短くてすくえず、生け簀へ落ちそうになった。その怖かったことが、今でも蘇ってくることがある。

一九三四年の第一室戸台風にあったのは、四歳の時で、断片的な記憶しか残っていないが、高潮で町を水びたしにした泥水が引き始めると、大人達が集まって魚を手づかみにしていた。今思うと、おそらくこの生け簀の鯉が溢れ出したものだろう。

当時中央市場は、私達の絶好の遊び場だった。毎日学校を終えると、すぐに中央市場へ走った。そして川魚問屋の前の溝を覆っている網目の鉄板をあけて廻った。逃げたうなぎがいることがある。それをつかまえると、私達はうなぎ屋へ走った。当時のお金で五円、結構小遣いになった。

その当時の中央市場への輸送は、西成線、今の環状線内回り線〈野田駅〉を出たところで、中央市場への引き込み線があり、明治時代の玩具のような機関車が、妙見筋を横切って中央市場へ荷物を運んだ。

冬の日には、貨車の上に雪が積っていたりして、踏切で汽車が通るのを待ちながら、幼い心に旅情を感じたことを思い出す。引込線は中央市場の西門のところで東南に別れていた。東の終着駅は野菜、果物、漬物市場、南の終着駅は魚市場であり、そのプラットホームに冷蔵庫があり、夏になると私達

は入口に立って、怒られながら涼をとった。

海上輸送は、漁船が瀬戸内海、紀伊水道を通って大阪湾へ航行し、安治川を東へさかのぼり中央市場の南岸に水産物を運んだ。

夏休みには、安治川を大漁旗をはためかせながら、漁船が西瓜を山のように積んできた。私達は舟を見つけると、競争するようにして、安治川沿いを中央市場へと走った。

そして船が着岸すると、船員が踏み板を渡し、市場から来た人が一列に並んで西瓜を手渡して、運搬車へ積み込んだ。私達は頃を見計らって、一人が西瓜を運んでいる人の間を横切った。リズムを狂わされた人が西瓜を落す。その西瓜が中央市場の人たちをはじめ船員、私達のおやつとなった。それは、なれあいになっていて、夏休みの定例行事みたいなものだった。

富島球場の思い出からスタートした白い帆を張った追憶の舟が、吉田さんの本の追い風をうけて航行を始めたが、次々と起る少年の日の郷愁と、感傷という優しい風に広い海を迷走しだしたようで、針路を元に戻さなければならない。

私は〈十六館〉という妙な名前の寄席があったという中央市場の大冷蔵庫を探さなければならないと思った。

私達が涼を取った記憶に残っている冷蔵庫は、魚市場への引込線の貨車のプラットホームにあって、

運んできた魚や、海産物を一時保管するもので、吉田さんのいう大冷蔵庫といったものではない。

中央市場は、空襲と度重なる改装で、昔の面影はないので、資料によってその位置を確かめるしか方法はないだろう。私は中央市場の二階にある資料室へ出かけた。

管理棟は十六階の建物で、空襲で焼け残った。妙見筋の東側の民家を買収して、一九九二年に建設された。買収した民家の中には、賭場が開かれたという長屋や、門戸君の家もあった。

資料室の図書はさすが野菜、果物、そして魚にかんする図書が多かったが、その中から私は小寺正三さんの【大阪繁栄史】に、中央卸売市場と大冷蔵庫のことがのっているのを見つけた。小寺さんは俳人であるだけに、香気のある文章は魅力があった。

昭和三年十二月十一日の大阪毎日新聞の「日本一の冷蔵庫の開業」という記事を引用しながら、小寺さんは次のように説明していた。

「年が明けると西野田十六町、船津橋の北詰で日本一の冷蔵庫が開業する。大阪市が八十五万円をかけて建てたもので、何しろ延建坪千八百坪の四階建に、三十坪の部屋が三十もあるというべらぼうな冷蔵庫の化け物である。

この冷蔵庫の冷房方法はかん水循環式を採用し、荷物昇降機を二台そなえつけた。

バナナ追熟室は八百平方メートルで、その地下室は九十個の小さな部屋に区切り、各室の上部に出

入口が設けられ、揚水ポンプで自動排水させ、上部上屋は加工室を兼ねて防熱の用をなし、一回の追熟量約六十籠目方にして二、五万キロの追熟能力をそなえていたようである。当時バナナは南九州の一部以外は、台湾より未熟のまま搬入されてセリに付され、仲買人の手に移ったあと、どうしても追熟作業を必要としたからである。

生け簀は鉄筋コンクリート箱形水槽のもので、水深六、七メートルまでいろいろな深さに調節することができた。水源は土地を深く掘って地下水を湧き出させるようにした井戸で、冷蔵庫用水と併用した。この生け簀はおもに鯉、鮒などの一時的な養魚に使われた」

私は冷蔵庫から出る水を生け簀の水として、鯉や鮒を飼う知恵に感心するとともに、この生け簀こそが鯉をすくいにいって、落ちそうになったあの生け簀であり、第一室戸台風の時、私の家の前を泳いでいた鯉や鮒は、この生け簀を溢れ出したものに違いない。そして、その横の大きな建物が、吉田さんのいう、大きな冷蔵庫であり、〈十六館〉という妙な名前の寄席があったところだ。それは〈いよ屋〉の裏、なんと私の家の前といっていい程の距離にあったことになる。そして、八軒道路（当時安治川北通り）から私の家の南側を、斜めに通っているハイカラ筋を延長すると、驚くことに〈十六館〉へ通じる。初代春団治もこの道を、赤い人力車に乗って走ったのだろう。

ハイカラという言葉は、川向うの川口の居留地から広まった大阪弁といわれ、西欧かぶれした人を

ハイカラさんといった。富島球場も、当時の人々にはハイカラなものだったに違いない。

また、ひと昔もふた昔も前のことだが、安治川の開削によって両岸に新地ができ、現在の中央市場あたりは、〈新堀新地〉と呼ばれていた遊里だったという。私の家の付近は、色里の雰囲気が色濃く残っていたのだ。

おそらく、西欧かぶれした女性達が、ハイカラ筋を通って色里へ通ったのだろう。ひょっとすると、源さんはそんな色里で生まれた人かも知れない。さらに飛躍して、源さんは吉田さんのいう〈ジゲのオッサン〉のことではないだろうか。

その理由として、源さんがベレー帽を野球帽にかえて、富島球場のバッターボックスに立った時、〈いよ屋〉の飲み友達が飛ばした野次が、今も私の耳に残っているような気がする。

「野田のクスブリ頑張れ!!」

そんな思い出に浸ったあと、私は十六町（現在福島区野田五丁目）付近を歩いてみた。

その時はじめて、吉田さんのいう大きな冷蔵庫が当時のまま残っているのに気がついた。場所は想像していたとおり〈いよ屋〉の真裏だった。

建物の側面に〈中央冷蔵〉と大きな文字で表示しているにもかかわらず、どうして見逃したのだろう、なさけなくなった。

戦禍と度重なる拡張工事で、私の知っている中央市場の面影がなくなっているという先入観が強すぎたのだ。妻はそんな私を「せっかちの鳥もち」という。なぜ鳥もちなのかわからない。

思い出と現実の違いは、それはそれで置いておこうと思う。

私の生家、百足湯、平田医院、二軒の仕舞屋は、海苔の〈大森屋〉になっている。

監督も驚く大逆転（25試合目）

「こんなゲーム始めて見た」

星野監督がいった八回一挙9点の猛攻。大逆転劇に甲子園は沸きに沸いた。

三回、伊良部、浜中のタイムリーで3点を先取したが、伊良部が野村、前田に変化球をねらわれ、八回表を終わって6点差、テレビはあきらめて球場を後にする人達を写していた。広島はエース黒田を温存しようと、マウンドにニューマンを送った。

片岡の三塁、そして矢野の投手へのボテボテの内野安打、二つ続くと勝負の流れが阪神に向いて来たのかと少々の期待をもった。と同時に伊良部が勝利投手をふいにし巨人戦のことが頭をよぎる。あの時は阪神が6点リードしていた。

藤本が1―1から厳しい球を3球続けてファールにしたあと右中間を深く破った。三塁打で2点を返した。伊代野の代打中村（豊）が移籍後初安打で3点、広島の投手が玉木にかわる。期待された今岡は二塁フライだったが、赤星が、一塁手のグラブを弾く足の二塁打、金本死球で一死満塁。今季満塁で5打数4安打の満塁男浜中に打順が廻った。浜中はカウント2―0からの4球目一塁方向へ

ファールフライを打ち上げた。これを一塁手淺井が目測を誤って落球。浜風の悪戯だろうが、こんなことを甲子園には魔物が棲むというのかも知れない。動揺した玉木は浜中に死球を与えて押し出し、一打同点といったところで桧山、あたっていない桧山は、高目のクソボールを気合いで打った。強烈な打球は投手のグローブをはじき遊撃シーツの左を抜けて2走者が生還した。グローブを出さなかったら、遊撃併殺打に終わっていただろう。一死、二、三塁で代打八木の大きなレフトフライで、浜中が勝ち越しのベースを踏んだ。なお、矢野四球、藤本、中村（豊）の1イニング2安打でこの回9点、3点をリードした。14人の打者がよく粘り、次から次へとつないで行く、本塁打なしの8安打2死球で9点、今年の阪神野球だ。

　カメラは情け無用、広島のベンチを写す。悲しげな大男ニューマンの横で、誰かがうつむいて顔を上げない。泣いている玉木だろう。そんな玉木を黒田がかばっていた。

2003年4月26日
甲子園ナイター
④阪神3勝1敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
3	0
0	4
1	0
0	2
0	0
9	4
×	0
13	10

投
伊良部
藤川
柴田
〇伊代野
Sウイリアムス

打
今岡3　矢野3
浜中2　藤本2
中村豊2赤星1
金本1　桧山1
伊良部1　片岡1
17

下柳いきなり6失点（26試合目）

野球は面白くて怖い。昨夜に引き続いて、今日も八回広島の永川を攻めた。金本が中前打すると浜中が四球、桧山死球で無死満塁。矢野が代打に出た。５３，０００人の大観衆やテレビで見ている人達は、昨夜の一挙９点をあげ６点差をひっくり返した大逆転の夢を見た。一度あれば二度あるという格言もあれば、柳の下に泥鰌は一匹。奇跡は二度と起こらないといった格言もある。

大観衆の目を集めた矢野の打球は遊ゴロ、併殺逃れの１点のみに終った。なお、一死になって、代打の八木が四球を選び、再び満塁。二回右前タイムリーで１打点をあげている藤本に打順が廻ってきた。藤本は昨夜、大逆転の口火となった三塁打を打っている。再びスタンドが興奮した。しかし、そううまくはいかない、最悪の遊ゴロ併殺打に終ってしまった。スタンドの歓声が悲鳴に変る。

スポニチの長池評は厳しい。三回一死三塁で浜中は０―３から淺い中飛に倒れた。シンに当てられないコースだったらスイングをしなくていいカウントだった。四番打者なら、同じストライクでもヒットになる球とそうでない球を見分ける選球眼が必要だという。

敗戦の中で、赤星の２盗塁と藤本の２安打１打点１盗塁。守りでは、安藤、藤川、金沢、吉野のリリー

フ陣が二回以降無失点に抑えた。

一回、下柳が2ランと満塁本塁打で失った6点はあまりにも重かった。3四球と、一塁カバーの自分の拙い守備と、そしてパリーグで経験のない大観衆に、さすがベテランも動揺したのだろうか町田と石原に投げたスライダーは、あまりにもコントロールが甘かった。

本塁打を打たれたあとのクローズアップされた下柳の悲しそう顔を見て、女房が横からいった。「宇野重吉に似ているよ。優しそうな顔」いわれてみればそうかなと思う。今の若い人に宇野重吉といってもわかってもらえまい。寺尾聡のお父さんといえば分かってもらえるだろう。

2003年4月27日
甲子園
⑤広島2勝3敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	広島
0	6
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	6

投
●下柳
安藤
藤川
金沢
吉野

打
金本2
藤本2
赤星1
5

代打八木が勝利打点（27試合目）

ゴールデンウィークの始めに、投打にわたって人気のあるムーアをもってくるあたり、星野監督の営業手腕もたいしたものだ。

そのムーアに、好投していても、1イニングは敵にビッグイニングを与え、そのあと、また好投するという悪い癖がでた。それは六回にやってきた。斉藤に安打を許し、二岡に四球を与えたあと、阿部のボテボテのゴロが内野安打になって、ムーアの表情が変った。案の定ペタジーニに満塁本塁打を打たれてしまった。赤星の足とバントで3打点を稼いでいた金本の好打と片岡の本塁打がふいになって5対4と逆転された。関西テレビで解説していた西本さんは「野球の面白さはこれから始まる」と平然とされていた。そのとおりその裏、桧山の安打と片岡の二塁打で同点、なお矢野のバントで一死三塁、藤本のスクイズが投手フライとなって、チャンスが一瞬にして消えてしまった。流れは巨人へ。代打黒田のファールにできる三塁ゴロを片岡がフェアーグランドでキャッチして一塁に生かしてしまう。川相の犠打のあと斉藤が右前打、浜中の好返球を矢野がポロリとやって再び勝ち越され、なお走者二塁でムーアが降板、中継ぎ陣が活躍する。藤川が二岡を左飛に、吉野が阿部を三球三振。八回は

柴田がペタジーニに二塁左へ強烈なゴロを打たれたが、今岡の好守備で抑え、安藤が福井、仁志を三振に打ちとって勝利投手となった。八回の裏、金本三振のあと、浜中、桧山の安打が続き、二死ながら一打同点のチャンスが矢野に廻ってきた。矢野はスタンドの大歓声に動揺している久保の初球を中前へ、四回二塁への送球ミスでの失点を取り戻し同点とした。続く藤本はスクイズの失敗が尾を引いている。1―3からの好球を見逃して四球。代打の八木が登場する。八木の打球は三遊間のゴロを二岡が横飛びでキャッチしたが間に合わない。阪神が再びリード。九回はウイリアムスが最終打者清原を三振に打ちとって熱戦が終わった。

勝っても、状況判断しない浜中の走塁、片岡、矢野の守備を指摘する監督の目は厳しい。

2003年4月29日
甲子園ナイター
④阪神3勝1分
毎日ＭＢＳ
関西テレビ

阪神	巨人
1	0
1	0
1	0
0	1
1	0
1	4
0	1
3	0
×	0
8	6

投
ムーア
藤川
吉野
柴田
〇安藤
Ｓウイリアムス

打
金本3　今岡2
桧山2　片岡②
浜中1　矢野1
八木1　赤星1
13

水戸っぽ井川（28試合目）

阪神の勝った翌日、朝風呂をわかしてスポーツ新聞を読むのは、私の至福のひとときである。今日のスポニチの一面の写真は、井川の球を投げたあとのダイナミックなフォームだ。昨年のオープニングゲーム巨人戦で、2対1と完投勝利し、我々の感動を呼んだ時の写真と同じである。写真の横には「エースの復活なくして優勝なし!!」と。

テレビが始まったのは、藤本の二塁打を井川が送り、今岡の犠飛で1点を返したところだった。初回、斉藤の一ゴロにベースカバーが遅れたことでペースを乱し、井川は無死満塁でペタジーニを迎えた。ラジオは映像がないのでいろんな事を想像してしまう。一回に4点をとられた中日戦のことが頭に浮んだ。幸いペタジーニを二塁併殺打で打ちとり、最少得点に抑えた。しかし二回には、高橋尚にスクイズをきめられる。

井川の調子の良い時に見せる、あの歯をむき出しにし、額にしわを寄せ、目をつり上げ十二神将のような厳しい表情を見せたのは、四回の表、二死二、三塁から斉藤を2―1から外角低目のストレートで三振を取った時である。それ以後、チェンジアップも決まり、調子を完全に取り戻した。その裏、

打撃陣が井川を援護した。

浜中四球のあと、桧山、片岡の連打で同点として、なお一、三塁。矢野がヒットエンドランを失敗して片岡が二塁で憤死。矢野は2―0から粘って、左翼スタンドへ快心の2ランで失敗を帳消しにした。グランドを廻りながら、矢野は雄叫びをあげていた。

六回には、金本が右中間二塁打、浜中の三遊間安打、桧山の一ゴロで一死二、三塁から片岡の中前打で2点を追加し勝利を不動のものとした。九回はウイリアムスで代打清原を今日も三振。井川は〝水戸っぽ〟。最近話題になった人といえば、ガンでモルヒネを打ちながら亡くなる寸前まで映画をとり続けた深作監督が〝水戸っぽ〟だ。井川も愚直なまでの頑固さを持っている。

2003年4月30日
甲子園ナイター
⑤阪神4勝1分
毎日ＭＢＳ
ＡＢＣテレビ

阪神	巨人
0	1
0	1
1	0
3	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
6	2

投
〇井川
ウイリアムス

打
藤本2
片岡2
矢野①
今岡1
赤星1
金本1
浜中1
桧山1
10

巨人に5連勝（29試合目）

書き出しは、どうしても攻めのことになるので、今回は守りのことから始めよう。それも九回のことから。

初回、またも藪の悪いくせがでて、2安打1四球、一死満塁のピンチを迎えたが、今日の藪は冷静で、後藤の犠飛1点に抑え八回まで好投した。3対1のリードで阪神の勝利の方程式ウイリアムスが登場した。3連投である。今日まで7セーブで防御率0で「自分が投げるという事はチームの勝利を意味する」と自負している。そんな時が危ない。私の心にふと不安がよぎる。代打川相がベテランらしく初球を三遊間安打。続く仁志に初球をぶつけてしまう。あっという間に無死一、二塁。佐藤コーチが通訳を連れて走る。その間、カメラはベンチの中を写す。藪から笑みが消えていた。

ウイリアムスが仕切り直す。彼は仕切る時、口許に顔の筋肉を集めるので、前歯が向き出し下口唇の下の小さな山羊髭が、かすかに動く。鈴木のバントが矢野の前でバウンドした。三塁で走者を刺せる、矢野は素手で取ろうとしてジャグルしてしまい、三塁へ間に合わないとみて慌てて一塁に投げた。ワンバウンドになった球が大きくそれる。今岡が横飛びで捕球した。隠れたファインプレーだ。

一打同点で代打清原が登場し、一塁側へファールフライを打ち上げた。矢野は必死になって追い、ベンチの屋根の上で、ミットにあてながら落としてしまう。

今日の矢野は、1打席で止めたバットに当った打球が顔面を直撃しベンチの肝を冷やした。矢野の厄日だ。清原に打たれるという不吉な予感がする。

ウイリアムスは、あくまで冷静だった。清原を三振、代打福井をポテンヒットになりそうな遊撃フライに打ちとり、8セーブをあげた。打の方では五回、今日も赤星と金本の二、三番コンビと、連日にわたる片岡のタイムリー二塁打で勝ち越した。これで、巨人に5連勝、今年の阪神は、ひと味違う。何かやってくれそうな予感がする。

2003年5月1日
甲子園ナイター
⑥阪神5勝1分

サンテレビ

阪神	巨人
0	1
0	0
0	0
1	0
2	0
0	0
0	0
0	0
×	0
3	1

投
〇藪
吉野
安藤
Sウイリアムス

打
今岡2
赤星2
片岡2
金本1
矢野1
8

関本守備で貢献（30試合目）

タラ（鱈）は北海道といったのは、名将鶴岡監督である。いつまでも負け試合のことを愚痴るなということだろう。悪いタラである。悪いタラもあれば、良いタラもある。どのスポーツ紙にものっていない、そのタラのことを書こう。

5対1とリードしたところで、星野監督は好投の伊良部に代打を送った。五回、稲葉への初球直後、伊良部の右足の指がつった。猿木トレーナーが、マウンドで、スパイクを脱いだ中指をもみほぐした。前代未聞のことである。数分後試合再開。稲葉中飛、宮本中前打のあとはベッツをフォーク、ラミレスを直球で連続三振にとったが、監督は大事をとって伊良部を97球で降板させた。

伊良部の代打に関本が登場した。今シーズン始めてである。三振に終わったが、赤星四球、金本の遊撃内野安打のあと、浜中のタイムリーがでて、駄目押しというべき1点を追加、4点をリードした。いつもの守備がため、三塁田中、一塁アリアスと思ったが、三塁は関本がそのまま守備についた。八回の攻撃に関本の打棒を生かし、投手を六番にいれ、チャンスがくれば代打を送って、なお点を取ろうという監督の魂胆だろう。

伊良部を継いだ金沢は、七回、三人を簡単に打ち取ったが、八回、ラミレス、鈴木を2―0と追い

こみながら、一死二、三塁のピンチを迎えた。チャンスには強い古田の打球は、三塁手の頭上で大きく跳ねた。幸い長身の関本である。飛びついて、ジャグルしながら一塁をアウトにした。田中だったらヒットになっていた。その裏、関本は二塁手のエラーで出塁、そこで代走田中、今岡のバントで二塁、赤星のとどめの左前打で追加点をあげた。この試合はチームの波に乗り遅れている男達が活躍した。右わき腹痛で欠場した片岡にかわり17試合ぶりにスタメン出場したアリアスの2安打1打点。浜中は真中の右飛を背走しながら好捕する超ファインプレーとともに、2安打1打点の活躍をした。

九回、安藤は三人を二塁ゴロに打ち取り、初セーブをあげた。

いいたいのは、いつものとおり、田中が三塁だったらこの試合は、どう転んだかわからない。そのタラはいいタラだといいたいのだ。

2003年5月3日
甲子園ナイター
⑦阪神4勝3敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
0	0
0	0
0	0
3	1
1	0
1	0
0	0
1	2
×	0
6	3

投
〇伊良部
金沢
S安藤

打
浜中2
アリアス2
赤星2
今岡1
金本1
矢野1
9

監督も認めた継投ミス（31試合目）

阪神が負けた翌日は気が重い。気分転換のため、尼崎市の農業公園の牡丹を見にいこうと家を出た。五月晴れの道を自転車で走る。家を出て西へ、176号線、空港線を越えると猪名川に出る。利倉橋を渡って、右岸の堤防をさらに上流へ走る。しばらくすると、左手に園田競馬場が見えてくる。草競馬とはいえ、敷地が広いのに驚く。本馬場にはいってきた馬が左右に散らばって行く。緑の中のカラフルな騎手服が牧歌的な風景を演出する。

農業公園についてみると、盛りである筈の牡丹の花は、ところどころしか咲いていない。四月下旬の雨風で散ってしまったらしい。残り花はゴールデンウィークのために残したらしいが幽艶な美が失われている。「白王獅子」の白色の大輪の花も汚れた塵紙のようだ。牡丹のためにも、早く摘みとってほしいものだ。

野球の話。監督が継投ミスを認めることが、これほど大きなニュースになるのが分からない。スポニチによれば、星野監督がミスを認める発言は中日時代を含めても珍事だという。藤本の三塁打、今岡の犠飛で同点に追いついた直後の守り、先頭のベッツを左の柴田が抑えると伊代野を投入、ラミレ

スを空振りの三振、見事だった。ところが鈴木に右前打を浴び、古田は死球、真中に中越え二塁打を打たれ、城石にも連続二塁打を浴び3点を失った。

名投手だった評論家は、吉野投入の選択肢があったというが、それは素人でも分かっている。監督の心理を探ってほしい。私の珍説を書きたい。

伊代野は星野好みの向かっていく度胸のある投手である。例え打たれてもメゲルような柔い男ではない。大成さすためにも続投、そんな思いがよぎったのだろう。決して継投ミスではない。左封じのシンカーを覚えれば高津のような投手になる素材だ。監督のミスは、下柳が降板した五回、捕手の野口をかえなかったことだ。下柳の時だけしか出場しない野口に情けが移ったといえないこともないが、伊代野のムキになる闘争心をリードするには、矢野の年期が物をいう。考え過ぎということか。

2003年5月4日
甲子園ナイター
⑧ﾔｸﾙﾄ4勝4敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
1	1
0	0
0	0
0	1
1	0
0	3
0	0
0	0
0	0
2	5

投
下柳
柴田
●伊代野
金沢
藤川

打
今岡1　赤星1
金本1　浜中1
ｱﾘｱｽ1　野口1
藤本1
7

ムーア完封（32試合目）

登板する前日、ムーアは自分で頭を剃ることにしているというサンスポの記事を読んで、私は古い映画「ハスラー」を思い出した。撞球の賭博師に扮したポールニューマンが、徹夜の勝負に負けがこみ出し、洗面所で丹念に手を洗い、髭を剃り、鏡に自分の顔を写してネクタイを締め直すシーンのあったことを。ムーアは、自分が瞬間湯沸器のような性格であることを自覚していて、頭を剃ることで禅僧になったつもりでいるのかも知れない。

昨日の試合で唯一のピンチは、五回一死一、二塁、笠原球審の判定に苛立って、冷静さを失いかけたが、宮出をカウント1―3から渾身の140キロの直球で一邪飛。続く代打佐藤真も中飛に抑えた。その結果、3安打9奪三振106球、三塁を踏ませない完封劇を4万8000人の前で披露した。矢野の好打（六回の本塁打）好リードも見逃せまい。

今シーズンの阪神は、野手の層が非常に厚くなったと感じるが、よく考えてみると、補強で活躍しているのは金本ぐらいだろう。野手だから投手は別である。去年活躍できなかった選手が活躍しているだけだ。矢野、赤星、桧山の怪我、藤本、片岡の自信喪失組が復活したことだろう。それと桧山の

一塁転向で、外野が充実し、アリアス、片岡がベンチに控える余裕ができたことが大きい。しかし、守備の不慣れが打棒に影響し桧山の打率は２２５で3試合ノーヒット。昨日は田渕コーチが限定休養という新語を作って、桧山はベンチ。かわって起用した八木が一回いきなり活躍するのだから、監督も笑いがとまらない。初回、一死満塁まで、初スタメンの八木が三遊間ゴロの安打で2点を先取しムーアを援護した。

守りでは、八回無死一塁から代打小野の三遊間のヒット性のあたりを横飛び、素早く二塁へ投げて併殺にした藤本のプレー。七回には鈴木の三塁線の深いゴロを好捕し、矢のような球を一塁へ投げた強肩のアリアス。そのアリアスは三回、二死から一塁に金本を置いて右中間にタイムリー二塁打を打っている。復活の兆しありアリアス。不慣れの一塁守備で、桧山の心労は大変なものだろう。選手会長の故、チームのため、己を殺す桧山選手に拍手を送ろう。頑張れ桧山!!

2003年5月5日
甲子園ナイター
⑨阪神5勝4敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
2	0
0	0
1	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
×	0
4	0

投
〇ムーア

打
赤星2
今岡1
金本1
浜中1
八木1
アリアス1
矢野①
藤本1
ムーア1
10

井川の捨て身のスクイズ（33試合目）

危険球に近い川上の剛速球が井川の顔面を襲った。普通ならば、バット放り出し後へのけぞって逃げるケースだが、二回目のスクイズのサインがでている。一回目はファール。井川はうずくまって、バットを顔の前に立ててボールをあてた。体を張ったスクイズだ。その球は投手の前に転がる。川上は球をグローブに入れたまま谷繁へ、好フィリングだったが、アリアスの足が谷繁のブロックをかいくぐった。川上と投げあって6連敗、谷繁の2ランのうっ憤を井川は二人の目の前で晴らした。スポニチの見出しは〝顔面スクイズ〟とあるが、バットを刀のようにして構えたので〝サムライスクイズ〟というのはいかがだろう。

このあと、左前打の矢野を三塁において、今岡がセンターへ犠打を打ち上げて同点とした。この今岡のバッティングが、調子の良くない井川を助けた。

―七回一死、一、二塁から井川の送りバントの失敗で二死一、二塁。あきらめムードの中、今岡は2―3から川上の失投を見逃さない。真中へはいるスローカーブをセンターへ運んで勝ち越した。打率も3割に近づく。さらに、赤星の足の内野安打で1点を追加、続く金本の集中力と迫力は物凄い。7球

をファールで粘った12球目、二塁左へ痛烈な球を放ったが荒木のファインプレーにあった。金本の真芯にあたったゴロがアウトになり、赤星のあたりそこねのゴロが安打となる。あらためて勝負の運、不運を思う。

このあと、余裕を持った星野監督の采配は見事なものだった。スポニチで解説している前中村監督は、〝采配の切れ〟という。

八回、中日のベンチが矢野を敬遠して、二死一、二塁から藤本と勝負しようとすると代打に八木を送り、遊ゴロ失で出塁すると、井川に代えて関本を送る。その積極的な采配に、関本はレフト左への二塁打で答え、勝利を確実にした。後半、８点を加え10対2の大勝である。

2003年5月6日
ナゴヤナイター
⑦阪神３勝４敗

ＢＳ７

中日	阪神
0	0
2	0
0	0
0	0
0	2
0	0
0	2
0	4
0	2
2	10

投
〇井川
吉野
安藤
ウイリアムス

打
今岡２
赤星２
アリアス２
矢野２
片岡１
関本１
11

エラーで藪の足引張る（34試合目）

雷のまじる激しい雨の音で目を覚ました。

春雷ならば、遠くの音として聞え、すぐに消えてしまう。五月ともなれば、もはや夏の力強い雷の音である。しばらくすると、雷の音も止み小雨になったが、あがる気配がない。初夏にしては肌寒い一日になるだろう。

〝人の振り見て我が振り直せ〟ということか、相手の3失策で大勝した翌日の試合に、今度は3失策で負けてしまった。

三回、一死後大西の二ゴロを、併殺をあせった今岡がファンブルして一、二塁、続く福留の投手強襲安打を藪が一塁へ悪送球して同点、さらに一死二、三塁から、立浪に左前へ2点タイムリーを打たれた。四回には無死一、三塁から、一塁走者荒木のスチールを矢野が二封したと思ったが、藤本がポロリとやってしまった。3失策がすべて失点につながった。

スポニチの対談で、西本さんは、藪にもっと図々しくなれという。三回一死二、三塁で自分のミスの責任を感じ過ぎて、勝負を急ぎ過ぎている。純粋すぎる。ワルになるために投球より気性を、星野

監督に習えと。

阪神は八回途中まで、5安打、今岡の本塁打1点だけ、毎回10三振を奪われ、復調した野口の低目のスライダーに手がでない。完敗である。

ファンとしたら、藪が好投して僅差で負けるより、思い切り負けた方がむしろあきらめもつく。選手達はどんな気持ちだろううか。プロの集団のことである。こんな日もあると水に流しているのだろう。

3番手の捕手淺井が七回、今季初めて藤川とバッテリーを組んだが、大西に本塁打を打たれ、打者二人で投手は交代した。次打者二人が左打者で柴田なのか、藤川へのムチなのか。いずれにせよ、監督は勝負を捨てない。

最後に、強肩好守の高波選手は井原監督好みの選手だそうだ。西武での健闘を祈ろう。

2003年5月7日
ナゴヤナイター
⑧中日5勝3敗

関西テレビ

中日	阪神
0	0
0	0
3	1
1	0
1	0
0	0
1	0
0	0
×	0
6	1

投
●藪
金沢
藤川
柴田

打
今岡①
赤星 1
沖原 1
片岡 1
藪 1
5

藤田乱調（35試合目）

「藤田投手は二段モーションから、オーソドックスの投球フォームにかえてますね。キャンプでやることを14日の間隔をあけて改造したのでしょうが無理ですよ。直球も変化球も全然キレがないですよ。一回も持たないでしょう」ＭＢＳで解説している中村さんが驚いている。テレビ放送がないので歯がゆい。

中村さんがいったとおり、アレックスに四球、福留に甘い球を狙い打たれて2ラン。立浪を遊ゴロに仕止めたが、谷繁に四球、穴の多いクルーズにまで右へ二塁打を打たれ、28球一回ももたずに降板した。かわった移籍後初登板の佐久本は森野を左飛に打ちとって、その回は2点に終ったが、その後9安打3本累打9点を献上し、試合は前半で終ってしまった。4月23日の中日戦で、藤田は直球が全く走らず、五回をもたず3点でＫＯされた。それから中14日、球威をつけるため2段モーションをよりオーソドックスにかえたらしい。

入団の年、前野村監督の指示で2段モーションからオーソドックスにかえ、3試合0勝1敗、防御率１４．７３と惨憺たるものだった。２年目の９月３日、広島に完投勝利した時は確か２段モーショ

ンだったと思う。

太陽という名前から、新聞の見出しになりやすい。昨年初勝利をあげた試合のあと次の試合で敗戦投手になった時、M紙は〝半月ぶり太陽つるべ落し〟と厳しい。

藤田は新屋高校出身、新屋は羽越本戦秋田駅から南へ二つ目の日本海沿いのところである。夕日が優しくて美しい。藤田の太陽はこの夕日なのだろう。

自分の道を自分で選ぶのがプロだ。イチローの頑固さを学んでほしい。監督にフォームをかえなければ一軍で使わないといわれて、彼は二軍を選んだ。最後に激励する意味で、ヘミングウェイが〝日はまた昇る〟で引用した旧約聖書の言葉を書いておこう。〝日は昇り、日は入り、またその出し処に喘ぎゆくなり〟

2003年5月8日
ナゴヤナイター
⑧中日6勝3敗

ＭＢＳ毎日

中日	阪神
2	0
0	0
3	0
4	0
0	3
0	0
0	0
4	0
×	1
13	4

投
●藤田
佐久本
藤川
柴田
金沢

打
今岡2
片岡2
淺井②
6

神話再び3連発（36試合目）

昨日の3連発の本塁打に気を良くして、朝から苗床の向日葵を庭に植えることにした。四月の初めにまいた種は20センチ位になっていた。去年は西側のフェンスに沿って植えたため、家が太陽を遮って背丈が伸びなかったので、今回は南側のフェンスに沿って植えることにした。花は女のものというのが常識だろうが、真夏の太陽に向って傲然と咲き誇っている向日葵の花は男の花だと思っている。去年は向日葵の花が咲く頃、阪神は首位戦線から脱落していたが、今年は5球団を大きく引き離して首位を走っていて欲しい。

昨日は今シーズン一番安心して楽しくテレビを見れる試合だった。伊良部に先取点の5点は、試合が決まったようなものだ。一回、今岡二ゴロ、赤星が中前打、金本三振、二死から浜中四球、片岡の技の右前打がきっかけとなった。赤星が帰って先ず1点、そのあと、アリアスの右翼越えの二塁打で3点、さらに矢野が四球、藤本が右中間を破る二塁打で追討ちをかけた。

三回には、先頭の浜中が4球目を中越え、片岡は5球目を左越え、そしてアリアスは2球目を左翼上段にたたきこんだ。

この3連発は、日本一になった85年4月の巨人戦でのバース、掛布、岡田の甲子園バックスクリーン3連発以来の快挙である。

矢野が4連発を狙っている。テレビの前で新記録を期待したが、矢野は四球だった。この四球を足場にして3点を追加して6点、三回までに11点をリードした。中日戦の2連敗が嘘のようだ。

この大量のリードにも、伊良部は慎重さを失わない。一球一球に意味がある。直球にスピードがあるので、変化球が生きる。その緩急自在の投球は打者をほんろうしていく。七回中村（泰）にマウンドを譲るまで、2安打無失点で5勝目をあげた。中村（泰）はコントロール悪く2点を失ったが、どこか魅力ある投手ではある。

2003年5月9日
横浜ナイター
⑦阪神6勝1敗

サンテレビ

横浜	阪神
0	5
0	0
0	6
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
1	0
2	11

投
〇伊良部
中村泰

打
アリアス④
赤星2
浜中②
片岡②
藤本2
今岡1
矢野1
中村豊1
15

コラム／ぜいろく魂

平成のはじめの頃、若いＯＬの間で、ある店の食べ物がブームになった。うだるような暑い日、その店に近い会社に用事ができ、会社の女性から買ってくるように頼まれた。地下鉄堺筋本町駅から東へ数分、昭和初期の仕舞屋を改造した喫茶店だった。その店のアイスクリームが人気を呼んで、店に行列ができた。

なんのことはない、私達少年時代にアイスクリンとよんでいたものだ。大きな樽の中からテッシャーでアイスクリンをすくい、最中のようにして売っていた。

私の少年時代だから、昭和十二、三年の頃、当時はハイカラな食べ物で、少年の口にはなかなかはいらなかった。

味はシャーベット系である。そして、それを新聞紙で包むのは、アイスクリンがとけるのを防ぐためだろうが、店の主人が少年の頃、氷饅頭（かき氷）を新聞紙にのせてもらい、せっかくの甘い蜜にインクの匂いがまじったことを思い出してのことかも知れない。

昔の商売道具を出してきただけなのに、何故こんなに人気を呼ぶのか、主人もきっと不思議に思っていることだろう。

商品には正直いってがっかりしたが、私が屋号に興味をもった。〈ぜいろく〉は、漢字で贅六と書く。西鶴の【日本永代蔵】から引用しよう。

「総じて大阪の手前よろしき人、代々つづきしにはあらず。大方は吉蔵、三助の成りあがり、是れ皆、大和河内、津の國、和泉近在の物つくりの子供が、おのれの性根によって長者になった」

この上方の新興成金を、江戸っ子が軽蔑して贅六といった。上方の商人達は、それでは贅六魂を見せてやると、ますます仕事に励んだ。この店の主人は、そんな意味をこめて屋号にした。初代は、三十日の節季を忘れないようにと〈ぜいろく三十日堂〉と名づけたが、あまりにも長いので〈ぜいろく〉になったらしい。

この贅六魂にふさわしいのは、岸和田生まれの清原選手だが、どうしてあれほど巨人にこだわるのだろう。

ドラフトの前日まで、早稲田大学に進学といっていた同僚の桑田投手を、巨人は一位指名した。そして巨人の約束違反に、彼は激怒した。

西武で森監督に一年生からレギュラーとして使ってもらい、一流打者となった。そして、日本シリーズで巨人に勝った。九回、最後の守りについたファーストで流した涙は一体なんだったのだろう。

吉田監督が「縦縞を横縞にしてもいいから来てほしい」と熱いラブコールをＦＡになった清原選手

に送った。ファンも阪神に来てくれるものと思った。ところが、巨人に残った。

巨人へはいって一年目、目を覆うばかりの打撃不振に、渡辺オーナーから「清原がいない方が、巨人は強い」と侮辱されながら、野村監督による阪神の二回目のラブコールも断った。

最近は、元木選手とコンビを組んで浪華のＭＫコンビとはしゃいでいるが、東京の人は関西人を見下しているものだ。あまり調子にのらない方がいい。それよりも、阪神の選手達にいいたい。阪神タイガースは大阪の球団である。大阪育ちの人もそうでない人も、是非贅六魂を持ってほしいものだ。

屋号を褒めたが、肝心の商品のことにケチをつけてしまったので、この店の珈琲のことを書いておこう。

珈琲に随分凝って、ミルで豆を挽き、素人でも、うまい味を出しやすいサイフォンで、珈琲をたてていたが、年をとると面倒くさくなって、インスタントコーヒーで間に合わせている。

あれほど軽蔑していたインスタントコーヒーも飲み慣れてくると、口に合ってくるから、人間の味覚もいい加減なのかも知れない。

でも、たまに喫茶店でコクのある珈琲を飲む。まずブラックで香りを楽しみ、次いでミルクを落し、コーヒーの表面に浮かぶ雲のような景色を目で楽しみ、最後に砂糖を入れて味を楽しむ。私はこれを勝手に珈琲の三楽と呼んでいる。

最近、少年の頃親しんだパーコレーターで沸した珈琲を飲みたいと思っている。

夕食がすむと、家族全員が茶の間の大きな火鉢を取り囲む。父は珈琲の粉をパーコレーターの濾過装置に入れ、炭火の上に乗せる。私達は各自の珈琲茶碗を出して、珈琲が沸くのを待つ。私の珈琲茶碗は甲虫が目印になっていた。

やがて、沸騰した湯が「ぼこぼこ」と音を立てながら踊り出す。その様子が蓋のガラス窓から見える。私達は順番に缶詰のコンデンスミルクを、珈琲茶碗に入れ、父が祖母、母、姉、私、妹の順番に珈琲を注いでいく。終ると父の合図で飲み始める。その合図は簡単である。「では」という一言だった。

〈ぜいろく〉の珈琲は、その時のパーコレーターの珈琲の味がする。その苦味のとれたまろやかな味は、一家団欒の風景を思い出させた。なにしろ値段が安い。一八〇円である。

バントの3連発（37試合目）

五回、一死走者なしで、赤星が打席に向かった時、毎日テレビのゲスト出演の松村君が掛布の物真似をしながらいった。

「これから赤星劇場が始まりますよ」

期待どおり、赤星は1―2からの4球目を三塁側に転がした。三塁手がボールを捕った時、赤星はすでに一塁ベース上にいた。ホルトは次打者金本に、赤星の足を警戒して2度のウエスト、6度のけん制球を投げる。金本の遊ゴロは、赤星の二盗スタートで動いた遊撃手の逆をつく中前打となり、一、三塁、浜中の三ゴロで赤星がホームベースを踏み勝ち越した。赤星劇場は1点を追う三回すでに始まっていた。藤本が初球を投手の右へ転がした。ホルトは球に追いつけず二塁内野安打。195センチの巨漢ホルトと動作の鈍いウッズを揺さぶろうとの魂胆である。下柳もすかさず初球をバントで藤本を二塁へ送る。続く今岡のバントを誰が予想したか。意表をつくとはこの事だろう。無警戒の内野のグランドに転がって一、三塁。お株をとられた赤星は中前打で藤本をホームへ帰す。バント攻勢で冷静さを失ったホルトは、金本の大きくバウンドする投ゴロを捕ったのはいいが間に合わない一塁へ暴投、

二走者が帰って3点をあげた。藤本と今岡にお株をとられた赤星は五回三塁側へのバントヒットでお返しするのだからたいしたものだ。

守りでは2点リードした三回、二死一、三塁でウッズの三塁ゴロを片岡が一塁走者が足の早い石井であることを忘れ、二塁へ投げて野選とし、そのあと中根に2点タイムリーを打たれて3点のリードをフイにしてしまった。投では、下柳をつないだ藤川が六回、一死二、三塁のピンチを迎え、代打佐伯に対し吉野が登板、カーブで遊飛に打ちとり一人一投。あと最近腕を上げている安藤が七、八回を安打1本に抑え、九回をウイリアムスでしめくくった。

試合終了後、片岡選手に星野監督の雷が落ちたらしい。横でアリアスが震えていたとか。

2003年5月10日
横浜ナイター
⑧阪神7勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
0	0
1	0
2	3
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
0	1
3	5

投
〇下柳
藤川
吉野
安藤
Sウイリアムス

打
藤本3
今岡2
赤星2
金本2
浜中1
アリアス1
11

浜中絶好調6打点（38試合目）

阪神が勝って、空は五月晴れ、女房がいないとなると、毎日が日曜日であるとはいえ、私にとって祭日のようなものである。朝風呂を湧かそうと思った。

五月といえば端午の節句、男の月である。我が家の鬼門の所、東北（ひがしきた）の柊の横に菖蒲の花が満開である。菖蒲湯にしよう。少年の頃、端午の節句の日、銭湯は菖蒲湯だった。少年は菖蒲の葉を鉢巻きにしたり、手首を巻いたりした。男らしくなるための呪（まじな）いだと思っていた。

朝の日射しを浴びながら、湯に濡れないよう、苦労しながら新聞を読む。ほとんどの新聞の一面は浜中である。43打点、2ラン、3ランと大きな活字が踊っている。

一回、今岡が初球を二塁打、赤星の犠打で一死三塁、金本が三振、チャンスが逃げたかと思ったが、浜中が右中間を破る二塁打で四番の責任を果した。いつも助けて貰っている金本を助けたことが、浜中をのせたのだろう。二回は、斉藤のインコースの難しい球を左翼スタンドにほうりこむ。四回は右へ11号3ラン、あわせて6打点。監督も、あれが四番のバッティングと称賛する。

サンスポに阪神の歴代打点王の写真がのっている。4番目にセピア色の背番号5、島倉千代子の亭

主だった藤本選手だ。本塁打王、打点王、それぞれ一回。気のいい選手で、島倉千代子もその優しさにひかれたという。南部高校出身で浜中の先輩である。

和歌山中学出身の西本さんが藪投手を評して、和歌山出身の男は気が優しすぎる、もっとワルになってほしいといったことがある。浜中選手にも、その言葉があてはまるだろう。勝負師には、優しさが仇となる場合がある。幸い、清原選手も一目置く、今までの阪神では見られない金本選手がいる。師事して大成してもらいたい。

夜遅く帰宅した女房が風呂場から呼んでいる。「庭の花は菖蒲じゃない。かきつばたよ」

触らぬ神に祟りなし、私は二階へ上った。

2003年5月11日
横浜
⑨阪神8勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
0	1
0	6
0	0
0	3
1	0
0	1
0	0
0	1
0	0
1	12

投
〇ムーア
谷中
久保田

打
今岡4
浜中③
金本3
赤星2
矢野2
関本1
ムーア1
16

連日の12得点（39試合目）

井川の立ち上がりは、相変らず不安だった。初回、いきなりチェンジアップを、中前へ2連打された。去年は低目にきまり、打者がよく空振りしていたものだが、今年は高目に浮いている。しかし、バントをしようとする緒方を捕手のフライに打ちとった直球と、前田を3球勝負で仕止め外角低目のストレートは迫力があった。ただ、きわどい球がボールとなり2四球で1点を先取された。それ以後は四回を除いて七回まで、毎回ランナーを出したが、1点を許しただけだった。粘投ということだろう。

阪神は二回に、浜中、片岡が連打、ハーストの阪神ベンチにとびこむ暴投で同点とした。四回、金本、浜中の連打で一、二塁、重盗を試みたが、浜中が二塁で刺されて一死三塁、チャンスを失ったかと思ったが、日曜日の横浜戦は浜中、昨日はアリアスが、ピッチャー返しの安打で勝ち越した。

五回、二盗を失敗した浜中が、金本とのコンビで大量点のきっかけをつくった。井川の左前打と今岡の二塁打で二、三塁、赤星の遊飛で二死となったが、金本は厳しい内角攻めに耐え、際どいコースを選び、かつての同僚佐々岡に精魂を使い果たさせたうえで出塁した。そして浜中はセオリー通り、四球のあとの初球打ち、右への二塁打で2点、つなぎの野球で片岡が2打点、矢野が2打点。この回、

本塁打なしで、二死からの6点で試合を決めた。

阪神が好調なのは、選手が自分中心にスタンドプレーする選手がいないことだ。そして失敗した選手を誰かがカバーしていることだ。浜中は昨日も5打数4安打。

米子市民球場は、ローカル球場らしく広告は〝皆生温泉〟と〝お菓子の壽城〟の二つだけで、それがバックネットの下にあるものだから毎回のようにテレビに映った。

走り梅雨か、朝から雨模様、米子も雨だろう。今日はいいとして、週末の巨人戦は天気であってほしい。打撃が好調な時、8連勝といきたい。皆生温泉の看板を見て、温泉宿裏の海岸で、投げ釣りをし、鰈を釣るはずだったが、かもめを釣った事を思い出し、テレビの前で一人苦笑する。

2003年5月13日
米子ナイター
⑥阪神4勝2敗
ＭＢＳ毎日
テレビ大阪

広島	阪神
1	0
0	1
0	0
0	1
0	6
0	0
1	2
0	2
0	0
2	12

投
〇井川
吉野
久保田

打
浜中4　片岡2
今岡2　金本2
ｱﾘｱｽ2　赤星1
矢野1　藤本1
井川1　桧山1
17

巨人に完封負け（40試合目）

八回まで、8安打を打たれながらも、ベテランらしい投球で、清原の本塁打の1点に抑えている伊良部に代打、関本を送った。関本は、2―0から、ファールで粘り四球で出塁した。

野球が楽しいのは、テレビを見ながら監督になれることだ。私は、星野監督の采配を予想した。今岡がバントで、代走の秀太を二塁へ送る。赤星はラスに内角を攻められて、外角球を引っ掛けるという最悪のパターンにはまっている。ここは、右の八木を代打に送る。巨人は動くか。原監督は、星野監督に似て、失敗した選手に名誉挽回のチャンスをすぐ与えて、奮起さすことがある。中日戦でストッパーに失敗した河原の起用もある。そうなればしめたもの、八木が駄目だったら、左の金本に廻る。と思ったが、私の予想は当たらなかった。

今岡は2球目をヒッティング、強い当たりだったが、投手右へのゴロ、走者を進めることができなかった。監督がサインを出すのを逡巡しているうちに、今岡がヒッティングにでたのかも知れない。秀太が赤星の2球目に二盗に成功して、バントと同じ結果になったが、赤星が2―3から三振、金本は二ゴロに終った。

次は登板する投手の予想である。星野監督は、昔から大きな舞台でいきなりルーキーをよく使う。最近の2試合で二回4三振、無失点の久保田か、それとも、巨人戦である、ファンは最終回を守りきって、サヨナラを期待している。新人では治まらない。だからといって、負けている試合にウイリアムスは勿体ない。最近安定している安藤を送る。私は安藤と決めた。これも予想がはずれた。やはり久保田だった。そして、仁志にスリーランを打たれての試合は決まった。原監督は、安心して河原を送った。九回は、片岡の右前打をはじめ、浜中、アリアス、矢野と1点差だったらと思わせるような大きなフライだった。負けはしたが、敵味方にファインプレーが続出した好試合だった。スポニチは、伊良部、清原の対決を平成の名勝負という。

2003年5月16日
甲子園ナイター
⑦巨人1勝5敗1分

毎日テレビ

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
0	0
0	3
0	4

投
●伊良部
久保田

打
金本2
矢野2
浜中1
片岡1
アリアス1
7

ムーア投打で活躍（41試合目）

七回戦は、四回の清原の本塁打が勝利打点となって、4対0で巨人。八回戦は、この日も四回、ムーアのタイムリーヒットの1点が勝利打点となって、1対0で阪神。不思議な巡り合わせだった。

あの故三原監督の真似をさせていただくと、まさしく、神様、仏様、ムーア様といったところだった。

四回、アリアス、矢野が左前へ連打、藤本のバントが、捕手の飛球となってしまって、一死一、二塁。犠打で投手へつなぐという他チームにみられない作戦は失敗に終ったが、大観衆の声援に送られてムーアが打席にはいった。解説の川藤さんは、ムーアの目付きがすごいという。集中力だろう。ムーアは期待に答えて、木佐貫の高目のフォークを左前へタイムリー、アリアスが帰って1点をあげる。これが貴重な勝利打点となった。

六回に、この試合の山がきた。山田が三塁内野安打、二岡の三ゴロのあと、清原がレフトのライン際の安打で一、三塁。清原でなければ、二、三塁となるところだ。川藤さんは清原を二塁に進めなかったベテラン金本の守備を褒める。この一、三塁になったことが阪神に味方した。阿部の打球は一塁ライナーで、清原は塁に戻れず、あっという間の併殺で、巨人はチャンスをつぶした。ムーアは八回ま

で投げて、４安打無失点。九回は守護神ウイリアムスに継いで開幕７連勝。打撃の方は、この日２安打で23打数10安打。得点打率は６２５。バッテリーの配球を読む、集中力のあるバッティングは、たいしたものだ。

巨人戦に打ってこそ、ミスタータイガースと呼ばれるのだが、浜中は、初回二死一塁で空振り三振。第３打席遊ゴロのあと、八回の一死二塁も三ゴロ。浜中をはじめ、一、二番の打撃不振が気になるが、１球のミスが試合を決める１対０の試合は緊迫感があり、ここ二日間、守りの野球の醍醐味を味わった。

2003年5月17日
甲子園ナイター
⑧阪神６勝１敗１分

読売テレビ

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
1	0

投
〇ムーア
Sウイリアムス

打
矢野２
ムーア２
片岡１
アリアス１
6

ウイリアムス3人斬り11セーブ（42試合目）

前半から飛ばす上原に、五回まで4安打、この2連戦、当たりがとまっているので、嫌な予感がした。それを吹き飛ばしてくれたのが金本だった。六回、上原の初球をレフトスタンドに叩きこんだ。ヤクルト戦で甲子園の浜風に邪魔された男が浜風を利用した。金本に刺激されたアリアスが二死からレフトスタンドへ、一挙に同点とした。テレビに胸のペンダントにキスするいつものアリアスが写った。

阪神ペースとなった七回、藤本が右中間を破る二塁打で出塁。テレビで解説の吉田さんはこの藤本を、二回、金本―藤本―矢野とつなぐ中継プレーで仁志をホームで刺して、3点目を与えなかったことから、この日の殊勲者だという。

無死二塁、ここから監督の腕の見せ所。六、七回を好投した谷中に代打秀太、バントが成功して一死三塁。打席に歩む今岡の集中した厳しい顔を、前監督は見ているのだろうか。ふと、そんな事を思った。今岡は左中間二塁打を打ち、藤本が生還して勝ち越した。内角低目のフォークボールを打った今岡の技術は特筆ものだ。赤星の代打桧山の時、七分間試合が中断した。テレビの画面が少し薄暗くなった。球場近くのアパートの失火で、その煙が球場を覆ったらしい。久しぶりの阪神の快進撃には甲子

園球場も珍事を巻き起こす。

桧山は、それが気になったか無気力な三振。続く金本、浜中の四球で二死満塁。当っている片岡に代打に八木を送る。打席にはいる八木の姿には、ベテランらしい静かな闘志がみなぎっている。八木は、岡島からライト前へ渋いヒット、腰を痛めている高橋がジャックルしている間に2者が生還し、この回3点をあげた。八回、好投する安藤が、清原にこの日2本目の意地の本塁打を打たれたが、その裏、矢野の安打、昨日のバント失敗で、居残りでバントの練習をしたという藤本の犠打と、秀太の右前打で一、三塁、今岡の犠打で1点を取り戻し、九回は、ウイリアムスの三人切り、貯金が最多の13となった。

2003年5月18日
甲子園ナイター
⑨阪神7勝1敗1分

ＡＢＣテレビ

阪神	巨人
0	0
0	2
0	0
0	0
0	0
2	0
3	0
1	1
×	0
6	3

投
下柳
〇谷中
安藤
Ｓウイリアムス

打
今岡2　藤本2
金本①　片岡1
八木1　ｱﾘｱｽ①
矢野1　淺井1
秀太1

11

好事魔多し浜中怪我（43試合目）

野球は面白いといえば、怪我をした浜中に失礼だが、浜中に変わった桧山が3打数3安打と活躍する。しかも、桧山のために用意されていたかの如く、絶好のチャンスが廻ってくるのだから、つい面白いという言葉がでてしまう。

最初は、1点ビハインドの四回、一死、赤星を三塁において、佐々岡の直球を右前にはじき返して、シーツに打たれた井川の失点を取り戻した。次は、同点で迎えた六回、またも、三塁打の赤星をおいて、西川の直球を振り抜き、つまりながら中前に落とす。最近、3試合にヒットのでなかった赤星と、スタメンから消えていた選手会長が活躍した。三度目は七回、一塁右を抜けるような安打で満塁としたが、後続が続かなかった。

右翼の守備位置をとられ、不慣れの一塁で苦労し、揚げ句の果ては打率もさがり、ベンチを暖める羽目になってもくさらず、練習に励んできた賜物だろう。と同時に、ここで打たなければという精神面にあったのだろう。昨日の試合は、メンタルな面が選手に影響する、そんな場面があった。

アリアスの五回、同点9号ソロは「最初の打席の3球三振の怒りをぶつけたんだ」という。

六回無死一塁で、右中間を破る同点三塁打を打った赤星。四回に一塁ゴロを自慢の足で内野安打にし、19個目の盗塁に成功して、気を良くしていたことだと赤星はいう。こんなメンタルな面を無視できない。

浜中の怪我を、星野監督は自業自得と一喝したが、この言葉には思い出がある。小学生の頃、原っぱで落し穴を作る遊びがあった。落とし穴を作ったのは、いいのだが、何処に作ったのか忘れてしまい、翌日、その穴にはまって、足を挫き、親父に自業自得といわれ、その意味を母に聞いた記憶がある。その時、接骨医に捻挫は骨折より時間がかかるといわれた。浜中の怪我が軽症であってほしい。世界の盗塁王福本さんが口やかましくいう、ヘッドスライディングは、格好良くても、怪我のもと、足から滑れと。浜中がそれを実証してしまった。

2003年5月20日
甲子園ナイター
⑦阪神5勝2敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
0	0
1	1
1	0
2	2
0	0
0	0
×	0
4	3

投
〇井川
安藤
Sウイリアムス

打
桧山3　赤星2
矢野2　今岡1
片岡1　ｱﾘｱｽ①
藤本1　淺井1
12

赤星足で投手を崩す（44試合目）

五月といえば、五月晴れ、鯉登り、好天気が続くものと思っていたが、気温も不順で、どんよりと曇った日が多い。今日もそんな日である。歳時記にも、五月雨はあっても五月晴れがない。おかしいと思っていたら、陰暦の五月は今の六月である。梅雨の晴れ間を、五月晴れというらしい。

私が思っていた五月晴れは、わが阪神タイガースである。昨日も、鯉を料理して鯉登りを上げた。スポニチの見出しは〝オーバー30大暴れ〟とある。活躍した片岡、藪、矢野が30才を越えているということらしい。活躍したのは、確かにこの3人だが、藪睨みといわれるかも知れないが、三人の前に赤星のことをとりあげよう。藪睨みとは、〝ひがらめ〟大阪でいう〝ひんがらめ〟のことで、見当違いの見かたをすることである。藪投手だからということではない。

六回、一死から赤星が四球で出塁する。赤星はリードを大きくとって、阪神打線を2安打と抑えている広池をゆさぶる。調子を崩した広池は、3者連続四球を与え1点を失う。なお、二死満塁で矢野。広島の投手は天野に代わり、矢野はストレートで、たちまち2―0に追いこまれたが、3球目の変化球を打って三遊間を破った。捕手出身で解説の有田さんは、ストレートを通すべきで、捕手はゆるい

球の怖さを知って一人前だという。八回に、矢野は西川から2ランを打って、広島のトドメを刺した。

初回いきなり1点を失い、二回にも先頭打者シーツに二塁打を打たれ、薄氷を踏むピッチングだった藪を立ち直らせたのは片岡だった。二回、中前打の桧山をおいての2ラン。ヒットを打たれ、動揺している投手の心を見透かした初球睨いの本塁打だった。

この本塁打以降、藪は完全に立ち直り、七回までテンポの良い81球、1失点、3併殺と見事なピッチングだった。解説の中西さんは、藪に打たせてとるピッチングを薦めていた。

2003年5月21日
甲子園ナイター
⑧阪神6勝2敗

サンテレビ

阪神	広島
0	1
2	0
0	0
0	0
0	0
3	0
0	0
2	0
×	0
7	1

投
〇藪
安藤
藤川

打
矢野②
今岡1
赤星1
桧山1
片岡①
6

金本逆転2ラン（45試合目）

麻雀友達に、戦前からの阪神ファンがいて、連絡の世話をして貰っている。去年は「あかんなあー」というのが、友のあいさつ代りだったが、今年は「負ける気がしない」というのが、彼の口ぐせになっている。実際、連絡をくれる前日の試合は必ず勝っている。

同点で迎えた八回、伊良部をリリーフした吉野が代打町田に死球を与えて、一人で谷中と交代したが、シーツに二塁打を打たれて、3対3の均衡が破れた。

その裏、先頭打者の今岡がセンターオーバーの二塁打で塁に出た。赤星が一球目バントを失敗、代走の秀太が捕手の二塁送球で、タイミングはアウトだったが、二塁手の落球に救われた。そのあと、バントは投ゴロとなり、走者を三塁へ進めることができなかった。嫌な予感がしたが、金本が打ちあぐねていたブロックの内角のストレートを、甲子園球場の一番深い所にほりこんで逆転した。

「とりあえず阪神に来て初仕事やね」

どうして、どうして、移籍後45試合で、これだけチームを引っぱっていく選手も稀らしい。選手会長の桧山と金本の握手や、伊良部とウイリアムスの握手は、チームにとって力強い。解説の中田さんは、

金本の本塁打にお客様は喜んでいるけれど、赤星と藤本のバントの失敗に監督はお冠むりだろうという。芸能人でもお客さんと一緒になって笑っていてはプロでない。醒めた目をもってこそプロだろう。

主役は金本に譲ったが、序盤から燃えたアリアスの二回先制2ラン。四回無死満塁からの左犠飛3打点の活躍も忘れられない。また、森笠に四球を与えて、緒方に痛打を浴びる失敗を繰り返したのは、いただけないが、五回に2ランを浴びた直後、伊良部が木村拓に投げた１５３キロはすごかった。ピッチングにまだまだ余裕がある。

二軍がシダックスに5―0で負けたのは情けない。鳴尾球場に、高級車に乗ったサッチーが、カツノリの嫁と孫を連れての観戦とは全く恐れいる。シダックスの選手がプロ入りする時の事を心配するのは偏見だろうか。古くからの野村ファンだが奥さんだけは、どうもいただけない。

2003年5月22日
甲子園ナイター
⑨阪神７勝２敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
2	0
0	1
1	0
0	2
0	0
0	0
2	1
×	0
5	4

投
伊良部
吉野
〇谷中

打
桧山２
金本②
今岡１
アリアス①
矢野１
７

ムーア47球でKO（46試合目）

ずんぶりと湯の中顔と顔笑う

道後で遊んだ時の山頭火の句である。

古い話だが、戦後世の中が騒然とした時代、松山出身の友と道後温泉に遊んだことがある。古色蒼然とした建物の湯につかり、そのあと、二階の大広間で浴衣に着替え、寛いでいると、何かと荒んだ心が落着いた。

松山東高校出身の友はいう。

「高校の頃、授業をサボッテ、ここで本ばかり読んでいて、大学へ行けなかった」という。

おっとりした優しい友の性格は、この温泉が育てたのだろう。

ムーアもこの町の優しさに闘争心を失ったのかも知れない。二回に降板し、ベンチを叩いて悔しがるムーアに、まことに失礼だが、私は、頭に手拭いをのせて、温泉に浸かっているムーアを想像しておかしかった。

冗談はさておき、ラジオを聞いていたので、どうして打たれるのか、わからなかったが、解説者に

よると、ヤクルトは、ムーアを攻略するため、右打者を並べ、ボールになる内角球を捨て、宮本、飯田、鈴木が四球を選びムーアをいらだたせた、ヤクルトのＩＤ野球だという。

ムーアは、一回2/3で、5安打、3四球で4点を失い、不敗神話は消えた。

おしかったのは、逆転が売り物の阪神の八回の攻撃だ。赤星の三遊間安打、金本のレフト左への二塁打で無死二、三塁。桧山の中前安打で2点を挽回、なお、無死一塁、片岡は三飛に終わったが、長打を警戒する投手が、アリアスのカウントを0―3にする。低目の好きなアリアスは、功を焦り、ボール球を打って、一塁のファールフライ。好球必打とはいえ、それはないだろう。

西武を自由契約となり、今年ヤクルトにテスト入団した元中日の佐藤投手を打てず3対5で敗戦。佐藤投手、星野監督へ涙の恩返しといったところ。今日のスポニチによると、道後温泉へ行ったのは、星野監督だけだったらしい。

2003年5月24日
松山ナイター
⑩ﾔｸﾙﾄ5勝5敗
関西テレビ
毎日ＭＢＳ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
3	0
0	0
1	1
0	0
0	0
0	0
0	2
×	0
5	3

投
●ムーア
久保田
佐久本
中村泰
谷中

打
赤星2
片岡2
金本1
桧山1
アリアス①
7

2死からの逆転劇（47試合目）

悔しそうな、悲しそうな、そして、厳しい古田の素顔がテレビに大写しになった。八回、金本に逆転タイムリーを打たれたあとのヤクルトベンチである。

二死から、今岡、赤星が中前連打のあと、5打席目の打順が金本に廻ってきた。4打席凡退したので、このチャンスを見逃すことができなかった。金本は、河端の146キロの連球を右翼へ引っ張った。一刀両断、ジャストミートした打球は、矢のようになって、右翼線を破り、2者がホームインした。

野村監督のもとでコーチをやったことのある福本さんが、監督と古田の腹のさぐり合い、仕掛け合いを通して、野球のおもしろさ、奥の深さを楽しんでいたと書いているぐらいだから、阪神の打者は、古田にいいように、あしらわれているという風評も、あながち嘘ではあるまい。その古田の深刻な表情は、阪神の強くなったことを証明しているのかも知れない。

金本の決勝打の背影には、片岡の同点打がある。七回、今岡の右前打のあと、左が4人続くということで、ヤクルトは中継ぎに左の山本を送った。これが裏目に出た。赤星が左前打、金本二ゴロ、桧山四球で一死満塁となり、片岡が左前へ、同点2点タイムリーを打った。

今迄リードされると、ヤクルト、中日の強力中継ぎ陣に、阪神は苦杯をなめている。六回終了時までリードされた試合、ヤクルトには4連敗している。中日に至っては、勝ち星なしの5連敗中である。片岡が山本を打って同点としたことで、五十嵐、高津の必勝リレーを封じこめることができた。ヤクルトは、左の石井の故障がこたえている。阪神の中継ぎ陣がヤクルトのお株を奪った。先発の藤川が四回までに4点とられたあとは、谷中、安藤が二回を無失点、そして、ウイリアムスが最後を締めくくった。どうやら、阪神にも勝利の方程式ができそうだ。この試合、赤星の4安打3得点、好打好走を忘れることはできない。

2003年5月25日
松山
⑪阪神6勝5敗

関西テレビ

ヤクルト	阪神
0	1
2	0
1	0
1	1
0	0
0	0
0	2
0	2
0	0
4	6

投
藤川
谷中
〇安藤
Sウイリアムス

打
赤星4
今岡2
藤本2
金本1
桧山1
片岡1
矢野1
12

代打浜中がV打（48試合目）

「どうした井川!!」

去年の井川であることを期待して、テレビの井川に声をかけるが、初回二死から鈴木（尚）に中前打されたあと、毎回安打される始末、二回一死満塁、四、五、六回と3イニング連続で先頭打者に二塁打された。それでいて、六回、今岡のタイムリーエラーによる1失点でおさまっている。

こんな井川をかばってか、アナウンサーが、井川のような真面目な選手は〝虎風荘〟始まって以来という梅山寮長の話を披露すると、解説の小山さんが「そんな選手は、阪神では大成しないんだがな」と皮肉ったあと、今日の井川は球がうわずっていることと、チェンジアップの時に腕があがっていないという。

六回、同点とされたあと、無死一、二塁で、片岡がバントで走者を進めることができないで三振、八木が左前タイムリーで勝ち越し、そのあと、井川に打順が廻るので、浜中がベンチを出たが、秀太の右前打で2点差となり、続投を決めて井川を打席に送った。

2点もらっても、井川は立ち直らない。七回、金城に四球、内川に右前打されて、無死一、二塁。ここで、

安藤がマウンドにあがった。鈴木（尚）は二塁ゴロ、併殺に打ちとる絶好球だったが、秀太の一塁への送球がそれて、一死一、三塁となり、ウッズを右飛に打ちとったが、コックスの、代打佐伯に打たれて同点にされた。その裏、赤星が右中間を深く破って三塁打、金本四球で、一死一、三塁、桧山三振で片岡、ここで、監督は浜中を代打に送った。浜中は期待に答え、三遊間を破って勝ち越した。

八回は、吉野、谷中でしのぎ、九回は例によってウイリアムス。不敗神話は、何時か崩れる。最近、球が高目に浮いて心配しているところへ、今岡がエラーして、無死一塁となったが、落ちついたウイリアムスは、代走の田中を牽制球で刺し、ウッズを投ゴロ、コックスを三振にと打ちとり、ウイリアムスは今日も健在だった。それにしても、内野のエラーが多い試合。

2003年5月27日
甲子園ナイター
⑩阪神9勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	1
1	2
0	0
×	0
4	3

投
井川
〇安藤
吉野
谷中
Sウイリアムス

打
赤星2　八木2
今岡1　片岡1
浜中1　矢野1
秀太1
9

コラム／山野さんのこと

長い人生の中で、思い出に残る人がいる。

東大法科を出ながら、大阪の警察署長で終わった山野さんも、その一人である。

山野さんは、少し給料が高いということで、うかつにも市警に入ったことが、運のつきだと淡々としている。昭和三十年頃、大阪には府警と市警があった。

山野さんと交遊があったのは、二十数年前のことだが、今もはっきり覚えていることがある。

場所は環状線の西九条で、その付近には、一〇〇軒近い飲み屋があるといわれている。桜島線への乗換駅で、その沿線に地元で西六社といわれている大手企業が集中していて、下町の飲み屋にネクタイ姿のサラリーマンも多い。

そんな店の一軒で、山野さんが水上警察署長時代になじみになったという店へ連れて行ってもらった。

山野さんが来たと聞いて、女将さんが大きな音を立てながら階段を降りてきた。

「署長さん、お久しぶりです。よう来てくれはりました。お世話になりましたあの娘も、子供ができましてん。暴走族になり、いっときはどうなるかと思ってましたが、ほんまに署長はんのおかげです。

ほんまにありがとうございました」

どうやら、取り締まる方と、取り締まられる方との見合いをさして、うまくいったらしい。

女将さんと挨拶がすむと、阪神ファンの山野さんが、田渕選手のトレードのことで、熱弁を振るい始めた。

「ブレーザーが言ったからといって、田渕をトレードすることないやろう。フロントは外国人になめられとる。一歩譲ってトレードは仕方ないとしても、あれだけの選手や、なんの説明もなく、しかも夜中に一方的に通告することないやろう。あいつのことや、どうせ悪者になるのが嫌で、社長の仕事やと手をつけなかったんや。あいつ、自分が京大を出てるもんやから、高商出の社長に不満があるのやろう」

話を聞いていると、阪神の球団代表のMさんのことで、Mさんと山野さんは、N高等学校（旧制）で親友だったらしい。厳しいことをいいながら、言葉の端々にどこか愛情がこもっていた。

山野さんの言い分はこうだ。

戦局が厳しくなって、文科の学生の徴兵延期制度がなくなって、文科の学生だったMさんは理系に変り、戦争が終ると文科へ、そして京大の経済を卒業したらしい。山野さんは、そのことを捕えて、保身ばかり考えている人間が上にいると、組織は強くならない。話がさらに飛躍して、Mさんが球団

をやめない限り阪神の優勝はないという。

ところが、一九八五年八月十二日、中埜球団社長が日航のジャンボ機墜落事故で亡くなり、Oさんが念願の球団社長になった。どうしたことか、その年に阪神は優勝した。人生とは皮肉なものだ。

それから二年後、球団史上最低勝率の最下位で、天国と地獄を見た吉田監督が退陣、村山監督が、コーチ人事を、まかしてもらうことを条件で就任した。そして、田渕、江夏をベンチへ入れようとしたが、田渕は球団の反対を察知して断った。

記者会見でM社長が「残念です」と一言だけだった。その言葉は村山監督が横にいるだけに、一層冷たく聞えた。村山監督は「阪神だから帰れないんです」と痛烈な言葉を吐いた。彼はその後、二年間監督をやったあと、阪神タイガースと絶交宣言をした。フロントの間に余程の確執があったのだろう。

一九八八年五月、バースが子供の病気で帰国してしまった。Mさんは六月に退職、Mさんが社長就任以来兼任していた球団代表に、古谷本部長が昇任し、バース問題の解決に当った。そして、古谷さんは、喜びも束の間、就任してわずか三十九日目に自殺してしまった。

Mさんは運の強い人かも知れない。停年後、音信不通になってしまったが、山野さんはどういうだろう。

「要領のいいことと運のいいことは違う」
山野さんは、きっとそうつぶやくだろう。

横浜に10連勝（49試合目）

危うく巨人戦（初戦）の二の舞を演ずるところだった。六回まで、10対3とリードしながら、終わってみれば10対9。

「四回までに10点を取ったんだから、本当は安藤、ウイリアムスは出したくなかったんや。寂しいよ。」

スポニチの監督談話である。出したくなかったら、出さなくてもよい。藪でもいい、谷中でもいい、続投させ、たとえ負けたとしても一試合ぐらいと思っては、いけないんだろうか。

ウイリアムスは、ここ10試合で7試合登板。疲れないはずはない。九回、ウッズ、村田に本塁打を打たれて、その差1点、代打小川にも打たれて、二死二塁、一打同点のピンチを迎えたが、代打万永を遊ゴロに打ちとってゲームは終わった。「10点差で勝っていようが、20点差で負けていようが僕の気持ちは変わらない」。ウイリアムス選手は、プロフェッショナルな選手だ。

藪は、六回1/3で7安打3失点だったが、ウッズ、村田を無安打に抑えていたし、自分で稼いだ3点もある。谷中のコックスへの2―2からの外角低目のストレートは絶好球だった。コックスは手が出ず、球を見きわめて、やられたという表情をしていた。ところが審判はボール。無情とは、この事

か。谷中は動揺、四球、そして村田の二本目の本塁打につながった。まだ3点ある。今日の谷中なら、のりきれると思った。

「捨て試合を捨て試合らしくなくやるのが名監督だ」といって、小山、村山のローテーションをきっちり守り、阪神を2度優勝させた藤本監督の古典的な投手起用も見直されてもいいのではなかろうか。当時は、クローザーも、セットアッパーもなかった。投手は完投するものだった。

競争意識をもった阪神の打撃陣の活躍は目覚ましい。チャンスを与えられた控え組が即活躍する。また、二回の二死から、今岡、赤星が火をつけた5連打3点も見事だった。

2003年5月28日
甲子園ナイター
⑪阪神10勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
2	0
3	0
2	2
3	1
0	0
0	0
0	4
0	0
×	2
10	9

投
〇藪
吉野
谷中
安藤
Sウイリアムス

打
今岡3　赤星3
八木3　藪2
久慈1　金本①
桧山1　片岡1
矢野1

16

伊良部13K完投（50試合目）

伊良部の投げた141球。〝一球入魂〟という言葉が、死語でないことを思い知った。13K完投、1失点。三回、中村に本塁打を打たれた一球だけが失投だった。その悔しさを、五回、147キロの胸許をつく直球で、中村を三振にとった。

〝あと一球〟の大歓声の中、最後の最後まで、伊良部は慎重で冷静だった。九回二死一塁。鈴木尚をカウント2―2と追いこんでから、タイムをとって、矢野とサインを確認。最後は、内角低目134キロのフォークで空振り三振に仕留め、笑顔を見せて小さなガッツポーズを作った。ウイニングボールをミットに収めた矢野は、緊張から解放され、跳び上がって喜んでいた。コントロールの良いストレートと、緩急自在の変化球を投げる投手のリードに、捕手冥利を感じているのだろう。最後の打ち合わせ事項は秘密だそうだが、二人は野球年齢からいえば、まさしく熟年である。二人の会話は、熟年夫婦らしく、案外、真面目な顔をして、冗談事をいいあっていたのかも知れない。勝利打点をあげたのも矢野である。初回、金城に中前打を打たれたが、伊良部は絶妙な牽制球で走者を刺した。それに対し、阪神は、今岡がドミンゴの内角高目の初球を今岡ならではのバッティングで、薄暮のレフト

スタンドへ運んだ。

三回、中村の本塁打で同点にされた四回、片岡のライトフライを、ウッズが球を見失って二塁打とした。無死二塁、ベンチは、三塁に片岡を進めて、外野フライでも点をとれる態勢。しかし打者はアリアス、送りバントは無理だ。昨年までのアリアスなら、強引に引っ張っていただろうが、今年は違う。アリアスは二塁へゴロを転がし、走者を三塁へ進めた。そのあと、表の横浜の攻撃で、コックスの三振と同時に内川の三盗を刺して気を良くしている矢野。ドミンゴの直球を右前へ落とした。この1点を伊良部が守った。八回、二死二、三塁、久慈に打ってほしかった。

2003年5月29日
甲子園ナイター
⑫阪神11勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
1	0
0	0
0	1
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
2	1

投
〇伊良部

打
今岡③
矢野3
金本1
片岡1
アリアス1
9

ムーア7失点（51試合目）

初回、今岡の二塁打のあと、赤星のバントは一塁手の正面をつき、今岡は三塁に封殺された。前回、ムーアが二回途中でＫＯされた24日のヤクルト戦（松山）と同じで嫌な予感がした。一回は簡単に三人を凡打に打ちとったが、二回、久々の出場の元木が、左翼線を破る二塁打で出塁。元木のしつこさに、いらいらしたムーアは、斉藤に2ランを打たれ、続く阿部に四球、そして初出場の原に二塁打を打たれて3点を失った。

さらに、四回裏、連打と四球で無死満塁とし、投手の高橋（尚）に手を焼いた。ファールで3球粘られ、最後は押し出しの四球。4点を与えてマウンドを降りた。開幕7連勝が嘘のようだった。体にキレがなく、スピードもなかった。六月になって、急に勝てなくなった去年の二の舞か。2番手の佐久本が、初球を清水に走者一掃の本塁打を打たれて8失点。大勢は決した。

阪神のベンチは、控え選手を出して、実戦に慣れさせる作戦に出た。桧山、片岡、アリアス、矢野、そして今岡も七回の打席で三振に倒れたあと、ベンチに引っ込み、赤星と金本だけが残った。1点差という緊迫した試合で、3連勝した横浜戦のあと、息抜きもいいだろう。長いペナントレースでは、

負け試合を作ることも必要であり、控え選手にとって絶好のチャンスである。

控え捕手の野口が、九回、一死、中前打の淺井を二塁において、中堅フェンスを直撃する三塁打を打って、高橋（尚）の完封を阻止する意地を見せた。

その野口は、七回から、アリアスに代わって一塁を守った。阪神の捕手はよく打つ。淺井の代打４５５の打率は特筆ものだ。

この夜の阪神の戦いぶりを、日刊スポーツは面白い表現をする。勝ちが満点なら、負けは０点、だがこの夜の阪神の負けは〝満点敗戦〟と。

明日の巨人戦を期待しよう。

2003年5月30日
東京ナイター
⑩巨人2勝7敗1分
読売テレビ
ＭＢＳ毎日

巨人	阪神
0	0
3	0
0	0
5	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
8	0

投
●ムーア
佐久本
中村泰

打
野口2
沖原2
今岡1
淺井1
矢野1
佐久本1
8

九回11点の逆転劇（52試合目）

広島戦の八回1イニング9点の逆転劇に、今年の阪神は強いと思ったが、この夜は、九回11点の大逆転劇だ。それも巨人戦だから、たまらない。盆と正月が一緒に来たようなものだ。

先発下柳が、初回に2点をとられたが、六回まで毎回の9奪三振。その好投に、矢野が右前打の桧山を一塁において、右翼スタンドへ同点2ラン。九回、大逆転劇の影の演出者だ。七回、下柳をつないだ吉野が、左の斉藤、阿部を凡打に、安藤が原を三振に打ちとった。八回、片岡の代打浅井が中前打、アリアス四球で一死一、二塁、沖原の三塁フライのあと、ベンチは、安藤の代打に八木を送って勝負をかけた。八木はセンターフライに終わって、勝負は裏目に出た。その裏谷中が、先頭打者の清水に中前打を打たれ、福井のバントで一死一、二塁、二岡四球のあと、腰痛に悩む高橋（由）にセンターオーバーの二塁打を打たれて、負けたと思った。カメラは、目頭を熱くしている高橋（由）をとらえていた。

しかし、勝負は無情である。九回、阪神の大反撃が始まった。久慈が二塁左へ安打。サンスポの〝ノムラの考え〟によれば、内角を要求した阿部のサインに、小兵の久慈にフルスイングされるとは想像し難いのに、仁志が守備位置を右に寄ったからだという。続く今岡が左前打、無死一、二塁からの赤

星のバントが、ドラマの幕開きだった。

バントが投前の小飛球となった。猛然とダッシュしてきた三塁手の福井がポロリとやって、併殺となるところが無死満塁となった。

金本の左前打で4対4の同点、桧山がバントを失敗したあと、一ゴロで走者を進め、片岡の代打浜中が敬遠で満塁。アリアスが初球を右中間に二塁打を打って7点。この時のアリアス、いつもなら、ヒットを打ったあと、ペンダントにキスをするのに、この時は打席にはいる前にやっていた。そのあと関本の2ラン。打者が一巡したあとも三連打。最後は金本の3ランで締めくくった。

2003年5月31日
東京ナイター
⑪阪神8勝2敗1分
読売テレビ
ＭＢＳ毎日

巨人	阪神
2	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
2	0
1	11
5	13

投
下柳
吉野
安藤
〇谷中
中村泰

打
今岡5　赤星2
金本②　ｱﾘｱｽ2
矢野②　久慈2
桧山1　淺井1
関本①

18

打たれても格好いいウイリアムス（53試合目）

高橋（由）に、昨夜のウサを晴らすかのような、サヨナラ2ランを打たれたあと、ウイリアムスの姿をテレビで追ったが、映ったのは、まっさきにベンチを出る星野監督の姿だけで、あとはお祭り騒ぎの巨人ベンチだった。10チャンネルで、解説は長嶋さんとなれば当然のことで、高橋（由）もいい時に打ったものだ。長嶋さんは、スポーツ報知で、打つべき人が打ったこと、中継ぎの河本、前田、眞田投手の頑張りを評価し、2、3勝以上の勝ちがあるという。あの１９９６年のメイクドラマのことをいわないのも長嶋さんらしい。あの年の巨人は、7月6日に広島との差が11・5ゲームあったのをひっくり返した。また、昨年阪神は6月に8連敗を含む4勝13敗と失速、3位に転落した。阪神ファンはこの事を忘れていない。

話を戻す。スポーツ新聞にウイリアムスの姿を探した。スポーツ報知は、勝利投手の如く胸を張り、スポニチは、地面を蹴り上げてベンチへ帰る格好いい姿をのせていた。ウイリアムスは、打たれて、ますます闘争心を駆り立てるだろうが、ウイリアムスの、一週間の完全休養を与えると宣言して、投手陣を奮起さしてはいかが星野さん。

阪神、巨人の新人投手の戦いは、久保より田が多い阪神の久保田が勝った。勝利投手をフイにしたが、六回1失点の好投は、敗戦の中で断然光っていた。一回、二岡に本塁打を浴びたが、五回には一死満塁から、その二岡を１４５キロの直球で空振り三振。さらに続く高橋由も2―3から１３０キロのフォークで仕留めた。六回の二死満塁のピンチも切り抜け5安打1失点。新人として堂々たるものだ。とくに、高橋（由）を打席に迎え、カウント2―1と追いこんだあと、阪神バッテリーはフォークボールを勝負球に選んだ。2球ワンバウンドになったが、矢野が全身で受け止めた。3球目もフォークボール、高橋（由）のバットは空を切った。この矢野との間に生まれた信頼関係は、久保田の大きな財産になるだろう。

2003年6月1日
東京ナイター
⑫巨人3勝8敗1分
読売テレビ
毎日ＭＢＳ

巨人	阪神
1	1
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
1	0
0	0
2×	0
4	3

投
久保田
吉野
安藤
●ウイリアムス

打
赤星2
金本2
今岡1
ｱﾘｱｽ①
沖原1
桧山1
8

ご当地選手八木大活躍（54試合目）

倉敷球場は何かが起きる。去年は広島戦でアリアスが3本の本塁打を打って、ファンを狂喜させたが、今年は発熱で休場、ご当地選手の八木が四番に起用された。その八木選手がアリアスに代わって、3安打3打点かと思っていたが、終わってみれば、5打数4安打5打点の大活躍で、地元ファンにこたえた。カビくさい言葉でいえば、〝錦を着て故郷へ帰る〟といったところ。ベースボールマガジン社の〝猛虎大鑑〟によれば、八木選手は、未完の大器といわれ続けて、気がついたら〝窓際族〟という、もったいない長距離砲。しかし、若手選手に人望があり、記録より記憶に残る選手だという。星野監督は、そんな八木選手を「何をいう働き盛りだ」といい、テレビの解説の藤田さんは、関本をみて、八木のミート打法を学べという。

もう一人活躍した選手は赤星。3安打3打点。とくに今岡が2度敬遠されたあとの赤星らしいピッチャー返しのはかったような安打は、一時はやったセリフを思い出す。

「ナメタラ、アカンゼヨ」

三回には、四球の今岡をバントで送る。藤田さんは、星野監督が赤星を怒るのは、監督という職業

の欲だという。

今年の阪神が強いのは、選手が競争心を持ったことだ。藤本が欠場して、片岡をも含め内野の競争は激しい。昨日、今日と沖原があたっている。関本、久慈には安打こそなかったが、関本には、三回惜しいライト線のファール。久慈は守備で貢献した。七回、井川が打たれて2点を失って降板。安藤が1点を失って、なお一死満塁。代打関川の打球は、センター前にフラフラとあがる。赤星も今岡も懸命に走るが届かない。その時、久慈が横から飛び出して好捕した。大量失点になるところ。

井川が登板するたびに、去年の井川に戻っているだろうかと毎度期待する。今日も立ちあがりからピンチの連続だったが、忍耐強く投げて六回まで無失点。１４０球投げ七回に疲れがでて降板。次回こそ完投を。

2003年6月3日
倉敷ナイター
⑩阪神4勝6敗

サンテレビ

阪神	中日
1	0
1	0
2	0
0	0
1	0
1	0
0	3
4	1
×	1
10	5

投
〇井川
安藤
谷中

打
八木4
赤星3
金本2
沖原2
桧山1
矢野1
浜中1
14

華麗な阪神野球（55試合目）

二回と六回の攻防の明暗が勝敗を分けた。

中日は、クルーズ、谷繁が連打して、無死一、二塁、先制のチャンスに、渡辺の遊ゴロが併殺打となって、チャンスを逃した。その裏、阪神は八木、桧山が連打して無死一、二塁、矢野の二遊間ゴロの安打で先取点をあげた。渡辺の打球が遊撃の正面をつき、矢野の球がほんの少し右へそれる明と暗である。続く片岡の左前打で2点、なお、無死一、二塁、沖原が初球をバント、一死二、三塁、藪は三ゴロに終わったが、今岡がインコースの難しい球を中前にはじき返して追加点をあげる。流れるような華麗な攻撃で4点をあげた。

六回の中日は福留が、あわや本塁打というライトフェンス直撃の二塁打で出塁。アレックスの打球がフラフラと外野へあがった。金本は深く守って追いつかない。ポトリと落ちたらピンチが拡大し、試合の流れが変わる。その時、赤星が二人の間をかいくぐってダイビングキャッチ、チームを救った。星野監督は、無安打でも2、3本打ったよな価値があると大絶賛。阪神は攻撃も守備も華麗だ。その裏、阪神は二死から、片岡が右へ6号本塁打で追加点をあげて明暗をわける。

片岡は巨人3連戦でノーヒット。淺井や浜中代打を告げられる屈辱も味わい、倉敷ではスタメンを

外されていた。次から次へとレギュラーを奪いあう競争が阪神を強くする。

藪は四回、アレックスに、ど真ん中の失投を2ランされてから、変化球から直球に切りかえて立ち直った。テレビ解説の中西さんは「藪は、ボールにする球が真ん中にはいり、井川は、ストライクをとる球がボールになる。それで藪は2―0から打たれたり、井川は四球が多くなる」という。

藪をつないだ吉野は、福留を三邪飛、アレックスを三振に仕留め、名誉を挽回する。ウイリアムスは、連打されたが、代打高橋（由）を三ゴロ併殺打に打ちとった。しかし、キレのあるスライダーはまだ戻っていない。

2003年6月4日
甲子園ナイター
⑪阪神5勝6敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	中日
0	0
4	0
0	0
0	2
0	0
1	0
0	0
0	0
×	0
5	2

投
〇藪
安藤
吉野
Ｓウイリアムス

打
今岡2
八木2
片岡②
金本2
桧山1
矢野1
9

素晴らしい伊良部の投球術（56試合目）

伊良部は立ち上がり、井端、大西に打たれて、一死一、二塁で、あたっている福留を迎えた。2球で2ストライク取ったあと、ボール球を振らせようと、2―3。あとは、フォークで攻めた。1球はファールされ、2球目で二ゴロ併殺に仕留めた。

そのあとも、福留に二塁打、右前打と打たれたが、いずれも二死から次打者アレックスに四球、六回は内野安打されたが、計ったように次のクルーズで三振を取っている。3安打されている井端。二塁打、本塁打と打たれている谷繁の前にも走者を置いていない。走者を二塁に置くと、伊良部は物すごい集中力を発揮して慎重になる。9安打されたが、三塁ベースを踏ませたのは、四回と最終回の2度だけで11三振をとっている。

そんな投球術を、伊良部がよく口にする〝ロケーションが良い〟ということだと思っていたが、日刊スポーツの評論家中西さんは、ストライクゾーンを9分割した球の配置のことといい、ピンチでクルーズと2度対決したとき、サイドは間違っても、高低は絶対間違わない細心の注意を払って、2度とも三振に仕留めた配球を解説している。言葉をかえていえば、力と技、緩急自在、細心にして大胆、

両両相持つということか。サンテレビの解説の皆川さんは、〝素晴らしい〟という言葉を連発していた。

一昨日の久慈のプレー。八回裏、片岡が敬遠されて一、二塁。代打浜中につなごうと初球をセーフティバントしたが捕飛。失敗したが、ベテランのチームプレーとして書いておこうと思ったが原稿に余裕がなかった。その久慈が今季初スタメン、二回、一死二塁から初球を左中間へ三塁打。そして、六回、一死二、三塁から、代打八木が敬遠のあと、左翼へ犠牲フライ、全得点を叩き出して伊良部の好投にこたえた。桧山の2安打と、谷繁のブロックをかいくぐった走塁も見事だった。この日は、伊良部、久慈、桧山の同期生が活躍した日だった。

2003年6月5日
甲子園ナイター
⑫阪神6勝6敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
×	1
2	1

投
〇伊良部

打
桧山2
赤星1
金本1
片岡1
久慈1
6

巨人とのゲーム差10（57試合目）

白い紫陽花が満開だ。紫陽花につきものといえば、雨と蝸牛である。蝸牛より、でんでん虫といった方が親しみをます。陸上に住む巻貝のことである。梅雨は、まだ早く、今やでんでん虫を見ることができないとすれば、この白い紫陽花に似合うものは、日没間際の夕暮れだろう。

ヤクルトの六回の攻撃が、丁度その頃だった。ムーアが、ラミレスに2ランを打たれて4対3になったところでポートに代わった。

期待されているポートは、一死をとったものの、浜名に三塁打、飯田に左前打を打たれて同点とされた。ちょうど、紫陽花が夕闇に消える頃で、ヤクルトの勢いから、阪神の白星は消えたと思った。続く宮本に右前打がでて、一、三塁になっていたところ、宮本がオーバーベース、矢野が判断良く宮本を一塁に刺した。これで流れが阪神に来た。

七回、阪神は二死から、金本の二塁打がでたが無得点、その裏、ポートをつないだ谷中は、ラミレスに死球、古田に打たれて一死、一、二塁、宮出の代打、左のベッツのところで、投手は吉野。ベッツを二ゴロ、土橋を三振に打ちとって役目を果した。

八回、先頭打者の桧山が、2―3から三人目の投手鎌田のフォークボールをライトスタンドへ運んで均衡を破った。つづく矢野がレフトオーバーの安打、片岡の大きなセンターフライのあと、藤本の犠打で二死二塁、代打浜中が敬遠されたあと、今岡がバットを折りながら、ライト前に落として1点を追加した。そして、安藤がヤクルトの攻撃を三者凡退に打ちとったあとの九回、桧山が0―3から、2打席連続本塁打を打って勝利を不動のものとした。

ベンチは大騒ぎだった。お立ち台で「公共の電波を借りて申し訳ないですが、今日は息子の誕生日です」というあたりいかにも桧山らしい。矢野の2ラン、安藤、吉野の好投、さらに八木、金本のベテランらしい犠牲フライも忘れられない。

2003年6月6日
神宮ナイター
⑫阪神7勝5敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	1
0	0
0	0
0	2
2	1
1	0
0	0
0	2
0	1
4	7

投
ムーア
ポート
谷中
吉野
〇安藤

打
赤星3　今岡2
桧山②　矢野②
金本1　八木1
ムーア1片岡1
13

下柳一発に泣く（58試合目）

一昨夜桧山は、二回、二死二塁で、飯田の右翼フェンス際の大飛球を、ジャンプ一番、お手玉しながらキャッチして、チームのピンチを救った。それに気を良くした桧山は、八、九回と二打席連続本塁打という離れ業をやってのけた。

三回、赤星がファールで粘りに粘った14球目、レフトポールぎりぎりに大飛球を打ったが、ラミレスが好捕した。次の金本が中前打。桧山がレフト線の惜しいファールのあと、レフトへ大飛球を打ち、背走したラミレスが、フェンスにぶつかりながら、またも、好捕した。打ったのが桧山だっただけに、この時、始めて昨夜のことを思い出した。そして、今夜は、好守備に気を良くしたラミレスにやられるという嫌な予感がした。

下柳と佐藤。ベテラン選手の投手戦となった。均衡が破れたのは六回だった。下柳がベッツに右へヒットを打たれ、ラミレスを打席に迎えた。バッテリーはボールからはいる。2球目、矢野は併殺をねらって、インコースへボールになってもいい球を要求したと思う。それが少し中にはいった。失投を待っていたラミレスがバックスクリーン下へ、2ランをほりこんだ。マウンドの下柳の顔がゆがん

だ。

阪神は佐藤に、松山戦の時と同じ4安打散発で、打線がつながらない。松山で本塁打を打ったアリアスは風邪で休んでいる。

下柳をつないだ谷中が、七、八回とヤクルト打線を抑えて、九回、高津を攻めた、テレビが終わってラジオに切りかえる。

一死後、片岡、八木が連打。そして、2安打とあたっていた矢野が三振、その間に、走者が進塁。パスボールしたのか、ヒットエンドランのサインがでていたのか、ラジオでは、わからない。二死、二、三塁、1打同点のチャンスに、代打浜中、神宮は沸いたが、強いショートゴロに終わって、あと一歩届かなかった。夏男の異名を持つ下柳。脇役から主役に踊り出す。そんな予感のする好投だった。

2003年6月7日
神宮ナイター
⑬ﾔｸﾙﾄ6勝7敗
テレビ大阪
毎日ＭＢＳ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
2	0

投
●下柳
谷中

打
片岡2
矢野2
金本1
八木1
6

好投の久保田はドラフト5位（59試合目）

毎月、第1月曜日は刀根山病院へ行く日である。69才、今から5年前に肺の手術をした。病は肺ノーホー。漢字が難しいので、お医者さんは、カルテに〝ブラ〟と書くらしい。小さな細胞がつぶれて、袋になってしまう病気である。

さしたる障害もなく、大きくなってから手術すればよいということで、ほっておいたら、階段を上がるにも息切れするようになり、手術に思いきった。

刀根山病院は、もともと結核療養所で、池田中学校（旧制）に通学していた頃、車窓から療養所を見て、勉強嫌いだった私は、結核になればいいのにと思ったものだ。いい年になって、それが実現するとは皮肉なものだ。

6月のレントゲンとCTスキャン。11月の肺活量と血液検査以外は、先生と雑談するのを楽しみにしている。そんな雑談の中から先生がタイガースファンであることがわかったのは、今年になってからである。独走する阪神に病棟が明るいという話からである。それから、あいさつ代わりに、日曜日の阪神の戦いぶりを話題にすることにした。患者さんが多いので長話はできない。

「久保田は、よかったですね」

九回、６安打３失点、１４０球。

「たいした新人だね、ドラフトは何位だったの」

「五位です」

「スカウトの手柄やね」

「テレビがないのが残念でしたね」

「そうね、ラジオのアナウンサーは、よく絶叫するね……ところで体の調子は」

「阪神と一緒です」

「６月は危ないよ」

それから簡単な診察が始まる。

今岡の２点タイムリー、金本の同点本塁打もあったが、２番手の安藤が延長11回、小野にサヨナラ打を打たれて、３対４で敗戦。延長戦は３敗１分けで、まだ勝利がない。

2003年６月８日
神宮ナイター
⑭ﾔｸﾙﾄ７勝７敗

毎日ＭＢＳ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
0	0
0	0
1	0
0	2
0	0
1	0
0	1
0	0
0	0
1×	0
4	3

投
久保田
●安藤

打
赤星３
八木２
矢野２
久慈２
今岡１
金本①
11

信じられない40勝（60試合目）

ここ三日はテレビ放送がない。ラジオを聞くことになったが、声そのものを文章にできても、声を聞いて文章にすることは難しい。臨場感がでないのである。アナウンサーのグランドの出来事に対する説明や描写が少なく、解説者に頼りすぎる。解説者は、聴取者が映像を見ているものとして、描写より批評が先走ってしまう。

昨夜の中日戦、五回の阪神の攻撃がいい例である。井川の三塁内野安打と今岡の右前打で、一死、一、三塁、金本の投ゴロで、野口は三塁へ暴投、井川が生還した。さらに、最近不調の桧山の代打浜中がライト前に打って同点とした。

スクイズのサインの見落としかと思ったが、金本にスクイズはあるまいと否定する。投ゴロで、三塁を飛び出した井川の凡ヘッドだろうか。そして、この凡ヘッドが好運を呼んだのか。打撃に助けられて、7勝をあげている井川の強運を思った。

スポーツニュースを見ると、井川の凡ヘッドでなくて、野口の考えられないミスである。金本の打球は、投手の前で大きく跳ねて、高い飛球となった。野口が取った時、井川はベースを離れていないし、

一塁へ投げても間に合わない。それなのに、野口が三塁へ投げた球は、走者を刺すといった球でなく、山なりのボールである。

スポニチの野口の談話は「ファールにするか、捕球で焦り、ミスしてしまった」という。テレビでも、この不可解な投手心理は説明できないだろう。しかし、野口が投げても無駄な球を三塁に投げたということはわかる。

昨夜の阪神はツイていた。五回の井川、金本の安打をはじめ二回の沖原の右前打、七回の満塁での金本の遊ゴロ、そして、駄目押しとなった関本の三遊間安打、いずれも好運な安打である。井川は相変わらずだったが、福留を抑えたことが成功した。安藤、ウイリアムスのリレーは完璧だった。

2003年6月10日
福井ナイター
⑬阪神7勝6敗

毎日ＭＢＳ

中日	阪神
1	0
0	0
0	2
3	0
0	2
0	0
0	3
0	0
0	0
4	7

投
〇井川
安藤
Ｓウイリアムス

打
今岡３　関本３
赤星２　浜中２
金本１　秀太１
矢野１　沖原１
井川１

15

コラム／六甲おろし

〈六甲おろし〉の応援歌を、はじめて聞いたのは、戦争に負けるほんの少し前だ。

場所は阪神電鉄の魚崎駅を降りて住吉川沿い、酒蔵の町を通って海へ出る道だった。阪神淡路大震災もあり、その道が今どうなっているのか、でかけることにした。

「この道はいつか来た道」といったところである。

私がその道を始めて歩いたのは、昭和二十年八月五日の夜半から六日未明の空襲で、阪神間の都市が全滅してしまった。それから数日後のことだった。駅を降りると焼野ヶ原で一望千里、夏の海がガラスの破片を散りばめたように光っていて、沈黙した町に、焼け残った松林で蝉だけが鳴いていた。その声は、空襲で打ちひしがれた人間への応援歌のようだった。

その年の四月に、私は関西学院へ入学し、秋まで授業を受けることになっていた。中学三年の夏から、学徒動員で工場が働き場所になっていただけに、平穏な日々が、春の日だまりの中にいるようでありがたかった。英語の授業も多く、配属将校が学校の先輩で、英語を使うのも意外だった。

ある日、机を並べている橋本君から、頼み事を聞いた。彼は広島出身で寮生活を送っている。「空襲で西宮の酒蔵が焼け、酒をわけてくれるらしいけん、かんざめの酒かも知れんが、つきあってくれ

んかの、寮でコンパをやるけん飲みに来てくれや」

私達は昼の授業をさぼって、水筒や薬缶では足りないので、バケツを持って行くことにした。

酒蔵の焼け跡では、大きなホウロウのタンクの周りに人が集まり、お酒をさまざまな容器に入れてもらっていた。待ちきれずに飲む人もいて、大変賑やかだった。バケツを持って行った私達には、タンクに梯子をかけ、長い柄のついた杓子で直接すくってくれた。その杓子はふん尿を汲むものと同じ格好をしている。緑色のタンクには白いペンキで〈桜正宗〉と書いてあった。

その帰り道、前を歩いている人が〈六甲おろし〉を歌っていた。その人は国民服に幾つもの水筒をたすきがけにし、大きな声でなんども繰り返し歌っていた。応援歌にしてはいい歌詞だった。「蒼天翔ける日輪の青春の覇気」には、新感覚派の文章の匂いがある。佐藤惣之助の作詞で、そのほか〈赤城の子守歌〉〈湖畔の宿〉〈男の純情〉〈人生の並木道〉等の作詞家であるとともに、本職は詩人であることを知ったのは、戦争が終わってからである。

私は、そんなことを思い出しながら、すっかり整備され、戦争や地震の爪痕がなくなっている松並木の道を、いつか見た人のように、〈六甲おろし〉を歌い、遠くなった日のことを偲びながら歩いた。

その時のお礼に、というのは、いささかオーバーだが、〈桜正宗〉のことも調べる気になった。〈桜正宗〉といえば正宗を名乗る酒の元祖格である。清酒を〈セイシュウ〉正宗と読ませることで、正宗〈まさむね〉

と名づけるお酒が多く出回った。まぎらわしくなったので、明治初年に商標を改正することになった。その方法として、最初に〈宮水〉を発見した山邑酒造が一番はじめに名前をつけることにした。

山邑酒造は、日本の花は桜と、〈桜正宗〉と銘をつけた。二番目の酒造会社は〈菊正宗〉と名付けた。そして今は、住吉川をはさんで甘口、辛口の銘酒づくりに励んでいる。

なお、〈桜正宗〉の誕生の地は、誰もが灘だと思うだろうが、実は大阪市此花区の〈伝法〉というところで、山邑家の墓は伝法の正蓮寺にある。正蓮寺は、鴻池組の菩提寺であり、中内家の墓もある。

藪余裕の6勝（61試合目）

昨夜は女房がいないことを幸いに、テレビ放送がないので、携帯ラジオと、もう一つは缶ビールを風呂場に持ちこんだ。

藪が調子いいうえ、湯加減もいいし、ビールもよく冷えていて、たちまちご機嫌になる。二回、片岡、藤本の安打で、二死一、二塁、自らのバットで先取点を叩き出したことで気を良くし、藪は中日の打戦を、四回まで無安打に抑えた。

藪が入団した時、監督だった解説の中村さんは「低目を心がけ、ストライクを常に先行させ、伊良部の投球術から勉強したんだろう、緩急自在にコントロールされていた」といい、五回、立浪に二塁打を打たれ、ソワソワしだしたとき「伊良部みたいに、ああ打たれたか、まあいいやというような顔をしてほしい」という。中村さんも伊良部の印象が強いのだろう。

藪の今季初完投を期待したが、八回、森野に本塁打を打たれ、関川の中前打のあと、二人を打ちとって福留に廻ったところで降板、吉野につないだ。吉野は徹底した福留封じにこたえて、二ゴロに打ちとる。九回も吉野が続投、荒木、リナレスに打たれたが、無失点で試合終了。テンポの良い藪の投球に、

打線も調子にのる。三回、一死満塁のあと、片岡の右前打と関本の犠飛で2点、四回は、今岡、赤星、金本の安打で1点、さらに五回は、片岡の二塁打を藤本の左前打で帰し、藪の送りバントのあと、今岡の中前打で2点。しめて16安打で7点。猛打賞も3人でた。金本、今季初の片岡、復帰後、2試合無安打だった藤本の三人。競争の激しいポストの藤本も胸を撫でおろしたことだろう。しかし、ベテラン久慈の守備と関本の長打力も捨て難い。まだまだ安心はできまい。投手では、安藤、ウイリアムスを、打では、八木、浜中を温存し、ベテランを適当に休ませながら闘う選手起用も、堂に入ってきた。13日から2位巨人戦に向け態勢はととのった。心配なのは桧山と雨だけだ。

2003年6月11日
岐阜ナイター
⑭阪神8勝6敗

毎日ＭＢＳ

中日	阪神
0	0
0	2
0	2
0	1
0	2
0	0
1	0
1	0
0	0
2	7

投
〇藪
吉野

打
金本3
片岡3
藤本3
今岡2
赤星2
矢野1
関本1
藪1
16

浜中負傷（62試合目）

「梅雨というのに、こんな月です」

昨夜、三回の阪神の攻撃の前に、こういって、甲子園の月を画面一杯に写していたのに、今日は朝から雨だ。梅雨入りして始めての雨である。白から色変わりを始めた紫陽花が生き生きとしている。ワンカップの水に、大さじ一杯の白と、小さじ一杯の赤と水色の絵の具を交ぜ合わせ、隠し味程度に黒を落としたら、その色になると思う。

不幸な出来事から書こう。

五回、浜中が二岡のファールフライをフェンス間際まで追いつめながら、グローブのドテにあて落球してしまった。そのあと、伊良部が本塁打を打たれてしまう。六回、無死から阿部の左翼線安打の打球を取り、浜中の肩を気づかって、近くに来ている今岡に返球したと思ったら、右腕をだらりと下げ、右膝を地面につけ、痛さを我慢している。杉田トレーナーが浜中を抱くようにしてベンチへさがった。五回のエラーが、心にひっかかっていたのだろう。

「将来のある選手だ。一塁しか守れないような選手にしたくない」と監督が慎重を期していたのに

どうしたことだ。すんだことだ仕方ない。肩の筋肉を鍛えて、脱臼を克服してほしい。

伊良部が三本の本塁打を打たれ、3点リードされた七回、左前打の藤本を一塁において、関本が本塁打を打って1点差とし、なお、赤星の安打と金本の四球で、一、二塁。打者中村（豊）の初球に、赤星が三盗して、バッテリーを揺さぶったが、中村（豊）は遊ゴロに終わって、同点にできなかった。八、九回に逆転の希望をつないだ。ところが、八回、谷中が清原に死球、江藤に2ランを打たれてしまって、せっかくの反撃に水を差してしまった。

伊良部が3点取られたが、敗因は、一回、赤星、金本四球のあと、浜中が捕邪球、八木が投ゴロと、高橋（尚）の立ち上がりを崩せず、七回まで投げさせてしまったことだろう。

2003年6月13日
甲子園ナイター
⑬巨人4勝8敗1分

サンテレビ

阪神	巨人
0	1
0	0
0	0
0	0
0	1
0	1
2	0
0	2
0	1
2	6

投
●伊良部
吉野
谷中
佐久本
金沢

打
今岡2
赤星1
浜中1
八木1
藤本1
関本①
7

下柳の好投に片岡のサヨナラ打（63試合目）

摩訶不思議。昨夜の巨人戦を見ながら、つい口から出た言葉である。摩訶とは仏教用語で〝大〟のことをさすらしい。

ヤクルト2連戦で、2ケタ得点されて惨敗した巨人が、1点の攻防に鎬を削る戦いをするのだから、やはり伝統というものだろう。とは、去年までの阪神が、巨人ファンにいわれていたが、今年は、まさにその逆、阪神ファンに至福の日が続く。

手に汗を握る投手戦とは昨夜のことだろう。木佐貫は、威力のあるストレートとフォークで、一、二回、6三振。八回まで、四回を除き毎回走者を出すが、五回、六回と併殺に打ちとる。六回の片岡の三塁ライナーは、いい当たりだったが、正面をつき併殺に終わった。阪神は度重なるチャンスにタイムリーがでない。七回に藤本の二塁打がでた。六回までパーフェクトピッチングを続けている下柳に代打はないだろうと思っていたが、星野監督は勝負に出て、代打に八木を送ったが、二ゴロに終わった。星野監督の大胆な采配にこたえて、安藤が八、九回と6人を凡打に抑えた。九回、アリアスの左中間安打、矢野のバントで一死二塁、藤本が敬遠されると、二回目の勝負、好投の安藤に、関本を代

打に送った。関本が初球の絶好球を見逃すと、監督の厳しい顔が写った。初球から行けと指示していたのだろう。関本は最悪の遊ゴロ併殺。

十回は、久保田が新人らしくない度胸で、二岡を三振、高橋（尚）に四球を与えたが、清原を三振、江藤がよけたバットに球があたるヒットで一、二塁となったが、動ずることなく斉藤を三振に打ちとった。その裏、三塁エラーで出塁した今岡を赤星がバントで送り、金本が敬遠され、桧山がレフトのファールフライに終わったあと、片岡が前田のアウトコースの球を左中間にサヨナラ打を打った。超満員のファンの期待に答えた。完全試合を期待させた下柳のフォーク、スライダーを低目に集める丁寧な投球は素晴らしかった。5月31日の巨人戦から35人連続無安打に仕留めているのだからすごい。

2003年6月15日
甲子園ナイター
⑭阪神9勝4敗1分

ＡＢＣテレビ

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1×	0
1	0

投
下柳
安藤
〇久保田

打
今岡2
赤星1
金本1
桧山1
片岡1
アリアス1
藤本1
下柳1
9

矢野のサヨナラ三塁打（64試合目）

野球の醍醐味とは、昨夜のような試合をいうのだろう。連日のサヨナラ勝ちだ。昨年も確か3連続のサヨナラ勝ちがあったと思う。

「八、九回と敵の好守備で点が取れなかったりすると、投手はツキがないのかと思って不安になるものですよ」

九回、阪神の攻撃が始まる前、解説の上田さんの言葉である。横浜は八、九回と中継ぎの金沢、吉野、川尻の3投手から7安打を打ちながら、阪神の外野陣の好守に1点しか取れなかった。

それは、八回無死一塁から、赤星は鈴木（尚）の中前打を素早く処理し、一塁走者の種田を三塁に刺した。そのあと、ウッズ、佐伯に打たれて1点を失い、小川を左飛にとったが、村田に左前打を打たれ、二塁走者は代走の田中（一）、駄目を押されと思ったが、金本の懸命のバックホームと矢野のうまいブロックで田中を本塁に刺した。九回には、二死満塁から、走塁の失敗を取り戻そうと打った田中（一）の左中間ライナーを、金本は背走しながらジャンピングキャッチ。ファインプレーの連発にスタンドが盛り上がった。上田さんは、赤星を打率に足の付録が、金本には俺について来いという

付録があるという。この好プレーに2点のビハインドを背負っている阪神の攻撃陣は奮起した。

阪神打線を5安打と2本のソロ本塁打だけに抑えて好投していた三浦が、上田さんの予想したとおり、桧山が四球で塁に出た。これで阪神の攻撃陣が色めき立った。昨日サヨナラ打を打った片岡が、一、二塁間を破って、無死一、三塁。三浦がマウンドを降りた。珍しく阪神の応援団から拍手が起きる。無死一、三塁でデニーが登板した。二回に本塁打を打っているアリアスが死球で出塁。ここ数試合あたっていないといえ、チャンスに滅法強い矢野が1―3から、思い切り良く外角の球を前進守備の右中間へ運ぶサヨナラ三塁打。平野区瓜破の出身で、思い入れの深い選手の活躍だけに、達川コーチと同様、ことのほか嬉しい。

2003年6月17日
甲子園ナイター
⑬阪神12勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	1
1	0
0	0
1	0
0	2
0	0
0	0
0	1
3×	0
5	4

投
井川
金沢
吉野
〇川尻

打
アリアス②
金本①
桧山1
片岡1
矢野1
藤本1
7

速攻の阪神（65試合目）

一回、今岡の初球本塁打に次ぐ早い先取点をあげた。今岡が初球を2塁打、赤星が初球を左前打、2球にして1点。そのあと赤星が二盗、桧山のタイムリーで2点を先取した。五回には、矢野が2点タイムリーの2塁打を打って中押し、八回には、三盗の田中をおいて藤本がスクイズをきめて駄目押し、理想的な試合運びで、同一カード13連勝をあげた。横浜は阪神の貯金の約半分という大切なお客様である。となれば横浜のことも書かねばなるまい。

大阪の上宮高校山上監督の門下生、種田選手のことを書こう。先輩に一枝、同期に元木、後輩に黒田がいる。種田選手のガニマタ打法を見ていると、私は悲しい青春時代を思い出す。戦争に負けたあとにやってきたのは、まことに悲惨な食糧難である。我が家の横の天竺川の堤防の空地は、たちまち家庭菜園になった。その肥料は家庭の人糞しかなかった。それを運ぶのに肥担桶（こえたご）を使った。天秤棒の両端に、桶をぶら下げ、長い柄杓（ひしゃく）を片手に運ぶのである。そのために、度々衣服を濡らした。そんなことを経験して、斜めに天秤棒を担いで歩けば、バランスがとれることを覚えた。あの種田のガニマタ打法で歩くのである。その姿は野球帽を麦わら帽子にかえ、スパイクを地下足袋にかえるだけでよ

い。あの顔がうってつけである。今年の横浜は、若手起用の方針で、種田選手の出番は少ないが、この2試合に、スターティングメンバーとして登場した。2試合で4安打、昨夜はセンターへタイムリーを打っている。昨年の阪神戦で私の印象に残っていることがある。三塁に手から滑りこんでアウトになった時の猛抗議である。滑りこんだ手を関本にスパイクされ、その瞬間、ベースを離れたという、まことに無情な判定である。悔しいのか、痛いのか、種田は半泣きだった。このあと数試合出なかったことを思うと、痛いのを我慢していたのだろう。あのガニマタ打法は、いつまでも見たい。

種田選手は私の好きな選手である。

2003年6月19日
甲子園ナイター
⑭阪神13勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
2	0
0	0
0	1
0	0
2	0
0	0
4	0
0	1
×	0
8	2

投
〇ムーア
久保田
ウイリアムス

打
今岡3　赤星3
片岡2　アリアス2
金本1　矢野1
藤本1ムーア1
野口1　桧山1
16

巨人の喜びも束の間（66試合目）

阪神が首位を走っている、オールスター前後に、大人位の背丈になって、大輪の花を咲くことを期待して、四月に種をまいた九本の向日葵の花が咲き始めた。一ヶ月も早く、背丈も一米にも満たない。種をまく時期が早かったのだ。そんな向日葵の花が、梅雨に濡れている紫陽花の横で咲いているのだから、様にならない。阪神が首位であることは期待どおりだが、このままだと、オールスターまでもつまい。阪神ではない、向日葵の花である。昨夜の戦いぶりを見るかぎり、その頃も、阪神は大輪の花を咲かせていることだろう。

阪神が、今岡とアリアスの2本の本塁打で4対2とリードして、七回の巨人の攻撃、二死から斉藤の右前のあと、まさか、まさかの鈴木が伊良部の初球をレフトスタンドへほりこんだ。同点、鈴木が打席にはいる前に、原監督が耳打ちしていただけに、その喜びようは相当なものだった。解説の長嶋さんの声が弾んだ。

試合が振り出しに戻った八回、巨人の投手は、二回を好投した河本にかわって、取っておきの久保が満を持してマウンドに上がった。ところが、いきなり桧山に本塁打を打たれた。それからは、長嶋

さんが試合当初いっていた、ピッチングスタッフの不安が現実のものとなった。出てくる投手が水に油を注ぐように打たれた。打者15人がつないだ10安打10点の猛攻。こんな痛快なことはない。

桧山（中本塁打5点）片岡（中二塁打6点）八木（中二塁打7点）今岡（左二塁打8点）金本（左前打9点）桧山（右前打10点）アリアス（左前打11点）矢野（右本塁打14点）片岡（投強襲打）藤本（中前打）二死からの八連打。解説の荒木さんが、大勝しているのに阪神ベンチが緊張しているのに驚く。

去年、阪神が巨人に大敗した時、巨人ベンチで清原と元木が盛んに、はしゃぎ、翌日のスポーツ紙にのった清原の談話を思い出す。

「阪神の選手は野村監督のことを忘れたらあかん」と。その清原、3安打2打点とはさすがだが、今年の清原には笑顔がない。

2003年6月21日
東京ナイター
⑮阪神10勝4敗
1分
ＮＨＫテレビ

巨人	阪神
0	1
0	0
0	0
1	2
0	1
1	0
2	0
1	10
0	2
5	16

投
〇伊良部
久保田
吉野

打
桧山4
今岡③
ｱﾘｱｽ③
片岡3
金本2
矢野②
藤本2
八木1
20

久保田、下柳の白星を守る（67試合目）

五回まで、巨人打線を1安打に抑え5対0とリードしていた下柳が、六回、清水に2ランを打たれて5対2となった。七回の阪神の攻撃は下柳から。前回の巨人戦で、下柳は六回まで、巨人打線をパーフェクトに抑えながら、七回二死から藤本の二塁打がでて、1点勝負とみた監督に代打を送られている。十回、片岡のサヨナラがでて、久保田が勝利投手となった試合である。

続投か代打か。視聴者が監督気分になるのは、こんな時である。3点差もあり、前回の甲子園の事を気遣って私は続投だろうと思った。予想どおり下柳は打席にはいった。ところが、この続投が仇となって、七回、江藤、元木に連打され、無死一、二塁、ここで交代だろうと思ったが、監督は動かない。阿部にも打たれ無死満塁。前回の甲子園は気の毒だったが、今回は仕方ないだろう、そんな素振りを見せながら、監督はゆっくりと動く。なかなかの役者である。25の貯金もあれば、新人の久保田に試練を与える余裕もでてくるのだろう。

久保田は、新人らしくない度胸のプレート捌きで、斉藤を二ゴロに打ちとったが、バウンドが高く上がって、バックホームできず1点失う。なお、一死一、三塁、打者は勝負強い後藤、2　3からファー

ルで粘る。解説の江川さんは、フォークを投げれば、打者は必ず振ってくるという。勝負球のサインはフォークだった。後藤のバットは空を切ったが、矢野がパスボール、星野の怖い顔がテレビに写る。元木がホームへ帰って1点差で二死二塁、一打同点のチャンスを与えたが、物怖じしない久保田は、清水を一ゴロに打ちとる。九回は、久しぶりのウイリアムスが三人を簡単に打ちとった。

ここ、二、三日、阪神の速攻は見事だ。昨夜も一回、今岡が二塁打、赤星のバントを清原が一塁へ暴投、赤星が一挙三塁。金本のレフトへの本塁打で3点。三回は、二死二、三塁で、矢野が投手足許をぬいて2点をとった。阪神の選手達は、今や巨人を見下している。

2003年6月22日
東京ナイター
⑯阪神11勝4敗
1分
読売テレビ
毎日ＭＢＳ

巨人	阪神
0	3
0	0
0	2
0	0
0	0
2	0
2	0
0	0
0	0
4	5

投
〇下柳
久保田
Ｓウイリアムス

打
今岡2
桧山2
金本①
アリアス1
矢野1
7

井川今季初完封（68試合目）

昨年、夏場に勝てなかった事を反省して、井川は、キャンプの時から、夏場にピークを持って行くといっていた。今季は8勝しても、失点が多く、勝利投手になっても、監督に「あれまでの投手かも知れない」といわれる始末。寡黙な男は、秘めた闘志を燃やし続けていたのだろう。昨夜は、去年七月のヤクルト戦以来の完封である。

四回、町田に左中間二塁打を打たれ、新井に足許を抜かれて無死一、三塁となったが、2　3からファールで粘るシーツを三振、ハーストを遊ゴロ併殺に打ちとった。五回は、二死二、三塁となったが、木村拓を簡単に二ゴロ、失点しそうになったのは、この二回だけだった。井川は攻撃でも三回、四回と四球を選び、藤本の安打を上位打線に結びつけた。三回、藤本左前打、井川四球、無死一、二塁で、今岡の左前打で先取点、赤星が打席にはいる前、監督が赤星の頭を叩いて、笑いながら耳打ちをした。無死一、二塁で、バントを覚悟しながら、打ちたそうな顔をしている赤星を見て、ヒッティングを命じたのだろう。期待に答えて、赤星は投手の足許を抜いた。このあと、金本の一ゴロに、シーツが好守備を見せて併殺、二死三塁となったが、桧山の左前打で、しぶとく1点を追加した。敵ながらシー

ツはいい選手だ。四回は、片岡四球、矢野の右中間二塁打、藤本の2点タイムリーのあと、井川四球、藤本三盗のあと、今岡の犠飛で1点を追加した。

怪我もあり精彩を欠いていた藤本が、井川の四球を生かす2安打2打点三盗と恐怖の8番といわれた活躍を取り戻したのが嬉しい。楽勝とはいえ、初回の井川には驚いた。町田の打席でカウント2-2からの6球目、井川がバランスを崩し、マウンドへ猿木トレーナー、佐藤コーチが飛んで行く。酸欠になったと知ったのは、翌日のスポーツ紙である。私は、その時、井川が大食漢と聞いていたので、登板前に食べ過ぎたのではないかと思った。失礼。

2003年6月25日
大阪ナイター
⑩阪神8勝2敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
3	0
3	0
0	0
0	0
1	0
0	0
×	0
7	0

投
〇井川

打
今岡2
赤星2
桧山2
藤本2
金本1
アリアス1
矢野1
久慈1
12

久保田、數の白星つぶす（69試合目）

梅雨の季節になると、ドームを持たない球団は悩みが多い。梅の実のなる頃に降る雨だから、梅雨というらしい。そういえば、昨日家内が裏庭の梅の木の実をもいでいた。

家内の父が生存中、年の暮になると、梅の盆栽を届けてくれた。白い小石を散りばめた土に、苔に囲まれた拳大の大きさの石、福寿草、梅の木をあしらった盆栽で、正月の玄関を飾った。その役目を終えた梅の木を、家内が裏庭に植え、それが人の背丈ほどの大きさになって、ここ数年、実をつけるようになった。何時頃貰ったものか。家内の父は、東京オリンピックを病室で見たあと亡くなった。結婚した年が昭和34年だから、その間に貰ったものであろう。その年に貰ったとしても、39年経っている。家内は、朝から赤紫蘇と荒塩を買ってきて、小梅を漬けこんでいる。来年の今頃は、小梅の梅干となって、朝のお茶受けとなることだろう。

「梅干婆が梅干を漬けている」

思わず口から出そうになったが辛抱した。

考え過ぎかも知れないが、昨夜の試合も梅雨が影響していると思いたい。六回、桧山、アリアスの

連打で無死一、二塁、片岡が今季始めての投前バントを成功したが、矢野がキャッチフライに終わって二死、チャンスは終わったかと思ったが、これで終わらないのが今季の阪神、藤本が右中間へ三塁打を打って勝ち越した。二死ながら三塁。一昨日は、井川が完投しているし、藪はバッティングもいい、代打はないだろうと思ったが、監督は、ちゅうちょなく代打を送った。八木は四球、今岡が三振して、チャンスは広がらなかった。

ベンチは、三日前、藪が二回まで好投しながら、雨で流れ、中一日で先発、始めからスタミナを心配して、早めの交代を考えていたのだろう。これが裏目に出てしまった。負けなしの久保田が乱打を浴びて、試合が決まってしまった。降板してロッカーへ帰った久保田を、監督にいわれた淺井がベンチへ連れ戻した。お前の後始末をしている投手に失礼だということだろう。

2003年6月26日
大阪ナイター
⑪広島3勝8敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
1	2
1	0
0	0
2	0
0	0
0	5
0	0
4	7

投
藪
●久保田
金沢

打
今岡2
赤星2
矢野2
金本1
桧山1
アリアス1
藤本1
10

阪神の本塁打攻勢（70試合目）

久しぶり、阪神の一発攻勢である。

金本2ラン。桧山ソロ。今岡ソロ。アリアス3ラン。矢野ソロ。本塁打で9点。そういえば、5月9日の浜中、アリアス、片岡の三連発がでたのも、この横浜球場である。どうやら、この球場も浜風が吹くらしい。横からでなく、ホームベースからセンターへの縦の風らしい。

派手なホームランもいいが、五、六回の攻防が面白い。2点をリードしていた阪神は、名手の手から水がこぼれた。投手の斉藤に中前打を打たれ、金城の二ゴロで走者を二塁で封殺したが、石井の一ゴロを、アリアスが二塁へ暴投、今岡が何とか飛びついて、一死一、二塁、続く中根の左前打を、なんと名手金本がトンネル、二者が帰って同点に追いつかれた。そのあとの伊良部の投球は、さすがベテラン、冷静に苦手の佐伯を三塁ファールフライ。巨人戦であたっていた多村を三振に抑えた。

同点にされた六回の阪神の攻撃。桧山が右へ二塁打、アリアス、片岡が凡打して二死となったが、勝負強い矢野が左前打、あたりが強すぎて、ホームは無理だと思ったが、岡田コーチは腕を廻す。タイミングはアウトだったが、返球が少し右へ逸れる。桧山の反対方向への巧みなスライディング。次

打者の藤本が懸命に方向を指示していた。岡田コーチ、桧山、藤本の一体プレーだ。そして六回の阪神の守り、勝利投手の権利を残して伊良部が降板、連投の久保田が名誉挽回のマウンドにあがったが、種田に中前打、古木に死球と無死一、二塁のピンチを迎えた。相川はバントの構え、矢野は久保田に真中のストレートを要求した。種田はその球筋を見て、大きくリードしたが、打者はバントの空振り、矢野の素早い送球に、走者は塁に帰れなかった。そのほか、赤星の四回の好守も忘れ難い。八回、待望のリガンが登板したが、テレビ放送の時間切れで、その勇姿を見られなかったのが心残りだった。

2003年6月27日
横浜ナイター
⑮阪神14勝1敗
毎日テレビ
毎日ＭＢＳ

横浜	阪神
0	2
1	0
0	0
1	1
2	1
0	1
1	5
0	0
0	1
5	11

投
〇伊良部
久保田
安藤
リガン
ウイリアムス

打
矢野④
今岡③
桧山②
アリアス②
藤本1
12

横浜に15連勝（71試合目）

「阪神効果で家庭が明るくなった」とスポニチの記事。とんでもない、老妻は巨人ファンである。六月になれば、昨年の8連敗のような事が起こると高をくくっていたが、阪神の勢いは一向に衰えない。10ゲーム離された頃から、老妻もあきらめたのか、最近は、どうにか平穏無事である。

昨夜は、阪神がデーゲームだったので、夕食後、二人で巨人―中日戦を見た。中日の20年目山本（昌）がプロ入りした年に生まれたのが巨人二年目の林。その両先発投手が白熱した投手戦を演じた。老妻も、やや興奮ぎみで、江藤が三塁を欲ばって、アウトになった時は、年甲斐もなくテレビに罵声を浴びせる始末。そして、八回一死一、三塁で、井端の打球は元木の正面、清原との併殺の間に、三塁の谷繁がホームをついて1点勝ち越し、古女房は、併殺でスリーアウトだから、得点は認められないという。元木が一塁の関川にタッチしようとしたのが失敗だと説明しても納得できないらしい。これで、阪神との差が13・5ゲーム。「つま先でつながる巨人の首」毎日新聞の見出しは、いいえて妙である。

本題に戻って横浜とのデーゲーム。阪神は四回、アリアスの場外ソロホームラン、六回には、金本の二塁打と片岡のタイムリーで1点、矢野の2ラン、今シーズン始めてのベンチ入りした平下の2打

席目のソロホームランで5点。矢野は追い打ちをかけるのがうまい。捕手だけに、打たれたあとの投手心理がわかるのだろう。

打線に引き換え、ムーアは、まさに薄氷を踏む投球だった。先取点を取られ、五回には、二死満塁から、多村の打球が幸いレフト正面をついて助かったが、六回に、再び無死一、三塁で久保田にマウンドを譲った。

久保田は、相川を二ゴロ、佐伯のあたりの左前打で2点を失ったが、いつもの新人らしからぬプレート捌きは見事なものだ。ここでテレビ放送が終わり、あとは、吉野、安藤、リガン、ウイリアムスとつないで、5対2で阪神の勝利。

2003年6月28日
横浜
⑯阪神15勝1敗
毎日テレビ
毎日ＭＢＳ

横浜	阪神
1	0
0	0
0	0
0	1
0	0
2	3
0	1
0	0
0	0
3	5

投
〇ムーア
久保田
吉野
安藤
リガン
Ｓウイリアムス

打
赤星２　矢野②
金本１　ｱﾘｱｽ①
片岡１　藤本１
平下①
9

球団最速の50勝（72試合目）

今年の阪神は、チャンスをものにするのがうまい。昨夜の横浜戦は、一、二、三、五、六回と3者凡退で、九回を除いて四、七、八回のチャンスを、すべてものにしている。選手達が集中力と自信を持っているのだろう。

四回一死から、赤星、金本が連打し、桧山のセンター前のヒットが、アウト、セーフのぎりぎりで、一塁走者の金本が塁に戻りながら、スタートしたため、センターゴロとなって二塁で封殺された。決して凡走ではない。チャンスは潰れたかと思ったが、アリアスが3試合連続18号を左翼席に放り込んだ。本塁打王に手が届きそうな選手がチーム愛を優先するのだから阪神は強い。

五回でテレビ放送が終わって、六回からはラジオ。七回の阪神の攻撃は特筆ものだ。二死走者なし。打者藤本は、塁に出れば、監督は代打を送るだろうと考えて、二塁前へドラックバントを決めた。投手が取れるような球だったが、予想どおり、守備のうまくないドミンゴであることが幸いした。2者が倒れ、諦めかけていた監督は、投手の替え時でもあり、躊躇することなく、代打に平下を送った。平下の痛くもない死球でチャンスは広がった。二死一、二塁、打順は一番に廻った。今岡は、カウン

トを2―1と追い込まれてから、ファールで粘る。ラジオ解説の門田さんは、こんな今岡を絶賛する。

「ファールして、自分のしぼり球を待つことは、一流打者だからできる事で、そう簡単にできるものではありません」

今岡は、センターオーバーの二塁打で、2者を帰した。さらに、その門田さんが、八回、安藤が多村に打たれて、すぐマウンドへ走った佐藤コーチのタイミングの良さを褒める。安藤は後続の二人を三振に打ち取った。

インタビューで「疲れました」と、それ以上いわない先発の下柳も、本塁打は打たれたが、六回まで9三振を奪う好投だった。八回の桧山の本塁打も書いておこう。

2003年6月29日
横浜
⑰阪神16勝1敗
毎日テレビ
ＡＢＣ放送

横浜	阪神
0	0
1	0
0	0
1	3
0	0
0	0
0	2
0	1
0	0
2	6

投
〇下柳
吉野
安藤
ウイリアムス

打
今岡2　片岡2
赤星1　金本1
桧山①　ｱﾘｱｽ①
矢野1　藤本1
10

コラム／若林投手

町の図書館、映画館、そして鳴尾球場は、私にとって格好の場所である。鳴尾球場は阪神タイガースの二軍の球場で、甲子園駅からバスで十五分、なにより無料であることが有難い。デフレといい出してから、いずれの場所も、最近とみに人が増えている。

鳴尾球場のことは、ともかくとして、図書館で【阪神タイガース昭和の歩み】を見つけ、忘れてしまっていた古い記憶を呼び戻すことが出来たことを書こう。

阪神タイガースのオールドファンは、戦後の別当、藤村、土井垣らのダイナマイト打線や、小山、村山、バッキー達投手陣による一九六一年、六四年の優勝を語り、中年の人は一九八五年の掛布、バース、岡田の日本一トリオの打線を話題にした。残念なことに、その優勝を知らない若者が年を追うごとに増えている。

私は、七色の変化球を投げた若林投手が好きで、中学生（旧制）の頃、甲子園球場へよく行った。右腕を頭上にあげ、一塁ランナーを牽制しながら、そのまま投げる独特のフォームが、今も目に浮かぶ。ボークにならなかったのは、牽制の時マウンドをはずし、投げる時にマウンドを踏んでいたのだろうか。今でいうクイック投法の走りかも知れない。それともボークか。

戦争中のことで、試合数も少なく、空襲警報の発令で中止になったこともあった。その頃の若林投手の写真が記念誌にのこっている。戦闘帽の顎紐をしめた勇ましい格好だが、表情は優れない。

一九四三年、戦争の雲行きが危なくなって、政府は戦意高揚のため敵性語の使用を禁止した。ストライクを〈一本〉ボールを〈一つ〉三振を〈それまで〉と、まるで剣道の用語のようになった。

この年の夏には、藤村富美男、景浦、門前が除隊になって復帰したが、阪神は巨人、名古屋について三位だった。

翌一九四四年、日本野球連盟は「日本野球報國会」と改称し、なんとか野球を続けようとしたが、選手達は軍需工場に動員され、西鉄、大和が解散、六球団になってしまった。阪神の選手達は、電鉄車庫、土木車輛部に籍を置いて野球をした。

その年、若林が監督で27勝6敗2分で最多勝利、最優秀防御率、最高勝利投手と獅子奮迅の活躍をし、藤村がチームでただ一人3割を打ち、チームは勝率8割1分8厘の高率で2位の巨人に8ゲームの差をつけて優勝した。

当時から智の若林、情の藤村、両雄並び立たずといわれていた。そこへ、戦後若林が家庭の事情で、球団への復帰が九月に遅れたことと、その間フロントが藤村を正式の監督ではないが、チームを統率する立場に置いたことが、二人の仲を複雑にした。そんなことが二リーグ分裂の時、若林投手を毎日

へ走らせたのだろう。毎日へ走った若林投手は優勝に貢献し、四十八才まで現役だった。

その年の十一月十三日、プロ野球は一時休止することになった。ところが、野球の好きな日本人は、翌年一九四五年正月野球として、一月一日から五日間、甲子園と西宮球場で阪神と産業軍で〈猛虎軍〉。一方阪急と朝日で〈隼軍〉として試合をしている。そのシリーズでの三日間に空襲警報が発令され、試合が途中で中止になっている。私が甲子園で見たのは、たしかその試合だ。

「産業軍」という風変わりな名前と、そのチームだけがゲートルを巻いていたのを今も記憶に残っている。そして、三月十日に東京、十四日に大阪、十七日に名古屋にB29の大空襲があって野球どころではなくなった。

野球の好きだったサトウハチローがこんな詩を作っている。

〈若林忠志〉

色あれど、表にあらわさず
音あれど、むやみに発せず
淡々とみせて
ひょうひょうとかせぐ
私はそんな若林投手が好きだった。

桧山サイクルヒット（73試合目）

桧山デーだった。

初回、1点リードされたあと、四球の金本をおいて、桧山の2ランから、阪神の攻撃が始まった。七回までに11対1、勝利は間違いない。ファンの楽しみは、桧山のサイクルヒットにかかっていた。一番難しいといわれている三塁打が残っていた。五回のチャンスは気負い過ぎて三振、七回の5打席目が最後のチャンスとなった。桧山は、山井の3球目を奇麗なフォームで打ち、球はアレックスの頭上を越える。テレビを見ながら、思わず「はいるな」と叫ぶ。幸い、ワンバウンドしてフェンスにあたって跳ね返った球を、アレックスがジャッグルした。とはいえ、アレックスは、球界随一の強肩の持主である。必死になって走る桧山をカメラが追う。サイクルヒットの完成に甲子園の観衆が熱狂した。

シーズン始めは、守備位置を、若い赤星、浜中に譲ってファーストを守り、不慣れな守備がバッティングに影響し、打率も2割2分台となってしまい、五月には、代打要員となって、ベンチを暖める日が続いた。桧山は選手会長として、チームのために自分を犠牲にすることを、いとわない謙虚な選手である。サイクルヒットは、そんな男への褒美だろう。

二回の阪神、八木の左前打と矢野の四球で無死一、二塁、藤本の犠打で二、三塁、今岡を期待したものだろう。ところが、井川は野口のスライダーを巧みにミートし、前進守備の二遊間を抜いて2人を迎えいれた。

これに気を良くした井川は、前回に引き続き完投で10勝、粘投いや熱投の１５６球だった。それに引き換え、投手に打たれてショックだったのか、野口は早々に降板し、エースが打たれたあとの中日の投手陣は、阪神打線の餌食だった。今岡、桧山の４安打、片岡のスリーラン、矢野の勝負強いタイムリー、得点に結びついた金本の２四球、17安打14得点、４連勝で貯金30という快挙だ。中日は、２０００本安打にあと5本という立浪がブレーキだった。

2003年7月2日
甲子園ナイター
⑮阪神９勝６敗

サンテレビ

阪神	中日
2	1
2	0
2	0
0	0
5	0
0	0
3	0
0	0
×	2
14	3

投
〇井川

打

今岡４	桧山４
矢野２	赤星１
ｱﾘｱｽ１	八木１
片岡１	藤本１
久慈１	井川１

17

二死満塁、今岡のセーフティバント（74試合目）

〝あっと驚く為五郎〟

古い箪笥（たんす）から着物を取り出すようなギャグだが、昨夜の今岡のプレーは、そんなハッスルぶりだった。

初回からシーソーゲームのような点の取りあい、6対4とリードされて迎えた三回、片岡の2点タイムリーで同点とし、二死満塁で今岡に打順が廻った。初球、誰も想像していないことが起こった。ファーストへのセーフティバントである。三塁側でなく一塁側である。かねて、ベッツの守備ぶりを見ていたのだろう。ヘッドスライディングする今岡と、倒れこんでベースカバーにはいる坂元が交錯する中、審判は大きく両手を広げた。雨上がりの土に泥ん子になっている今岡を見て、前監督の今岡評を思い出した。

「あいつのユニホームが汚れているのを見たこともない。ボーっとしていて真剣にプレーしているように見えない」

その年は藪と共に2軍に落とされた。そして昨年は、今岡の活躍ぶりに「今岡に裏切られた気がする。

監督が選手を嫌うというのはあっても、選手から監督が嫌われるのは珍しい」と。その発言を伝え聞いた今岡は「優勝するんです、見といて下さい」と応酬し、一言も弁解しなかった。今年は、なかなか優勝といわないが、裏切り者呼ばわりされたことは決して忘れないだろう。

―

そんな今岡が、さらに五回二死一、三塁で苦手の坂元から中越え2点タイムリー二塁打。2　3から低目の難しいフォークを巧打した。阪神は2敗している佐藤をよく打った。16安打13点。猛打賞は、今岡、赤星、アリアス、片岡の4人。2安打だが矢野は勝負強い。ただ金本の不振が心配だ。

藪はストライクゾーンで、勝負を急ぐくせが直らない。初回4点を貰いながら、三回までに6失点降板は頂けない。あとの中継ぎ陣が好投した。藪のあとの久保田が2イニングを150キロの球威を武器に、3者を凡退、ヤクルトの勢いを止めたのが大きい。

2003年7月5日
甲子園ナイター
⑮阪神8勝7敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
4	0
0	2
3	4
0	0
2	0
2	1
0	0
2	0
×	0
13	7

投
藪
谷中
〇久保田
リガン
吉野
安藤
ウイリアムス

打
今岡3　赤星3
ｱﾘｱｽ3　片岡3
矢野2　藤本1
秀太1

16

連日のお立ち台今岡（75試合目）

今岡は今年、優勝を口にしないと書いたが、連日のお立ち台に上がって、七夕にちなんで、アナウンサーに、短冊に何を書きますかと聞かれて、一呼吸おき、思いきって〝優勝〟と叫んだ。誘導尋問にひっかかった嫌いがある。阪神の勝率は７１６の新記録。

乗りに乗る今岡、またもや初球本塁打。このあと、赤星が左前打で盗塁、金本の捕ゴロで三塁、桧山の犠打で、電光石火の先取点だ。四回は片岡のタイムリー二塁打。五回、今岡の右中間二塁打、稲葉がもたつく間に三塁へ。赤星は、インコースに来たら当たろう思っていたという死球。達川コーチの伝授か、当たった右足を大げさに痛がるふりをして、金本の初球に、いきなり盗塁、無死二、三塁で金本が16打席ぶりの三遊間安打で2点の中押し、八回の駄目押しにも今岡がからんだ。矢野四球、藤本の送りバントで一死二塁、代打の八木は三ゴロに終わって二死となったが、今岡、赤星の中前打が続いて2点。今岡は猛打賞、赤星は2安打2盗塁。アリアスも五回の右前打で15試合連続安打を継続、打率も２６５まであがった。監督は、絶好調の時の落とし穴、今岡のハッスルプレーに怪我を心配する。

下柳は粘りの投球で五回２３を7安打2失点で5勝をあげた。毎回安打を許しながらも後続を断っ

ていたが、六回、古田に四球を出し、ベッツに安打を浴びて、二死一、三塁となり久保田の救援を仰いだ。5対1。男っぽい監督だが、投手リレーは極めて慎重だ。久保田は、土橋に打たれて1点を失った。七回は、稲葉に二塁打を打たれたが、2三振を奪って無得点に抑え、八回に左が2人続くので吉野につなぐ。吉野は、左打者を打ち取ったが、古田に死球を与え、土橋一人に安藤をつなぎ、ストッパーにリガン、2安打されたが、球が走っているので心配あるまい。

解説の有田さんは、半袖のベバリンを見て、投手は下柳のように長袖を着用すべきという。でないと汗が指先に伝わって手が滑るという。

V9で有名な元巨人監督の川上さんを評して、人は〝石橋を叩いて渡る人〟いや〝壊す人〟ともいう。星野監督が、そんな川上さんに師事していたことは、案外知られていない。昨夜のリレーは川上流儀だ。

2003年7月6日
甲子園ナイター
⑯阪神9勝7敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
2	0
0	0
0	0
1	1
2	0
0	1
0	0
2	0
×	0
7	2

投
〇下柳
久保田
吉野
安藤
リガン

打
今岡3
赤星2
金本1
桧山1
アリアス1
片岡1
11

アリアス2本塁打、M49（76試合目）

灰色の空に青空が覗き、雲も夏雲らしくなったと思ったのも束の間で、蒸し暑い、どんよりした日になった。

倉敷マスカット球場の幕あきは、今岡の初球ホームランから始まった。2試合連続、3度目である。1シーズン3度は史上初である。戦国時代でいえば、狼煙（のろし）をあげて、士気を鼓舞するといったところだろう。一球にかける集中力の賜である。

スポニチによると、今岡の初回先頭安打した試合が22試合あって、そのうち20試合が勝ち試合だからすごい。まさしく、優勝へばく進する猛虎号のけん引車である。

昨夜は、今岡の初球ホームランのあと、すぐに木村（拓）に本塁打を打たれたが、阪神は負けていない、二回、片岡の中前打と藤本の四球で二死一、二塁、井川は2―0から粘って2―3とし、ブロックの7球目を投手の足許を抜いて1点を取り戻し、そのあと、今岡がレフト前に打って主導権を譲らない。井川のバッティングもなかなかのものだ。三回には、桧山が左前打すると、アリアスが目も醒めるような2ランをレフトスタンドへ、そして、五回にも、右中間二塁打の桧山を、二塁において、ブロッ

クの高目のカーブをまたもやレフトスタンドへ、アリアスは七回に左犠飛を打ち上げ、今季53打点となり、矢野を抜いてチームのトップとなり、16試合連続安打である。金本の不振を、桧山、アリアスがカバーする。

井川は、ストレートに威力なく、12安打を打たれながら、チェンジアップで体をかわし、強力打線に守られて11勝目をあげた。１４１球、無四球。

テレビ大阪の解説の江夏さんは、恒例の江夏の一球として井川の二回のタイムリーヒットを推奨した。理由は時間制限で聞けなかったが、井川にヒットを打たれたことで、ブロックがペースを乱し、アリアスに本塁打を打たれたことをいっているのだろう。そういえば、井川に打たれた時、ブロックは、マウンドから球審に文句をいっていた。

2003年7月8日
倉敷ナイター
⑫阪神９勝３敗

テレビ大阪

広島	阪神
1	1
0	2
0	2
1	0
0	2
0	0
0	1
0	0
2	0
4	8

投
〇井川

打
桧山３
今岡２
アリアス②
藤本２
片岡１
井川１
11

久保田の一人芝居でサヨナラ負け（77試合目）

阪神は負けたが、西本さんのお元気な姿をテレビで拝見できて、何より嬉しい。確か大正9年生まれの方だから、83才になっておられるはずだ。愛情と情熱で根気良く選手を育てられる手腕に関しては、西本さんの右に出る監督はいないだろう。

試合は二回、2四球で無死一、二塁、藤本、伊良部が凡退したあと、絶好調の今岡が三塁線を破る2点タイムリー。3試合連続の先制点をあげた。そんな今岡を、西本さんは、落合、野村選手に匹敵する域に達しているといって、監督でなく解説の星野さんを驚かした。そして、星野さんが今年の今岡は技術面より精神面が充実しているというと、西本さんは、今岡は、もともと技術の秀れている選手だという。

先取点をあげたあとの阪神は、西本さんの指摘どおり、長谷川の荒れ球にてこずって、点が取れない。阪神は、制球のいい伊良部が四球絡みで2点を失い、同点のまま両投手は降板した。あとは、中つぎ陣による二幕目の幕が上がった。

阪神は八回、吉野が前田に四球を与え、シーツの犠打で一死二塁、野村を敬遠してマウンドを下りた。

三番手の安藤は2人を簡単に打ちとって、九回の攻撃を迎えた。二死から藤本の左前打が出て、盗塁すると、打席に入っている安藤を0―2から平下に代えて勝負に出た。平下四球で、最も期待の出来る今岡につないだが、三ゴロに終わった。

阪神のマウンドには久保田が上がった。いきなり森笠に三遊間を抜かれ、一塁への牽制球が暴投となって無死三塁、ベンチは満塁策をとった。久保田は、151キロの直球と変化球で、新井を遊ゴロ、2―3から広瀬を三振、シーツを一塁ファールフライに打ちとった。

十回の阪神は赤星の左前打だけ、その裏、久保田は、一死一、二塁、併殺にとれる森笠の投ゴロを二塁へ暴投、またもや満塁、木村（拓）を一ゴロに、二死となったが、緒方に初球をぶっつけ、あっけない幕切れとなった。投手は9番目の内野手ということを、久保田は肝に銘じたことだろう。

2003年7月9日
広島ナイター
⑬広島4勝9敗

関西TV・毎日MBS

広島	阪神
0	0
0	2
1	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
1×	0
3	2

投
伊良部
吉野
安藤
●久保田

打
今岡2
赤星1
桧山1
片岡1
藤本1
伊良部1
7

安藤二回パーフェクト（78試合目）

今岡の左前打で始まり、二死満塁と攻めたが、片岡が三振して先取点が取れない。その裏、ムーアは2人を三振に打ちとったが、そのあと、3連打され先取点を取られた。

三回、阪神のお家芸の集中打が出た。赤星が右中間を破る二塁打、当たりの止まっている金本が四球を選んで、無死一、二塁。桧山の進塁打で一死二、三塁。このチャンスに、最近右打ちが出来るようになって、打率を270まであげているアリアスに打順が廻った。アリアスは期待どおり、右中間を破る巧打で2点。すかさず、片岡が左中間二塁打、さらに矢野がセンター前にタイムリー、集中打で一挙4点をあげた。

4点を貰いながら、ムーアのピッチングはピリっとしない。コントロールは悪く、内角への鋭いストレートも影をひそめ、四回は、野村にヒット、森笠に四球、木村（拓）にタイムリーを打たれて1点を失い、町田に死球を与えて二死満塁。新井を遊ゴロに打ちとって事無きを得た。五回には、前田に死球、シーツに四球、佐藤コーチがマウンドへ走る。ベンチで監督がいらだっている。「義行（よし）け!!」監督の叱声が聞こえるような気がする。てっきり交代かと思ったが続投である。勝利投手の権利を気

遣ってのことだろう。このあたりが星野監督らしい。この回は、木村（一）を三振、広瀬を遊ゴロ併殺打に打ちとり、失点を1点に抑えた。ムーアは、五回を8安打5四球で降板、投球はいまいちだったが、二回、自ら安打を放ち、打てば負けない不敗神話は継続中だ。

六回は、リガンが登板、いきなり森笠の遊ゴロを藤本がエラー、犠打と淺井の四球で、一死一、二塁。広島は重盗を試みた。二塁走者の森笠はリガンのモーションを盗んでいたが、淺井のスタートが遅れているのを見逃さなかった矢野は、二塁へ送球、淺井を刺した。この好判断に気を良くしたリガンは、新井を三振に打ち取った。七、八回の安藤は、３Ｋ、パーフェクトのピッチングで、広島の反撃の芽をつんだ。九回のウイリアムスは、四球、死球と走者を出したが、新井の二直が併殺となる好運で無失点に抑えた。安藤が3度目のヒーローインタビューをうけた。

2003年7月10日
広島ナイター
⑭阪神10勝4敗

ＮＨＫ衛生第一

広島	阪神
1	0
0	0
0	4
1	1
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
3	5

投
〇ムーア
リガン
安藤
Ｓウイリアムス

打
アリアス4
今岡2
赤星1
桧山1
片岡1
ムーア1
矢野1
11

四回に一挙8点（79試合目）

四回、8点の猛攻を、それまでのピンチをよく守ったことで、流れが来るのが、手に取るようにわかった。飛ばしていた工藤も、味方が点を取れないので、がっかりしたのだろう。とは星野監督の勝利談話である。

二回、江藤四球、阿部が捕手の打撃妨害で二死一、二塁、仁志の左前打で、江藤が本塁をついたが、金本の好返球が、バッテリーを助けた。四回は、清原の右前打、ペタジーニの四球、珍しい矢野の2度の捕逸で、一死二、三塁、江藤の三塁頭上を越えるようなゴロは、片岡の好捕で内野安打とし一死満塁で阿部を迎えた。バッテリーは、内角をついたあと、外角低目を打たして、遊ゴロ併殺打に仕止めた。この遊ゴロを始め、藤本の送球が再三ショートバントするのを、目立たないが、再三好捕していたアリアスの事も忘れられない。この阪神の好守備に、気落ちした工藤に、その裏、阪神得意の集中攻撃が始まった。

口火を切ったのは、二回の好守備で気を良くしていた金本だ。今迄の不振が嘘のような強い打球が一、二塁間を破った。桧山が右前打、アリアスが四球で無死満塁、片岡一飛のあと、矢野が名誉ばん回のライトへの2点タイムリー二塁打で2点。すかさず、藤本がセンター前に2点タイムリー、ベン

チの強硬策に答えて、藪が投手の足許を抜いて一死一、二塁、今岡の一塁のファールフライで二死となったが、赤星がセンター前のタイムリーヒットで打順が一巡した。

2順目の金本が〝10年ぶりに打った感じ〟という11号3ランで巨人の止めを刺した。11安打8点の猛攻である。この中には、四回のチャンスに併殺打を打ってしまった阿部、2度のパスボールの失敗を取り返そうとする矢野、好守と快打で気を良くしている金本、勝負の流れということは、これ等選手達の心理的な綾が作るのだろう。四回のあとも、沖原の3安打を始め、今岡、アリアスの二塁打、矢野の2ラン等で6点を追加。18安打、14点の大勝だった。

2003年7月11日
甲子園ナイター
⑰阪神 12勝4敗
1分

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
8	0
3	0
0	0
3	0
0	1
×	0
14	1

投
〇藪
佐久本

打
金本③
沖原3
矢野③
桧山2
藪2
今岡1
赤星1
ｱﾘｱｽ1
藤本1
久慈1
18

先発全員得点・沖原4安打（80試合目）

先発のラスには、七回戦で4―0と完封されているので、苦戦を予想したが、初回の明暗が試合を決めてしまった。

下柳は、立ち上がり清水に二塁打を打たれたが、二岡を一ゴロ、高橋（由）、清原に、ボールを振らせて三振に打ちとった。それに反し、ラスは味方のエラーに、足を引っぱられた。今岡の三ゴロを、江藤が悪送球、一死一塁で、金本の二ゴロを、今度は仁志がトンネルしてしまった。このミスにつけこんで、桧山、アリアス、矢野、沖原がヒット、ペタジーニのエラーもからみ、阪神は一挙5点を先取した。二回にも、無死一塁で、赤星の遊ゴロを二岡がトンネル。またもや、このミスにつけこんだ阪神は、二塁打4本を含む8安打、打者13人の猛攻で7得点した。

テレビに写る巨人軍の選手達は、戦意喪失、集中力を欠いている。9点取られて、ラスと阿部の交代を告げ、ベンチに戻った原監督は、帽子を叩きつけていた。ヤクルトにサヨナラ負けを含む3連敗。そして、この阪神2連戦の屈辱的な敗北に、我慢しきれなくなったのだろう。

この日の阪神は、先発全員安打、全員得点。その中でワキ役の沖原が光った。昨日から6打席連続

安打、そして、甲子園初本塁打となる一打をバックスクリーンに打ちこんだ。星野監督も、この控え選手の活躍に大喜びだ。

今日の下柳投手は、九回に完封を意識して3点を取られたが完璧だった。巨人打線は、低目にコントロールされた球を打ちあぐねていた。

この調子でいくと、先発投手全員10勝以上、ムーアが登板の時は全員3割打者というのも、あながち夢ではあるまい。今年の阪神は控え選手をはじめ、全員で戦っているということだろう。後半戦は、〝勝って兜の緒を締めよ〟怪我人なしで戦ってほしい。今日は朝から雨、前半戦最後に、久保田、木佐貫の若手投手の投げあいを見たかったが、甲子園は中止だろう。

2003年7月12日
甲子園ナイター
⑱阪神 13勝4敗
1分
サンテレビ

阪神	巨人
5	0
7	0
0	0
1	0
1	0
0	0
0	0
0	0
×	3
14	3

投
〇下柳

打

沖原④
アリアス3
桧山3
今岡2
赤星1
金本1
八木1
下柳1
片岡1
矢野1
18

リガン、初勝利投手（81試合目）

7月16日、今年初めて蝉が鳴いた。昨年は7月20日だった。それから、梅雨寒といった日が続く。今日もそんな日で、蝉も鳴かない、うっとうしい日である。昨日の広島戦は、幕切れにドラマが待っていた。八回、桧山の打球が高く上がり、風に乗って右中間スタンドへ飛びこんだ。この本塁打で4対3、1点を勝ち越し、後半戦の初戦は、これでいただきと思った。

ところが、ウイリアムスは、ぬかるんだマウンドに足を取られ、コントロールが定まらない。木村（一）を遊ゴロに打ちとり、代打町田に四球、そこまでは安心できたが、木村（拓）、緒方に連続死球、二死満塁で、悪いことに、今シーズン始めての4番で、あたりにあたっているシーツに打順が廻った。4打席、2本塁打と二塁打と広島の全得点を稼いでいる。

二死、貯金35、ウイリアムスのメンツもある。続投かと思ったが、ベンチは素早く動いた。安藤が残っていた。チャレンジャーの姿勢で、一戦一戦を大切に戦おうとするベンチの考えだろう。

安藤は、物怖じしない堂々とした真剣勝負を挑む。直球で2―0とシーツを追い込む。1球はずしたあと、4球目は外角低目にストレート。シーツのバットが空を切って熱戦は終わった。

試合は、藪がシーツの二塁打で1点を失ったあと、今岡の今季5度目の先頭打者本塁打で試合が始まった。二回は、矢野が右前の片岡をおいて、右中間に11号2ランを放って、藪を援護するが、藪はシーツに初回2点タイムリー、三回と五回に本塁打を打たれ、五回で降板した。藪は五回9安打3失点。六回は、谷中が新井に打たれたが、野村を左飛、石原を二ゴロ併殺打に打ちとり、七回、八回はリガンが雨で試合の中断もあったが、被安打1、2三振と好投、来日初めての勝利投手となった。オールスターで優秀選手になったアリアスが、やたらと強振し、4三振はいただけない。

2003年7月18日
甲子園ナイター
⑮阪神11勝4敗

サンテレビ

阪神	広島
1	1
2	0
0	1
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
×	0
4	3

投
藪
谷中
〇リガン
ウイリアムス
S安藤

打
矢野③
桧山②
今岡①
赤星1
金本1
片岡1
9

黒田の前に打線沈黙（82試合目）

今朝、蝉時雨で目を覚ました。熊蝉の鳴き声は、時雨というより驟雨のようだ。学校は、今日から夏休みだ。夏休みに遊んだ昆虫達が懐かしい。甲虫、くわがた虫、髪切虫、玉虫、蜻蛉、鬼やんま、ばった、きりぎりす、からすあげ羽、油蝉、熊蝉、にいにい蝉、身近な昆虫達がいなくなって久しい。そんななかで、熊蝉だけが季節を感じさせてくれる。

阪神ファンが熱狂する甲子園。まさしく四面楚歌といった中で、黒田投手の精魂こめた96球は見事なものだった。１５０キロの速球を内角に決め、低目にフォークボールを落とされては、３割を誇る打線も、３安打11三振と沈黙せざるをえない。黒田投手は、上宮高校、関西出身の選手である。高２の時、部の不祥事で、春の選抜に出場出来なかった甲子園で、阪神に投げ勝つことに、心も高揚していることだろう。

下柳も黒田に負けていない。細心の注意を払って低目をつく絶妙の制球力で、連打を許さない。立ち上がり、広島に１点を失ったが、それ以降八回まで、８三振、５安打の好投である。この熱投する両投手に答えようとする打撃陣、阪神は八回、片岡の二塁打、矢野の犠打と藤本の犠飛で、代走の田

中が生還し同点とした。

―阪神は九回、下柳に代わった久保田が、ベテラン緒方に１５０キロの速球を右へ運ばれ、前田に２３から2ランを打たれ、力のはいった投手戦は終わった。久保田は、広島と相性が悪い。６月26日、４対2とリードしていたのを、八回5点取られ、藪の勝ち星をフイにし、７月9日には、同点の九回、緒方へサヨナラ死球を与えて3対2、伊良部の好投をフイにし、敗戦投手となっている。今日で三回目だ。なんとする久保田。

昨日は、一回の明暗が試合を決めたのだろう。広島が福地を足を生かして2安打で先取点をあげたのに対し、今岡、赤星で無死一、二塁としながら、金本の三振ゲッツーが痛かった。

2003年7月19日
甲子園ナイター
⑯広島５勝11敗

サンテレビ

阪神	広島
0	1
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	2
1	3

投
下柳
●久保田

打
今岡 1
片岡 1
藤本 1
3

ベテラン久慈、健在（83試合目）

「何を、いまさら、ジュンサイな」といわれるのを覚悟で書こう。ほんとに、そう思ったんだから。テレビはゲームの途中で、攻撃チームのベンチをなめるように写す。マジックが点灯していても、選手達の表情は堅い。いつも苦虫を噛みつぶしたような顔をしているのは、星野監督だ。ベンチの中に緊張の糸が張られているようだ。昨夜は、疲れがでているのか、選手達の目はうつろだった。

そんな中で、桧山が珍しく怒りの表情を現にしている。五回、一死満塁のチャンスに、2―3からファールで粘り8球目、ボールと確信した球をストライクと判定され、追加点を取れなかった悔しさだろう。そんな選手がもう一人いた。ベンチの片隅の久慈だ。厳しい目が輝いている。久慈が活躍する。そんな予感がした。

九回、安藤が緒方に打たれて同点とされ、十回にも、ウイリアムスが打たれた。二死一、二塁、木村（一）の打球は三遊間を破った。金本は冷静に捕球、計ったようなダイレクト返球で、二塁走者広瀬を本塁で刺した。気を良くしたウイリアムスは十一回、3者を三振、流れを引き寄せた。アリアスが永川から四球を選んだ。代走田中、片岡の代打沖原が1球目に送りバントを決める。矢野は敬遠、代打を送

るにも、十二回に、遊撃を守る選手がいない。久慈がバッターボックスにはいった。もともと、投手の配球を読むのがうまい選手だ。久慈は、初球を思い切り叩いた。打球は前進守備のレフトの頭上を越えた。打った瞬間、ほんの少し久慈の目が潤んでいるのを見た。昨年、中日を自由契約になった悔しさと、星野監督に呼んで貰った嬉しさが交錯したのかも知れない。すぐ平静に戻った久慈は、選手達の喜びの渦に巻きこまれていった。同期生の桧山も久慈の頭を叩いていた。

現役時代〝牛若丸〟といわれた名遊撃手元吉田監督から教わったという久慈のスローイングの速さは、今も衰えていない。

自由契約になった選手の活躍は、なにより嬉しい。中村前監督をはじめ、１９９２年、ヤクルトと優勝争いをした仲間達も喜んでいることだろう。

2003年7月20日
甲子園ナイター
⑰阪神12勝5敗

サンテレビ

阪神	広島
3	0
0	0
1	0
0	2
0	1
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
1×	0
5	4

投
ムーア
リガン
安藤
〇ウイリアムス

打
今岡2
赤星2
金本②
アリアス①
久慈1
ムーア1
9

井川10連勝（84試合目）

井川投手は、木訥剛毅（ぼくとつごうき）の青年で、ニックネームは〝ダッペ〟、そうだっぺの〝ダッペ〟で茨城県の方言である。口数が少なく、不言実行のタイプだ。言葉少なく強調するのは、粘りの投球。夏にピーク。防御率の3件である。粘りの投球は勿論のこと、夏が近づいた6月25日から、完投4連勝で目標を達成しつつある。防御率は3・09で第3位。一位は味方の伊良部投手の2・52。ライバルというには、大先輩に失礼だ。2位の巨人の新人木佐貫投手には是非勝って欲しい。今日のスポーツ紙は、村山以来35年ぶり10連勝と騒いでいるが、彼は気にしていないだろう。

テレビの解説を聞いているので、井川の好不調は、投球フォームを見ることで分かるようになった。昨夜の井川は、投球後左足が三塁の方向に傾かないし、重心がしっかりしていて好調のフォームだ。2本塁打と鈴木のタイムリーで3点を失ったが、七回の一死満塁のピンチも併殺で切り抜け、安心して見れた。井川には辛口の星野監督も「今季で一番の投球」と褒めた。

打つ方では、一昨日の久慈のサヨナラ打、オールスター前の沖原の6連打から考えると、左投手の場合、いずれかのスタメン起用があると期待したが、スタメンは藤本だった。

その藤本が井川とともにお立ち台にあがる活躍をした。二回、一死一、二塁から石川の内角球を右前へ運ぶ先制タイムリー。３点をリードで迎えた四回も、一死三塁から、ファーストストライクを積極的に打ち左翼へ犠飛を打ちあげた。２安打、２打点の活躍である。

もう一人の秀太は、八回代走にでて、矢野の大きな左飛で、果敢に二塁へ走ってアウトになったが、その積極的な走塁と、九回一死から鈴木健の打球を飛びこんでキャッチ、三ゴロに仕止めた好守備は褒めてもいいだろう。ショートの定位置を確保した藤本も立派だが、腐らず地味だが与えられた仕事をやりとげる３人も立派なものだ。

井川ファンのために、友達が知らせてくれた後援会の住所を書いておこう。

〒311―1300　茨城県東茨城群大洗町大洗町役場内

2003年7月21日
甲子園ナイター
⑰阪神10勝7敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
3	0
0	0
2	1
0	0
0	0
0	1
0	1
×	0
5	3

投
〇井川

打
今岡３
片岡３
藤本２
金本１
アリアス①
桧山１
矢野１
井川１
13

「天晴れ！」と「喝！」

日曜日の朝は、関口さんが司会する〈サンデーモーニング〉を夫婦で楽しみにしている。大沢さん、張本さんご両人の、歯切れのいいさわやかな会話が、日曜日の朝にふさわしい。

私は、大沢さんの現役時代に、お会いしたことがある。

「もはや戦後ではない」という言葉が流行語となった高度成長の走りの頃だ。労働力の不足から、中学校を卒業した多くの若者達が金の卵と呼ばれて、地方から大阪へやってきた。

その頃、地方公務員だった私は、一人でも多くの若者が大阪へ定着するため、大阪弁の使い方や、仕事のマナーなどの研修会の仕事を担当していた。

私はプロ野球の人気に着目して、南海ホークスの後援会の本田さんにお願いして、南海の選手を呼んでもらった。そんな一日に五名の選手が来てくれた。大沢さん、祓川さん、大神さんの名前は覚えているが、あとの二人は忘れている。

大沢さんが、どんな話をされたか、それも忘れてしまってはいるが、仕事がすんだあとの夕食時のことだけは、今もはっきりと覚えている。

予算も少ないのに、上司がいい格好をして、堂島川沿いの〈新大阪ホテル〉へ、選手達を招待する

ことになった。当時一流のホテルである。

「好きなものをいって下さい」

上司は豪華なメニューを選手達に渡した。選手達が聞いたこともない料理の名前を、ささやき合っている声が聞こえてくる。私は内心ひやひやした。

その時、トイレから帰ってきた大沢さんが大きな声でいった。

「おれ!ビールとカレーや!」

私はほっと胸を撫でおろした。

大沢さんの部屋中に響きわたるような大きな声に、みんなも同調した。

「喝!」という大沢さんの声を聞くと、今もその時のことを思い出す。

また、大沢さんは武勇伝の多い人でもあった。私は二度見ている。

その一つは、濃人さんのあと、ロッテの監督になって、オールスター後阪急を猛烈に追い上げている時、西宮球場で三塁の塁審を豪快に投げ飛ばしたこと。

もう一つは、日本ハムの監督の時、阪急の竹村投手が二人の選手の頭部にぶっつけた。大沢さんは、マウンドへ猛ダッシュして、竹村投手に鉄拳をふるったのをテレビで見ている。何より面白かったのは、日本ハムが優勝した時、酒樽につかった大沢さんがいった言葉が愉快だ。

「ケツから飲む酒はうまいなあ」

大沢さんは稚気あふれる愛すべき闘将だった。

コンビの張本さんは、その風貌からして、彼の真面目な正論に、意外と思う人もいるだろう。私は講演会で、韓国人である故に少年時代にうけた差別、そしてそれをバネにして生きてきたことを、とつとつと語るのを聞いて感動したことがある。

その時から、張本さんは、今の日本人の若者が失ってしまった良きものを身につけている、在日韓国人だと思っている。

一球の悪戯（85試合目）

ひと握りの白球が、男達の心を揺さぶる様を書こう。古田は、一回二死満塁のチャンスに打てなかったことを、気にしながら、前半に点を与えないよう、懸命に投手をリードする。一回、いきなり今岡に打たれたが、赤星を遊ゴロ併殺打にとり、あと中前打、桧山四球と、しぶとく喰いさがられたが、アリアスを左飛に打ちとって、事なきを得た。三回、今岡にファールで粘られたあと、内角のシュートを左翼席に運ばれた。この本塁打に気を良くした今岡は、七、八回と好守備で、ヤクルト後半の芽をつんだ。古田は、今岡のフェイントをかけてくるバッティングに舌を巻き、仕方なしと頭を切りかえたが、投手の佐藤は心を乱した。赤星に四球、金本に一、二塁間を破られて無死一、三塁。続く桧山の左翼ラインすれすれのフライを、ラミレスが落球、無死満塁となった。打者はアリアス。2　3から三遊間を抜かれ2点を失った。そのあと片岡にも打たれたが、岩村のホームへの好返球もあって、この回は3点に終わった。伊良部の好投からして、この3点はヤクルトに重い。昨年までは、リードしやすかったが、今年は、ボールに集中してくる阪神の選手に手を焼き、そして、一回のチャンスに打てなかったことが尾を引いて、古田は3三振、それに引きかえ、ラミレスは、三回のエラーに落胆

することなく、5打数4安打、九回、佐藤の暴走がなければ、一死満塁でラミレスのヒットが出たことになり、試合は、どう転んだか分からない。

小さな白球の悪戯は、男を奮い立たせたり、消沈させたり、動揺させたりする。

伊良部の好投については、スポニチの仰木さんの談話を引用させていただこう。

150キロ以上のものを出せる力がありながら、抑え気味にコーナーを狙うから、打者にとっては球持ちが長く見にくい。しかも手元で伸びる。外角にくる地をはうようなストレートは、昔の稲尾をほうふつさせる。

2003年7月22日
甲子園ナイター
⑱阪神11勝7敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
0	0
3	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
×	1
4	1

投
〇伊良部
安藤
ｳｲﾘｱﾑｽ

打
今岡②
金本2
アリアス2
矢野2
赤星1
片岡1
藤本1
11

剛腕、ルーキーの投手戦（86試合目）

阪神、久保田、ヤクルト、高井の剛腕ルーキーが、一球も見逃すことの出来ない投手戦を展開した。高井は球威に加え、緩急をつける制球力が抜群、一回、一死二塁で、金本、八木を空振り三振に仕留めると、八回を6安打無失点に抑えた。サンテレビの解説をしている福本さんは、バッティング、走塁、赤星を盗塁させなかったクイック等、19才とは信じられない素質の高さに驚きのコメント。選手名鑑をみると背筋力300キロ、その数字が能力の高さを示しているのかも知れない。

一方、6月8日以来3度目の先発に挑んだ久保田は、150キロの速球とスライダーで九回を6安打10三振、無失点の好投。圧巻だったのは、五回一死三塁、九回二死二塁で、いずれも当たっている岩村に対してのピッチングだ。五回は、インハイの直球で遊飛、九回は、カウント0―2から、外角低目のストレートを3球続けて三振を取った。解説の中西さんは、ピンチに物怖じしない心臓と面構えを褒める。この大器の意地の張り合いが相乗効果となって、勝敗をこえた見ごたえのある投手戦を展開した。両投手をつないだリガン、五十嵐、石井も好投、十一回、阪神にチャンスが来た。代打淺井が2―0から、ファールで粘って、12球目をセンター前ヒット、赤星の遊ゴロで、代走の平下が二

塁へ、石井の暴投があって一死三塁。おいしい場面が金本に来たが、ベテランも緊張したか、力がはいり過ぎて三振、あと代打の矢野、アリアスが敬遠され、沖原に廻って来た。今までにも、おいしい場面があった。七回、アリアスの左前打と沖原の二塁打で、一死二、三塁のチャンスに、宮本の右翼線の打球を好捕した中村（豊）。久保田を好リードした野口。しかし二人とも、ものにすることが出来なかった。幸運児沖原の強い打球は、一塁手の前でイレギュラー、サヨナラ打となった。矢野、桧山、片岡、藤本の4人をはずし、代わりに出た選手が全員活躍するのだから、監督も満面の笑みだ。

2003年7月23日
甲子園ナイター
⑲阪神12勝7敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1×	0
1	0

投
久保田
〇リガン

打
赤星2
沖原2
今岡1
淺井1
中村1
アリアス1
8

八木大活躍（87試合目）

大阪の人達は、昔から、天神祭の頃が一番暑いという。ところが、ここ二、三日、涼しい日が続く。七月も終わりだというのに、梅雨明け宣言もない。プール、海水浴場も来る人が少なく、ビール、冷房機の売り上げも伸びなやみ、弱っていることだろう。何事も順調にいっているのは、阪神タイガースである。

昨日は、下柳が六回まで、初回、立浪に打たれた1点に抑えた。本人は、ボールが高目に浮いて調子が悪く、矢野のリードに助けられたというが、四回、福留の右前打、立浪に左中間を破られて、無死二、三塁のピンチに、リナレスを空振りの三振、アレックスを三直、谷繁を落ちる球で三振に打ちとった。ベテランらしい粘りの投球は、ファンを魅了した。

打つ方は、野口と相性のいい八木を4番に起用したベンチの作戦が図にあたった。二回、八木、アリアスのセンターオーバーの連続二塁打で同点、桧山は左飛に終わったが、矢野の右前打で一、三塁、沖原の二ゴロで、アリアスが生還して1点をリードした。

三回には、足に自打球をあて、ファンが心配していた今岡がセンター前、赤星がレフト前と続き、

野口にとっては疫病神の八木に打順が廻った。野口は蛇ににらまれた蛙といったところ、八木は再び二塁打を打って、2人が生還、あと、アリアス、桧山の安打が続いて、この回、4点をあげた。

四回は、二、三番コンビが活躍した。二死になりながら、赤星が右前打で出塁、バッテリーの警戒をかいくぐって二盗に成功、金本が、すかさずレフトへタイムリー打を放って、7点目を叩き出した。

下柳のあと、七回は安藤が2三振をとりながら2安打されたが無失点に、八回は、吉野が、当たっている福留、立浪を打ちとり、最後は、先発をおろされた藪が三者凡退に打ちとった。ボールが高いと監督の評価は辛いが、次は先発に戻すだろう。

2003年7月25日
ナゴヤナイター
⑯阪神10勝6敗
ＢＳ7
関西テレビ

中日	阪神
1	0
0	2
0	4
0	1
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	7

投
〇下柳
安藤
吉野
藪

打
赤星2
八木2
アリアス2
今岡1
金本1
桧山1
矢野1
10

師弟コンビの前に大敗（88試合目）

眠れない夜、長いサラリーマン生活で、幸せと思ったのは、いつ頃だったろうかと思う時がある。子供達の成長をはじめ、家族のことを別にしたら、源氏鶏太が書いているように、上司に恵まれた時だと思う。源氏鶏太といっても、知らない人の方が多いだろう。住友系の会社に勤めた経験から、サラリーマンの哀感を書いた作家で、代表作に〝三等重役〟がある。戦後、会社の経営陣が、戦争に協力したかどで追放され、思ってもみなかった人が重役になり。動乱の時代を、会社のために粉骨砕身するさまをユーモラスに書いたもので、自分の利と体面ばかり考えているような、今の経営陣に読んでもらいたいものである。いいたいのはそのことではない。

勝利投手となった平井と山田監督のことである。二人は、オリックス初優勝の時の師弟コンビである。当時、ピッチングコーチだった山田監督は、高校を出たばかりの平井をストッパーとし、巧みな投手リレーで、オリックスを優勝に導いた。平井は、１５０キロ近いストレートで三振を取ることが出来た。その後、肩を痛めて手術、昨年中日にトレードされた。山田監督は、平井のことが気になって仕方ないと人に洩らしていたという。平井は、山田監督をいい上司として、心に刻むことだろう。

山田監督がいつまでも西本さんを尊敬しているように、阪神の選手達も、優勝とともに、星野監督を思い出に残る上司として、心に刻む日も近い。

昨夜は、15点、今シーズン始めての大敗である。今岡の6号先頭打者本塁打と片岡の長打2本以外、いい事はなかった。打者は、谷繁の内角球を有効な見せ球にするリードに手を焼いていた。

スポーツ紙には、吉野の日本ワーストタイ5連続四球、ムーア不調の5失点、佐久本の目に余る乱調とあるが、三回、一死一、三塁のチャンスに、0―3から、併殺打を打った桧山のあせりも俎上にのせねばなるまい。いずれにしても、出る度に好投を続けていた吉野の5連続四球は特筆ものだ。

2003年7月26日
ナゴヤナイター
⑰中日7勝10敗

関西テレビ

中日	阪神
0	1
1	0
4	0
0	1
0	0
3	0
6	0
1	0
×	1
15	3

投
●ムーア
谷中
吉野
佐久本

打
今岡②
赤星2
片岡②
桧山1
矢野1
秀太1
久慈1
10

井川好調（89試合目）

八月だというのに、外を歩いていても、汗を流したことがなく、空を仰いでも、夏雲を見ることがない。今年の夏は、どうなっているのだろう。

井川のピッチングは、昨年の巨人との開幕戦で、清原の本塁打の1点に抑え、完投勝利した状態にまで戻っていない。しかし、夏場になって、調子を上げてきた。これで、チェンジアップが低めにきまりだせば、本調子になるだろう。昨日の配球も、どちらかといえば、ストレート中心で、二回、そこを狙われ、3連打されて1点を失った。下位打線で、完投意識して、手を抜いたきらいがある。それ以後は、2安打に抑え、九回、ウイリアムスにつないだ。これで11連勝、防御率も2点台にのせた。星野監督は、村山さんに比べては失礼やと、相変わらず、井川に辛口のエールを送る。

打撃の方は、初回、今岡が四球、赤星が左前打、金本の投ゴロが送りバントとなって、一死二、三塁。桧山は、前日チャンスに併殺打を打った失敗を、右中間への2点二塁打で取り戻した。フォークを片手で、すくい上げる得意のバッティングだ。続くアリアスのいい当たりが左飛に終わったあと、片岡がレフトへのタイムリー、初回に3点を取って、前夜の15点のショックを払しょくした。

四回は、今岡の右への11号ソロのあと、4安打3点の中押し、今岡の左右に打ちわけるバッティング技術は、18試合連続安打、今季16度目の猛打賞。安打数で、イチローの記録を破るのも夢でない。七回、藤本の四球、井川の送りバントで二塁へ、今岡の中前打で生還、代走の秀太が二盗をきめ、赤星の中飛で二死になったが、金本がセンター前へのタイムリーで、効率の良い2点を取った。七月にはいって打率を落としている金本も、不振続きの中で2本の安打がでた。八月には、シーズン当初の当たりを取り戻して欲しい。右中間を破る強い当たりは、テレビを見ていても、一瞬の清涼剤だ。

2003年7月27日
ナゴヤナイター
⑱阪神11勝7敗

関西テレビ

中日	阪神
0	3
1	0
0	0
0	3
0	0
0	0
0	2
0	0
0	0
1	8

投
〇井川
ウイリアムス

打
今岡③
赤星2
金本2
片岡2
桧山1
アリアス1
藤本1
矢野1
13

伊良部二回KO（90試合目）

薄着をしていると肌寒い。雨は上がったが、どんよりとした空模様で、熊蝉の鳴き声も、不協和音に聞こえてくる。八月にはいれば、梅雨も明け、30度をこえる夏が来るらしい。阪神の優勝は一ヶ月早く、天候が一ヶ月ずれるとすると、真夏の夜の胴上げか。

阪神が負けた夜は、書きづらい。日曜日の午後11時、毎日テレビの〝情熱大陸〟という番組で、矢野捕手が出演していた。美しい奥さん、可愛い娘さんと、そして瓜破の実家のご両親、家族を大切にする現代青年の雰囲気が良く出いていた。その番組で、矢野が、野村監督から「何か感じとれ」といわれていた事が記憶に残っているという。そんな事を思い出しながら、テレビを見ていた。

昨夜の横浜戦、一回、二死一塁でウッズへの２　３からの配球、フォークで、ウッズのバットが空を切ると思っていたが、インコースのストレート、バックスクリーン右へほうりこまれた。濡れた指先が制球を狂わせたのだろうか。二回も、ストレートを狙われ、２四球、２安打、多村の2ランで４点を奪われた。その間、フォークは1球もなかった。湿った空気の日は、フォークは落ちないのだろうか。いずれにせよ、コントロールの良い伊良部の面影はなく、二回で降板した。

6点をリードされたあと、金沢、藪、谷中、吉野の中継ぎ陣が好投、九回までに無得点に抑えた。阪神は六回、藤本の三塁打、代打久慈三振のあと、今岡の二塁打、赤星死球、金本の一ゴロで二死、二、三塁、桧山の右中間二塁打で3点、チャンスは続いたが、アリアスが、代わった山田に、二ゴロで終わった。八回、無死から、平凡な投手へのフライを、捕手と三塁手が譲りあって、今岡が出塁、慌てた横浜ベンチは、代わったばかりの福森をこの一球だけで交代、代わった竹下に、二死から桧山が左へヒットを打ってアリアスにつなぎ、本塁打を期待したが、代わった5人目の加藤に捕邪飛に打ちとられた。九回も、この加藤に抑えられた。

この加藤投手、今年入団した国立東京学芸大学出身の異色の投手だが、なかなかよくやる。

2003年7月29日
甲子園ナイター
⑱横浜2勝16敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	2
0	4
0	0
0	0
0	0
3	0
0	0
0	0
0	0
3	6

投
●伊良部
金沢
藪
谷中
吉野

打
今岡 2
桧山 2
金本 1
片岡 1
藤本 1
7

金本復活か（91試合目）

久保田は一回、２人を簡単に打ち取ったあと、鈴木の一ゴロに、ベースカバーが遅れて内野安打とした。続くウッズに先制打を浴びて、先制点を与えた。それ以後、二回から四回まで４安打、毎回得点圏に走者を背負った。それに引き換え、ドミンゴは、今岡の３球三振をはじめ、３者を三振、三回までに片岡に二塁打を許しただけで、ストレートに威力があった。久保田が投げると、不思議と好運が訪れる。高井と投げあったヤクルト戦、０対０から延長戦になって十一回、沖原の一ゴロが、大きく跳ねてサヨナラ打となった。

この日も四回、赤星の中前打、金本が左中間を破る二塁打で無死二、三塁のチャンスを迎えた。ドミンゴが踏ん張って、桧山、アリアスを三振、チャンスはついえたかに見えたが、片岡の速球に押された打球が、フラフラと上がる内野フライで、石井のヘッドスライディングのクラブの先に落ちて、拾ったような１点で同点とした。五回は二死から、２三振の今岡が四球、赤星が初球をヒット、金本が２球目を左翼線ぎりぎりの二塁打、一塁走者の赤星まで本塁に帰って、２点を勝ち越した。レフトからの返球をカットした石井は、三塁で赤星がストップすると思い、目線を切り、それから慌てて本

塁に送球した。一瞬のすきをついた赤星、岡田コーチのファインプレーが試合を決めた。

七回、久保田は二死を取りながら、金城の当たりそこねの内野安打のあと、石井に四球を与えた。ベンチは左の鈴木に吉野を、横浜は右の小川を代打に送った。阪神ベンチは、吉野が小川に打たれて1点を失い、ウッズを迎えたところで安藤を送った。安藤は、外角低目をつくコントロールの良い速球で、ウッズを三振、そのあと八、九回を抑え、そんな安藤を監督は絶賛した。久保田も安藤には及ばないが、未完の大器であることは、間違いない。お立ち台には、猛打賞の金本が上がった。夏男に、今年の七月は、気候と同じく夏でなかった。

2003年7月30日
甲子園ナイター
⑲阪神17勝2敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	1
0	0
0	0
1	0
2	0
0	0
0	1
0	0
×	0
3	2

投
〇久保田
吉野
S安藤

打
金本3
赤星2
片岡2
7

心のスキをつかれて（92試合目）

同一カードの負け越しは、6月7，8日のヤクルト戦以来である。攻撃陣は6点を取っているのだから、投手陣に心のスキがあったのだろう。下柳は、今岡の7本目先頭打者本塁打を含め、16安打4点のハンディを貰った直後の二回、1犠打を挟んで5本の安打をつるべ打ちされて、一回13でKOされた。4点のハンディと、5連勝から、緊張を欠いていたといわれても仕方あるまい。

中継ぎ陣は、初戦、伊良部が6点取られたあと、無得点に抑えた自信過剰と、初戦の横浜は守る方、昨日は追いかける方で、おのずと勢いに違いがある事を気づくべきだったろう。三回、谷中は、ウッズにストレートの四球。バッテリーのスキを狙ったウッズの積極的な盗塁は、矢野の好送球で阻止したが、小川にライトポールぎりぎりに、相川にも、レフトスタンドへほうりこまれた。四回には、石井に四球を与えて二盗を許したあと、多村に2ランを打たれた。ウッズの盗塁といい、石井といい、積極的な姿勢が、本塁打を呼んでいるようだ。

追う立場になった阪神は五回、石井のエラーで金本が出塁、桧山四球、アリアスが三振の時、二人が果敢に走って一死二、三塁。片岡が左へ2点タイムリーを放って、チャンスをものにした。続く2

安打している矢野に注目されたが、二ゴロ併殺打に終わった。この回、1点差となり、阪神の反撃ムードが高まった。このムードに水を差したのが金沢である。六回金沢は、投手の山田にセンター前に打たれたあと、金城に2ランを打たれて、反撃の火が消えてしまった。

つなぐ打線が、横浜の一発打線にやられた試合だった。初戦をウッズと多村で5点、3戦目も小川らの4発で6点を失った。そんな中で、今シーズン始めてマウンドにあがったドラフト4位の三東が、せめてもの救いだった。一塁走者を得意のけん制球で刺し、落ちついたプレートさばきは特筆ものだ。二回を投げて1安打無失点ＭＡＸ１４６キロ、遅ればせながら登場した新戦力だ。

2003年7月31日
甲子園ナイター
⑳横浜3勝17敗

サンテレビ

阪神	横浜
4	0
0	3
0	2
0	2
2	0
0	2
0	0
0	0
0	0
6	9

投
下柳
●谷中
金沢
三東
リガン

打
金本2
桧山2
片岡2
矢野2
藤本2
今岡①
秀太1
12

甲子園初の連敗（93試合目）

八月になって、やっと夏らしくなった。青空には、夏雲が浮かんでいる。入道雲とは、よくいったものだ。雲が仏道にはいって剃度（ていど）した人に見えてくる。剃度しているムーアは、コントロール悪く、四回、2点を失ってマウンドを下りた。中継ぎ陣は好投したが、藤本のエラーもあり完敗した。

阪神は、9安打10残塁、得点圏に再三走者をおきながら、ここ一発がでない。三回の矢野のセンターライナー、六回の八木の大きなレフトフライは、いずれも不運な当たりだった。六回の大西の頭脳的なプレーは敵ながら天晴れ。2点をリードしていることで、大西は1点を覚悟のうえで、守備位置を下げた。定位置のままだったら、八木の打球は大西の頭上を越えていたであろう。この大西の好判断に、平井の笑顔がクローズアップされていた。オリックスで優勝した時から10年近く経った顔は、少年の面影はすっかり消えていた。

阪神が負けたことで、スポニチの一面は、オリックスが、5日前の25点の記録を更新、29点で大敗したことを報じている。かつてオリックスにいた平井選手は、どんな気持ちでいるだろう。いずれにせよ、地獄を見た選手が、努力して、よみがえることは嬉しいことだ。平井選手の完全復活に、心から拍手を送ろう。阪神にも、ベンチ入りしたばかりの石毛が、下位打線とはいえ、一回を好投した。

一日も早く、巨人戦で投げて欲しいものだ。一体、オリックスはどうなっているのだろう。上田監督がやめて、神戸出身ということで、土井監督になって、巨人選手の首切りを助けるような球団になって縁を切った。3年経って、仰木さんが監督に、山田さんがピッチングコーチになって、再びファンになり、日本一にもなった。石毛監督になっても応援していたが、シーズン始まったばかりに、監督を解任するフロントに愛想をつかし、再び縁を切った。アメリカ流のファンサービスを真似するだけでなく、選手達のいい分をよく聞いて、チームを強くすることだ。野球するのは選手だから。

2003年8月1日
甲子園ナイター
⑲阪神 11勝8敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
0	0
0	2
0	0
0	0
0	4

投
●ムーア
藪
リガン
石毛
金沢

打
沖原3
赤星2
藤本2
金本1
矢野1
9

井川投打に活躍（94試合目）

優勝は間違いない。手を緩めたらという声もあるが、ひいきのチームには、１４０試合全部、勝って欲しいというのが、ファン心理だ。消化試合が多くなろうと、知ったことでない。

今岡の三塁打がでるまでは、井川が好投し、その井川のタイムリー二塁打がでても、攻撃がちぐはぐ、前回の10残塁の続きかと疑った。一回、二死から金本、桧山の2連打、アリアス四球、満塁になったが片岡が三振、二回は、藤本の左前打と井川の犠打で二死二塁となったが、今岡遊ゴロ。三回は、二死から桧山が、あわや本塁打というような、センターオーバーの三塁打を打ったが、アリアスのヒット性の当たりが、ライトライナーとなって、点にならない。四回、またもや一死から、矢野がセンター前のヒット、藤本が左飛、二死となっては、今岡につなげないと、あきらめたが、井川の左中間を破る二塁打が出て、先取点を叩き出した。取れそうで取れない先取点が、思わない所で取れるのが面白い。12イニングぶり。これに刺激されたか、無安打に抑えられていた中日が、五回反撃に出た。立浪は遊ゴロに終わったが、ベテランらしい、ファールで粘った効果が出て、アレックスの三振のあと、関川、柳沢が連打、下位打線とはいえ、甲子園の浜風。ファンは、さい疑心が強い。森野の打球が二ゴロとなっ

て、やっと胸を撫で下ろす。六回、またも矢野がチャンスメーカーとなって右前打、藤本の投ゴロを、併殺をあせった野口が二塁へ暴投、井川は、走者を送れなかったが、今岡の狙い定めた三塁打が出て、二者が生還。そのあとの赤星のスクイズは、今岡のスタートが早過ぎて失敗したが、七回、アリアスがダメ押しの2ランを放って、勝利を不動のものとした。

井川の許した安打は、五回の2本だけ、あとは、赤星、藤本の好守もあって、毎回3人で終える、今シーズン一番の出来だった。「やっぱり井川や!!」試合が終わって、ファンは、そうつぶやいたことだろう。

2003年8月2日
甲子園ナイター
⑳阪神 12勝8敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	0
2	0
0	0
×	0
5	0

投
〇井川

打
金本3
桧山2
矢野2
今岡1
アリアス①
藤本1
井川1
11

勝ってVロードへ出発（95試合目）

甲子園は、間もなく高校球児の夢舞台となる。お立ち台には、Vロードの出発にふさわしい八木と桧山が上がった。

「遠征もこのまま、一つ一つ勝っていきます」選手会長の力強い言葉が終わっても、別れを惜しむファンは、球場をなかなか去らない。虎マークのついた縦じまと黄色いメガホンを叩きながら、〝六甲おろし〟を歌っていた。テレビに写るアルプススタンドには、カメラマンの演出か、女性ファンが多い。若い女性は、阪神のユニフォーム、年輩の女性は法被、そんな中で、虎模様のビキニ姿の女性が一際目立っていた。続いて、カメラは、プラカードを写していく「八木の桃太郎姿」「頼れる選手会長ひーやん」「Vへ向けて行ってらっしゃい」「優勝笑虎」赤い星を掲げている娘さん達。このファンの熱き思いが実現する日も近い。ロードから帰って来た時は、マジックも一けたになっていてほしい。

前回の横浜戦、珍しく二回で6点取られて降板した伊良部はさすがベテラン、二度とその轍（わだち）を踏まない。三回まで、伸びのある速球と、低目に落ちるフォークを多用、3人で片付けた。打線もその好投に答え、立ち上がり見事な速攻を決めた。今岡凡退のあと、赤星が左前打で盗塁、金本四球「四番

一塁」で出場の八木は、左腕の外角球を、おっつけ気味で一、二塁間を破る。赤星が先取点をあげた。続くアリアスも、レフト前タイムリー。桧山三振、二死一、三塁で、なくなりかけたチャンスを、矢野が初球をレフト前に打って引き戻し、3点目を叩き出した。三回には、一死一、二塁で登板したバルデスが沖原に死球、伊良部の投ゴロをハンブル、慌てて本塁へ暴投、阪神は難なく2点追加。四回には、中前打の八木をおいて、アリアスが三振、かつての球友バルデスと目線が会い、笑みを浮かべていた。そのあと、桧山が2ランを打って、さらに2点を追加した。7点を貰った伊良部は、ピッチングを楽しんで、七回で降板。安藤、ウイリアムスにつないだ。

2003年8月3日
甲子園ナイター
㉑阪神 13勝8敗

サンテレビ

阪神	中日
3	0
0	0
2	0
2	0
0	0
0	0
0	1
0	0
×	0
7	1

投
〇伊良部
安藤
ウイリアムス

打
赤星2
八木2
桧山②
矢野2
アリアス1
9

赤星の本塁打も、下柳で敗戦（96試合目）

三回、二死二塁、赤星は中前打の沖原を二塁において、高井が投げた初球の内角スライダーを振り抜いて、スタンドぎりぎりの2ラン。ホームランに、少年のようなあこがれを持ち続けている赤星は、うさぎのように跳ねながら、グランドを一周した。今シーズン第1号である。

その裏、ヤクルトは、土橋が二塁打、飯田の遊撃右のゴロを、沖原が身をていして好捕しながら、一塁へ悪送球して、一死二、三塁、宮本四球で満塁。ベッツの右前打で1点、次のラミレスの中前打で飯田が帰って同点とされたが、勝ち越しランナーの宮本を、赤星が好返球、ホームで刺した。四回、高井が突如コントロールを乱し、八木四球、アリアス死球で、阪神はチャンスを迎えたが、桧山が投ゴロ併殺で二死三塁、矢野は敬遠ぎみの四球で、一、三塁。沖原が名誉挽回の左前打で、再び勝ち越した。

7月31日の横浜戦で、下柳は初回に4点を貰いながら、二回3失点で降板した。その屈辱を晴らすべく、昨日は、トレードマークの無精ひげをそり、気分を一新して登板したが、調子がままならず、味方が点を取っても取り戻される。四回、1点のリードを貰いながらも、古田の本塁打で同点とされ、そのあと、二死を取りながら、投手の高井に打たれ、飯田、宮本に連打されて1点を失い、ベッツの

0―2で降板し、久保田がマウンドに上がった。一歩遅れた投手交代といえなくもない。久保田はベッツを150キロの速球で三振、金沢につないだ。金沢は、佐藤に二塁打を打たれたが、六回を無失点。七回に登板した藪は、一死から沖原のエラーとラミレスの内野安打のあと、古田に読み勝ちの本塁打を打たれた。カメラは、沖原のエラーの時は、ベンチの藤本と久慈を写し、古田の時は、「古田選手おめでとう」のプラカードを写していた。九回は、石毛が3人で抑えたが、阪神は、五十嵐、石井の強力リリーフ陣を打ち崩せなかった。

2003年8月6日
神宮ナイター
⑳ﾔｸﾙﾄ8勝12敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
2	2
2	1
0	0
0	0
3	0
0	0
×	0
7	3

投
●下柳
久保田
金沢
藪
石毛

打
沖原2
赤星①
今岡1
金本1
桧山1
6

コラム／退団する人々

阪神ファンは、巨人のように、お金にまかせてＦＡ選手を補強し、優勝してほしいとは思っていない。チームの中心勢力は、二軍からはい上がってきた選手達が、中心になってほしいと思っている。

こんなファンの声を、アナウンサーが星野監督に伝えた時、監督は例年より多い24人にやめてもらい金を浮かせて補強しているので、巨人ほど金をかけていない。まだ余っているぐらいと返事していた。私は監督に次のような言葉をつけ加えてほしかった。

「今年はやめていった選手の分もみんなにがんばってもらって、シーズンの終りには、彼等と一緒に優勝の美酒を味わいたいものだ」と。

昨年の最後の試合に、引退する三投手が投げた。遠山、伊藤、星野の三投手である。

星野監督の胸で号泣したのは、遠山投手だけで、伊藤、星野両投手は淡々として、監督と別れの握手をしていた。遠山投手は阪神へ入団した年、ルーキーで2完封をふくむ8勝をあげたが、フロントのうけが悪く、ロッテへトレードされ打者に転向し、一九九七年にテストで阪神へ再入団した。

野村再生工場で見事カムバック、リストラ世代の星といわれた。

松井選手を完全に抑え、ファンは〈遠山の金さん〉にちなんで、一件落着と喜んだ。

伊藤投手は、阪急から横浜へ、そして阪神へテスト入団した。在籍6年、右サイドからのクセ球で、中継ぎとして黙々と投げに投げた。

野村監督は継投に困った時は、とりあえず伊藤というほど信頼が厚かった。彼は〈鶴の恩返し〉と名言を吐き、その謙虚な姿勢は、阪神ファンの胸を熱くした。

星野投手は、中島捕手が素手で取ったこともあるという、緩急自在の投球で１８６勝した。阪神の在籍期間は2年と短かったが、強靱な手首と巧みな投球術は若手投手陣へいい刺激になったと思う。

阪急のスカウトだった当銀さんが、目標としていた選手にことわられ、せっかく北海道へ来たからにはと旭川工高の星野投手をドラフト五位で獲得した。星野投手と対決したことのある元近鉄の金村選手が彼を目の前にして、さんざん冷やかしていた。彼はテレビでこういった。

「北海道から出てきた男が、ひょろひょろ球を投げて宝塚出身のミス日本を嫁にするんやから、たいしたもんや、ほんまにあの球は癪にさわった。まだ早いとタイミングを合わすんやけど、やったと思って振っても、ボテボテの内野ゴロやったな」

貴公子といわれた星野は、端正な顔に、穏やかな笑みを浮かべながら聞いていた。ファンはそんな星野のことを、テレビの人気番組から〈細腕繁盛記〉といった。

最後に、阪神タイガースを去った選手達のご多幸を心から祈ろう。

神宮で4連敗（97試合目）

昨年八月にでてきて4勝、夏に強い川尻の印象が残っている。昨夜は丁寧に投げていたが、肝心なところで球が甘くなり、飯田から3ランを浴びたのが致命傷になった。四回、8安打5失点で降板した。点を取られたのが、すべて二死からであり、三回には岩村に、二盗、三盗を許し、川尻の先発は、これでないだろう。とすると、藪のカムバックはあるとしても、ムーア、下柳の不調を誰がカバーするのだろう。6球団随一の先発陣に、ほころびの出来たことが心配である。こんな中で、ここ数試合、金沢、石毛が好投しているのが朗報だ。三東もいれておこう。

上司には、責任はオレがとる、思い切り仕事をやれという上司と、責任はオレにかかるから失敗するなという。大きくわけて二つのタイプがある。星野監督は前者だ。昨日の藤本の萎縮したプレーに、監督は怒っていることだろう。初回、二死からベッツを二塁においた、ラミレスの中前打は、いつもの藤本ならダイビングで処理できたろうし、できなくとも、一、三塁に止めているところだが、それができない。三回、二死三塁から、古田の緩い遊ゴロを、大事を取り過ぎて、足の遅い古田を一塁に生かして1点を失う。中日戦のエラーで、沖原に代えられ、その沖原が2失策した事が意識にあって、

瞬間の動作が鈍るのだろう。昨日は、久慈が代打で2点タイムリー。三人の遊撃争いは熾烈だ。

八回、桧山が腰を痛めて退場した。上坂と曽我部がベンチにはいるらしい。上坂はもともと内野手、打撃を嘱望されて外野手になり、下積みの長い曽我部は、昨年、レフトのフェンスによじ登り、降りた時にアキレス腱を切断、休養を余儀なくされた強肩、好守の選手だ。この二人に中村（豊）をまじえた三人が、遊撃争いのように、良きライバルとなって、禍を福に転じて貰いたいものだ。「どこのチームよりも必死にやっている阪神の選手には疲れが大きい」とは、解説の上田さんの言葉である。

長期ロードが始まったばかりだというのに、あたっている桧山の戦線離脱は痛い。怪我人続出、そんな不吉な予感がする。早期回復を願うばかりだ。

2003年8月7日
神宮ナイター
㉑ﾔｸﾙﾄ 9勝 12敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
3	0
1	0
0	0
0	2
0	0
0	0
0	0
×	0
5	2

投
●川尻
三東
金沢
石毛

打
桧山 2
野口 2
今岡 1
赤星 1
片岡 1
秀太 1
久慈 2
10

今季初の3連敗（98試合目）

台風一過というにしては、滞留時間の長い台風だった。自転車のスピードで、四国の室戸から再上陸して、日本列島を縦断、二日がかりで北海道を出た。阪神は、今シーズン始めての三連敗、貯金37あるとはいえ、台風一過といきたいものだ。

昨日は〝テレビ大阪〟七回の阪神の攻撃の終わったところで時間切れ。解説の江夏さんは、別れ際に、こういった。

「阪神が負けたとしても、ファンの皆様は、伊良部のピッチングに満足するのではないですか。大人の野球を見せて貰いました」

伊良部は、野村のタイムリー、シーツ、新井に2ランを打たれ、5点を失って、六回で降板したが、五回のピンチに、伊良部は真骨頂を発揮した。

木村（拓）にレフト前に打たれたあと、すぐ盗塁され、淺井の一ゴロで、一死三塁、シーツのショートゴロが、大きく跳ね、藤本はよく飛びついて好捕したが、一塁への送球がショートバントになり、アリアスが落球して一、三塁、打者にセリーグきっての好打者前田を迎えた。伊良部、前田のベテラ

ン同志の一騎打ちに、ファンはくぎづけになった。

伊良部は、最後の一球以外、すべてストレート勝負だ。前田は、際どい球を、右に左にファールで返す。その数八回、ホームランに近いファールもあった。

ストレートに的を絞ってくる広島打線に、あえて、ストレート勝負する伊良部の男の意地をみた。江夏さんは、そんな伊良部のことをいっているのだろう。根負けした伊良部は、13球目にフォークボールを投げる。ショートバンドする球に前田はバットを止めたが、わずかにバットが出て三振、続く緒方を4球で三振にとり、この回のピンチを脱した。

新打線は、金本の本塁打の1点だけだった。8安打したが、広島の併殺網にかかった。

そんな中で、先発メンバーにはいった野口、中村がそれぞれ2安打。金沢が好投した。

2003年8月9日
広島ナイター
⑱広島6勝12敗

テレビ大阪

広島	阪神
0	0
1	1
2	0
0	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
5	1

投
●伊良部
金沢
リガン

打
金本②
野口2
中村2
今岡1
アリアス1
8

井川で4連敗（99試合目）

連敗がストップしないで、井川の12連勝がストップした試合だった。初回、赤星がレフト前ヒット。藤本の送りバントが、キャッチャーフライとなり、今岡の遊ゴロで併殺打、3人で終わった時、不吉な予感がした。その裏の広島の攻撃は阪神と好対象。左前打の木村（拓）を、福地がバントで送り、緒方の左前タイムリーで、いとも簡単に先取点をあげた。

二回、金本が四球、二死となったが、野口の中前打で一、二塁、中村のライト右の二塁打になる打球を、初回にバントを決めている福地に好捕され、そのツキのなさに、いよいよ不吉な予感が現実のものとなってきた。

井川は、初回の1点と、前田、シーツの本塁打の3点に抑えた。狭い広島球場のことを考えると、井川は最低の責任を果たしたといえよう。

問題は攻撃陣である。この2連戦のヒット数は、8安打と同数でありながら、阪神が2得点に対し、広島は8得点。本塁打の4本の差が大きいが、もともと阪神は、本塁打より、足と連打で戦ってきたチーム、それが両日にわたって、広島の併殺網と、バッテリーに足を封じこめられてしまった。そのこと

は数字が物語る。併殺数は、広島5に対して阪神は0である。また、チームに、ほころびが目立ち始めた。藤本のバント失敗、赤星のけん制死、さらに、守備には定評のあるアリアスが、四回、なんでもない黒田の一ゴロをミットからこぼし、六回には、二死一塁で一塁走者野村を挟殺しながら、アリアスの二塁への送球がそれて生かしてしまった。この守備のミスが打撃に響いた。六回、二死一塁から、金本が左前打で広げたチャンス、そして、八回、二死一、二塁から、金本が野選で満塁としたチャンス、そのいずれも、アリアスがつぶしてしまった。田渕コーチが提案したといわれている新打順は、再検討されるのだろうか。〝改むるに憚(はばか)ること勿(なか)れ〟と言葉もあれば、朝令暮改という言葉もある。いずれを取るや如何。

2003年8月10日
広島ナイター
⑲広島7勝12敗

サンテレビ

広島	阪神
1	0
0	0
0	0
1	0
0	1
0	0
1	0
0	0
×	0
3	1

投
●井川
安藤

打
赤星2
野口2
今岡1
金本1
片岡1
沖原1
8

確かな素質、久保田投手（100試合目）

久保田の立ち上がりは素晴らしかった。新人らしい外連味（けれんみ）のない速球で飛ばす。二回の佐伯まで5者連続三振。ただ、速球投手にしては、球数が多すぎる。三回にその疲れがでて、中村にセンター前、ホルトの犠打で一死二塁、石井の振り遅れの打球が、レフト前に落ちて二塁打、気落ちしたところを、鈴木に打たれて2点を失った。久保田は、六回2/3を投げて、6安打12三振2失点で降板した。

関西テレビ解説の田尾さんは、七回、久保田が金城に中前打、石井に四球を与えたところで、マウンドに駆け寄る佐藤コーチを見て、北海道育ちの茫洋（ぼうよう）とした、おおらかな風貌（ふうぼう）が選手達の信頼を得ているという。全く同感。北海道に来て、うまい肴で、選手達と一献傾けたことだろう。

二回の阪神の攻撃、二死から藤本が遊撃内野安打を打ったが、次の打者の事を考えて、誰も気にとめない。久保田がセンター前に、プロ入り初安打して、始めてベンチが色めき立った。今岡がきっちり二遊間をゴロで破って藤本が生還、続く赤星の打球が遊撃手の頭上を襲う。石井がグローブにあてて球がグランドを転々として久保田も生還。5連打を狙った金本が打席にはいったが遊ゴロに終わった。しかし、金本は、その悔しさをバネに七回決勝点をあげた。一死から今岡がセンター前にヒット、

赤星がバントで金本につなぐ。金本は2―3から、ホルトの変化球を3球ファールにし、待っていたストレートをセンター前に弾き返す。淺い球だったが、好スタートを切った今岡がホームへ、ヘッドスライディング、久しぶりに、今岡が滑り込んだままファイティングポーズを見せる。

久保田のあとは、ウイリアムスが、七回代打の小川一人を抑え、八、九回は、安藤が1安打無失点完璧だった。

星野監督は、勝っていても渋い顔をする時がある。三回、石井の足から考えて、無駄なホームへの返球で、打者を二塁まで進めた赤星と、六回、バントを失敗した野口に対してだった。

2003年8月12日
札幌ナイター
㉑阪神18勝3敗

関西テレビ

横浜	阪神
0	0
0	2
2	0
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
2	3

投
〇久保田
ウイリアムス
S安藤

打
今岡2
金本2
赤星1
野口1
藤本1
久保田1
8

藪復調、片岡決勝打（101試合目）

昨日までは、半そで、半ズボンで汗を流していたのに、今日は長雨で肌寒く、長そで、長ズボンに着替える始末。天気予報によると、盆に降る雨は、37年ぶりで、午後2時の温度が20・8度、10月中旬なみだそうだ。

避暑をかねての北海道のシリーズ、選手達もこの気候に驚いていることだろう。今日は移動日、2連勝して、札幌の夜を満喫した選手達は、今頃機上の人だろう。

この横浜の2連戦、同一スコアーの僅少差の勝利。星野監督は、伊良部、井川で2連敗のあとだけに、久保田、藪での連勝が嬉しかったのだろう。

「藪はナイスピッチングや。今季初めてじゃない？低め低めに行ったのは。これをずっと続けてほしい」

勝利インタビューに答える星野監督のほっとした表情が印象深い。藪は7月18日の広島戦以後、先発メンバーからはずされ中継ぎ投手として調整、復活を期しての登板だった。六回まで投げて5安打、金城の本塁打1点に抑えた。その間、今季初スタメンの上坂が好守で藪を助けた。五回、二死一塁で、

投手前バントを藪が一塁へ悪送球、上坂が素早いカバリングで一塁走者種田を本塁で刺した。六回にも、鈴木尚の右翼線への大飛球を背走しジャンピングキャッチした。

打つ方では、片岡が四番の責任をはたした。六回、今岡、赤星の連打のあと、金本が倒れ、片岡は、1―3から1球をファールしたあと、ドミンゴの速球を痛打。打球はライト右を破って走者を帰した。片岡は珍しく手を叩いて喜びを表現していた。

北海道で今岡の打撃も復調したようだ。三回、ドミンゴの内角速球をバットを折りながらレフト前へヒット、先取点をあげた。今岡は本塁打も打てるリードオフマン、そして、下位打線が作ったチャンスを継ぐとともに、ポイントゲッターでもある。やはり、今岡は一番が一番良く似合う。

2003年8月13日
札幌ナイター
㉒阪神19勝3敗

毎日テレビ

横浜	阪神
0	0
0	0
0	1
1	0
0	0
0	2
0	0
0	0
1	0
2	3

投
〇藪
リガン
Sウイリアムス

打
今岡3
片岡2
赤星1
藤本1
7

上原に完封される（102試合目）

試合が終わると、湯舟につかりながら、ゲームを振り返り、取り上げることを決め、一晩寝かして、翌日、スポーツ紙を参考にしながら、８００字にまとめることにしている。昨日のように完敗すると、書くことが無くて困る。巨人以外のチームなら、相手のことも書く気もするが、優等生意識の強いチームのことは、取り上げたくもない。

上原のテンポの早いペースに乗せられて、三塁を踏むことも出来なかったが、数少ないチャンスはあった。三回、野口が三塁内野安打、藤本二ゴロのあと、伊良部の犠打で二死二塁、今岡の痛烈な打球は、三塁線に飛んだが、江藤に好捕された。三塁線を破っておれば、阪神に流れが傾いた可能性はあった。四回、二死から、片岡、アリアスの2連打がでたが、上坂が遊ゴロ。五回は、野口がセンター前に打ったが、藤本の遊ゴロ併殺打でチャンスをつぶし、八回、伊良部の代打沖原が初球をセンター前にはじき返したが、あとが続かない。そして、最後のチャンスが九回に来た。先頭打者の金本が、右中間を突破する二塁打で、上原に一矢を報いた。今シーズン初出場の広沢が二回目の打席にはいった。上原のフォークを狙った広沢の打球は、レフト左へ。数センチでファール。広沢は天を仰いで残念がった。

それを見て、テレビ解説の川藤さんは、これで広沢は三振だという。ベテラン選手でも、あれがヒットだったらという意識がどうしても残って、集中力がなくなってしまうという。川藤さんの予言どおり、広沢は、気のないハーフスイングで三振。アリアスは三塁フライ、代打の久慈は捕邪飛、1点も返すことなく完封された。

四番になって、調子をあげていた片岡が、ヒットを打った走塁で、右太ももに違和感を覚えて途中退場した。浜中、桧山、相次ぐ四番の離脱。不安だが、みんなでためた貯金は、こういった日のためにあると思えばよい。優勝すれば、貯金は無用になるのだから。

2003年8月15日
東京ナイター
⑲巨人5勝13敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
1	0
0	0
2	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
3	0

投
●伊良部
金沢

打
野口2
金本1
アリアス1
沖原1
片岡1
6

井川完投で15勝（103試合目）

8月5日、サンテレビが珍しく阪神、中日の二軍戦の実況放送をし、その時、虎風荘の梅本寮長のインタビューをしていた。大きく伸びる選手は、小さな事にこだわらず、よく食べて健康管理に気を使う選手だと、梅本さんはいう。そして、中西、新庄、井川選手の名前をあげていた。また、天狗になる選手の鼻をへし折るのも仕事らしい。そんな選手に比べて井川は、大変謙虚な選手だと褒める。梅宮さんは、20年近く寮長をやっておられるので、平凡な語り口に真実味がある。

昨夜の井川は、大胆にストライクを先行させ、心理的に巨人打線を追い込み、135球3安打完投、18年ぶり、巨人に勝ち越した。九回、代打高橋との勝負が面白かった。井川は、外角ストレートで攻める。高橋は5球をファール。解説の江川さんは「高橋は打てませんよ。逃げるのが精一杯、井川は、ストレートで三振を取ろうと楽しんでます」という。

そのとおり、ファールされたあと、一転内角へストレート。高橋は手が出せなかった。今日で、防御率は、木佐貫を抜いて1位に躍り出た。20勝も夢でない。

この井川に打撃陣が答えた。初回、赤星がヒットで盗塁、金本のセンター前ヒットで簡単に先取点

をあげた。三回、二人は死球と右前打、一死一、二塁から二人は重盗を決めた。島野コーチが、ストップウォッチを持っているのがテレビに写る。木佐貫投手の投球タイムを計って、重盗のサインを出したのだろう。動揺した木佐貫は、アリアスの時に暴投、そして四球。野口、中村の初球ヒッティングの安打で、この回3点をあげた。さらに五回、金本、広沢が連打したあと、アリアスに久しぶりの二塁打が出て1点を追加した。赤星と金本は、足に死球をうけながら、5盗塁するのだから、たいしたものだ。打って走った4安打の金本は、575試合連続フルイニング出場、歴代3位。まさに、鉄人金本。清原も一目おくはずだ。

2003年8月16日
東京ナイター
⑳阪神14勝5敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
0	1
0	0
0	3
0	0
0	1
0	0
1	0
0	0
0	0
1	5

投
〇井川

打
金本4
赤星2
中村2
広沢1
沖原1
アリアス1
野口1
12

新人久保を打てず（104試合目）

久保が阪神戦で、始めて先発登板したのは、6月1日の12回戦である。阪神は久保田、新人同志の投げ合いは、試合に負けたが、田が一字多い分、久保田が投げ勝ったと書いた記憶がある。その試合は、九回、ウイリアムスが、高橋由にサヨナラ本塁打を打たれ、始めて敗戦投手となった。久保田が六回まで1点を失ったのに対し、久保は五回まで投げて、金本、今岡のタイムリー、アリアスの本塁打と、3点を失って降板している。

昨夜の阪神は、七回まで、5安打に抑えられ久保から点が取れない。3点をリードされた八回、12回戦に活躍した面々が、最後のチャンスを作った。不振の今岡が、久保の外角スライダーを、3試合13打席ぶりに、右翼線へヒット。続く金本の右翼線二塁打で一死二、三塁。八木の初球に、久保がワイルドピッチーして、今岡がホームへ、ヘッドスライディングして1点を返した。ヘッドスライディングもいいが、なにより怪我をしないでほしい。これで今岡まで怪我すればどうなる。

そのあと、八木が四球、八木の代走に秀太、一死一、三塁でアリアス。ベンチは初球に秀太を走らす。ヒットエンドランで一打同点を狙う作戦だ。絶好球だったが、アリアスが打ち損じてファール。ベン

チは、あくまで積極的だ。秀太が走ったが、盗塁死。アリアスは三振に終わった。その裏、リガンが連続タイムリーを打たれて3点を失ったが、これは付録みたいなものだ。

昨夜は下柳が、初回二岡に本塁打を打たれたが、12回戦の時も、久保田が初回二岡に本塁打を打たれ、九回、二岡の安打のあと、高橋由にサヨナラ本塁打を打たれている。昨夜の試合は、攻守とも、12回戦によく似た試合だった。16・5ゲーム差の余裕だろうか、それとも疲れか阪神の攻撃は、お茶漬けの味のような、淡泊なものだった。

2003年8月17日
東京ナイター
㉑巨人6勝14敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
2	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	1
3	0
×	0
6	1

投
●下柳
金沢
石毛
吉野
リガン

打
今岡1
赤星1
金本1
アリアス1
野口1
中村1
沖原1
7

広沢の一発だけ（105試合目）

久保田の立ち上がりは、前回の登板時と同様、上々だった。三回まで5三振、三者凡退。二回には、広沢がレフトスタンド中段への本塁打で、幸先の良い先取点をあげた。ベンチで八木が仲間と喋っている。

「広沢さん、ほんとに41才」

とでもいっているのだろう。

阪神が良かったのはここまで、後は全く中日ペースだった。中日は、安打数4本で4得点、阪神は、7本打ちながら1点しかとれない。今まで、好調な打撃陣でカバーしていた拙守、拙攻が目立つようになった。久保田も拙守に足を引っぱられたとはいえ、ランナーを出した時、セットポジションに問題がありそうだ。四、六回に、四球を出したあと、長打を浴びている。

四回、関川に四球を与えたあとの福留のあたりは、二塁打となっているが、広沢の拙守によるもので、立浪の犠飛で簡単に同点にされた。五回には、アリアスのエラーと谷繁の左前打で無死一、二塁。荒木がバントを空振り、アレックスが塁を飛び出し、野口が二塁へ送球したが、藤本とのタイミング

がずれ、球はセンター前へ転がって二、三塁。荒木の遊ゴロで1点リードされた。その裏、阪神は藤本のセンターオーバーの当たりが三塁打となった。スタンド観戦のご両親が立ち上がって手を叩いて喜んでられた。久保田の二ゴロのあと、今岡がライトライナー、藤本がリードを大きく取っていたため、ベースタッチが遅れ、福留の好返球で、本塁1メートル手前でタッチアウトとなり、阪神に来つつあった流れを止めてしまった。気を良くした福留は、六回中前打、立浪四球、リナレスは、バントできず、2―0と追いこまれながら、レフトオーバーの二塁打を打って2得点。あとは、つながりのあった阪神打線は影をひそめ、反撃の力はなかった。ポイントゲッターの今岡も得点圏で2度凡退。朗報は、八回代打の矢野が二塁打を打ったことと、連日に渡る石毛の好投。

2003年8月19日
大阪ナイター
㉒中日9勝13敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
1	0
0	0
0	1
0	1
0	2
0	0
0	0
0	0
1	4

投
●久保田
吉野
石毛

打
藤本2
金本1
広沢①
野口1
中村1
矢野1
7

ロード負け越し（106試合目）

残暑と呼ばれる季節になって、夏らしくなった。夏雲が昨日と同じところに居座っている。枝を切り過ぎて、花をつけるかと心配していた百日紅も、遅まきながら、新しい小枝の先に、淡紅色の花をつけた。青空によく似合い、天の簪（かんざし）百日紅とは、よくいったものだ。百日紅というより、〝猿滑り〟といった方が親しみがあるかもしれない。

同期の久保田に先を越され、内心じくじたるものがあるだろう杉山が、初登板だった。初回、先頭打者井端を歩かせ、関川のバント安打などで、一死一、三塁、立浪の一ゴロ併殺崩れの間に1点を失った。テレビで見た限り、藤本の一塁への送球は、間に合ったと思ったが、セーフのコール。今日のスポニチに〝これがセーフ〟と、その瞬間の写真を大きくのせていたのが、せめての慰めで留飲を下げる。三回には、打撃で定評のある投手の山本に打たれ、関川の嫌らしい内野安打のあと、福留に二塁打を打たれて2点を失い、五回、一死二塁から、井端に中越二塁打を浴びてKOされた。四回13を5安打5失点。2四球がいずれも得点に結びついた。三東も、一回2/3で、3安打2四球で2点を失い、新人には試練の日だった。そんな中で、ベテランの石毛が、今日も二回投げて無安打に抑えた。

好調時の阪神は、投打がカバーしあっていたが、今の阪神は、投打とも不調になっている。この2日間、広沢一人が気を吐いている。昨夜は四回広沢の本塁打と、六回、代打上坂の左前打、赤星の二塁打、金本の一ゴロで1点を、あげただけだ。

四番打者だった三人の欠場に、各選手が打たなければと、自意識過剰となり、〝力み〟となっている。自意識過剰は文学青年のものでスポーツ選手には無意識過剰がいい。集中力ということは、無心になることだろう。スポニチで西本さんがいっている。不調の打線を立ち直すには、一時的にフォ・ザ・チームという考え方を捨て去り、各人が自分の打撃を心がけるべきだと。

2003年8月20日
大阪ナイター
㉓中日 10勝 13敗

サンテレビ

阪神	中日
0	1
0	0
0	2
1	0
0	2
1	1
0	0
0	0
0	0
2	6

投
●杉山
三東
石毛
安藤
ウイリアムス

打
広沢②
赤星1
金本1
野口1
藤本1
上坂1
7

2度目の4連敗（107試合目）

麻雀は、若者からすっかり見放されてしまった。麻雀屋は、長い老後生活を送る年寄りの社交場となっている。碁、将棋は、強い者が強い。ところが、麻雀はツイたら、初心者でもベテランに勝てるから面白い。このツキは、説明が難しい。簡単にいうと、ツクとすべてがいい方に、ツカないとすべてが悪い方に廻るということだろうか。勝ち過ぎて、手を緩めたいとすると、このツキが逃げてしまい、勝つチャンスの確率の高い手が、最も確率の低い手に負けたりする。取り戻そうとしても、なかなか元に戻らない。そんな時、忍の一字、心の上に刃と焦らず、ツキが来るまで我慢する。

今の阪神の状態である。昨夜の試合、監督のいうとおり、審判と相性が合わないといって、熱くなってもしょうがないのだが、必勝を期した試合の伊良部が、そんな審判に出合ったことが、そもそもツキのない始めだと思いたい。三回、死球、四球、四球で招いた満塁のピンチ、リナレスのタイムリーで2点を追加された。その裏の攻撃で打席に向かって歩く伊良部が真鍋球審に、何かいっている。ベンチから監督と佐藤コーチが慌てて割ってはいって事なきを得た。大リーガーで円熟味をましたとはいえ、伊良部も人の子、集中力を失って、6四死球と乱れ、五回までに5失点、試合は前半で決して

しまった。

金本が2本の本塁打で一人気を吐いたが、いつもならいるランナーが前にいない。これもツキがない。それに反して、この日2打点猛打賞の中日の荒木には、捕前安打や、広沢のエラーを誘うなどのツキがあった。阪神の唯一のチャンスの七回、藤本の右前タイムリーで1点を返し、二死一、二塁で、上坂の初球を狙った打球が、50センチ内にはいっていたら、それもツキのなさだろう。そのあと、上坂三振、今岡四球、二死満塁のチャンスを八木に託したが三ゴロに終わった。いずれにせよ4安打では勝てない。ツキ云々は、悔しさの戯言(ざれごと)か。

2003年8月21日
大阪ナイター
㉔中日 11勝 13敗

サンテレビ

阪神	中日
1	1
0	1
0	2
1	0
0	1
0	0
1	0
0	0
0	2
3	7

投
●伊良部
金沢
リガン
石毛
吉野

打
金本②
中村 1
藤本 1
4

井川で5連敗（108試合目）

〝井川、お前もか〟

投打がかみ合わないと、何が起きるか分からない。立ち上がりに、自己ワーストの一回6失点。二回でKOされた。一回、先頭の金城にストレートの四球。続く石井のバントを、三塁アリアスが悪送球して、無死二、三塁、多村を三ゴロに打ち取ってから、ウッズの二塁打、村田の3ランを含む4連打で6点を失った。テレビは、まだ始まっていない。毎日放送で解説している中村さんは、こんな井川は珍しい。ストレート、チェンジアップが真中に集まっているという。物ごとに動ぜず、常にマイペースの井川も、連敗の重圧に押しつぶされたのか。中村さんは、井川は気分転換がうまく、ストレスをためない選手だから、次はきっと好投します。投手には、こんな事もあり、心配いりませんと、ファンを安心させてくれる。二回、エラーして責任を感じているアリアスの本塁打、三回には、野口の三塁打と今岡のタイムリーで2点を返したが、二番手の金沢が、相川、石井に本塁打を打たれて追いつかない。こんな試合になると、ベテランの選手達は、つい緊張感を失うもの。ところが阪神の選手達は違った。本塁打がでても、エラーした責任から、アリアスは、インタビュアーに、ものもいわ

ないらしい。途中出場の野口の真しなプレーは感動を呼ぶ。中日戦で走りまくられたが、昨日は六回、金城の盗塁を阻止した。打つ方では、三塁打をふくむ2安打。そして、捕手のあとはライトを守り、八回、右翼フェンスぎりぎりの大飛球を背走しながら好捕した。

8点リードされた九回、金本、八木の連続二塁打、アリアスの右への安打で2点を返す。最後の打者となった久慈は、2―3からファールで粘る。ベンチでは、2安打で気を取り直したアリアスと井川が声援を送る。ファールする度に、久慈の表情は厳しさを帯びてくる。11球目バットは空を切ったが、このムードは明日につながる。明日は必ず勝つ。

2003年8月22日
横浜ナイター
㉓阪神19勝4敗
毎日放送
関西テレビ

横浜	阪神
6	0
1	1
1	1
1	0
0	0
0	0
0	0
1	0
×	2
10	4

投
●井川
金沢
吉野
三東

打
アリアス②
野口2
今岡1
赤星1
金本1
八木1
8

コラム／少年の目

サラリーマンの幸せは、上司と同僚に恵まれた時でその期間はごくわずかであるといった作家がいる。

私もそんな時期があった。同僚の富田さんは先輩だがなんとなくうまがあった。富田さんは大阪市の野球部のキャプテンで、さすがチームワークをとるのがうまく、私は彼のおかげで思う存分仕事をすることができた。

私達は富田さんが試合に出る時は、できるだけ多くの者が応援に出かけるようにした。

まだ、おおらかな時代である。

そんな富田さんの所へ、市の野球部の人が集まってきたので、自然と私もその仲間入りするようになったそんな仲間にプロ野球で活躍していた人がいた。

辻さんと栄屋さんである。

辻さんは海草中学（旧制）の捕手だった。海草中学といえば、豪速球の嶋投手、小学校五年生の頃、面白い名前の島田商業の一言多十投手とともに、私達野球仲間の話題の中心だった。そして辻さんがプロ野球にはいってからは、今でいうおっかけをしたようなこともあった。そんなことがあって、初

めて会った時は変に胸がときめいた。

海草中学は一九三九年の25回中学野球大会で、嶋投手は四試合を全部完封。しかも、準決勝で島田商業を、そして優勝戦で下関商業をノーヒット・ノーランで完封するというものすごい記録を残している。

その嶋投手は、明治大学へ進学し学徒出陣で、一九四五年六月、仏印沖の海戦で不帰の人となった。そのあと、三塁手だった真田選手が投手となって全国制覇しているが、辻さんはレギュラーでなかった。辻さんが甲子園へ出場したのは、戦争で最後となった17回の中等野球大会で、辻（源）―辻（功）の同姓バッテリーで出場し、優勝校となった徳島商業に、準決勝で1対0で惜敗している。

そのあと辻さんは予科練へ入隊、戦後は、いち早く坪内監督の率いる金星スターズへ入団、プロ野球で最年少の選手として活躍した。その頃、若い辻選手を応援に球場に足を運んだ。辻さんとバッテリーを組んだ投手を今も覚えている。林、内藤、須田各投手だ。須田投手はスタルヒン投手の日本名である。

野球を止めてから、辻さんは住込みの現業員として大阪市の施設で働き、そのかたわら書道を学び、人を教えるほどの腕前になった。その間、市での昇進を無視した。そして、停年後は小学生を教えていたが、数年前鬼籍にはいってしまった。

栄屋さんは、一九五四年阪神へ入団、その年7勝をあげたが、打球が眼鏡にあたって負傷し、選手生命は短かった。怪我がなければ、名投手として、阪神球団の歴史に名をとどめただろう。

同じ年、打点王となった阪神の三番打者の渡辺さんが桃山中学出身で、富田さんの野球部の先輩であったことから、渡辺さんのことと、もう一人の渡辺さんとともに、よく話題になった。

もう一人の渡辺さんとは〈省ちゃんボール〉といった超スローボールを、王さんや長嶋さんに投げた渡辺省三投手のことである。

渡辺さんは、むっつり助平で飄逸な人だったらしい奥さんを仕とめるために、月給全部はたいて化粧品をプレゼントした。野球は超スローボールでも、恋は剛速球といわれた。

技術屋さんだった栄屋さんは大阪市で努力を重ね、下水道局の部長で定年退職した。

プロの世界から身を引いて、辻さんと栄屋さんの生き方はちがっていたが、バッテリーを組んで野球をする時は、二人の目は少年の目のように輝き、真剣そのものだった。

また、スポーツ選手にとって、優勝ということがどれだけ嬉しいことか、二人の話しぶりからよくわかった。

辻さんは三重交通で、栄屋さんは鐘淵化学で優勝している。

栄屋さんの了解をとるため、原稿を見て貰った時、読み終わった彼は、誰にいうともなくつぶやいた。

「二人とも自殺するような人でなかったのになあ、魔がさしたということだろうか」

栄屋さんは、悲しそうな顔をして、二人の渡辺さんのことを思いだしていた。

渡辺投手のお嬢さんは、お父さんの自殺が信じられないと、本を出版されている。

ベテランの活躍（109試合目）

前日、大量点のリードをされながら、ベテラン達は、試合を捨てなかった。それが、昨夜の勝利を導いた。苦しい時に、頼りになるのはベテランだ。初めての5連敗という嫌なムードを、金本、広沢の攻撃陣、下柳、野口のバッテリーが振り払った。

初回、今岡の右飛のあと、赤星がセイフティバントを決め、金本が右翼スタンドへ2ランをほりこんだ。七月に2割8分まで打率を下げ、悪戦苦闘していた金本は、八月にはいって、やっと夏らしくなると、が然調子を上げてきた。この先制点が連敗を続けている下柳の気持ちを楽にした。日本ハム時代から、下柳とバッテリーを組んで6年目になる野口は、引くところは引き、徹底的に低目で攻め、ほとんど内野ゴロと三振で打ちとり、三塁ベースを1度も踏ませなかった。六回、二死、73球投げて交代。佐藤コーチが、下柳から球を取ると、下柳は両手を広げる。もう少し投げたい下柳の気持ち、それが分かる佐藤コーチは、お互いに苦笑するだけで、微笑ましい風景だ。あとは、投板間隔のあいているリリーフ陣のリガン、ウイリアムス、安藤が好投、シャットアウトした。

もう一人は、球界きってのベテラン広沢選手の活躍。力強いスイングは、41才になっても衰えてい

ない。二回、二死一、二塁、田崎の速球を打った球は、左中間を破る2点タイムリー二塁打となった。二死からのタイムリーだっただけに、横浜ベンチに与えるダメージは大きい。ベテランらしい効果ある一撃だった。

ベテランというには、早いかも知れないが、アリアスもあげねばなるまい。前日、エラーの責任を感じて打った本塁打が契機となって、昨夜も六回、赤星、金本の連打のあと、右翼の頭上を抜く二塁打で、駄目押しの2点をあげ、八回には、左翼スタンドへ、アリアスらしい本塁打がでた。大勝だが、相手の投手は二線級だったことを忘れてはなるまい。

2003年8月23日
横浜ナイター
㉔阪神20勝4敗

大阪テレビ

横浜	阪神
0	2
0	3
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
0	1
0	0
0	8

投
〇下柳
リガン
ウイリアムス
安藤

打
金本③　赤星2
ｱﾘｱｽ②　野口2
今岡1　広沢1
秀太1　藤本1
八木1

14

ロード最終戦も黒星（110試合目）

やはり、ジンクスは生きていた。今年の強い阪神には、死のロードはない、Vロードだ。マジックをヒトケタにして帰って来るだろうといったが、最終戦の〝お得意様〟横浜に2対5で敗戦。これで長期遠征は4勝11敗、267の勝率、9年連続の負け越しだった。桧山、片岡、矢野の2度目の怪我が何より痛い。

幸いなことに、4勝しかしていないのに、追いかけるチームの共食いで、マジックは、「29」から「17」に減り、2位巨人との差は12．5ゲームある。厳しい監督も、トータルで見て、今まで頑張ってきた選手に感謝しなければという。しかし、弱い阪神と長い間つき合ってきたファンは、優勝間違いなしと思っていても心配なものだ。

明26日の巨人戦から、今季36勝10敗、勝率783の本拠地での試合。負け越しが決定しているとはいえ、巨人は最後の意地を見せるだろう。今の巨人は強いが、徹底的に勝ってファンの積年の恨みを果たしてほしい。

八月は負け試合の記事ばかり書いているような気がする。昨夜も、久保田の速球を打てないとみた

金城が、叩きつけるバッティングで、嫌な内野安打を打った時、負ける予感がした。決して結果論でいうのではない。続く石井のあてるだけのバッティングがヒットになる。一死一、二塁で、苦手のウッズを打席に迎えた。心臓の強さで定評のある久保田も、不運な安打にイライラし、顔が強ばっている。ストレート一本に絞っているウッズにコーナーをつく直球が真中にはいった。打ったあと赤星は動かない。高く上がったセンターフライかと思った。ところが、赤星は遠くへ飛んだ球を見失っていたのだ。この3ランが致命傷となった。四回に金本の本塁打で1点を返し、六回には、今岡の左前打と赤星の右中間三塁打で1点差として、なお無死三塁、逆転のチャンスを迎えたが、打線がつながらない。七回のチャンスにも、今岡のタイムリーがでない。八回に安藤が打たれて万事休した。

2003年8月24日
横浜ナイター
㉓横浜5勝20敗

サンテレビ

横浜	阪神
3	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	1
0	0
2	0
×	0
5	2

投
●久保田
リガン
安藤
吉野

打
今岡1
赤星1
金本①
広沢1
アリアス1
藤本1
6

久々の甲子園で勝利（111試合目）

最終回、二死から巨人最後の攻撃、二岡を一塁においてペタジーニ。ウイリアムスの外角球を打った球は、三塁ファールフライ。観客席ぎりぎりの所へ、高く上がった。沖原が倒れながら、グラブを差し出した。総ての目が沖原に集中し、一瞬の静寂が流れる。そして、沖原が捕球したグラブを差し上げると、うねりのようなどよめきが起こった。選手達ははじけるような姿を浮かべながらベンチへ、ベンチはお祭り騒ぎだ。この1勝は大きい。

選手達は、4勝14敗のロードの雪辱を、この巨人戦に期したのだろう。勝利監督インタビューをうけた星野監督も、開口一番「興奮した」と顔を赤らめていた。阪神一色のパフォーマンスや、女性のファッションは、一層派手になっているようだ。

最近の金本の活躍に「鉄人金本」「金本筋肉」「兄貴金本」と金本に関するものが多い。その金本は、猛打賞と4打点。伊良部が初回、4安打を打たれて2点を失い、巨人ペースになりかかってたのを、その裏、四球の今岡、中前打の赤星をおいて、金本が桑田のカーブを完ぺきに捕らえた本塁打が、阪神に流れを引き戻した。

伊良部は、この本塁打と、二回、藤本を二塁において、自らが打ったタイムリーに気を良くして立ち直った。金本は五回にも、中前打の赤星が盗塁のあと、一、二塁間を破る巧打で、さらに1点をあげて、伊良部を援護した。六回、斉藤の嫌な投ゴロヒット、川中の遊ゴロをアリアスがエラー、代打後藤にコーナーをつく投球がボールとなって四球、一死満塁となった。微妙な判定にも冷静を失わなかった伊良部は、代打江藤を3球勝負で三振、二岡を二ゴロに打ち取ってピンチを脱した。七回にその疲れからか、清水、清原に本塁打を打たれ、1点差に追いつかれて降板した。八回のタイムリー三塁打で初めて登るお立ち台の中村（豊）が初々しい。吉野、安藤、ウイリアムスが2点をきっちり守りきった。値千金とは、一回裏の金本の3ランのことをいうのだろう。

2003年8月27日
甲子園ナイター
㉒阪神15勝6敗
1分

阪神	巨人
3	2
1	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	2
1	0
×	0
6	4

投
〇伊良部
吉野
安藤
Sウイリアムス

打
赤星3
金本③
今岡1
藤本1
中村（豊）1
伊良部1
10

41才の青春（112試合目）

お立ち台で〝六甲おろし〟を歌ったのは、井川が投げて1対0で勝った試合だったと思う。昨夜、お立ち台に上がった広沢は、インタビュアーの機先を制した。「今日は歌いません。日本シリーズで優勝したら、みんなでやりましょうや」日本一に目標を切り替えたるあたり、さすが優勝経験のあるベテランだと感心した。初回にバックスクリーンへ、40才の工藤から先制2ランを放つと、三回には左翼へ4号3ラン。五回の中前タイムリーと合わせて6打点。青春真っ盛りといったところで、ユーモアも忘れない。「オレ、広沢か？」と放送記者に聞き、相手が目を白黒させていると、「オレ金本やでー」といったとか。それにしても、金本の3戦連続本塁打といい、今夜の広沢、そして、もう一人アリアスの2本塁打4打点と一発攻勢は、すさまじい。

打撃が低迷していた頃、西本さんが8月24日のスポニチで「チーム全体の調子が落ち込んでいる時こそ、各人が自分の打撃を心掛け、いい形で打つことに専念すべき」と評論、つなぎのチームバッティングを強調していた田渕コーチが、西本さんと同じ様なことをいって、指導方針をかえた。お二人の炯眼（けいがん）に恐れ入る。

七回以外、毎回ランナーを出しながら、七回まで無失点に抑えていた井川にも、そんなところがあった。四回、高橋（由）、ペタジーニに連打され、清原に四球で無死満塁となり、佐藤コーチが走った。井川は心配無用とばかり、江藤を一邪飛、斉藤を投ゴロ、村田を空振り三振に。五回は一死二、三塁で、高橋（由）、ペタジーニを連続三振に、３アウト目がいずれも１４５キロ以上の直球で空振りの三振に打ちとるのだから格好がいい。これが井川だといっているようだ。八回以降は、吉野、三東が左打者を、石毛が右打者を完ぺきに抑えた。今岡が久しぶりに２安打、前回初めてお立ち台に上がった中村（豊）も２安打し、片岡も代打で出場、赤星も盗塁成功、チームは復調の兆しあり。

2003年8月28日
甲子園ナイター
㉓阪神 16勝6敗
1分

阪神	巨人
2	0
0	0
4	0
0	0
4	0
0	0
1	0
0	0
×	0
11	0

投
〇井川
吉野
石毛
三東

打
アリアス④
広沢③
今岡２
中村２
11

下柳完封（113試合目）

お立ち台に、九回3安打でヤクルトを完封した下柳が呼ばれていない。野球は、守りより攻撃が重視されるのかと思っていたが、翌日の〝スポニチ〟を見て理解した。

「これから練習があります。3度目の完封はみんなのおかげです。感謝しています」といい残して、下柳はロッカーへ去ったとのことで、4月20日、移籍初勝利のお立ち台の前に「これが最初で最後です。一回でいい」とすでに関係者に告げていたという記事をのせていた。下柳は〝含羞（がんしゅう）の人〟平たくいえば照れ屋である。毎日新聞は、時代おくれの男の完封と表現していた。

熱燗や寡黙の男口開き

酒でも呑まなければ、自分の事は喋れないということだろう。

九回無死一塁、岩村の本塁打性の当たりが、早川の好捕で右飛に終わると、下柳は心の動揺を沈めようとして、マウンドの回りを歩き出した。それを見て、横浜戦で六回二死、無失点のまま降板を命じられたことの意地と、セ・リーグ初完封への下柳の執念を思った。そして、ラミレス、度会を連続三振で打ち取り、完封勝利。最後まで、ひざ下のゾーンで、速球、フォーク、スライダーが、よく決

まっていた。試合は、この下柳の好投と、二回アリアスの2ランと三回金本を二塁においてのタイムリー、おまけに古田の二塁への悪送球がついて、球が外野を転々とする間に、アリアスが一挙ホームイン。この4点で試合が決まった。

この試合で、3試合連続先発起用された早川が、本塁打を含む3安打と期待に応えた。26日に1軍昇格して、すぐチャンスをつかんだが、その後、5打数無安打だった。この3安打の影には、名伯楽水谷2軍コーチの指導と、星野監督の「2試合で判断するのはかわいそう。これで2軍に落としたらあいつの人生終わりや」という愛情があった。早川が本塁打を打った時、カメラは中村を映した。二人は同年齢30才で守備位置も同じ、境遇も似たもの、手を叩いて祝福している中村の心情や如何。

2003年8月29日
甲子園ナイター
㉒阪神13勝9敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
2	0
2	0
2	0
2	0
0	0
0	0
0	0
×	0
8	0

投
〇下柳

打
早川③
赤星2
アリアス②
今岡1
金本1
矢野1
10

戻ったつなぎ打線（114試合目）

夏休みの終わりになって、青空に居座っていた入道雲が消え、秋雲といわれている筋雲が流れているが、とにかく暑い。

昨夜の甲子園は、雨が予想されていたので、早く点を取って、ゲームを早く進めることだ。一回、今岡の右前打、赤星の三塁内野安打、金本四球で無死満塁。アリアスの遊ゴロ併殺崩れの間1点。最小点で不足だが、雨を考えると貴重だ。二回には、早川が昨日に引き続いてセンターオーバーの本塁打を打ち、続く藤本のセイフティバントと久保田の送りバント、今岡の左中間を破るタイムリー二塁打で2点をあげた。雨で流れないよう早くゲームを進めることだと思っていたところ、久保田が1点を失った。鈴木に打たれたあと、自らの暴投とベッツのタイムリーという、やらずもがなの1点で嫌な気がしたが、その裏、タイミングよく矢野の本塁打がでた。矢野が本塁打を打った試合は負けないとうジンクスがあるらしく心強い。

久保田が五回を三人で打ち取って、ゲームが成立。あとは雨を心配することなく、じっくり攻めればよいと思っていたら、早速、5安打4点。ロード前の強い阪神が戻った。一死から赤星が右翼線へ

三塁打、金本のあたりそこねの打球が内野安打となって1点、この安打で気落ちした佐藤を阪神のつなぎの打線が攻め立てた。片岡がセンターオーバーの二塁打、アリアスが左翼線越えの二塁打、続く矢野の右中間の三塁打で4点をあげた。いずれも長打、チャンスに一気にたたみかける攻撃が復活した。矢野の復調で打線のつながりがよくなり、得点が倍増した。

久保田は、9安打3点を与えて、八回マウンドを降りた。11三振を取る力投をみせながら、ベンチの久保田は厳しい顔を崩さない。八回、二死を取りながら、鈴木に四球を与えたあと3連打されて2点を与えたのが悔しいのだろう。久保田の課題は、完投能力をつけること。

2003年8月30日
甲子園ナイター
㉓阪神14勝9敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
1	0
2	0
0	0
1	1
4	0
0	0
0	0
1	2
×	0
9	3

投
〇久保田
リガン

打
アリアス3
今岡2
赤星2
矢野②
早川②
藤本2
金本1
中村1
片岡1
16

福原復活（115試合目）

ウイリアムスから、ウイニングボールを貰った福原が、お尻のポケットにしまいながら、同僚達の祝福を受けているのをみて、こんなことを思った。

野球は筋書きのないドラマとよくいわれる。確かに、野球観戦で一番楽しいのは、カクテル光線に映えている芝生のグランドに、選手達が散って、これからどんなドラマが始まるのか、胸をわくわくする時である。

昨夜のヤクルト戦は、選手達が作った〝福原復活〟というシナリオのあるドラマだった。舞台は、うまく進行し、福原への神様の褒美かと思うほどだった。

福原がグランドから去る前の試合は、昨年8月16日の昨夜と同じヤクルト戦、6対1の負け試合の八回、中継ぎに登板し、渡会、ラミレスの二人を打ち取ったのが最後である。その後腰を痛め、そのことを話題にした記者に、星野監督は激怒した。「何もしとらんのにギックリ腰。そんなの記事にするなよ」。その後9月21日2軍戦に登板したが、今度は右肩痛を発生して10月18日に手術。03年6月から鳴尾浜でリハビリにはいった。福原は、1998年、速球投手としてドラフト3位で入団した。

背番号は江夏のもの、球団の期待が伺える。昨夜の福原から155キロを記録した速球は影をひそめ、矢野のリードのもとスライダーを多投、六回まで4安打、無四球、無失点と好投した。シナリオというのは五回の攻撃である。二死から福原自らが三遊間を破る。今岡が左前打で福原と同期生の赤星につなぐ。赤星は単打で福原はホームまで帰れないと読み、思い切り引っ張った。打球は右翼線を破る二塁打となり、福原は生還した。金本は2―0と追い込まれながら、5球をファール10球粘って出塁し片岡にバトンタッチする。福原の努力を鳴尾浜でみている片岡は、金本で力を使い果たした鎌田の初球を叩く。打球は一塁右を破る走者一掃の二塁打となった。あとは吉野、安藤、ウイリアムスが完ぺきのリレーで福原を祝福した。

2003年8月31日
甲子園ナイター
㉔阪神 15勝9敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
0	0
0	0
0	0
0	0
4	0
0	0
0	0
0	0
×	0
4	0

投
〇福原
吉野
安藤
リガン

打
赤星2
片岡2
今岡1
矢野1
早川1
藤本1
福原1
9

アリアス2発4打点の活躍（116試合目）

阪神の四回の攻撃が終わったあと、カメラが応援団のプラカードを写した。

〝常時アリアス〟

ファーストネームのジョージをもじったもの。昨年ペタジーニをとるために、アリアスを解雇する話があったので、いつまでも阪神の選手であってほしいということか、それとも、アリアスはスランプの期間が長いので、短くしてほしいという願いをこめているのだろうか。そのアリアス、ロードは絶不調だったが、ここ5試合は20打数13安打で打率6・50、打点も13と絶好調。昨夜も5打数4安打、その内の2本が本塁打という大活躍だった。広島からまだ勝ち星のない伊良部は、初回、緒方に二塁打を打たれ1点を失ったが、二回に、アリアスが高橋の内角スライダーをレフトスタンドにほり込んで同点とし、四回には外角シンカーを右中間への技ありの一発でリードした。その裏、伊良部は二死から森笠に打たれて同点とされたが、この広島を突き放したのは五回である。赤星四球、金本の右前打、片岡の一ゴロで走者を二、三塁に進め、アリアスがレフト前に、2点タイムリーを打ち、伊良部は勝利投手の権利をもってマウンドを降りた。伊良部は、さすがベテラン、五回、走者2人を出したが、

続く打者を2三振に打ち取り五回を7安打4四球で2失点。「粘り強く投げられたと思う」と、コメントどおりだった。

アリアスは、さらに七回、四球の金本、中前打の片岡を一、二塁において、レフトオーバーの二塁打で2点を稼いだ。また、アリアスは昨夜の2発で、本塁打王争いでトップのラミレス、ウッズと1本差に迫った。優勝と本塁打王、両手に花も夢ではない。不調だった矢野が、このアリアスに誘発されたのか、4打数4安打と調子をあげてきた。

リリーフ陣は、リガンが六、七回を1安打、吉野が八回を無安打に抑え、九回、初めてストッパーを任された金沢が2ランを打たれ、安藤に助けを求めたのが残念だった。

2003年9月2日
広島ナイター
⑳阪神13勝7敗

大阪テレビ

広島	阪神
1	0
0	1
0	0
1	1
0	2
0	0
0	3
0	0
2	0
4	7

投
〇伊良部
ｳｲﾘｱﾑｽ
吉野
金沢
S安藤

打
ｱﾘｱｽ④　矢野4
片岡2　金本1
秀太1　藤本1
久慈1伊良部1
15

片岡の意地の一打が石毛を勝利投手に（117試合目）

阪神を1点に抑えていた長谷川を、広島ベンチは、六回のチャンスに代打を送るために代えた。阪神の1点は、今岡に代わって初先発した秀太の三年ぶり2本目の本塁打である。ベース1周が速くて初々しかった。

投手交代は、長谷川の荒れ球を打ちあぐねていた阪神に幸いした。七回、二回を無失点に抑えた石毛の代打広沢が、三遊間を破る安打で口火を切った。秀太が走者を二塁に送ったが、赤星中飛で二死となり、金本が敬遠された。これをみた片岡の打席に歩む姿は、テレビをみていても、四番の意地と闘志がみなぎっていた。そして、片岡の気合いをこめたひと振りは、右翼手の頭上を超え、2者が生還した。続くアリアスに、片岡の闘志溢れる後姿をみて、打ったという本塁打がでて、この回一挙4点をあげた。アリアスは、この一打で、ラミレス、ウッズに並んだ。

片岡の二塁打で逆襲した時、カメラは、チラッと、勝利投手になれる石毛を写していた。オフに近鉄を解雇され、テスト入団した、かつての巨人の守護神、3人の子持ちで33才の男の静かな笑顔があった。

福原、石毛の好投には、かつて１５０キロで阪急の日本一に貢献した、山口２軍コーチの指導もあってのことだろう。最終回、ウイリアムスの思わない不調で、1四球2安打で1点を返され、なお、無死一、二塁、幸い新井のバスターが投ゴロ併殺となって事なきを得た。ウイニングボールを持って、赤星が嬉しそうにベンチへ走る。ベンチでは、選手達の祝福に石毛が頭を下げていた。

井川がシーツの投ゴロを背面で捕球しようとしてバランスを崩し、膝を痛めて16球で降板した。このことが、いろいろなドラマを呼んだ。ベンチは、前日九回に2ランを打たれた金沢に登板を命じた。金沢は1点を与えたものの好投、石毛も五、六回を無失点に抑え、この両投手の力投が七回の反撃を生んだ。

2003年9月3日
広島ナイター
㉑阪神14勝7敗

サンテレビ

広島	阪神
1	0
0	0
0	1
1	0
0	0
0	0
1	4
0	0
1	0
4	5

投
井川
金沢
○石毛
リガン
安藤
ウイリアムス

打
赤星２　秀太①
金本１　片岡１
ｱﾘｱｽ①　矢野１
広沢１

8

下柳の力投報われず（118試合目）

昨日は、大きな熊が立ち上がったような、メリハリのある夏雲が青空に居座って、夏の再来かと思った。季節の変わり目は、寄せる波のように、行きつ戻りつ到来するのだろう。今日は、綿菓子のような夏雲が数片、青空に漂っている。短い命を訴えるように、せわしく鳴いていた熊蝉は、落ち蝉となって、散歩道でみかけるようになった。そして今朝は、語尾を伸ばして悠揚と鳴くミンミン蝉のひと声を聞いた。残り試合23試合。今年の秋は楽しみだ。

阪神最後の攻撃、野口、沖原、中村（豊）の連打が出て、二死ながら満塁のチャンスを迎え、代打八木が打席にはいった時、テレビは八回降板し、ベンチの片隅に座っている大きなブロックを写した。昨夜の敗因は、初回と七回にこのブロックを打ち崩せなかったことだろう。初回、初めて一番を打った藤本が、いきなり右前打で出塁。金本の四球で、一死一、二塁となり、続く片岡、アリアスの強い一塁線への当たりが、いずれも野手の正面を突いた。七回は、先頭打者の片岡が左中間を破る二塁打で出塁、アリアスには長打を警戒して四球、野口に死球を与えて無死満塁。ブロックは、バットを振る仕草をして審判に抗議、イライラし始めた。いつもの悪いくせに、逆転のチャンスと思ったが、昨

夜のブロックが体を動かすことで逆に集中力を高めていたのだ。代打の矢野に2―3から、ファールで粘られながら、速球で一塁ファールフライに、続く代打の広沢を二ゴロ併殺打に打ち取り、六回、自分の死球と緒方の本塁打でものにした2点を守った。ブロックは六回、ムーアなみのヘッドスライディングで三盗し、下柳を揺さぶった。下柳は、緩急で両コーナーを突き、広島打線に的を絞らせなかった。惜しまれるのは六回、先頭のブロックに与えたストレートの四球だ。打線の援護がなく勝利投手になれなかった事は悔しいだろうが、完投して投手陣を休ませたことは大きい。野口が初ホームランを打って、下柳を盛り立てた。

2003年9月4日
広島ナイター
㉒広島8勝14敗

サンテレビ

広島	阪神
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
2	0
0	0
2	0
×	0
4	1

投
●下柳

打
藤本1
赤星1
片岡1
アリアス①
野口②
沖原1
中村（豊）1
8

矢野サヨナラ本塁打（119試合目）

九回一死から、脇腹の痛みから8月8日に登録抹消され、この日一軍登録された桧山が、ギャラードの150キロに近い直球を、ライト前にクリンヒットした。選手会長の一打をみて〝よし‼いける、あとに続こう〟と矢野は思ったに違いない。変化球はない、矢野は真中のストレートを思い切りふり抜いた。金城の動きからセンターフライと思ったが、打球は外野スタンドの前列に飛び込んだ。金城がカモフラージュしていたのだ。矢野もだまされていたのだろう、入ったとみるや、こぶしを甲子園の夜空に突き上げ、雄叫びをあげながら、飛び跳ねるようにしてダイヤモンドを一周、ベンチの前で待っている仲間の輪へ、両手を上げて飛び込んで行った。あちこちから出てくる手で、矢野は仲間の荒っぽい祝福を受けていた。そんな中で久保田が矢野の手を握っている。〝六甲おろし〟とメガホンを叩く音がこだまし、スタンドは興奮の坩堝（るつぼ）に化し、2度目のジェット風船が舞っていた。カメラは、女性達が掲げているプラカードを写していた。〝瓜破の星〟〝男前矢野〟

テレビに写る、そんな風景をみながら、私は6月17日、矢野が無死満塁から、ライトの奥深く逆転サヨナラ三塁打を打って、仲間達の手荒い祝福を避けるため、三塁の方向へ逃げ廻っていたことを思

い出した。その時も、昨夜と同じ三浦が先発で九回に降板し、デニーから打ったサヨナラ打だった。一度あることは二度あるということか。

ドラマは一人で作れまい。おぜん立てした選手達がいる。守りでは、2番手の石毛が6人を抑え、九回はリガンの2三振を奪う力投があった。六回、多村の難しいレフトフライを好捕した金本のファインプレーもあげねばなるまい。走では六回、内川の一塁への悪送球で二塁へ、金本の安打で1点を返した赤星の好走塁もあった。打つ方では、八回代打沖原の中前打、赤星、金本の連打でその差1点とし、九回のフィナーレを迎えた。金本の好守にわたる活躍が印象的だった。

2003年9月5日
甲子園ナイター
㉖阪神21勝5敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	0
0	0
0	0
0	3
1	0
0	0
1	0
2×	0
4	3

投
久保田
石毛
○リガン

打
金本2
桧山2
赤星1
矢野①
沖原1
7

杉山惜しい黒星（120試合目）

七回、村田の左翼への飛球が、金本の頭上を越えて金網にあたり、グランドを転々とした。金本は、必死になって球を追い、村田は懸命に走った。ところが、急に二人の動きが止まった。小林三塁塁審が右手を廻している。金本があきれた顔をして審判に詰め寄り、赤星も食い下がった。ベンチから、星野監督が飛び出して来て抗議したが判定は覆らない。翌日のスポニチの写真を見れば誤審は間違いないだろう。打球は、フェンスの最上部より30センチ下にあたり、グランドに跳ね返っている。首位争いに鎬（しのぎ）を削っている時だったら、ファンを巻き込んで、大変なことになっていただろうが、貯金が40もある阪神、星野監督もうすら笑いを洩らしながら引き下がった。余裕である。上田監督の長時間に渡る熾烈（しれつ）な抗議を思い出した。日本シリーズで、ヤクルトの大杉選手の打った左翼ポールぎりぎりの球が、ポールを巻いたか、巻かないかの抗議である。その日が甥の結婚式で、トイレに行くふりをして、式場をぬけ出して、成り行きを見守った。辞任を覚悟している上田監督は、金子コミッショナーの説得に応じる気配もない。男の生き様を見る思いがした。甥が阪急ファンであり、テーブルスピーチで、その事を話したら、意外とうけた。その甥の長女が大学生だから、随分古い話だ。昨夜の試合は、

誤審といい、横浜の7人の継投策に、たびたびゲームが中断、だらだらした試合だった。負け投手になったが、ルーキーの杉山はよく投げた。最速143キロのストレートに108キロのカーブを、うまく交ぜて好投した。四回、ウッズの二ゴロで併殺になるところ、沖原の一塁への送球が走者にあたったが、守備妨害を認められず1点を失った。六回、2連打され、走者を二、三塁において吉野と交代した。吉野は鈴木（尚）を今まで完全に抑えていたが、自信が過信となったのか、2　2から外を狙った球が甘く入って、打たれた2点タイムリーが試合を決めた。

2003年9月6日
甲子園ナイター
㉗横浜6勝21敗

サンテレビ

阪神	横浜
2	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	3
0	1
2	1
0	1
4	7

投
●杉山
吉野
金沢

打
赤星2
片岡2
アリアス1
矢野1
広沢1
7

コラム／渡辺オーナー　御許に

いつでしたか、東京ドームの貴賓室で、巨人の戦いぶりを観戦しておられる渡辺さまをテレビで拝見いたしました。

巨人が勝っていたせいでしょうか、笑みをうかべておられるあなたさまのお顔は、誠に頼もしく、お若い時はさぞかし女を泣かされたことでしょう。

その時お隣におられたのは、まぎれもなく、元総理大臣の中曽根さまではございませんか。竹下内閣のリクルート事件以来、総理大臣がころころと変わり、日本の値打ちもその後随分さがりました。

中曽根さまのことはまたと致しまして、あなたさまはお若い頃、政治記者として、田中番をやっておられるだけに、『文芸春秋』三月号の「小泉総理に友情を持って直言す」を拝見さしていただき、なかなかお達者な、そして、若々しい筆運びに、さすがと感心いたしました。

辛らつな批判をなさったあと、病院見舞いに小泉首相からパジャマをお貰いになったことをご披露され、「純ちゃん最高権力者は言葉にこだわらず、国民経済を守るため、君子豹変していいんじゃないか」とご忠告されるあたり、長年政治の世界を見てこられたお方だと思ったのでございます。

そういえば、あなたさまは商業主義になってしまったオリンピックには、巨人の選手を送らないと、

あれほど強くおっしゃっていましたのに、今度のアテネのオリンピックの監督には、長嶋さんと推薦され、オーナーにはいい選手を出すよう、さぞかし、ご要請なされることでしょう。

また、横綱審議会の委員長もされているあなたさまは、貴の花の七場所の休場を厳しく非難されました。

捨て身になった貴の花が千秋楽まで優勝戦線に残った時、さすがのあなたさまも、困った顔をなさって、「あの人は神秘的だ」とおっしゃっていました。

神秘的とは、どういうことを仰っているのか分かりませんが、正直に申し上げまして、あなたさまは貴の花の人気と、女性がほれぼれする寡黙な男の美を、お見逃しになったようでございます。

今の男は饒舌になり過ぎです。外国人の何ともいいようのない土俵入りばかり見せられている女性にとって、久しぶりに見る貴の花の土俵入りは、まことに美しゅうございました。

知らぬ間に、相撲の話となってしまいましたので、野球の話に戻さしていただきます。

日本選手権がすむと、毎年十一月のドラフト会議はプロ野球ファンにとって楽しみのひとつでございます。

くじを引く人の悲喜こもごもは、さながら人生の縮図でございました。ドラフト制度の功罪は、いろいろございましょうが、ドラフトの上位の選手が、必ずしも活躍するものではございません。各球

団が優勝するチャンスができることですから賛成でございます。一九八九年のリーグのお荷物といわれました広島の優勝は、まさしくドラフト制度の賜物でしょう。

若い人の人権の問題と大袈裟にいう人もございますが、どの球団に指名されても、野球することには変わりないのですから、拒否することは、多額の契約金を考える時、贅沢というものではございませんか。

ところが、いつの間にか、大学生と社会人の二名を自由枠とし、ドラフト制度が形骸化されました。制度のことは12球団のオーナー会議で決まるのでしょうが、その内容は私共にはわかりません。

常識的には多数決ということでございましょうが、それで決まるはずはないのでございます。この制度が観客動員数の多い人気球団に有利なことは、明々白々でございます。財政力の豊かな球団にいい選手が集まり、ますます強くなるのでございます。なにより視聴率が第一の民放は、それに拍車をかけるのでございましょう。

観客動員数が多いのは、セでは巨人、阪神、パではダイエー、西武が他球団を引き離しております。どう考えましても、賛成4、反対8で、多数決ではこの制度は決まらないはずなのでございます。それがどうして決まってしまうのでございましょうか。人気球団にオンブしてもらおうと、考えているオーナーの方もおられるかも知れませんが、私は会議を強引に牛耳るお方がおられるからだと思う

のでございます。

まさしくそれは渡辺さま、あなたでございます。川島コミッショナーは会津出身と聞いております。会津のお方は、やはり江戸のお人渡辺さんに弱いのでしょうか。それとも、官房副長官をなさっている時、読売の記者だった渡辺さんに借りでもあるのでしょうか。そんなことを勘ぐりたくなります。

一九九三年、ＦＡ制度が導入されました時、各球団が人件費の高騰を心配しているなかで、あなたさまは積極的でございました。ドラフト制度で戦力が均衡化することを、ご心配なさったあなたさまは、ＦＡ制度で有力選手をジャイアンツに集める計算だったのでございましょう。

二〇〇一年には、金に糸目をつけず他球団の四番打者、エースを集められ、大方の人が巨人の優勝を予想いたしました。ところが、予想に反して優勝したのはヤクルトでございました。そして、皮肉にもその翌年若手選手をうまく起用した原監督で、日本一になったのでございます。狂喜されたあなたさまは「原君は若い。あと十年はいける」と、おっしゃっていらっしゃいました。

二〇〇三年は、あなたさまが有利だとお思いになって導入されたＦＡが、裏目に出ました。それは、松井選手が大リーグに行くことになってしまったことでございます。

あなたさまは、人気と待遇を考えれば、巨人から出ていく選手はいるはずがないと、自信にあふれておられただけに、ショックだったと思います。

松井選手は記者会見で「裏切り者といわれるかも知れないが、ぼくは大リーグに行く」と、沈痛な表情でございました。

私は、推測するのでございます。あなたさまではないかも知れませんが、恐らく、幹部のどなたかが、日本一の四番打者に育ててやって、6億近い給料を与えているのに、恩を仇で返すつもりか、というようなことをいわれたのでございましょう。そうでなければ、賢明な松井選手が、あんな発言をするはずがございません。さらに驚きましたことは、選手会との交渉で決まった代理人制度について、こんな風にいわれたのです。

「巨人にはくだらん代理人を連れてくる奴は、いないだろう。連れてきたら、おれが球団代表に給料をカットしろという。いやなら自由契約だ。うちに入りたい奴はいくらでもいる」

まるで恫喝(どうかつ)ではございませんか。

政治の世界には〈影の実力者〉という言葉がございますが、あなたさまはプロ野球の世界では、影どころか白昼堂々とした実力者でございます。

そんなあなたさまだからこそ、私はお手紙をしたためた次第でございます。

お願いごとの一つは大リーグのように〈セ〉〈パ〉の交流試合を、やっていただきたいのでございます。あなたさまは、かねがね一リーグ制をいっておられますので、賛成されるはずはないと思うのですが、

一九五〇年のリーグ分裂の時の、正力松太郎さんになっていただきたいのです。

読売、毎日新聞の血みどろの販売合戦を、知っている人々は、まさか毎日球団の加入が認められるとは、思ってもいませんでした。ところが、正力さんはプロ野球の発展のために、あえて加入を認められたのでございました。

それと私にも奇策がございます。それは交流試合を実施する球場のことでございます。私は松山生まれ、大阪へ嫁に来た者でございますので、なんとか故郷をよくしとうございます。

松山は、日本へ初めて野球を広めた正岡子規の生誕の地でございます。〈坊ちゃん球場〉もできました。また、四国は数々の名選手を排出し、野球の好きな者がわんさとおります。そんなわけで、交流試合のすべてを〈坊ちゃん球場〉でやってほしいのです。政府は四国へ三つもの橋を架け、赤字で悩んでおります。

交流試合を〈坊ちゃん球場〉でやっていただけば、地元の人は勿論、多くの人々が橋を渡って来てくださることと思います。道後温泉もございます。温泉、球場、橋をセットにした割引券の発行も、可能でございます。

いかがでございましょう。お褒めいただけるでしょうか。

もう一つのお願いは、消化試合を止めていただきたいのでございます。閑古鳥の鳴いている球場で、

個人記録のための試合は、全くつまらないものでございます。

川崎球場が健在でした頃、閑古鳥が何羽いるか、バードウォッチングの専門家を呼んで、数を数えているテレビを見たことがございます。たしか一〇〇羽もいなかったかと記憶しております。

夫にこのことを申しますと、彼は秋風の吹きはじめた、祭りの後のようなうらぶれた球場の消化試合もいいもんだ、と申すのでございます。仕方のない天の邪鬼ではございません？

消化試合と申しますのは、個人記録のための見え透いた達成、阻止の繰り返しで、みにくいフォアボール合戦がまかり通るものでございます。大阪弁で申しますと、女のいけずのやり合いみたいなもので、試合とは申せません。外国人選手どころか、女の私さえ怒りたくなるのでございます。赤字を出してまでやる必要はないと思うのです。正々堂々という言葉は死語になったのでございましょうか。

衛星放送で朝早くから、大リーガーの試合を見ることができます。このままいけば、日本のプロ野球は魅力を失ってしまうのではないでしょうか。

オーナーとして、Ｖ９、Ｖ10をお考えになるのは当然のことと思いますが、あなたさまのようなスケールの大きなお方は、小泉首相に進言なさったように、まさしく君子豹変していただいて、12球団の繁栄のことをお考え下さいませ。かさねがさねお願い申し上げます。

アリアス満塁弾（121試合目）

今岡の欠場でプロ入り初めて一番打者になった沖原が左前打で口火を切り、赤星が四球、幸先よしと思ったが、続くクリンアップが簡単に凡退した。相手の吉見投手は、三月の開幕投手で、井川に投げ勝って、山下新監督に初勝利をプレゼントした。この嫌な予感を払しょくさしてくれたのが、福原の好投である。

一、二回を3者凡退に抑え、三回は、投手に二塁打を打たれ心配したが後続を絶ち、四回も二死から走者を出したが村田を三振、五、六回は、片岡のエラーによる走者を出しただけで、3者凡退に退けた。

手術前、味方のピンチに登板、１５０キロを超える速球を投げながら痛打され、顔をしかめていた福原が嘘のようだ。力味（りきみ）ない投球フォームは、１４０キロ台前半のスピードしか出ないが、よくコントロールされた球が低目をつき、キレのある球で三振を取る。六回投げて2安打無失点、星野監督が大事を踏んで降板を命じた。

解説の小山さんも「福原は変わった」という。投球フォームの事をいっているのだろうが、落ち着

いたプレートさばきに、顔まで老けてみえる。まだ20代だと思ったが、念のために選手名鑑をみたら、やはり27才だ。斉藤、槙原が引退後、若手投手陣が伸び悩んでいる巨人に位べ、阪神の将来は明るい。井川、安藤、久保田に福原が加わった。

この福原の好投に、攻撃陣がこたえた。五回、再び沖原が中前打、赤星が四球、広陵高校の先輩金本が、打ちあぐねていた吉見から左前打を打って先取点をあげた。この1打で動揺した吉見は、片岡に四球を与えて無死満塁。続くアリアスは、投手の動揺を読み、四球のあとの初球を見事レフトスタンドへグランドスラムを叩きこんだ。さらに七回、金本は、ライトスタンドへほり込んだと思った打球が、フェンスにあたって、グランドを転々とするのをみるや、スピードをあげて三塁打とした。足を痛めていても、表に出さない金本の男の美学だ。

2003年9月7日
甲子園ナイター
㉘阪神22勝6敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	0
0	0
0	0
5	0
0	0
3	0
0	0
×	3
8	3

投
〇福原
リガン
安藤
石毛

打
沖原3
桧山3
金本2
藤本2
赤星1
アリアス①
矢野1
13

伊良部五回に崩れる（122試合目）

昨夜も、沖原が初回いきなり、センター前にヒットした。続く赤星四球、高井のストレートのコントロールが悪く、古田が懸命にリードする。このチャンスに、打者に集中する高井のすきをついて、金本の2―3の時、重盗を試みたが、三振ゲッツーとなって、一挙にチャンスをつぶしてしまった。勝負事は、えてしてこういう時、ツキが相手に回るものと心配したが、アリアスを一塁において、桧山のセンターオーバーの本塁打がでて、ひと安心した。四回には、桧山四球、矢野、藤本の中前打で1点を追加、伊良部の要所を抑えるベテランの投球術からみて、優勝に一歩近付くと思った。ところが、その裏、ラミレスを2―0と追い込みながら、すっぽ抜けたフォークボールをレフトスタンドにほり込まれた。そして、五回の裏、想像できない事が起こった。二死としながら、2安打1死球で満塁とされ、岩村にレフトスタンドへ狙い打ちされた。2年前、優勝を目の前にして、苦労した経験が岩村の意地となったのだろう。

スポニチで解説している鈴木さんは、宮本に与えた死球が原因で、伊良部がセキを切ったように崩れていったのは、精神的なスタミナの不足を強調する。独断と偏見かも知れないが、伊良部の心の片

隅に、ラミレスに本塁打を打たれ、本塁打争いをしているアリアスに悪い事をしたという思いが残っていて、それが尾を引いたのではないかと思う。伊良部は、見かけによらず、優しい心の持ち主だと聞いている。

中日の山田監督が解任になった。作り笑いの中に男の無念さが惨んでいた。どうして、シーズンの終わりまで待てないのだろう。惰性で消化試合をやることは、来季の為にならないということらしいが、オーナーの権威みたいなものをしめしたいのだろう。その日、オリックス時代からの愛弟子の平井が、プロ初完投、初完封したが、「監督されている時に恩返しがしたかった」と悔しい胸の内をいっていた。

2003年9月9日
神宮ナイター
㉓ﾔｸﾙﾄ 10勝 15敗

関西テレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	2
0	0
1	1
7	0
0	0
1	0
1	0
×	0
10	3

投
●伊良部
金沢
吉野
杉山

打
桧山②
藤本2
沖原1
矢野1
6

11回、変なサヨナラ負け（123試合目）

「2点に抑えても、勝てない時は勝てないもんだなぁー」

解説の小山さんは、独り言のようにつぶやいた。井川は打たれながらも、要所を締め、岩村に打たれた2ランだけに抑えていたが、打つ方がさっぱり、初見参の館山から、桧山の二塁打とアリアスのタイムリーによる1点と、片岡の同点本塁打の2点を奪っただけだった。そして、2対2のまま迎えた最終回にゲームの様相が一変した。

九回阪神は、四球の片岡を一塁において、矢野の目のさめるような痛烈な当たりが、三塁正面を突き、併殺となってチャンスを逃した。その裏、井川は、代打の志田に初ヒットを打たれ、飯田を三振にとったあと、宮本に左中間を破られ、岩村を敬遠して満塁策をとって、ラミレスと勝負。ラミレスは3三振とレフトフライ、当たっていないとはいえ、現在の二冠王だ。絶体絶命のピンチとはこの事だろう。しかし、腹をくくった井川は、ほほ笑みさえ浮かべている。井川はチェンジアップを連投、その5球目を打ったラミレスの球は、矢野の前で弾んだ。なんとキャッチャーゴロ、矢野は、ホームを踏んで一塁へ送球して併殺。井川は、九回、12安打12三振でマウンドを降りた。十一回の裏、再び阪神に試

練が訪れた。安藤が城石、真中に連打され、飯田に送りバントを決められ、宮本を敬遠して満塁策をとった。左の岩村を迎え、安藤と交代したウイリアムスは、外角へのスライダーで岩村を三振。そして、再びラミレスを迎えることになった。投手はリガンに交代した。何故か〝そうは問屋が卸さない〟そんな言葉が浮かぶ。初球を打ったラミレスの詰まった打球は、一、二塁間に飛んだ。

秀太が好捕した。そのあと、テレビは、躊躇しながら、一塁でなくホームへ投げている秀太を写した。リガンが一塁のカバーには入っていないのに気がついたのは、相当時間が経ってからだ。

リガンがカバーに入っておれば、秀太のファインプレーだったのに残念だ。

2003年9月10日
神宮ナイター
㉖ﾔｸﾙﾄ 11勝 15敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
2	0
0	1
0	0
0	0
0	0
1×	0
3	2

投
井川
吉野
●安藤
ウイリアムス
リガン

打
沖原2　片岡②
赤星1　桧山1
ｱﾘｱｽ1　矢野1
8

延長12回ドロー（124試合目）

わずか10センチが試合を面白くした。

八回、五十嵐がアリアス、片岡に四球を与えたところで、中指の痛みを訴えて降板した。救援した佐藤も矢野に四球、無死満塁のチャンスが阪神に来た。藤本の犠飛で1点、なお一死一、二塁。そして、代打の八木が三振で倒れた時、走者の片岡と矢野がスタートした。今季盗塁ゼロの2人が、ダブルスチールを決めた。

ここ数試合、今までのうっ憤を晴らすかのような活躍ぶりの沖原に打順が回った。沖原は、外角のスライダーに泳ぎながらバットを出した。フラフラと上がった打球は右翼ライン線へ、魂の乗り移った白球は、生きもののように、白線のわずか10センチ内側で高く弾んだ。同点打だ。延長十二回にも、二死二塁で沖原に回ってきたが、右飛に終わって、両手に花ということにならなかった事も書いておこう。

初回に、片岡のエラーから1点を失い、二回にアリアスの2ランで逆転したが、先発の下柳はピリっとしない。その裏、城石に同点の本塁打を打たれ、四回、アリアス、片岡の安打で無死一、三塁、矢

野の併殺打の間に1点を取って、再びリードしたが、下柳は依然立ち直らない。五回、4連打を浴び3点を失って降板した。そして、六回にリガンが七回に石毛が、岩村、ベッツに本塁打を打たれて4対7、そんな時に沖原の一打が出て、流れを阪神に戻した。

十回、二死一、二塁のチャンスがあったが金本三振、前夜、延長戦で敗戦投手となった安藤は、その雪辱戦とばかり、三回3Kパーフェクト救援、十一回、安藤のバトンを受けたウイリアムスが十二回に、一死満塁の危機を迎えたが、渡会の二ゴロを秀太が落ち着いて、代走の三木をホームで刺し、志田を空振りの三振に切って試合が終わった。4時間48分、両軍39人の選手を投入した総力戦だった。最後に、星野監督が決めたかったという九回、アリアス、矢野を三振にとった古田の好リードも書いておこう。

2003年9月11日
神宮ナイター
㉗ﾔｸﾙﾄ 11勝15敗
1分
サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
1	2
0	0
0	1
3	0
1	1
1	0
0	3
0	0
0	0
0	0
0	0
7	7

投
下柳
藪
リガン
石毛
安藤
ウイリアムス

打
沖原3　ｱﾘｱｽ③
藤本3　桧山2
矢野2　片岡1
14

九回の反撃届かず（125試合目）

阪神ファンは、心の底から楽しんでいる。そして、楽しみは一日でも長い方が有難いと思っている。残り試合を全部負けても、優勝出来ると思うのだが、選手達は、マジックと戦っているようだ。

九回表の二死満塁、一打同点のチャンスに、三塁のファールフライに終わった金本が、バットを叩きつけて悔しがっているという。テレビ放送が終わって、ラジオを聞いていたので、その度合が分からない。翌日のスポーツ紙を見て驚いた。ベンチの前で、バットを思い切り振り上げ、帰り仕度をしている選手達が手を止めて呆然と見ている。左足を痛め、ここ数試合ブレーキになっていたが、昨夜は、ヒットも打ち盗塁もした。しかし、逆転出来なかった最後の打席が、余程悔しかったのだろう、自分を責め立てる怒りは、生半可なものではない。

「あいつは、休めといっても、松葉杖をついて、レフトを守りよるで」

星野監督のセリフもうなずける。この金本選手のプロ根性が、今迄、人気に溺れていた選手達の意識を変えて、見事闘う集団となった。いくら書いても、書き足りない。この金本選手をとる事に、一番執着されたのが、野崎球団社長だと聞いている。その炯眼は、たいしたものだ。外柔内剛、上を向いて仕事する人が多い中で、社長は現場中心に仕事されるお方だとお見掛けするが如何。

五回に、久保田が右ヒジの違和感を訴えて降板、急きょリリーフした石毛が、森野のタイムリーで失った1点と、吉野が福留に打たれた1点を、中日の強力リリーフ陣が守った。負けたとはいえ、阪神は九回に、大塚を攻め、見せ場を作った。代打の野口が二塁打、矢野が粘って、10球目をセンター前へ、執念のヒットで1点を返し、藤本の犠打で二塁へ、広沢のセンター前ヒットで一、三塁、沖原の代打片岡が良く粘ったが三振、赤星が四球でつないだが、金本の無念の一打で試合は終わった。

新幹線が開通した頃の話である。管理職になった私を、当時の上司がいきつけの居酒屋に招待してくれた。上司は、女将から三本の割り箸を貰い「これが新幹線、その次が〝つばめ〟一番下が鈍行」とカウンターに箸を横に並べた。そして、「我々はこの〝つばめ〟のクラスや」といって真中の箸を下に向けた。そして、「鈍行に7，新幹線に3の気配りをする。そんな生き方が、料理でいう、いい塩梅というものだろうなあ」。今になって、含蓄のある言葉と思うようになった。野崎社長を拝見するたびに、その上司を思い出す。お顔がよく似ているのである。

2003年9月12日
ナゴヤナイター
㉖中日 12勝 13敗

サンテレビ

中日	阪神
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
1	0
×	1
2	1

投
久保田
●石毛
吉野
藪
ウイリアムス
金沢

打
藤本 2
金本 1
野口 1
矢野 1
広沢 1
6

アリアス、桧山大暴れするも（126試合目）

大阪人気質を説明するために、タイガースファンの心理を例にした〈大阪学〉が、タイガース人気にあやかって再版されている。日本中、町は沢山あるが、町の名を冠した学問は珍しいと思っていたが、大宅荘一の「日本の人物鉱脈」によれば、水戸学が最初で、幕末の志士達が学び、明治維新の原動力となったといい、水戸は戦後も、藤田東湖百年余など催され、戦災にあった常磐神社の復旧をはじめ、義烈館、回天館などが完成した。町には、東武館などという剣道場が大繁昌し、青少年男女が竹刀をかつぎ、意気揚々として闊歩（かっぽ）している。その点で、この〝水戸火山〟は、三原山などと同じように、愛国心が生きている町であると大宅荘一はいう。

いいたいのは、久保田投手のことである。相当重傷らしく、登板の機会もないと思うので、この際、書いておきたい。久保田投手は、富山県出身で、滑川高校で甲子園を経験している。卒業後は、何故か野球では無名に近い、水戸の常盤大学に入学している。久保田投手の物怖じしないプレート度胸は、常盤大学で学んだ水戸精神によるものと思う。将来の投手は、井川、久保田そして兄弟のように似ている安藤が中心になるに違いない。新人賞がとれなくて残念だろうが、１５０キロ台のスピードボー

ルの魅力をファンは忘れないだろう。焦らずに、一日も早くファンに元気な姿を見せてほしい。試合は、アリアスと桧山が大暴れ、アベックホームランもあり、五回までに、二人で6打点と活躍したが、8月1日以来の登板となった先発ムーアが、5安打3失点で、一回も持たずに降板、以後の中継ぎ陣が12四球を連発し崩れてしまった。そして、1点リードして迎えた五回、藪が3四球を連発、珍しく星野監督がマウンドへ駆け寄って気合いを入れたが、代打の井上に走者一掃の二塁打を打たれ、続く吉野、石毛も四球を連発して試合をつぶしてしまった。

2003年9月13日
ナゴヤナイター
㉖阪神 13勝 13敗

サンテレビ

中日	阪神
3	2
0	0
1	2
0	1
5	0
0	2
0	0
0	0
×	0
9	7

投
ムーア
谷中
●藪
吉野
石毛
金沢

打
桧山③　ｱﾘｱｽ③
藤本1　赤星1
金本1　矢野1
沖原1

11

4 安打シャットアウト負け（127試合目）

初回、無死一、三塁のピンチ、福原が福留に投じた3球目を、矢野がパスボール、三塁走者の森野が生還。アレックスの右前打で、もう一人が帰って2点を失い、福原の12イニング連続無失点記録が消え、五回3失点で降板した。パスボールしたあとの矢野をみて、心身ともに疲れている。翌日のスポニチで〝丸〟のコマーシャルで有名な俳優の矢崎さんが、野口の起用を書いておられたが、優勝がきまるといった試合は、やはり矢野だろう。矢野だけでなく、選手達は疲れているのだろう、ミスの多い試合だった。百戦錬磨の金本までが四回、関川のライナーを前で取ろうとしたが、わずかに届かず、おまけに蹴飛ばした打球がファールゾーンに転々とし、一塁走者の森野にホームインを許した。そして、六回にも、筒井のレフト前の球をお手玉して、二塁打とし失点につながった。八回は、あたっている沖原が四球で出塁、赤星が左飛を放つと、沖原が三塁附近を歩いている。球は一塁へ送球され併殺となった。カウントを間違えたのだろう。そんな精彩のない試合の中で、六回のチャンスを逃したのが惜しかった。六回まで、平松の軟投に無安打で抑えられていたが、藤本がセンター前に初ヒット、代打の八木が三ゴロに倒れたあと、沖原がライト右へ、藤本が一塁から長駆ホームをついたが、福留

の強肩に本塁寸前アウトになって、チャンスをついえたと思ったが、赤星の内野安打、金本四球で二死満塁のチャンスを迎えた。続く桧山の打球は、センターの頭上を越えて行く、はいれば逆転、抜けても同点、しかし、その喜びは束の間だった。アレックスが好捕した。胴上げを阻止しようとする中日の選手達の勢いに負けて6連敗、完全優勝の夢は消えた。最後にスポニチにのった世界チャンピオン徳山選手の言葉で締めくくろう。

「終盤戦の優勝争いはボクシングに似ている。一戦一戦が勝負です。そして、今こそ開幕の頃を思い出したい。守るものは何もなかったじゃないですか」

2003年9月14日
ナゴヤナイター
㉗中日 14勝 13敗

サンテレビ

中日	阪神
2	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
5	0

投
●福原
谷中
吉野
藤川

打
沖原 1
赤星 1
アリアス 1
藤本 1
4

夢に日付をいれた日（128試合目）

〝夢に日付けをいれることが出来ました〟

星野監督は、あいさつがうまい。ますますファンが増えることだろう。優勝できたのは、監督の愛と鞭（むち）で選手の競争心を引き出す操縦法と、強いリーダーシップが、フロントを始め、コーチ、選手達の間に強い信頼の絆が生まれたことだ。解説の西本さんは、すべての選手が殊勲選手だという。私は、星野監督の選手達への愛情が、かつての西本さんのように本物だったということだろう。

一、二回と、藤本とアリアスの好守備が、不安な伊良部の立ち上がりを助けた。しかし、三回二死から、淺井に内野安打、盗塁され、伊良部のフォークの制球が甘くなって、シーツに本塁打を打たれて、2点先行された。阪神は、適当に荒れる河内を打てない。五回、矢野の初安打と沖原のタイムリーで1点を返した。伊良部は三回以降、円熟した投球技術で、広島打線を抑え、六回で降板した。八回、途中出場の片岡の研ぎすまされた一振りの打球は、ファンの大声援の中、白い弧を描き右中間スタンドに突き刺さった。解説の田尾さんは、シーズンの始まる前、人伝てに、星野監督が一番期待しているのは、片岡だと聞いて涙を流したという秘話を披露した。この片岡の一打が九回のサヨナラに結びついた。九回、一死から、藤本中前安打、片岡が右前打でつなぐと広島は満塁策をとった。

「僕の読唇術によれば、前進守備を敷いているから、思い切り引っ張れといっているのでしょう」

解説の田尾さんがいい終わらない内に、赤星は鶴田の初球をフルスイングで叩いた。打球は右翼手朝山の頭上を超えた。シーズン当初は非力な打力から、代走守備用員だと思われていた赤星を、監督はこの日まで一試合もはずさなかった。その赤星が優勝を決めるだろう一打を放った。少年時代、星野中日ファンだったという赤星が、監督の熱い胸に抱かれている。このあとの2時間後、午後7時33分、横浜が勝って阪神の優勝が決まった。

本ならば愛読者だが、テレビはどういったらいいのだろう。〝愛テレ〟とでも、いったおこうか。そんな番組に〝ちちんぷいぷい〟がある。なんとふざけた名前だと思っていたが、角さんを始め、飾らない人柄の人達のトークが魅力となって、今や、晝の人気番組となっている。マジックが減る度にクス玉を割ってきたが、阪神優勝。今日は一番大きなクス玉を割る日で、角さんのコメントが今から楽しみだ。

2003年9月15日
甲子園ナイター
㉓阪神15勝8敗

関西テレビ

阪神	広島
0	0
0	0
0	2
0	0
1	0
0	0
0	0
1	0
1	0
3	2

投
伊良部
リガン
〇安藤

打
赤星2
片岡②
沖原1
八木1
矢野1
藤本1
8

井川には次がある（129試合目）

優勝が決まった15日から16日の朝まで、テレビは阪神タイガースの特番をしていた。めまぐるしくチャンネルをかえながら楽しんだ。〝熊さん〟との愛称があった後藤さん、80才になっておられるそうだが、とても元気だった。後藤さんは15代（１９６９年）監督で、２位の成績を残しておられる。当時１位で入団した現在の田渕コーチを、辻捕手という２人のベテラン捕手がいながら、貧打線克服のため抜擢し新人王を獲得させた。２位の成績を残しながら、１年で村山実に交代したことと、その人柄から〝仏の熊さん〟といわれた。１９７８年に２度目の監督となったが、球団初の最下位に沈み１年で退団した。その後、サンテレビで長い間解説された。もう一人、１９８５年、中西清起とＷストッパーを組み、強力打線を支えたが、８月にアキレス腱を断裂し、優勝の一瞬だけベンチ入りし、ナインに胴上げされて、涙を流していた山本さんのお顔も拝見できた。現役選手は、グループを組んで各局を廻っていたが、広沢、下柳さん以外は、どの選手も緊張していた。井川選手だけが、明日の登板を控え、ナインがビールかけで盛り上がっている最中に、１人祝勝会を後にした。

「ビールかけ？残念ではないですよ。だってぼくには次があります」

この次はどの次だろう。投手の三冠王を狙う明日のことだろうか。それとも日本シリーズ、いや、今シーズンだけでない、若者には未来があるということだろうか。

防御率トップ、完投数8でトップに並んだエースに消化試合など存在しない。

井川は、朝山の本塁打で1点を与えたが、無四球、3安打、完投勝利だった。打たして取るピッチングは見事だった。打つ方では、アリアスの100打点目の35号ソロ、優勝の日に生まれた男の子と会うため、24日に一時帰国するらしいが、後11試合には本塁打を狙ってほしい。六、七回には、昇格したばかりの関本、早川がダメ押しの1点を取って完勝だった。

2003年9月16日
甲子園ナイター
㉔阪神16勝8敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
0	1
1	0
0	0
2	0
1	0
0	0
×	0
4	1

投
〇井川

打
金本2
藤本2
関本②
アリアス①
早川①
8

ムーア復調？（130試合目）

毎年11月の中頃から12月になると、落葉かきが、私の日課となるが、9月になると、毎年週に一度、桜の落葉を掃く。桜の花は散るのが早く、人は称賛するが、葉っぱも他の樹に先駆けて散る。落葉色の中に緑の残った枯葉は痛ましい。その頃になると、去年は4位争い、ここ数年は最下位争いだった。桜の満開の頃は、よくてAクラス争いと思っていたのだが、なんと今年は優勝してしまった。こんな嬉しいことはない。

これからは、日本シリーズを見越しての選手起用と、記録に挑戦している選手達の起用、そして、若手選手の発掘ということだろう。

昨夜は、ムーアが日本シリーズで起用できるかどうか、首脳陣は見極めたかったのだろう。そのムーアは、初回、朝山に三塁打を打たれ。木村（拓）の二塁打、犠打で2点先取された。その裏、ホームラン争いの渦中にあるアリアスのために、チャンスを1打席でも多く与えようと、ベンチは一番に起用した。アリアスは、優勝の日に誕生した第3子ニコラス君と面会するため、24日に一時帰国する。この粋な計らいに、アリアスは初回いきなり本塁打を打ってベンチの期待に答えた。これでウッズと

並んだ。

ムーアは、そのあと五回に、投手というより打者で競っているブロックに本塁打を打たれ、3失点で七回に降板した。ムーアの調子は一時にくらべて良くなっていると思ったが、スポニチの仰木さんは、下半身で投げていないため、伸びのある球が来ていないと手厳しい。ムーアの後をつないだ金沢、吉野は好投した。今シーズン始めてスタメンでマスクを被った淺井が、藤本の右中間二塁打のあと三遊間を破るタイムリーを打った。その感想を聞くアナウンサーに「リードに集中したいのでノーコメントにしてほしい」と答えたとのこと。いつもベンチで監督の聞き役に廻っている淺井に、星野イズムが浸透してきたのだろう。関本、早川の昇格組から快音は聞けなかった。

2003年9月17日
甲子園ナイター
㉓広島9勝16敗

サンテレビ

阪神	広島
1	2
0	0
0	0
0	0
1	1
0	0
0	0
0	0
0	0
2	3

投
●ムーア
金沢
吉野

打
藤本2
アリアス①
淺井1
4

どうした巨人軍（1）（131試合目）

渡辺オーナーは〝君子豹変す〟をモットーにされておられる方だから「阪神に3連敗したら、来季、原監督の続投は分からない」といわれたといって、本気にする必要はあるまい。ところが、このオーナーの一言で、読売本社は右往左往、試合開始の直前に報道陣が、東京大学前の本社に集結したというのだから、たいしたものだ。フロントの人達も、本社7階の社長室を頻発に出入りしたらしい。消化試合にならないようオーナーの叱咤激励と分かっていても、ご機嫌伺いにいかねばならないのが、サラリーマンの悲しい性だろうか。騒ぎをみながら、オーナーは悦に入っていることだろう。権力を持った者は、えてして、人事をもて遊ぶ。オーナーの言葉は、激励というより恫喝に近い。

松井は大リーガーに移籍し、代わりにとったペタジーニは、シーズン半ばに故障してアメリカへ帰国、シーズン当初には、元木と仁志の衝突事故、工藤の指の骨折、後半は、高橋（尚）、高橋（由）、阿部、村田の故障等、怪我人の多かったことを考えると「お前の来シーズンはないぞ」と脅かすより、もっといいようがありそうなものだ。最近の原監督の憔悴した顔はみておれない。〝君子は九度思いて一度言う〟ということわざもある。九度思うことで考えたのが、〝蚊取線香〟では洒落にはならない。選

手を怒ることはいいとしても、侮辱する言葉を、選手に投げつけるのはいかがなものだろう。鹿取コーチも巨人を去るだろう。

日本シリーズのベンチ入りを競争するすべての選手達が活躍した。4月11日の6点をリードした巨人戦の九回戦、後藤に同点スリーランを打たれて以来登板のなかった藤川が、五回まで完封した。六回以降は、吉野、リガン、ウイリアムスのリレーで完封。打では、関本の本塁打を含む猛打賞、九回その関本を一塁において、2ランを放った平下等、最近ベンチ入りした選手達が活躍した。昨年、好投した藤川を小山さんが、コントロールの良い投手になるといっていた事も書いておこう。

2003年9月19日
東京ナイター
㉔阪神17勝6敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
0	0
0	2
0	1
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
0	2
0	6

投
〇藤川
吉野
リガン
ウイリアムス

打
関本③
赤星2
桧山1
平下①
藤本1
藤川1
アリアス1
10

阪神に消化試合はなし（132試合目）

日本シリーズへの参戦権をかけて、阪神には消化試合はない。競争意識を植えつけられた選手達が、必死になってグランドで火花を散らす。投手では、右の中継ぎ投手陣の明暗がはっきりとした。先発の谷中は、初回3安打を打たれたが、金本の本塁への好送球もあって、無失点に抑えたが、三回、斉藤にタイムリー二塁打を打たれて2点を失った。四回には、一死から4連続安打を浴びてKO。結果を残すことができなかった。気落ちした谷中の顔がテレビに写る。2番手の金沢は、四回の一死満塁から登板、清原を速球で見逃しの三振に仕とめ、二回2/3で許した安打は1、谷中と明暗をわけた。3番手の石毛は、いきなり清原に本塁打を打たれた。片岡の2ランで、1点差にせまり、好投している上原に疲れがみえていた時だけに、監督がベンチで吠えていた。古巣を見返すことのできない石毛に怒っているのかも知れない。八回は、安藤が3人と格の違いをみせつけた。

前夜は、4号ソロを含む3安打、2打点の活躍をみせた関本が、五回二死から、パーフェクトピッチングだった上原の内角速球を左翼線二塁打で気炎を上げた。関本の長打力は定評があったが、遊撃の定位置争いに遅れをとったのは、守備力だった。そんな関本が、昨夜は守備で魅了した。

四回、３点目を奪われ、なお二死満塁のピンチに、斉藤の放った打球は、鋭い二遊間のゴロ、誰もが失点を覚悟したが、関本はダイビングキャッチ、素早く起き上がって二塁へ送球、追加点を防いだ。まだ試合は残っているが、今のところ、金沢、関本は、日本シリーズへのベンチ入りは間違いなさそうだ。

巨人のことだが、サンスポによれば、原監督の「辞任しない」の一言で、後任監督までうわさされた茶番劇は終わったそうだ。

オーナーは、東大時代から、政治運動の荒波をくぐってこられ、権謀術数は人後に落ちない人だろうが、スポーツはフェアープレーでいきたいものだ。

2003年9月20日
東京ナイター
㉕巨人7勝17敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
0	0
0	0
2	0
1	0
0	0
0	0
1	2
0	0
×	0
4	2

投
●谷中
金沢
石毛
安藤

打
アリアス1
金本1
桧山1
片岡①
関本1
5

どうした巨人軍（2）（133試合目）

先発の福原は、初回、四球から1点を失ったが、二回、3連打と福原の意表をつくスクイズで、3点をとったが、三回、高橋（由）、斉藤に2ランを浴びKOされた。復帰一、二戦の低目にコントロールされた球が高目に浮いていた。続く新人の江草は、清原を三振に打ちとり嬉々としていたが、五回、元木にタイムリー二塁打を打たれ、六回には、清原にアウトコース低目のボールになるような球を本塁打され、プロの厳しさを味わった。七回には金沢が2三振と好投、八回は、吉野が乱れて3点を失った。攻撃では、七回、二塁打の藤本をおいて打ったアリアスの37号本塁打で、工藤が動揺し、四球と内野安打で二死満塁のチャンスを迎えたが、片岡は一ゴロに終わった。

ここ二、三日、スポーツ紙をにぎわしている原監督の去就問題を、魚住昭著の〝渡辺恒雄メディアと権力〟を引用しながら、考えてみよう。

「渡辺と氏家は読売入社以来、ともに手を携えながら出世階段を駈けのぼってきた。一方で二人は最大のライバル同士であったから、社内での地位が上がるにつれ、二人の仲に亀裂が生じることもあった。とくに氏家が日テレ副社長に転出した直後、その亀裂は傍目にもはっきりわかるほど広がった。

二人の友人で中曽根の秘書だった小林克己が語る。あの二人はどこまで仲が良くて、どこまで反目しているのかわからないところがあると。氏家さんは広告局長になった後、渡辺さんに頭が上がらない様子だったけど、日テレの副社長に転出を命じられたときは渡辺さんの画策で出されたと思ったらしい」

今回の件も、球団の顧問にすぎない日テレ会長の氏家さんが、読売の社長でありオーナーである俺をさしおいて人事に口ばしをいれるのだということで〝留任〟と思っていながら〝3連敗〟の発言になったのだろう。お二人とも、トップの老害に苦労されたはずだ。「オレたちの仕事を軽く見られている気がする」という星野監督の発言も、もっともだ。

2003年9月21日
東京ナイター
㉖巨人8勝17敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
1	0
0	3
4	0
0	0
1	0
1	0
0	2
3	0
×	0
10	5

投
●福原
江草
金沢
吉野
石毛

打
片岡2
藤本2
赤星2
アリアス①
桧山1
関本1
矢野1
10

ムーア好投（134試合目）

ごま粒のような種から芽を吹いた、かぼそい苗をみて、はたして育つのかと心配していた鶏頭の花が、今や秋空と対峙（たいじ）している。梅雨の頃、この鶏頭をみて、俳句の門外漢が一句作ったことがある。

鶏頭の赤一寸の色気かな

俳句に熟達している友にみせると、鶏頭は秋の季語、秋の鶏頭が蕾であるのは、おかしいと鎧袖一触（がいしゅういっしょく）、そんなことを思い出しながら、一句作ってみた。

鶏頭の燃ゆる夜道の夫婦かな

阪神の優勝祝いに一献を傾けながら、友にみせるのを楽しみにしている。

対戦相手のダイエーの強力打線に左打者が多い。六回から伊良部を継いだムーアが、日本シリーズ先発入りを強力にアピールした。

六回、３人を４球で処理する等、四回を１安打３奪三振、無失点で抑えた。テレビにはムーアの真剣な眼差しと、ベンチで腕をあげながらムーアを指導している監督が写った。

先発した伊良部は、関本のエラーに近いペタジーニの安打で２点を失った不運もあったが、ストレートが高目に浮いて、五回を８安打４失点ＫＯされた。仰木さんはスポニチで、これから秋にかけ、甲

子園の浜風は、左翼から右翼へ強い風が吹くことを考え、左に強打者の多いダイエーの投手陣には、伊良部の内角を攻める球と技術が必要であろうという。

打線は、木佐貫に4安打に抑えられ、10勝を献上してしまった。九回に、金本、平下の本塁打で完封をまぬがれた。16日1軍に昇格したばかりの平下の本塁打は、今季3本目で日本シリーズのベンチ入りも間違いなさそうだ。

巨人騒動のことだが、スポニチによれば、渡辺社長の子飼いの政治記者出身、三上球団代表と原監督との対立は相当ひどいらしい。長嶋茂雄終身名誉監督が、事態の早期収拾に向けて、原監督と直接会談を持つ意向を明らかにしたとのこと。阪神ファンだけでない、巨人ファンも、とんだ茶番劇と思っていることだろう。

いくら敏腕記者とはいえ、職場が変われば、しばらくは様子をみるものだ。〝慌てれば事を仕損じる〟〝能ある鷹は爪を隠す〟ということわざもある。

2003年9月23日
甲子園ナイター
㉗巨人9勝17敗
1分
サンテレビ

阪神	巨人
0	0
0	1
0	2
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
2	0
2	4

投
●伊良部
ムーア

打
金本②
桧山1
平下①
4

どうした巨人軍（3）（135試合目）

福留の本塁打による1点に抑えて好投していた下柳が、七回、藤本のエラーから乱れ、柳沢に右前打を打たれた。幸い一塁走者の走者の判断ミスでめずらしいライトゴロとなって二死。ほっとしたところを筒井の右前打で一、二塁となりリガンに交代した。リガンは、関川にしぶとくタイムリーを打たれて1点を失った。八回は、ウイリアムスが2三振で3人を抑え、九回、安藤が登板した。

沖原の2安打3打点と、片岡のタイムリーで、4対2のリード、誰もが楽勝と思った。ところが、アレックス、大西に連打され、犠打をはさんで、代打谷繁に二塁打を打たれ、同点とされ、下柳の9年ぶりの10勝が消えた。十回は、いつもの安藤に戻っていた。打撃陣は、九、十回と天敵岩瀬に手も足も出なかった。十一回、金沢が七回矢野のけん制球に刺されチャンスをつぶした筒井に名誉挽回（ばんかい）の3ランを打たれた。十一回、野口の左前打のあと、初ベンチ入りの喜田が初安打を打って1点を挽回する役割を果した。

18日の〝3連敗したら――〟というオーナーの発言に端を発した巨人の騒動は私の予想に反し茶番劇でなかった。今も新聞記者の良心と良識で活躍されている元大阪読売の記者大谷さんの〝日刊スポー

ツ〟でのコメントが一番当を得ている。

「巨人の長い歴史の中でも、最悪の監督交代劇だ。来季のコーチングスタッフなどを巡って新しい球団代表と原監督は意見が合わなかったようだが、渡辺オーナーの虎の威をかって現場の意向を無視した三山球団代表に原監督は怒りを心頭に発し、たまりかねて辞表を叩きつけたとしか思えない。その意味で、現場を知らない者に振り回された原監督は男の意地を通したし、ファンも彼を責めるころはしないだろう。今季はトラに敗れ、さらに虎の威をかりるキツネにもやられたダブルショックしか残らない」大谷さんは、左傾化しているとの理由で、読売を追われた故黒田社会部長と行動を共にされた人である。

2003年9月27日
甲子園ナイター
㉘中日 15勝 13敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
2	0
1	0
1	1
0	0
0	0
0	1
0	0
0	2
0	0
1	3
5	7

投
下柳
リガン
ウイリアムス
安藤
●金沢

打
沖原2　金本2
関本2　喜田1
赤星1　片岡1
藤本1　野口1
11

今岡選手について（136試合目）

昨夜は、テレビもラジオも放送がなかったので、いいたいことを書かせていただこう。

今岡選手ほど、前野村監督のダシになった選手はいまい。昨年は裏切り者呼ばわりされたが、今岡選手は「優勝するんで、見といて下さい」と大人の対応をしていた。そして、優勝した今年は〝文春10月号〟で、今岡誠は、ある意味で、僕が育てたようなものです。彼が頑張っているのは、僕への反骨ですと。ものはいいようとは、このことだろう。今岡選手もたまったものでない。〝文春〟で、今岡はプロの自覚がないから二軍に落としたと、まるで言い訳するかのように書いているが、すべて正論である。ただ、スポーツ記者に「あいつは、いつも、口をポカンとあけて何を考えているのかわからん」といわれたことはいただけない。叱るというより、侮辱していることになる。野村監督が退陣してからも、今岡は一言も反論しなかった。ただ、優勝したあとテレビでいったセリフに、今岡の思いがこもっている気がした。星野監督が、就任あいさつで、5年連続最下位のチームの選手に、みんなで優勝しようといった監督に驚くとともに、同時に感激したといい、最下位を低迷しているチームに、チームプレーをいっても仕方ないでしょうといって言葉を濁した。今岡選手は、人気に甘えてい

る球団の姿勢や選手達に、うんざりしていたのを、野村前監督は見抜けなかったのだろう。そして、藤田元監督に叱られて、野球を止めるといった新庄選手を、素質があると、投手までやらせ、おだてたのだから、やる気のある選手達がそっぽを向いてしまい、三年間、低迷を続けたということが考えられないだろうか。昨夜のヤクルト戦は、〝ズポニチ〟から引用させていただく。

阪神は2点を追う七回に二死から一、二塁の好機を広沢の左中間二塁打で同点。さらに赤星が右翼線二塁打で逆転した。先発の井川は18勝目。チームの連敗は4でストップ。ヤクルトは先発の高井が六回1失点と粘ったが中継ぎ陣が乱調で3位転落。

2003年9月30日
神宮ナイター
㉘阪神16勝11敗
1分

ヤクルト	阪神
2	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	1
0	3
0	0
0	0
3	4

投
〇井川
リガン
Sウイリアムス

打
広沢3
赤星2
藤本2
金本1
桧山1
関本1
10

桧山の16号満塁本塁打（137試合目）

参観日とは、うまくいったものだ。ダイエーの選手が47人も乗りこんでいるらしい。

伊良部投手は、五回まで投げて、被安打8、4失点。スポニチで解説の三村さんは、シーツに三盗を許す等、走者を出すとタイミングが崩れて投球が甘くなり、痛打されているのが心配だというが、新井に打たれた2本の本塁打は、高目のストレートで、追い込んでから投げていた。フォークボールは一球もなかった。テレビで解説している川藤さんは、参観日にお土産の渡し方もあるという。伊良部は、五回、5対4、1点リードで降板した。後続の下柳は六回、味方の失策も絡み、2点を失ったが、八回に桧山の満塁弾がでて逆転、2イニング投げた下柳に、10勝目になる白星がころがりこんだ。これで、井川、伊良部、ムーアと、21年ぶりの10勝カルテットが完成した。伊良部は、日本シリーズで見事変身して、ダイエーの強力打線を完封、下柳は古巣へ恩返しといきたいものだ。大舞台には、この二人のベテランがいることは心強い。

川藤さんのいうもう一つのお土産は、新井の2ランでリードされた三回だ。先頭、赤星が左前打、前田がもたつく間に二塁へ、金本の2球目に、完ぺきのスタートと、バットを止める金本の援護で三

盗に成功、その金本が四球で出塁、続く桧山が左前タイムリー。関本、片岡が倒れたが、矢野が左中間へ2点二塁打で逆転、そして藤本が中前打で続き、4点目をゲット、恐怖の下位打線をみせつけた。

初回、右前打を好走塁で二塁打とする足をみせたアリアスが、四回に本塁打を、八回には、桧山が2線級投手からだが、満塁本塁打を披露した。

この日、2軍戦のプレーオフで、後期優勝の阪神が、前期優勝の広島を5対3で下し、3連覇を果した。4月11日の巨人軍との初戦、九回、後藤に同点本塁打を打たれ、星野監督に激励され、十一回まで歯を喰いしばって、投げぬいた藤川が勝利投手になった。

2003年10月4日
広島球場
㉖阪神17勝9敗

読売テレビ

広島	阪神
0	0
2	0
0	4
1	1
1	0
2	0
0	1
1	4
0	0
7	10

投
伊良部
〇下柳
福原

打
矢野3
アリアス②
桧山②
藤本2
赤星1
片岡1
秀太1
平下1
13

井川20勝へ王手（138試合目）

昨夜の広島27回戦は、放送がなかったので、試合の記録は、阪神が5対1で広島を下し、今季初の中4日で登板した井川が19勝目をあげ、最終戦で20勝に挑戦することになったことだけとし、二人の監督について、思いついたことを書かしていただこう。

麻雀に、〝大三元〟という最高の役がある。〝白（はく）〟〝発（はつ）〟〝中（ちゅん）〟のパイをそれぞれ3枚を揃えることで、最高の人間は〝智〟〝情〟〝意〟の3拍子が揃っているということらしい。そこで、どのパイが智情意にあたるのか、勝手に考えてみた。智は人前にさらし過ぎると、座が白けることから〝白（はく）〟とし、情は、からむと何かと複雑になることから、こみいった字の〝発（はつ）〟とし、緑色が情を表しているような気もする。意は、赤色で、物をつらぬいている字の格好からして〝中（ちゅん）〟とした。

このことから、野村、星野監督のことを考えてみた。意は、両者とも強いリーダーシップを持っておられるので同格とした。とすれば、誰もが、智（白）は野村監督、情（発）は星野監督と考えるだろう。いいたいのは、星野監督は、三拍子を揃えることは至難の業と考え、コーチ陣をうまく使った。それに反し、頭のいい野村監督は、コーチ陣を自分の意のままにしようとし、情を補佐するコーチが

いなかったことだろう。三顧の礼で招いたであろう井原コーチは「任せたといっておきながら、あれだけぼやかれたら堪らない」といって一年で辞めていった。

文春10月号の〝わしが育てて星野が勝たせた〟を読まれたのであろう、久万オーナーが珍しくスポニチのインタビューに応じておられる。「今岡の使い方でね。私がもっとおだてるやり方を考えてはどうか？というと、できませんと受け入れなかった。人間は機械じゃない。感情があります……組織の上に立つには情に厚い人間でないといけません。組織のため、部下のため、死ぬ気でやれる人間でないといかん」と。

2003年10月5日
広島球場
㉗阪神18勝9敗

広島	阪神
0	1
0	1
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
0	3
0	0
1	5

投
〇井川
リガン

打
片岡2
藤本2
赤星1
金本1
平下1
矢野1
井川1
9

原監督、甲子園で引退のあいさつ（139試合目）

夢に日付をいれた人から、夢の続きを温める人への花束贈呈。引退会見にも涙を見せなかった原監督が、星野監督の胸で泣いている。試合より、終了後のセレモニーと原監督のあいさつが、ファンの感動を呼んだ。

「思い起こせば、昨年のこの時期、甲子園球場におきまして、宙を舞うことができました。その時のジャイアンツファンの歓声、最後まで見守ってくれて祝福してくださったタイガースファンの姿を忘れることができません。そして本日、私ごときのために、阪神球団のご厚意で、このような時間を作ってくださって大変感謝申し上げます。何より、尊敬する星野監督から、最後はねぎらいの言葉までいただきまして、どう自分の気持ちを説明していいかわからないぐらい感動しています。タイガースはこれから日本シリーズという大きな舞台が待っています。必ず日本一になって下さい。プロ野球はファンの皆様のおかげであります。プロ野球、タイガース、そしてジャイアンツ、これからも温かいご声援をよろしくお願いします。私は夢の続きをしっかりと胸の奥にしまいこんで、大切に温めて、宝物にして、あすからしっかり生きてまいります」

試合のこと。ムーアは、五回二死から4連打されたのは、いただけないが、球のキレからして、春先きの調子を取り戻しつつある。だからといって、日本シリーズに通用するかどうか、ファンの心配はつきない。阪神はリリーフ陣がしっかりしている。彼らをいい状態で使うには、イニングが短かくしなければならないが、そのためには、ムーアを始め、先発陣の活躍にかかっている。打撃の方は今岡が心配だが、もしもの場合は、あたっている沖原がその役をこなしてくれるだろう。赤星、矢野が元気なのも心強い。心配なのは守備。昨夜も四回藤本の悪送球で走者を生かし、清原の本塁打で2点を与えた。タマギワに強いが送球に難のある藤本が心配だ。久慈の起用もあるのでは。

2003年10月7日
甲子園ナイター
㉙巨人10勝17敗
1分

阪神	巨人
1	0
1	0
0	0
0	2
0	4
0	0
0	0
0	0
0	0
2	6

投
●ムーア
石毛
吉野
安藤

打
赤星2
桧山2
矢野①
沖原1
金本1
広沢1
野口1
9

井川20勝、藤本3割（140試合目）

最後の最後で、阪神タイガースの選手達は、お家芸のつなぎの野球を披露、有終の美を飾った。53，000人の大観衆は「2003年の優勝は、みなさんとともに勝ち取った優勝です……日本シリーズはみなさんとともに日本一の美酒を味わいたいと思います」桧山選手会長のあいさつと、選手達のサインボールの投げ入れが終わっても、帰る人はいなかった。いつまでも〝六甲おろし〟の大合唱が、スタンドに、こだましていた。

有終の美を飾った八回の攻撃は、テレビ一杯に満月が写ったあとに始まった。一死のあと、金本が猛打賞となる右前打で出塁、代打平下が中前打、本塁打を狙いすぎて、凡打を続けるアリアスが、左中間に二塁打を放って金本、平下が生還した。桧山の四球で、なお一死一、二塁、矢野と交代して初打席の野口が右中間二塁打を打って、アリアスが生還。続く久慈の犠打で桧山が帰り、さらに、沖原の右前打で野口が生還。5連続得点をあげた。

井川が立ち上がり1点を失ったあと、死球の赤星と右前打の金本を一、二塁においた、広沢のタイムリー二塁打と、矢野の3点タイムリー二塁打で、20勝をかけている井川を援護した。赤星の死球は、

ヘルメットをかすったもので、危険球と判定され、いきなり先発の河内は降板した。赤星は二回、三塁走者となった時、広沢の強いファールボールが足にあたり、大事をとって退場するという赤星の厄日だった。

大量点に守られた井川は、３点を与えて六回で降板、あとリガン、ウイリアムスが好投し、井川の20勝に協力した。３割を狙っていた藤本は初回を三振、大丈夫かと心配したが、三回と五回にヒット、見事念願の３割を達成した。残念だったのは、９月２日以来、37試合ぶりの今岡にヒットが出なかったことがとても残念だった。

有終の美を飾った最終戦は、同時に日本シリーズへ向けての最高の壮行試合となった。

2003年10月10日
甲子園ナイター
㉘阪神19勝９敗

サンテレビ

阪神	広島
4	1
0	0
1	0
1	0
0	2
0	0
0	0
5	0
×	0
11	3

投
〇井川
リガン
ウイリアムス

打
金本３　藤本２
沖原２　広沢１
平下１　ｱﾘｱｽ１
桧山１　矢野１
野口１
中村（豊）１
14

あとがき

有難いことに、阪神タイガースの試合で放送のなかったのは、優勝の決まったあとの2試合だけだった。今年は阪神の選手達から沢山の感動を貰った。そして、残り少なくなった日々を充実して過ごすことが出来た。

このことは、監督、コーチ、選手を始め、球団職員の皆さん、サンテレビ、スポーツニッポンを始めとするメディアの関係者に、お礼を申し上げねばなるまい。

なんといっても、18年ぶりに優勝を決めた日は感動した。平成15年9月15日、神宮球場でヤクルトが横浜に負けて、阪神タイガースの優勝が決まった。午後7時33分、53，000人のどよめきの中を、選手達がはじけるように飛び出した。一番乗りは背番号39、二番手は背番号24。あとは、叩く、跳ねる、抱き合う、狂喜乱舞とは、このことだろう。選手達は、この一瞬のために128試合を闘ってきたのだ。

ベンチを出た星野監督は、扶沙子夫人の遺影を抱いた島野コーチを振り返った。二人の目頭が熱くなっている。星野監督は、喜びを噛みしめるように、ゆっくりと選手達の輪の中にはいって行く。たちまち、1メートル80センチ、80キロの体が宙に浮く。一度、二度、三度……星野監督は、満面に笑

を浮かべ、大の字になって七度宙に舞った。

「ファンの皆様に感動を与えた選手達を褒めてやって下さい」

ああ、しんどかったに始まる星野監督の見事なあいさつが終わったあと、田渕コーチが星野監督に抱きついた。監督はコーチの肩を叩きながら抱擁する。優勝の感動が二人の羞恥心を放念させたのだろう。扶沙子夫人の遺影を抱いた島野コーチが二人を見ている。カメラマンも感動し、映像が止まったままだ。

野球を愛する三人の男の無垢な友情と、青竹を割ったような男気が、コーチ達を、選手達を、そしてフロントの人達の心を一つにしたのだろう。優勝は、そんな男達への神様の贈り物かも知れない。

廣岡　明
1929 年　大阪市福島区生まれ
1945 年　池田中学校（旧制）卒
1950 年　関西学院大学経済学部卒
1984 年　大阪市役所退職

住所　大阪府豊中市服部南町 2
TEL(06)6864-2918

野球　捨てがたく候　阪神、優勝への記録

2003 年 12 月 20 日　紙版発行
2011 年 04 月 20 日　電子出版発行

著　者 —— 廣岡　明
発行者 —— 桐生敏明

紙版発行 —— 株式会社かんぽうサービス
電子出版 —— 編集工房ＤＥＰ　TEL 0745-60-2696

©2003 Akira Hirooka Printed in Japan

はじめに

私の年賀状も、年金を貰うために出す生存証明のようなものになってしまった。

そんな年賀状に返事が来た。去年のことである。夫を早く亡くして、長男と東京で暮らしている八十近い姉からである。

怠惰な日々を送っているという近況報告へのお叱りである。老いて昔の説教ぐせがでたらしい。日記をつけなさいという。手紙に般若心経の写経を、同封して送ってきた。年がいっても腕は衰えていない綺麗な字である。

日記をつけることにしたが、閉門蟄居の身で、テレビの守りだけをしている身には、日常茶飯事のことしかない。

天候、雲の形、食事の内容、南天、山茶花、ろう梅等冬の花のことなどで、一ヶ月ばかり続けたが、変化のない日常生活に、かえって我が身が哀れになった。

そんなこともあって、参考にするつもりで、永井荷風の「断腸亭日乗」をひもといてみた。荷風散人七十三才（昭和二十六年）私と同じ年での日記である。

はじめに

私の年賀状も、年金を貰うために出す生存証明のようなものになってしまった。

そんな年賀状に返事が来た。去年のことである。夫を早く亡くして、長男と東京で暮らしている八十近い姉からである。

怠惰な日々を送っているという近況報告へのお叱りである。老いて昔の説教ぐせがでたらしい。日記をつけなさいという。手紙に般若心経の写経を、同封して送ってきた。年がいっても腕は衰えていない綺麗な字である。

日記をつけることにしたが、閉門蟄居の身で、テレビの守りだけをしている身には、日常茶飯事のことしかない。

天候、雲の形、食事の内容、南天、山茶花、ろう梅等冬の花のことなどで、一ヶ月ばかり続けたが、変化のない日常生活に、かえって我が身が哀れになった。

そんなこともあって、参考にするつもりで、永井荷風の「断腸亭日乗」をひもといてみた。荷風散人七十三才（昭和二十六年）私と同じ年での日記である。

さすがの荷風大先生も書くことがないのか、その年は、毎日一行ですましておられる。そのなかで、「夜淺草」との記事がなんと二二六回、二日に一回淺草へ行ってることになる。まことに、うらやましい限りだ。

日記をつけるのを止めてから、私はテレビで阪神、巨人のオープンニングゲームを見た。好投を続ける井川投手の姿が伐折羅大將のようだ。

その映像が一幅の絵となって感動を呼ぶ。そして、どうしたことか、井川投手が水戸商校出身であることから、桜田門の変の水戸の浪士達を想像し、思わず藤田東湖の正気の歌を口ずさむ始末である。

試合が終わったあと、井川投手を抱きしめる星野監督の姿は、喜怒哀楽を鮮明にして闘う監督らしい。このシーンを見て、私はこれだと思った。日記の代わりにこの感動を書けばよいのだと思った。野球は筋書きのないドラマだといわれている。ヒーローとなる選手もおれば、バイプレーヤーに徹する選手もいる。そんな選手達が織りなすドラマを書こう。幸い阪神は人気球団であり、殆どの試合がテレビに映る。テレビのない時はラジオがある。

そんなことで、私は昨年、阪神タイガースの一四〇試合を全部記録した。今年は優勝への記録であってほしいものだ。

最後に、昨年の私の年賀状を書いておこう。私のプロフィールになればと思う。

あけましておめでとうございます。

ご家族お揃いで初春をお迎えのこととおよろこび申し上げます。

「勝ツマデハ欲シガリマセン」人生二五年と覚悟を決めていた少年は、戦争に負けて心のよりどころを失いました。手のひらをかえした大人達の俄か民主主義になじめず太宰治に心酔し「生レテキテスミマセン」と飢えの時代を送ってきました。

やっと高度成長の思恵にあずかった男が、今や老いを迎え、生きておれば、いい事もあるだろうと、無為な日々を送っております。

なにとぞ、ご指導のほど、お願い申し上げます。

雑煮喰い　入歯ずれたる　夫婦かな

12 川上に完封負け・・・・・・38
コラム／富島球場（一）・・・・・・40
13 不可解なり投手交代・・・・・・44
14 胸撫でおろす星野監督・・・・・・46
15 矢野代打で勝利打点・・・・・・48
16 藪が四回３失点・・・・・・50
17 幼馴染み対決・・・・・・52
18 矢野の好リード・・・・・・54
19 桧山のサヨナラ打・・・・・・56
20 三拍子揃ったムーア・・・・・・58
21 下柳初勝利・・・・・・60
22 浜中８号満塁弾・・・・・・62
23 中日の継投に打撃陣沈黙・・・・・・64

133 どうした巨人軍（2）・・・・・・334
134 ムーア好投・・・・・・336
135 どうした巨人軍（3）・・・・・・338
136 今岡選手について・・・・・・340
137 桧山の16号満塁本塁打・・・・・・342
138 井川20勝へ王手・・・・・・344
139 原監督、甲子園で引退のあいさつ・・・・・・346
140 井川20勝、藤本3割・・・・・・348
あとがき・・・・・・350

おめでとう山下新監督（1試合目）

柳桜をこきまぜて、春も錦となりくれば。

山口高等学校（旧制）の寮歌である。友達の兄さんが山口高校生で、その友から教えてもらった。そして、プロ野球を初めて見たのは、その兄さんに連れて行って貰った阪神の試合である。それから、投手で監督だった若林ファンになった。１９４４年敗戦の一年前阪神の優勝した年である。

柳はしだれ柳のことだろうが、私は雪柳ではないかと思っている。私の好きな散歩道に桜並木の堤防がある。川沿いには雪柳の真白な郡落だ。毎年雪柳がまず春を告げ、追いかけるように桜が咲いて春を謳歌する。錦となるのはもうすぐだ。

解説の中村さんが六回までは選手の仕事、七回からは監督の仕事といったとおり七回の阪神の攻撃、一死後アリアス、矢野が四球、好投してきた吉見投手の顔に不安の表情が走る。代打広沢の2―0からの集中力と気力がすごい。ファールで粘った11球目、三遊間を破って1点、井川の代打八木もベテランらしく吉見投手の心の動揺をよんで初球ねらい、石井の右を抜いたと思ったが、横飛びの好守に阻まれる。代走斉藤の併殺逃れの好走塁でなお二死一、三塁。続いてベテランの域に達している今岡、

広沢と同じく2―0から6球をファールして、ねらい球を中前安打して2点、続く赤星がボテボテの二ゴロ、力走、ヘッドスライディングするも塁審の右手が上った。

昨年は、この横浜戦、藪投手の2年ぶりの完投勝利に感動した。今年は、井川で開幕戦を飾れなかったのは残念だが、山下新監督へのお祝いとしよう。長いペナントレースだ。負けからスタートすることもいいだろう。

三回、無死中前安打の種田の一球目からのいきなりの盗塁、そして鈴木尚の右前安打で1点取ったあと、なお無死一、二塁、当然バントと思ったが強行策、小川の一打は3ゴロ併殺打に終わったが、その積極策に、昨年と違って選手の顔も明るい。勝利監督のインタビューに、山下監督の目が潤んでいた。

2003年3月28日
横浜ナイター
①横浜1勝

毎日テレビ

横浜	阪神
0	0
2	0
1	0
0	0
0	0
0	2
1	0
×	0
4	2

投
●井川
谷中
吉野
金沢

打
今岡 1
矢野 1
広沢 1
斉藤 1
4

伊良部選手への手紙（2試合目）

伊良部さん、勝利投手おめでとうございます。七年ぶりの日本のマウンドに、随分緊張されたのでしょう。２四球、そしてウッズに打たれ、尽誠学園の一年後輩の佐伯にまで打たれて、２点取られた時は、正直いって駄目かと思いました。

四回には、桧山の不慣れの守備とバント処理の失敗から無死満塁、絶体絶命のピンチです。監督は動かない。二人の間で、七回までとの男の約束があったとは、翌日の新聞で知りました。このピンチを矢野の好リードもあったのでしょう、阪神戦には不思議と曲者ぶりを発揮する種田を併殺打に打ちとり、五回には、気を良くしたあなたが、主軸打者を三者三振に打ちとった右腕は、全く見事なものでした。

あのズシンとミットに響く音が聞こえてくるような一五〇キロの豪速球は影をひそめましたが、大リーガーでピッチングの組み立てを学ばれたのでしょう。阪神ファンは、あなたの円熟味を帯びたピッチングに満足した一日でした。

テレビでは七回で終って、ポート、ウイリアムスは見られなかったが、吉野投手の左殺しは、早く

も佳境に入っている。今日は鈴木尚を三振、これで5人に投げ4三振といったところ。

打つ方では三回、二死走者なしからの集中攻撃は、ドミンゴ投手が二回のボークで気が動転していたとはいえ見事なものだった。そのボークを引き出した赤星の三塁強襲安打から始まり、金本の左への初安打、浜中四球、桧山の初安打の二塁打、アリアス四球、当たっている矢野の満塁でのタイムリーで4点というもの。蚊帳の外は浜中、四番の重圧か。去年の横浜二回戦で5打数4安打、その内の一本は本塁打という猛打ぶり、やがてその勢いを取り戻すだろう。

テレビで見たベンチ。広沢の後ろに伊良部が座っていて、二人の頭だけを画面一杯にクローズアップ、そのユーモラスな風景を演出したカメラマンに拍手しよう。

2003年3月29日
横浜ナイター
②阪神1勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
2	0
0	0
1	4
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
0	2
3	7

投
〇伊良部
吉野
ウイリアムス
ポート

打
矢野3
赤星2
アリアス2
金本1
桧山1
藤本1
今岡1
11

ムーアは今年も健在（3試合目）

昨年の巨人二回戦、ムーアのデビューは、今も鮮烈な印象として残っている。その時、黒沢監督のことなら老若男女の共通の話題になると、ムーアを「七人の侍」の宮口精二にたとえた。端製な面立ちも、助っ人という役柄も似ている。

昨年の子供の日、テレビのテロップに、阪神の選手の少年時代に抱いた夢が流れた。どの選手も「プロ野球の選手」。そんな中でムーアは「父のようになりたかった」と。行き届いた家庭の躾（しつけ）が忍ばれて、私のムーア選手への思い入れは深い。そのムーアをキャンプ巡りをしてきた評論家が、調整の遅れているムーアが心配だという。

今日のムーアは、六回6安打3失点7奪三振、どうやら昨年の調子は持続しているようだ。

体格に合わないフルスイングの反省からバットをひと握り短く持った藤本のバッティングは好調だ。逆転された直後の六回、アリアスの二塁打、矢野の投ゴロで二塁を飛び出したアリアスを見て、若田部が投げた球を古木が後逸して同点、三塁に矢野を残して、藤本の右前タイムリーで勝ち越した。四回には、一死から矢野、藤本、ムーアの連続3安打で満塁、今岡の浅い右飛でタッチアップした矢

野が三本間で立ち止まる。それを見て二走者の藤本が三塁へ、ライトからの返球を中継したウッズが一瞬しゅん巡した。その瞬間矢野が生還同点とした。

岡田コーチによれば、練習を重ねたトリックプレーらしい。下位打線は絶好調だ。それに反して浜中は今日も無安打だったが、九回、足で稼いだ赤星を三塁において初打点をあげた。ほんのさ細な事がバッティングの契機になることもある。

星野監督の手堅い九回最後の守り、一塁にアリアス、三塁に秀太を送る。一、三塁とも守備のうまいアリアス、攻守にわたって活躍する予感がする。

2003年3月30日
横浜ナイター
③阪神2勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
1	0
0	1
0	0
0	1
2	0
0	2
0	0
0	0
0	1
3	5

投
ムーア
谷中
ウイリアムス

打
アリアス2
藤本2
今岡1
赤星1
金本1
桧山1
矢野1
ムーア1
10

広島ファン金本に拍手（4試合目）

拙宅の前はお宮さんの参道で、松の老樹と桜が対峙（たいじ）し、書斎から満開の桜が見える。

「サクラサイタ」

数年前まではやっていた合格祝いの電報であるが、今や過去のものとなってしまった。

浜中にやっと待望の安打が出た。執念のこもった球が右翼の前にぽとりと落ちた。今季18打席目。これには金本のお膳立てがあった。金本は、ブーイングを覚悟していた。ところが、広島ファンの暖かい声援に気を良くした金本はすでに2安打。そして七回、親友、佐々岡との四度目の対決にフルカウントから5球をファールで粘り、11球目に四球で出塁。バトンを浜中に渡した。金本との対決で気力を使い果たした佐々岡の甘い初球を浜中は右前へ2点タイムリー。「サクラサイタ」。

今日の見所は七回の阪神の攻撃だろう。カメラは和田コーチを囲んだ円陣を写し、そのあと浜中を追う、元気のない顔がクローズアップされる。先頭打者のアリアスが三振して手袋を投げつけ、ベンチに緊張のムードが漂う。矢野が左中間へ二塁打、藤本の中前安打で矢野が好走して1点。藪の犠打で二死走者二塁、今岡四球、赤星が内角変化球を右前に巧打して勝ち越し、さらに金本四球で二死満塁、

そこへ浜中の嬉しい初安打、続く桧山の好運な安打がでて一挙5点。見事に打線がつながった。

八回の裏、好投の藪をつないだ谷中が低めの球がきまらず2四球、新井の中前打で1点を献上、代わった吉野が今季始めて前田に巧打され、一球投げただけでポートにつないだ。ところが、藤本の手痛いエラーがあったあと、森笠に打たれて1点差に詰め寄られた。しかし、九回に再反撃する。先頭の赤星が右中間を破る三塁打、金本、浜中の連打、さらに、二死から八回のエラーを帳消しにする藤本の中前打で4点を追加した。その裏、ポートは広島の打者を三人で押えた。守りでは四回センターへの大飛球を背走好捕した赤星のプレーと、藪の好投が光っていた。

アメリカでも「サクラサイタ」。松井のメジャー初打席の左前タイムリーと野茂の完封そしてもう一人田口。君にも日本のサクラは咲いている。気を落とすなよ田口。年がいっても学校の後輩は気になるものだ。

2003年4月1日
広島ナイター
①阪神1勝

テレビ大阪

広島	阪神
0	0
0	1
2	0
0	0
0	0
0	0
0	5
3	0
0	4
5	10

投
〇藪
谷中
吉野
Sポート

打
金本3
矢野3
藤本3
赤星2
浜中2
桧山1
14

10回サヨナラ負け（5試合目）

楽勝と思っていたが、五回以降急に流れが変って、揚げ句のはては延長十回サヨナラ負け、後味の悪い試合だった。

監督は七回、下柳の変わりばな、木村拓のフラフラとあがったライトフライを、今岡と浜中の連携ミスで安打にしてしまったことを叱る。こんな見方はいかがだろう。

勝負事にはツキがつきもの。この試合、木村という名前にツキが廻った。七回、浜中がポトリとやった球を打ったのが木村（拓）。町田死球、移籍後初登板の下柳が動揺している無死一、二塁で、五回に初安打が本塁打で気を良くしている西山が犠打をきめる。そして代打の木村（一）が右へ同点タイムリー。投手が谷中に代った十回、シーツのボテボテの内野安打、緒方の犠打で一死二塁、新井死球、好手の矢野がパスボール、満塁策をとって前田四球、そこで出てきたのがあの木村（拓）。下柳が矢野のサインに何度も首を振る。嫌な予感がした。案の定、2―0と追いこみながら左へサヨナラタイムリーを打たれて万事休す。

絶好調だった矢野が六回以降、ツキを落してしまった男のようになっている。六、八、十回と走者を

置きながら3三振、そして捕逸と明日の矢野が心配だ。ぼやきはここまで。

金本のこと。田渕コーチが激賞していたことが今日の試合でよくわかった。只者ではない。攻走守の三拍子の選手だ。五回、栗原の大飛球をフェンスに激突しながらの好捕。四回、中前打で出塁、浜中の安打で一挙三塁へ走った足。そのうえ桧山の一ゴロを一塁手が二塁へ送球した瞬間、迷わず本塁へ突進する好走。打は今日も2安打、打率３５０、いい選手をいただいたものだ。感謝、感謝。

藤田投手、初回のピンチに、落ち着いたプレーと度胸は去年には見られなかった。滝に打たれたことは無駄ではなかった。いずれ花が咲くことだろう。谷中よ、試合は終わった。いつまでもベンチに座っていないで、悔しいのはよくわかる。勝負は時の運。明日がある。

2003年4月2日
広島ナイター
②阪神1勝1敗

サンテレビ

広島	阪神
0	0
0	0
1	2
0	2
1	0
0	0
2	0
0	0
0	0
1×	0
5	4

投
藤田
下柳
ウイリアムス
●谷中

打

赤星2	金本2
浜中2	ｱﾘｱｽ2
矢野2	藤本2
藤田1	今岡1

14

矢野怪我はないか（6試合目）

広陵高校、優勝おめでとう。

広島球場の横、平和記念公園の３３０本のサクラが満開だそうだ。いずれも被爆後の桜である。広島市内には、市役所前の三本の桜、碇神社の桜等、市内に被爆した桜の樹が残っているらしい。それらの樹々も満開のことだろう。そして、桜の花は人間の愚かさを悲しんでいることだろう。私達は原爆でなくなった二二六、八七〇人の人達を忘れてはならない。イラク戦争の映像を見ながら、ふと思った。ノーモア広島。

井川にも「サクラサイタ」。４安打９三振に広島打線を抑えた。技術論はさておき、お立ち台での発言が良かった。二回、無死一塁から前田の強い打球を左ヒザに受けたことを聞かれて「降板したら後の投手に迷惑がかかりますから」と。さすが〝水戸っぽ〟らしい。広島の放った４安打のうち３安打までがピッチャーがえし、注意してほしい。

昨日までは、下位打線が活躍していたが、今日は打つべき人が打った。まず浜中のソロホーマー。三回、猛打賞の今岡が三遊間を破って出塁、赤星四球、金本が二遊間へゴロの安打で同点、そして七回、

井川が先頭打者安打、すかさず今岡がライト線の二塁打で二、三塁、赤星一ゴロ、金本敬遠で一死満塁、浜中の犠打で井川が生還、1点ではと思っていたところへ、桧山のレフト線ギリギリの技の二塁打で今岡が帰って2点。2走者をおいて、3打席とも長谷川の変化球にやられているアリアスに打順が廻ってきた。4打席目、緩いカーブが高目にきた。一呼吸おいて振り抜いた打球がレフトスタンドへ一直線、試合を決めた。何回だったか、矢野がファールチップを肩にあてて、うずくまった時、カメラが達川コーチの心配した顔をクローズアップした。

「矢野が一四〇試合出場できたら阪神の優勝は間違いない」

達川コーチのセリフを覚えていた、カメラマンのファインプレーだ。

2003年4月3日
広島ナイター
③阪神2勝1敗

サンテレビ

広島	阪神
0	0
2	1
0	1
0	0
0	0
0	0
0	5
0	0
0	0
2	7

投
〇井川

打
今岡3
金本1
浜中①
桧山1
アリアス1
矢野1
藤本1
井川1
10

打の〇印は本塁打をふくむ

脅威の下位打線（7試合目）

昨夜来の雨が朝まで降り続いている。桜が心配で窓を開けた。大丈夫だ。散る気配もない。俳句では花の雨というのだろう。

横浜戦の伊良部は、変化球中心に配球を組み立てていたが、今日はストレートが主体だ。体重の移動がスムーズで、バランスのとれた奇麗なフォームだ。打者の手許で球が伸びているのだろうフライが多い。

横浜戦の時もそうだが、伊良部はよくロケーションが良かったからという。Location といえば、映画用語で、スタジオやセットではなく野外で撮影することだと思っている。どうもふに落ちない。スポニチにはカッコ書きで〝配球と制球〟とある。ロケーションを場所や配置が良いということからとったのだろうが、これも釈然としない。自分のことでなく、捕手や野手が良く守ってくれたことをいっているのだと思いたい。

〝伊良部クラゲ〟といったのは大沢さんである。クラゲは飄々（ひょうひょう）として海に漂うだけで、はっきりものをいい過ぎて誤解を招いた伊良部にはむかない。

おそらく大沢さんは日ハムの監督時代、伊良部にさんざんやられて海水浴で、電気クラゲに刺されたことを思い出したのかも知れない。語呂はいいが意味が不明だ。

昨日は上位打線、今日はまたもや脅威の下位打線、矢野と藤本で5打点。二回、二死から矢野が左中間二塁打で出塁、続く藤本の2球目のタイムリーで生還。ホームでクロスプレーとなったが、古田が球をはじいた。岡田コーチの積極的な走塁指示が目立つ。六回、金本の二塁打、浜中四球、桧山三振、アリアスのボテボテの三ゴロで、走者二、三塁となったものの五回に今岡のバント失敗もあり、ツキは逃げたかと思っていたが、矢野が初球をセンター前にはじき返して2点。八回に稲葉の3塁打で1点、九回、ラミレス四球のあと古田の二塁打で一打同点のピンチを迎えたが、ウイリアムスが見事後続を断った。

2003年4月4日
大阪ナイター
①阪神1勝

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
2	0
0	0
0	1
×	1
3	2

投
〇伊良部
Sウイリアムス

打
金本3
藤本3
矢野2
桧山1
9

浜中2発5打点（8試合目）

桜日和である。桜の樹を見上げると、満開の花の間をぬって青空が見える。海の色と白に近い淡紅色の清楚なコントラストが美しい。

昨日の嬉しい興奮が、一夜明けても酔いとともに残っている。

お立ち台へあがるとわかると、選手もいろんな事を考えるのだろう。三年前の広沢の〝六甲おろし〟も良かったが、昨日の浜中もよかった。

「ファンの皆様、今日はおいしいお酒をたらふく飲んで下さい」

16安打、12打点、ファンにとって、こんなありがたい試合はない、再々あってほしいものである。なんといっても、浜中の3安打2四球五打点の活躍だろう。初回、二死走者なしから戎の内角直球をバックスクリーン左へのソロ。続いて三回、一死三塁から、ワンバントで三塁頭上をこえる二塁打で2打点。そして四回、二死一、二塁から前田の外角直球を右中間へ見事な3ラン。阪神の四番はオレだと叫んでいるような本塁打だ。浜中は「オレは走者を進めるバッティングをするから、あとは四番のお前にまかす」といってくれた金本の言葉が励みになっているという。その金本、今日も打つべき

ときはタイムリー、走者を進めるときはチームバッティングと兄貴分の役割をはたしている。

その金本の活躍を連日にわたってベンチから見ている昨年のＦＡ選手片岡、八回から守備につき、代打八木の左翼線二塁打のあと、松田の初球をバックスクリーン右へ復活のアーチ。試合がきまった後とはいえ、猛烈な拍手だ。ファンは片岡を忘れていない。

もう一人、忘れられないのは、好投、好打、好走のムーアの活躍ぶり。投手としては七回５安打１失点に抑え、打つ方は２安打、とくに四回右前打のあと、今岡の左前打で二塁へ、続く赤星の中飛で、果敢な三塁へのヘッドスライディング、野手なみの走塁だ。ムーアは阪神野球に興趣を添える貴重な選手だ。

2003年4月5日
大阪
②阪神２勝

サンテレビ

阪神	ヤクルト
2	0
0	0
1	1
5	0
0	0
0	0
2	0
2	4
×	0
12	5

投
〇ムーア
中村泰
金沢
ポート

打
浜中③　今岡２
金本２アリアス２
ムーア２　赤星１
矢野１　八木１
片岡①　桧山１
16

ミス続出逆転負け（9試合目）

風もないのに、桜の小枝がゆらいでいる。見上げると、目白が花の蜜を吸っている。林檎（りんご）の輪切りを突き刺した庭のろう梅の木に、ここ二、三日来ないと思っていたら、こんな所に来ていた。いつも目白を追い拂う椋鳥までも一緒になって花の蜜を吸っていた。都に上がってきた田舎者のことを椋鳥というらしい。椋鳥とは、そんな鳥である。

六回、アリアスが五十嵐の151キロの速球を見事はじき返した特大の2ランで逆転。七回、金沢が同点とされたところで、両外人のいずれかと思ったが、吉野だった。来週からの中日、巨人戦に温存したのだろう。その吉野が飯田に左へ二塁打を打たれ、宮本が送り、一死三塁のピンチを背負った。ベッツの強いあたりの一塁ゴロを、一回に2ランを打って気を良くしている桧山が好捕、素早いバックホームで、好スタートした俊足の飯田を本塁で刺す美技で二死。ピンチを逃れたかと思ったが、矢野の手痛いパスボールで、吉野のリズムが狂い、ラムレスに二塁打を打たれて勝ち越された。内野安打で出塁した矢野をおいて、あわやホームランと思うファールをはじめ10球粘った八木が手に汗を握るシーンを演出してくれたのが、せめてもの慰めだった。

走者三塁において、初先発のよる緊張としかいいようにない下柳のボーク。ピリッとしない和製中継ぎ陣、矢野のパスボールと嫌な面もあったが、桧山の好守、とくに藤本の再三にわたる好守は見逃せまい。二回、宮出の三塁よりゴロを好捕、三回は鎌田の二塁よりのゴロを好捕したあとの一塁への好送球、八回、土橋のセンター前に抜けそうなゴロを好捕した時は、ベンチの星野監督も大きくうなずいて拍手をしていた。岡田コーチが早くから藤本を推していて、せっかく四人が競争しているのに早いのではないかと思っていたが、今になると岡田コーチのけい眼に恐れいる。

2003年4月6日
大阪
③阪神1勝2敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
3	0
0	0
0	0
0	3
0	0
2	1
0	1
0	0
0	1
5	6

投
下柳
金沢
●吉野

打
赤星4
金本1
浜中1
桧山1
アリアス①
藤本1
広沢1
10

ツキのなかった阪神（10試合目）

小説は、最初の一行できまるという。こういうのはどうだろう。

碁、将棋は強い者が必ず勝つが、麻雀はツキがあれば弱い者でも勝てる。そのツキを誰も説明できない。勝負の神様のいたずらとしかいいようがない。そのツキが阪神になかった。

一番手は桧山、二回の痛烈なショートライナー、四回の三遊間、九回の一、二塁間を抜けるようなゴロ。3安打損をする。

二番手は矢野、打球がレフトフェンスのラバーではね、グランドに落ちた不運な二塁打と、右翼手の正面をついた七回の強烈なあたり。三番手は四回、金本の左中間を破ってもいいような痛烈なあたり。四番手は八回、八木の右翼へのあたりと計6安打損をしている。裏を返せば、中日の守備力が勝ったのだろう。最後のしめは、十一回、先頭打者の井端の打球がボテボテの内野安打になった。その瞬間負けたと思った。案の定、勝負強い谷繁にポートが打たれた。最後の攻撃で金本が出塁し、一死で浜中に打順が廻り、夢をもう一度とファンは手に汗を握ったが、近鉄からトレードされた大塚に、併殺打で終った。

阪神の4得点のすべて浜中が叩き出した。四回、赤星四球、金本のセンターフライのあと、すかさず盗塁、二塁手の荒木が赤星の足を気にして二塁ベース寄りになったところをねらって打った浜中の技の安打で1点。あとの3点は、九回、田渕コーチの現役の時を思わせるような滞空時間の長い起死回生の同点3ラン。田渕コーチのガッツポーズをカメラがとらえる。この浜中につなぐ金本のチームバッティングは素晴らしい。中継ぎの藤川が二回を好投した。

あえて、敗因というならば、七回まで中日打線を無得点に抑えていた藪が、クルーズに3ランを打たれた失投だろう。そして、十回関川のボテボテの内野安打のあと、荒木の左中間を破る三塁打による追加得点が命取りとなった。

2003年4月8日
甲子園ナイター
①中日1勝

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	4
0	0
3	0
0	0
0	2
4	6

投
藪
谷中
藤川
●ポート

打
金本2
浜中2
赤星1
矢野1
6

藤田が涙の白星（11試合目）

藤田投手、六回無失点、今季初勝利おめでとう。

前回の広島戦の時とちがって、今日は安心して見られた。女兄弟で育ったことで、軟弱になった心を鍛えるために、岐阜県の不破の大滝で冬の滝修行をし、その時修得した〝不動心〟がマウンドの落ち着きとなったのだろう。

２００１年、巨人との開幕戦で中継ぎ登板したがストライクがとれないで、自責点7，そしてその年の防御率が１４・1だったことが、まるで嘘のようだ。

「強いチームより強いチームを倒す投手になりたい」入団時の発言を忘れないで、次の巨人戦で、２００１年の開幕試合の雪辱を果たしてほしいものだ。昨年の広島戦でプロ初勝利をあげた時、同期の赤星選手が5安打5打点（二塁打3）の援護射撃、昨日も赤星選手は3打数3安打。ドラフト4位の同期の桜がすでに大活躍している。藤田投手には、〝切磋琢磨（せっさたくま）〟の四文字を送ろう。

最近の監督は一人の投手の完封勝利よりも、今日の阪神のように藤田、藤川、ウイリアムス、ポートの完封リレーの方が嬉しいに違いない。

中日の山本投手は六回に降板したが、ヒット性のあたりは金本の一本だけに、不本意だったろう。四回の桧山、五回の赤星、六回の藤本と内外野間に落ちるポテンヒットが、すべてタイムリー、たまったものでなかったに違いない。

一昨日阪神は6安打損をしたが、昨日はポテンヒットの3安打がすべてタイムリーという好運が阪神に味方した。

今日は赤星、金本の足が、つなぐ野球の流れを作った。四回、中前打の赤星が、金本の右前打を福留がもたつく間に生還する。続く浜中が三振、その時金本が三盗、中日が前進守備を敷かざるをえなくなって、桧山の二塁を越える安打がでた。定位置なら、安易なセカンドフライだ。そのほか、投では藤川の中継ぎ、打では三塁打の矢野が活躍した。

2003年4月9日
甲子園ナイター
②阪神1勝1敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
2	0
1	0
2	0
0	0
0	0
×	0
5	0

投
〇藤田
藤川
ウイリアムス
ポート

打
赤星3
今岡2
矢野2
藤本2
金本1
桧山1
11

川上に完封負け（12試合目）

今にも降り出しそうな花曇りである。

八日の風を道連れにした激しい雨で、花も半ば散ってしまった。鈍色空の下の桜は、草色の芽が交り、髪の毛の薄くなった白髪まじりの初老のようで見栄えが悪い。満開の時がまるで嘘のようだ。むしろ足許の花むしろの方が人の目をひく。土足で踏むのも気になる。

拾ってきた花びらを、原稿用紙の上においてよく見ると、色づいている場所や色の濃淡が、それぞれ異なっている。なかには眞白いものもあった。一枚一枚見ると淡紅色というよりも薄紫色に近い。集まると色が変わるのだろう。花が散ったあとの若葉の季節が待ちどおしい。

次々と三振をとる井川を奪三振の新記録を作るかも知れないと思っていたが、四回と六回にアレックス、谷繁に打たれて失った3点が命とりになった。いずれも、低めにきまらないチェンジアップが餌食になった。

好投する川上に、あたっていた打戦が沈黙したのが敗因だが、六回、藤本の内野安打と代打上坂の初安打で無死一、二塁のチャンスに、今岡の強烈なピッチャーライナーと赤星のライト線ぎりぎりの

ファール。タラとはいいたくないが、くやしい。七回も左翼左への二塁打で無死二、三塁となったが、大塚にチャンスの芽をつみとられた。

テレビに映る声をあげて投げる大塚投手の追力は物すごい。その顔は悪役大塚といったところだ。充実している中日の中継ぎ陣をさらに充実さすことになる。走者三塁で打者一人に大塚をもってくることもあるだろう。１５０キロの速球とフォークは脅威だ。中日はいい落とし物を拾ったものだ。

昨年は１対１の引分け試合。星野が先発で七回まで、八回から十一回まで伊藤、最後はバルデス。伊藤が二死三塁から、絶好調の井端に真っ向勝負した。その雄姿が今も印象に残っている。この時の三人は、もう阪神にいない。

2003年4月10日
甲子園ナイター
③中日２勝１敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	2
0	0
0	0
0	0
0	3

投
●井川
金沢
吉野
谷中

打
赤星 1
浜中 1
桧山 1
アリアス 1
藤本 1
上坂 1
6

コラム／富島球場（一）

母親に縫ってもらった布のグローブとバットで野球をしたのは、戦後育ちの少年達で、私達戦前の少年野球は、ゴムマリと棒切れだった。私達の自慢は私の家のすぐ近くに野球場があったことだ。

町の人々は〈富島球場〉と呼んでいた。当時、安治川には川上に向かって渡しがあり、最後の渡しが〈富島渡し〉で、そのあとは橋で両岸が繋がっていた。

最初の橋が船津橋で、名前のとおりそこまでは、最高三〇〇頓ぐらいまでの船が航行し、中央市場をはじめ両岸の倉庫群へ荷物を運んでいた。

球場の場所が十六町（現在福島区野田五丁目）なのに、渡しも球場も、川向こうの富島町（現在西区安治川一丁目）の名前で呼ばれていることが、少年達には不満だった。

富島町が外国人の居留地だった川口町の西隣りで、私達の町より古いことと、語呂の良さから、そう呼ばれたのだろう。

安治川沿い中央市場の西門を西へ、二〇〇米程行くと交番所があった。その前の道〈妙見筋〉を北へ少し行くと、安治川に停泊している船へ、小舟に乗って重油を売っている油屋があり、その隣りに球場の狭い入口があった。そこから北へ約二十五米、煙草屋まで板塀が続いていた。球場のライト側で、

レフト側は川沿いの道に沿った人家のうしろに板塀が続いている。

その距離はおよそ四十米、その奥は草ぼうぼうで、球を探している間に走者はホームインし、野球をしている者には魔の場所だった。それに引き換えライト側は極端に距離が短く、右翼手がいなくても野球ができるほどだった。打球が塀を越えてもルールは二塁打とした。

関西電力の空地を利用しているため、変な形の球場だが、バックネットもピッチャーズマウンドもスコアボードもあった。ただ、ベンチは三塁側だけで、呉越同舟といったところだが、一チームのグローブとミットですむ便利さがあった。

私達は、球場北の端と煙草屋の間のわずかなすき間から球場へ入った。二人だけの時はゴムマリでキャッチボールをした。人が増えてくると棒切れのバットを持ち出して野球の真似事をする。

一番よく遊んだ友に門戸君がいた。彼は運動神経が抜群で野球のこともよく知っていた。三人で遊ぶ時、よく狭殺プレーをした。門戸君がランナーになると、追いつめてタッチしようとしても巧みに体をかわされた。

彼は天王寺中学（旧制）へ進学して、体は大きくなかったが、持ち前の柔軟な体と足が速いことから、ラグビー部に入り、一九四三年、全国制覇したチームの一員だった。そして、同志社大学から近鉄へ進み、オールジャパンの名選手として活躍した。野球場がラグビー選手を育てたことになる。

球場の付近は戦禍に会うとともに、一九八一年に、中央市場が関西電力の土地を買収したので、昔の面影は全然残っていない。ただ球場の入り口にあった、〈福田屋〉だけが、大阪中央石油株式会社となり、ガソリンスタンドとして、今も活躍している。

環状線の野田駅のホーム南西の方向に、一九九二年に完成した十六階建ての中央市場の業務管理棟がみえる。その西に、富島球場があったと思ってもらいたい。具体的にいえば、中央市場の旧館から妙見筋を越えて、新館へ通じている陸橋の下あたりである。

大阪のどの辺りかと問う人には、大阪市の地図を広げていただこう。そして、大阪の北、毛馬の閘門（こうもん）で別れている旧淀川の川筋を見てもらいたい。女の人がふかぶかと椅子に座っている恰好をしているのが、おわかりになるはずだ。首筋が毛馬橋、背中が源八橋のある桜の宮で、大川にかかる天神橋、中之島公園辺りが、女性の最も恥じらうところ、そこを過ぎれば、堂島川、土佐堀川が、スマートな脚となって流れている。その脚をあわせた踵（かかと）のところが、中央市場であり、富島渡し、富島球場のあったところである。

不可解なり投手交代（13試合目）

阪神は九回二死まで、7対1でリードしながら、追いつかれてしまった。〝野球はツーダンから〟その見本のような試合だった。

4点リードの九回、二死一、二塁の場面で吉野が仁志を2―0と追いこんだところで、ベンチから監督とコーチが飛び出して来て藤川を告げた。予期していなかったのだろう吉野も驚いた表情をしている。藤川は仁志に初球をいきなり打たれて3点差。なお、走者を一、二塁に置いて代打後藤、2―0と追いこみながら、ボールにするはずのフォークが落ちず、3ランを打たれて同点とされてしまった。立ち直った藤川が、巨人の主軸打者を押さえた。阪神十二回、赤星が二塁打、金本四球、浜中の犠打で二、三塁、アリアスの左翼フライで勝ち越した。ドラマは終わったかと思ったが、頼みの高橋由に谷中が本塁打を打たれて、せっかくのリードをふいにしてしまった。

不可解なのは、九回二死、2―0からの投手交代である。監督は引き分けてよかったというだけでその理由はいわない。佐藤コーチは「藤川は準備していたし、吉野にも問題はなかった。監督のひらめきでは」と。遠山さんは「監督の殺気」という。私はこう思う。

最近の阪神投手陣は、二死から、また、2―0と追いこんでからの四球や、安打が多い。注意しているのに、今日も直らない。監督は、いらだちと胸騒ぎを覚えてマウンドへ向かったのだろう。満開の桜は、人を狂気にするといった作家もいる。

監督はベットの上で、のた打ちまわって眠れない夜を過ごしたことだろう。

同点となったために、活躍した選手が忘れられないよう記録しておこう。

清原とは直球勝負し、七回まで1点に押さえた伊良部投手。二塁打2本と本塁打の金本。片岡の2ラン。アリアスのソロと犠打。赤星の2安打と盗塁。藤川には、今日の試練を糧にして、一層の飛躍を望むことにしよう。彼はそれができる選手だ。あの名投手だった小山さんが、背格好、体重、俺と同じ、コントロールのいい投手になるよと、昨年、サンテレビで解説されていたことを、藤川につたえておこう。

2003年4月11日
東京ナイター
①巨人1分

読売テレビ

巨人	阪神
0	0
0	0
0	0
0	1
0	1
1	0
0	0
0	2
6	3
0	0
0	0
1	1
8	8

投
伊良部
ウイリアムス
ポート
吉野
藤川
谷中

打
金本③　赤星2
今岡1　ｱﾘｱｽ①
矢野1　藤本1
片岡①　10

胸撫でおろす星野監督（14試合目）

二回、浜中の四球、桧山の二塁打で無死二、三塁の好機に、後続の三人が凡退し、昨日のことが尾を引いて嫌な予感がしたが、三回、その予感は見事に粉砕された。

ムーアの好運な左前打のあと、これまた好運な今岡の右翼フェンスぎりぎりの2ランが出た。今岡の久しぶりの笑顔がテレビに大写しになったあと、ＮＨＫのニュースに場面が変わってしまった。ラジオが見つからず、スイッチを入れた時は、ムーアの右翼フェンス直撃の二塁打に、アナウンサーが絶叫していた。ムーアに始まってムーアで終る8点を先取した三回の攻撃だった。

カメラがそんなムーアを追う。ムーアとアリアスの顔がクローズアップされた。ヘッドスキンの顔は、さながら比叡山の僧兵だ。高下駄をはかし、薙刀を持たせてやりたい。それと好対照なのは、左横のキリストにも似たアリアスの優しい目だ。

五回にバッティングのいいムーアをカメラが追う。空を切る音が聞こえるような、ものすごい素振りである。そして二死というのに、力をこめた打球は投ゴロ。スポニチで大野さんは、五回2点を失ったのは、その時の手のしびれが原因だという。「2アウトランナーなしで打つんだから、もうちょっ

と大人になってほしい」という佐藤コーチの気持ちもよくわかる。

そんなこと、おかまいなしで、七回二死、藤本がランナーに出ると、最後のバッティングチャンスが廻ってくる。ムーアがベンチの中を右から左へ、うろうろしている。ヘルメットを探しているのだ。案の定、二死満塁でムーアに打順が廻ってきた。大振りした打球は、あわやグランドスラムというような大きな中飛だった。今日は試合終了後の星野監督の談話が嬉しい。

「選手がオレのミスを救ってくれる時もあるし、その逆もある。信頼関係や。阪神は本当に強くなっとるぜ」

2003年4月12日
東京ナイター
②阪神1勝1分

ＮＨＫテレビ

巨人	阪神
0	0
0	0
0	8
0	0
2	0
0	0
0	0
0	0
0	1
2	9

投
〇ムーア
ウイリアムス
吉野
金沢

打
今岡②
赤星2
桧山2
アリアス②
ムーア2
浜中1
金本1
11

矢野代打で勝利打点（15試合目）

矢野選手は、平野区の瓜破中学出身で、リトルリーグ時代から注目を集めていたらしい。年勘定をすると、その頃、私は平野区役所に勤めていて、リトルリーグの大会に、区長の代理として、あいさつに出向いたこともある。また、出身校の桜宮高校は普通校に初めて体育科を設けた高校で、１９８２年、春の選抜で甲子園に出場している。矢野が入学する前のことだ。大阪の市立高校でもあり応援したが、一回戦で負けてしまった。そんなこともあって、矢野選手のことは、とても気になる。

今日は下柳ということで、バッテリー経験のある野口が先発、矢野が初めてスタメンからはずされた。疲れ気味の矢野への配慮でもあったのだろう。その矢野が代打に出て、八回二死、アリアスを三塁において、気はくでもっていったような左前打で勝利打点をあげた。

テレビのレポーターが矢野のタイムリー談話を報告した。

「今は九回の守りのことで頭が一杯ですから答えたくありません」

四月四日のヤクルト戦で、好投した伊良部と一緒にお立ち台に上がった時、バッティングをほめられても、守りを大切にしたいといっていた。また、捕手は八人の選手と向い合っているので、暗い顔

をしているとみんなに伝染するともいう。巨人戦で工藤が矢野にぶつかった時、矢野は次打者で二塁走者の金本を本塁に誘導していた。チームを中心に考える矢野の活躍は頼もしい。

アリアスの止どめの一発が三日続いた。去年本塁打を打つとベンチでペンダントにキスすることを発見したが、今シーズン初めて、カメラがうまく捕らえた。レポーターに是非とも理由を聞いてもらいたいものだ。

この試合、今岡が4安打、桧山が二塁打と三塁打。打つべき人が当りを取り戻し、吉野、藤川、ウイリアムスと終盤のリレーが成功し、監督もひと安心したことだろう。仁志と元木の衝突事故、二人の一日も早い回復を祈ろう。

2003年4月13日
東京ナイター
③阪神2勝1分

読売テレビ

巨人	阪神
0	0
1	0
1	1
1	1
0	0
0	1
0	0
0	1
0	3
3	7

投
下柳
〇吉野
藤川
Sウイリアムス

打
今岡4　金本2
浜中2　桧山2
藤本2　ｱﾘｱｽ②
野口1　下柳1
矢野1

17

藪が四回3失点（16試合目）

巨人戦のあとの阪神は弱い。そんなジンクスが生きていた試合だった。スポニチによれば、監督は試合前に注意したそうだが、それでも直らないのが、ジンクスというものだろう。こういう時は、巨人戦に参加していない投手陣が頑張ってほしいが、先発の藪、初回いきなり稲葉に一発を浴びた。

この一発は出会い頭で仕方ないとしても、三回ベッツを一塁に置いて、シュートにねらいをしぼっているラミレスに、レフトスタンドへ持っていかれたのは、いただけない。

試合終了後、テレビ大阪の〝江夏の一球〟というコーナーで、江夏さんは、一回古田への初球、矢野がはっきりとボールを要求しているのに、ストライクを投げる藪の無神経さを指摘した。

五回の阪神、アリアス四球、矢野三遊間安打、ホッジスのボークで無死二、三塁、藤本の二ゴロでアリアス生還、なお二死二塁で今岡のショート左へのヒット性のあたりを、宮本に好捕され、一点にとどまった。そのあと、これからという時、二番手のポートが試合をつぶしてしまった。

稲葉の内野安打は不運としても、次のバント処理を失敗して動揺、一死、一、二塁からラミレスの二塁打とボークで2点、さらに、鈴木の2ランを浴びて4点を失った。巨人戦のあと、アリアスがポー

トを夕食に誘って、慰めたらしいが、その効果はなかったようだ。

金沢が七、八回と無失点に抑えたが、打撃陣がヤクルトの二番手のリリーフ陣に抑えられてしまった。

今まで不動のオーダーできたが、今日は、あたっている片岡がスタメンで2安打。浜中は風邪を引いたらしい。

昨日、二軍戦を見に行った。甲子園球場の一等席で見れるのが嬉しい。中日と引き分けに終ったが、最後に出て来た、気合いで投げる伊代野投手が面白そうだ。掛け声がバックネットまで聞こえてきた。

2003年4月15日
神宮ナイター
④ﾔｸﾙﾄ2勝2敗
毎日放送
テレビ大阪

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
0	0
2	0
0	0
4	1
0	0
0	0
0	0
×	0
7	1

投
●藪
ポート
金沢

打
金本2
片岡2
赤星1
矢野1
6

幼馴染み対決（17試合目）

敗戦処理投手とはいえ、昨日推奨したばかりの伊代野投手が登板したのには驚いた。

七回、吉野が鈴木の左前打のあと、古田に2ランを浴びて降板、続く藤川が今岡のエラーのあと、四日にベンチ入りしたばかりの福川に二塁打を打たれ、八回には、ラミレスの本塁打を打たれて降板した。そのあと、左対策で日ハムからトレードされた柴田が鈴木に死球を与えて降り、一死で2点のビハインドをせおって伊代野が登板した。

古田を迎えて、0―3、どうなるかと心配したが、ストライクを一つ取ったあとのショートゴロの併殺打に仕止めた。横からの140キロは魅力がある。

七回までは、藤田（185cm）と石川（169cm）の緊張した投手戦だった。二人は秋田県出身で幼馴染みだったらしい。藤田は五回不運な安打で1点取られたが、ヤクルト打戦を六回まで4安打に押えた。一方、石川は古田の好リードもあって、6安打無失点。古田さんに受けてもらいたいとヤクルトを希望しただけに、古田捕手を信頼しきっている。

均衡を破ったのは、七回、阪神の見事な攻撃である。

藤田の代打上阪が気のない三振のあと、今岡が右中間を破る二塁打、赤星が足の内野安打、次の金本に石井の１５２キロの球が手首にあたり、ベンチは長期離脱かと肝をつぶしたが、金本の鍛えた体はびくともしない。不死身だ。一死満塁。浜中のセンターへの犠打で今岡が本塁へ果敢なヘッドスライディングをして同点。二死、二、三塁から桧山が二塁右へ執念の内野安打、土橋の体勢の崩れを見て、二塁走者の金本は古田のブロックをかいくぐって本塁へ好走塁。３対１で逆転。藤田の笑顔がクローズアップされる。それも束の間、その裏に逆転されてしまった。スポニチの長池さんは、古田は、阪神打線が内角に弱いことを知っている。阪神は古田に負けているという。

2003年4月16日
神宮ナイター
⑤ﾔｸﾙﾄ３勝２敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
3	3
1	0
×	0
5	3

投
藤田
吉野
●藤川
柴田
伊代野

打
赤星３
矢野３
桧山２
今岡１
浜中１
藤本１
11

矢野の好リード（18試合目）

昨日、今日と温度は25度、五月中旬から七月上旬の気候といわれている。家の前の参道が、あっという間に、若葉のトンネルとなった。

ヤクルトに2連敗して、阪神はエース井川の登板である。二回、ラミレス四球で、今のところ4割打者の鈴木を迎えた。徹底して外角への直球勝負である。横浜戦でチェンジアップが低目に決まらなかったことも、中日戦でチェンジアップが高目にはいって、アレックスに本塁打にされたことも、矢野の記憶に残っている。一発のある鈴木に、チェンジアップが高目にいくのが怖い。抜けて高目にはいったチェンジアップは、ただの半速球だ。鈴木は6球をファールで粘る。根負けした矢野が12球目に出したサインがチェンジアップだ。球が幸い高目に思い切り浮いて四球。無死一、二塁で好打者古田を迎え、矢野の苦心の配球が始まる。

右打ちは常識である。ただ、鈴木と徹底的に直球勝負したことで、古田は、井川のチェンジアップが調子悪いと考え、ストレートにしぼってくるだろうと矢野は読んだ。古田は一球目の直球を空振りする。カモフラージュかも知れない。矢野は容赦なく思い切って2球目で勝負に出た。チェンジアッ

プである。うまく外角低目に決まった。右打ちに徹していた好打者古田も、絶妙の緩急に思わず引っかかった。三ゴロ併殺打でピンチを脱した。

八回、直球を多投した井川にヘバリがきた。城石、宮本に打たれて1点を与え、なお、走者二、三塁で、強打者ラミレスに打順が廻ってきた。直球で勝負できないと思った矢野は、チェンジアップを要求したが、球は高目にぬけて、ラミレスのバットが火を吹いて3ラン。同点とされたが、打撃がヤクルトを上回った。三回、矢野、藤本の連打と、バントを失敗したあと、井川の絶妙の二ゴロで上位打線とつながり、今岡、赤星の三遊間をゴロで破る安打で2点。そのあと浜中のソロ、金本の2ランと打線は好調だったが、5点をもらったあと、井川の八回の乱調はいただけない。

2003年4月17日
神宮ナイター
⑥阪神3勝3敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
0	2
0	1
0	0
0	0
0	0
4	2
0	0
4	5

投
〇井川
Sウイリアムス

打
今岡1
赤星1
金本①
浜中①
桧山1
矢野1
井川1
7

桧山のサヨナラ打（19試合目）

阪神がサヨナラ勝ちした時は、一面の写真を楽しむために、二社のスポーツ新聞を買うことにしている。

スポニチの一面は、両手を上げ、小躍りして帰ってくる桧山を出迎える選手達の表情をのせている。万才する者、拳を突き上げる者、拍手する者。秀太が、矢野が、上阪が、浜中が、野口も、顔半分写っているのは八木、85は顔が見えないが長島コーチだ。

ニッカンは、桧山の左手に金本、右手に頭ひとつ高い、大きな伊良部が桧山の頭を撫で、伊良部の肩口のところに、赤星の横顔が写っている。ハンサムな桧山の笑顔は、まさに千両役者といったところだ。

不慣れな一塁守備に黙々として、取り組んでいる選手会長の努力に敬意を表した浜風が、打球をレフトスタンドに運んだものと思いたい。

伊良部の１３２球、４安打、11三振の完投。その緩急自在の慎重で大胆、粘り強い投球に、サンテレビで解説している小山さんが絶賛する。「若い投手よ、伊良部を見習え」と。

日刊スポーツに矢野の伊良部評がのっている。「アイツ、大きな体でふてぶてしい態度をとるけれど、実際は実に細やかで、優しい男なんです」と。

なるほど、尽誠学園で同室だった一年後輩の佐伯によく打たれるのも、そんな優しさが原因かも知れない。今日も二回にタイムリーを打たれ、今までに、7打数、4安打3打点と打たれている。

一回、阪神の攻撃で赤星と金本が、1イニング3盗塁で作った一死、二、三塁の好機を見逃した上位打線を下位打線がカバーした。

二回、アリアスが二塁内野安打で出塁したあと、矢野が中前打、アリアスの好走塁で一、三塁、藤本の二ゴロで1点を先取する。さらに、五回には藤本が中前打を放ち、今岡のセンターオーバーの2累打で同点とした。下位打線が不振の上位打線を助ける。

2003年4月18日
甲子園ナイター
④阪神3勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
1	0
0	0
0	2
1	0
0	0
0	0
0	0
1×	0
3	2

投
〇伊良部

打
今岡2
矢野2
桧山①
藤本①
アリアス①
7

三拍子揃ったムーア（20試合目）

三拍子とは、小鼓、大鼓等三種の楽器で拍子をとることらしいが、遊びをきわめた人を三拍子がそろっている人ともいう。飲む（酒）打つ（ばくち）買う（女）の三拍子である。そして、三拍子がそろうと命がなくなるともいわれている。

野球の三拍子といえば、打者は三冠王。野手は3割、30盗塁、30本塁打。投手にも投走打の三冠王の賞を設けてはいかがだろう。打の中には、バントの巧拙も参考にする。

コーチの方々から、怪我でもしたらどうするとお叱りをうけそうだが、ムーアが登板する時、野球がなお一層面白くなる。甲子園へ来る人はムーアの登板する日を選んでいるとか。昨日のムーア、本業の投では、制球の甘かった序盤に3点を失ったが、同点になってからは、四回以降、球を低目にきめ、許した安打はわずか2本。見事軌道を修正した。

走打では、脅威の下位打線の矢野、藤本が安打で出塁し、ムーアは巧みなバントで走者を進めて上位打線へ継いだ。そして、今岡の犠打と、浜中の2点タイムリーで同点とする。

圧巻は、同点で迎えた七回である。ムーアは斉藤の決め球１２５キロのスライダーをすくい上げて

右中間を破った。無死からの二塁打。今岡のバントは一塁前の小飛球、取れなかったのか、それとも、あえてワンバウンドでとって走者を三塁で刺そうとしたのかわからないが、ウッズは三塁へ送球した。ムーアは好判断で三塁へヘッドスライディング、手が三塁手のタッチをかいくぐった。無死、一、三塁となって、赤星が前進守備の三遊間を破ってムーアが生還、勝ち越した。そのあと、金本四球で無死満塁、引き離すチャンスだったが、かわった富岡投手に、浜中、桧山、アリアスの三者三振はいただけない。

ムーアの三拍子は、彼の強い集中力の賜物だろう。完投ペースだったムーアも、九回二死、一、二塁のピンチを迎え、ウイリアムスが登板、気迫のある投球で石井を三球三振、5セーブをあげた。

2003年4月19日
甲子園ナイター
⑤阪神4勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	1
3	2
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
×	0
4	3

投
〇ムーア
Sウイリアムス

打
赤星2
浜中1
矢野1
藤本1
ムーア1
6

下柳初勝利（21試合目）

ネオユニヴァースとサクラプレジデントの一騎打ちの皐月賞は見ごたえがあった。両馬は、これから良きライバルとして、競馬ファンを喜ばすことだろう。

皐月賞を見終ったあと、6チャンネルにきりかえると、甲子園球場は雨で中断していた。浜中が一回に3ラン、三回にソロと2本の本塁打で4点をリードしている。カメラは心配そうな顔をして、ベンチで待機している浜中を写していた。

小降りになって再開した四回裏の阪神の攻撃、下柳が三球すべてを空振りして三振。今岡は初球をレフトフライ。赤星は初球をチョコンとバットにあてる。球は三遊間を抜ける。運良くというより運悪く出塁したが、すぐ二盗してアウト、最小時間の攻撃にする。五回にはいってゲームが成立、浜中は元気良くライトの守備に走った。

大観衆と阪神での初勝利に力みがちになる下柳を抑える野口の好リードもあって、のらりくらりした投法は、横浜打線を4安打に抑えた。「柳の枝に雪折れなし」といったところだ。

テレビ中継が七回に終ってしまったので、楽しみにしていた下柳の移籍後初勝利の声を聞くことが

できなかった。あくる朝、一番でスポーツ新聞を見た。

「頼りがいのある四番が、頼りない投手のために打ってくれてよかったです。」

照れ笑いのひげ面を見られなかったが、その言やよし。

タイガースでの初勝利おめでとう。

昨日の試合は、浜中の2本の本塁打と八回の2点タイムリー、そして下柳の好投につきるが、六回中前打の藤本を一塁において、代打にでた矢野の勝負強いタイムリー二塁打も忘れがたい。よく打つ下位打線と上位打線の歯車がかみ合った時の阪神は強い。昨日は何より降雨コールドゲームにならなかったことを、天に感謝しなければなるまい。

2003年4月20日
甲子園
⑥阪神5勝1敗

朝日テレビ

阪神	横浜
4	1
0	0
1	0
0	0
0	0
1	1
0	0
3	0
×	1
9	3

投
〇下柳
金沢
柴田
伊代野
吉野
谷中

打

赤星3	浜中③
今岡2	桧山①
野口1	秀太1
藤本1	矢野1

13

浜中8号満塁弾（22試合目）

昨日は、今シーズン初めてテレビ実況のない日だった。昨年阪神を退団した伊藤さんと元監督の中村さんが解説しているＭＢＳを聞くことにした。伊藤さんは、「鶴の恩返し」という名言をはいて、中継ぎ投手として活躍した。今も阪神の若手の投手陣を励ましているらしい。藤川投手がグローブで口をおさえて「先発で投げたいです」と伊藤に心の内を話したという。微笑ましい。

今年の阪神の選手を、伊藤さんは去年までは星野監督に踊らされていたが、最近は選手の足が地についているという。昨日は、そんな選手達が星野采配にこたえた試合だった。

初回いきなり藪が4点とられたあと、二回に1点を返し、なお二死、二、三塁で藪に打順が廻ってきた。監督は中日の強力なリリーフ陣を考え、早目に勝負とでた。代打はヤクルト五回戦で気のないスイングで三振して監督に「アイツにはもうチャンスはない」とまでいわれた上坂である。星野用兵の妙だろう。

上坂は期待にこたえて三塁強襲安打で2点。この回はさらに暴投と赤星の中前安打で4点差を一気に追いついた。

三回は桧山の4号ソロで1点勝ち越しなお3四球でえた一死満塁で、伊代野の代打として登場した八木の中犠飛で2点をリードした。

五回、無死から藤本の絶妙のバントヒット。パリーグから移籍してプロ初打席の投手柴田、2球続けてバントの構えから見送る。2球目、バントに気をとられている中日の内野陣の裏をかいて藤本は二盗に成功。2―0から代打に淺井を送る。淺井の叩きつけるバッティングがボテボテの投手ゴロとなって、走者を三塁へ進め、監督の期待にこたえる。これが効いて、あとは一気呵成にたたみかける。今岡が適時打、そして浜中の満塁本塁打が中日の息の根を止めた。伊代野、柴田、金沢、谷中、吉野、藤川の中継ぎ陣も好投。三番手の柴田が移籍初勝利となった。

2003年4月22日
ナゴヤナイター
④阪神2勝2敗

毎日ＭＢＳ

中日	阪神
4	0
0	4
0	2
0	0
0	5
0	0
1	0
0	0
0	0
5	11

投
藪
伊代野
○柴田
金沢
谷中
吉野
藤川

打
赤星2　浜中②
桧山②　矢野2
藤本2　今岡2
上坂1　金本1

中日の継投に打撃陣沈黙（23試合目）

私の家の東側は、天竺川の堤防である。

天竺川は箕面川の支流で、北から南へ神崎川に合流する。名前のとおり、川岸には村の共同墓地が多い。一番大きな墓地は、緑地公園に隣接している大阪市の服部霊園である。阪神大震災で、この堤防が崩れ、改修工事が行われた。幼い時から馴染みの樹が多いので、なるべく残してほしいと説明会で注文をつけたが、松の木を残して殆ど伐られてしまった。

甲虫取りに夢中になった楝や、アオバズクが巣を作っていたクスノキが伐られしまったのが悲しい。そのかわりとして、菜の花の種をまいたのだろう。毎年四月には満開となり紋白蝶が舞う。菜の花もいろんな種類があるらしい。堤防の菜の花の正式な名称はカラシナで、日本人が昔から油を取り、食用としていた菜の花はアブラナ科らしい。「菜の花や月は東に日は西に」そんな一瞬を家から見ることができると思えば有難い。大阪市の服部霊園の敷地は、甲子園球場の約5倍、東側に桜並木に囲まれた大きな池がある。その桜の樹にまじって〝柳は緑花は紅〟の故事にちなんで、数本のしだれ柳が植えられている。ところが、その柳は湯上がりの老婆の髪のようで、桜にはどうみても不似合いだ。

やはり柳には白衣の足のない人がふさわしいのだろう。桜の季節に訪れるたびに、そんなことを思

い、冒頭で書いてくどいようだが、柳は雪柳だとの思いを強くする。

平凡な試合だった。

五回、藤本が右前打のあと、藤田の犠打で二塁へ、今岡の左前打で二死、一、三塁、金本の久しぶりの左中間を破る二塁打で逆転、阪神のペースは、そこまでだった。その裏、藤田は投手に打たれ、福留の2ランで逆転された。変化球が生きる藤田の低目をつくストレートがない。

五回以降の阪神は、中日の強力なリリーフ陣にノーヒットに抑えられた。阪神の朗報はここ4試合わずか1安打、打点ゼロの金本に2点タイムリーがでたことと、今シーズン初めて登板した安藤に手応えがあったことだけだ。

話は変わるが、開幕20日で石毛監督の解任はひどい。去年の不成績を監督のせいだけにするのは卑怯というものだ。チームのかなめだった田口を放出し、どれだけの選手を補強したというのだ。大リーガーの経営を眞似たところで野球は強くならない。石毛監督もさぞかし無念だろう。

2003年4月23日
ナゴヤドーム
⑤中日3勝2敗

ＢＳ7

中日	阪神
0	0
0	0
0	0
1	0
2	2
0	0
1	0
0	0
×	0
4	2

投
●藤田
柴田
安藤
藪
伊代野

打
今岡 2
赤星 1
金本 1
藤本 1
5

またも川上に（24試合目）

どうした井川。初回いきなり4点と取られるなんて藪と同じだ。テレビを見ながら一昨日の見事な逆転劇を思ったが、川上のもとでは駄目だろうとあきらめた。

あたりのでてきた福留を三振、井端を右飛と、調子の良かったのはそこまでで、相性の悪い立浪に右前打を打たれたあと、アレックス、クルーズの一発を怖がるあまり、2―0から四球をだしたのが命取りとなった。続く関川は、左投手だのに大西にかわって先発メンバーに選ばれてハッスルしていた。チェンジアップを引っかけるようにして打った打球は右中間を破る2点タイムリー二塁打。動揺したところを、中野が追い打ちをかけるようにして、左中間を破り、さらに2点を追加した。

井川の井川たるところは、2ストライク取ったあと、ボールになるチェンジアップを外角に決めてこそである。井川の生命は、直球とチェンジアップのコンビネーションである。リードする矢野の頭には、ヤクルト六回戦のことが残っていたのだろう。その日も昨日と同じようにチェンジアップが決まらず、直球中心のリードをしたが、後半へばりがきて、八回高目にきたところをラミレスに3ランを打たれて、万事休した。

この中日戦も、矢野はなんとか井川本来のチェンジアップを取り戻さそうとするが、思うようにならない。ＮＨＫ衛星放送の解説している今中さんは次のようにいう。スローカーブでカウントを稼ぎ直球で勝負した今中さんがいうことは説得力がある。「変化球を打たれたことが頭に残っているかぎり、腕を思い切り振れないものです。忘れることです」

先取点が何よりの薬だ。打撃陣が井川の心に余裕を持たすことだろう。余裕を持った心でチェンジアップを投げさすことだ。

スポニチの一面は、珍しい井川のしかめ面がのっていた。

その横には、鬼門、悪夢、金縛りの３文字が踊っていた。早く立ちなおれ井川。

2003年4月24日
ナゴヤナイター
⑥中日４勝２敗

ＢＳ７

中日	阪神
4	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
1	0
0	0
×	0
6	0

投
●井川
安藤

打
藤本２
金本１
桧山１
片岡１
５

コラム／富島球場（二）

人との出会いもあれば、本との出会いもある。富島球場のことを想い出しているうちに、ある日古本屋で一冊の本を見つけた。

吉田留三郎著【漫才風雲録】である。

藤沢さんが、杉山さん、木津川さんとの座談会で、著者について、こんなことをいっている。

「留ヤンにふさわしい亭号を、あの人に言われましてね、わたし〈流水亭〉とつけたんです。その頃、うちの親父がたまたま自分に親しい者に、なかばふざけた号をやろうと言いよって、僕は辰年生まれだから〈竜仙〉。みんなに仙人の号をやろうというわけ。そして留さんは〈市仙〉。街の仙人という意味だね。うちの年とった親父さんでも留さんにはやっぱり市仙的イメージをもっとった」

本の表紙も、そんな言葉にふさわしい加藤義明さんの切絵による砂川捨丸さんの肖像である。

私は本を開いた途端、お金を握って、店主のもとに走った。一頁に私が少年時代に過ごした町の、ひと世代前の大正時代のことが書かれていた。長くなるが引用したい。

「私の遠い外戚に野田生まれの人間がある。根っからの下町人間で、自分からは〈野田の地下のクスブリ〉と称している。一夕、このジゲのオッサンと会談する機会ができて、おぼろげの私の記憶を

確かめるとともに、昔の端席の状態、つまりは大阪芸能界の側面を覗き見ることができた。

野田で第一に浮かんでくるのは〈十六館〉という妙な名の寄席である。これは今でも残っている。中央市場の西、昔はここに富島の渡しというのがあって、野田から九条へ行く近道になっていた。〈十六館〉は、現在の中央市場の大冷蔵庫か、それに隣接した辺にあった。

立地条件も規模も、端席の見本のような小屋であったが、例のジゲのオッサンの言によれば、内容は相当のものだったらしく、当時の真打の大物が全部足を運んでいたことがわかる。松鶴、染丸、春団治、円枝などの名が出てくる。顔ぶれから考えるに、吉本が大阪の演芸会を制覇した後の時代、つまり大正末期から昭和初期にかけてのことを考える」

そういえば、祖母から初代春団治が、赤い人力車に乗って家へ来たことがあるといっていたのを思い出した。その時は、そんな一流の人が家へ来るはずがないと信用しなかったが、家の近くに寄席があったとすると、祖母のいったことも、あながち嘘をついていたとはいえなくなると、本を読んで思った。

十六町は私の生まれた町である。正確にいうと、私の本籍地は、福島区（当時此花区）十六町二四番地である。住居表示法という悪法で、十六町は現在野田五丁目となっている。

大阪の町で数字をそのまま読む町は少ない。淀川を渡ったところに十三という町名の町があるが

「ジュウソウ」と読み「ジュウサン」とはいわない。淀川の十三番目の渡しがあったところと、はっきりした意味がある。十六にはどんな思いがこめられているのか、かねがね気になっていた。そのうえ、入学した中学校が新設校で、十六番目に出来た学校ということで、〈府立第十六中学校〉と呼ばれていた。入学するとすぐに、天王寺から池田へ移転、今の池田高校である。

そんなことも重なって、ますます気になった。近所で小さい時から可愛がってくれた、源さんに聞いてみた。十六中学に入学した年である。彼は町で一番の物知りといわれ、いつも緑のベレー帽をかぶっていて、なんで生活しているのか、誰も知らない。その源さんはしばらく考えていたが、おもむろにこう説明した。

ばくち打ちがよく口にする言葉に、〈いちろく天地さいの目〉というセリフがある。そこから、一と六で十六。もう一つは、ばくち打ちの多いところには必ず質屋も多い。一と六をたすと七で質屋だ。そんなことから十六町になったという。

そういわれてみると、銭湯で背中にいれずみをした人を見かけたし、安治川沿いに賭場が開かれる長屋があって、町の人々は昔の色里のあとだといい、大人達は子供達が近づかないようにしていた。

源さんは話を作るのがうまい。どうせ、まゆつばものと思ったまま今まできたが、これを機会に町名辞典を調べてみた。やはり十六町については何の記載もなく、ただ数字のついた町名として、ほか

に十八条（淀川区）、十二軒町（東区）が分かっただけだった。それに反して、向こう岸の富島町（西区安治川一丁目）については、安治川に大仏島という州があって、のちに開発されて富島新地となり、江戸期は大阪三郷天満組にはいったとある。渡しも球場も、川向こうの先輩の町名を拝借したことになる。

空襲で焼けるまで、私達が住んでいた家は、さきの富島球場のところで触れた煙草屋、そのあと北に、うなぎ屋、駄菓子屋と続き、そして町の人々が〈ハイカラ筋〉といっている幅五米ぐらいの道が、西北に五〇米、八軒道路（旧安治川北通り）まで、やや斜めに通じている。普通の道で何がハイカラなのか、わからない。

その道の北隣りの三角形の角地に、私の家があった。そして、同じ棟続きに銭湯の〈百足湯〉があるという風変わりな家だった。百足湯の名前は、字のとおり足が百本、人が多く来るようにと名付けられた銭湯で、人に貸していた。

六畳の父母の寝室が、女湯の脱衣場に通じていて、冬の寒い日、祖母と母は扉をあけて銭湯に行った。また、便所の扉の向こうは、女湯の湯船で便所にはいると湯水の音、桶の音、女達の嬌声が夜遅くまで聞えた。

ある日、いたずら心を起した私は、持っていたナイフで扉を突いてみた。長年の湯気ですっかり腐

食している扉は、いとも簡単に穴があいた。

中学校（旧制）へ入学したばかりの私は、通学に富島渡しに乗って、川向こうからやってくる女生徒に淡い恋心を抱いた。そして、彼女は夕方になると母と一緒に渡しに乗って、百足湯へやって来た。女生徒の湯浴みする姿を穴から覗けると思うと胸がときめいた。

私は不安と期待を抱きながら、おそるおそる覗いてみた。ところが湯煙りで人の姿らしい物がぼんやりと見えるだけだった。

異様な興奮は途端に失望と安心感にかわった。安心感というのは、もし見えたとしたら、気になって勉強もできなくなるだろうと心配したからだ。

このことが教訓になって、それから私は夢のような希望は持たないことにした。

〈百足湯〉の隣りが平田医院で、魚釣りの好きな先生は診察が終わったあと、富島渡しの浮桟橋でよく夜釣りを楽しんでいた。

私が始めて人の死を見たのは、平田医院の土間である。その人はふぐを食べ、ものすごいケイレンしながら死んでいった。

中央市場の正面入口をはいって南側の魚市場のとっかかりに、ふぐの調理台があった。その人は知っていて、その美味に命をかけて、あえて挑戦したのか、それとも知らずに臓物を食べてしまったのか

わからないが、命を落してしまった。

平田医院から二軒の仕舞屋が続き、西に曲ると突きあたりに妙見宮があった。祖母の話では、祖父が安治川の工事をしている時、川の中から仏像が出てきて、当時能勢の妙見さんの信者だった祖父母が、小さなお宮さんを建てて、その仏像を祭ったという。

その妙見さんも井戸と桜の木を残して、空襲ですっかり焼けてしまって、今は地元の婦人会の人達が、小学校の泰安殿を利用して、お宮さんのかわりとしている。泰安殿には三方の上に、三巻の巻物と摂州能勢のお札を祭っている。私はお参りする度に、巻物を広げてみたい誘惑にかられる。「教育勅語」ではないかと思ったりしている。

私の家の前の〈いよ屋〉は、愛媛県出身の人で、立ち飲みもできる酒屋だった。町は中央市場で働く人が多く、夜明け前から働き出し、昼の三時頃には仕事を終えた人達が集まった。

仕事が終わってすぐ飛び込んできた人達、前の〈百足湯〉で一風呂浴びてきた人達が、入り交って酒を酌み交した。

手鉤（てかぎ）を刀のようにして腰に差している人、鱗のついたままのジャンパーを着ている人、ゴム長の人、鉢巻きをしたままの人、鉛筆を耳にはさんだ人、湯上がりで洗面器を持って、さっぱりした身なりの人、そんな人達の中で源さんの緑のベレー帽は、ひときわ異彩を放っていた。

そして、客がたてこんでくると、誰いうとなく壁に立てかけてある床几を店の前に並べ、たちまち宴会場になった。そんな時、店の前を通ると、私はよく源さんに呼び止められた。

「おい!!ぼく、あれ頼むわ、きゅんとしたやつ」

あれとはこんにゃくのことで、私は妙見さんへの露地の入口にあって、子供達の間で一番人気のあった駄菓子屋〈妙見〉へ走った。

そこで煮つまって縮かんでいる三角形のこんにゃくに、芥子をぬり串にさして、源さんのところへ走って帰った。そして二本を源さんに渡し、一本をお相伴に預かった。〈妙見〉の関東だきと一銭洋食は大人達の間にも人気があった。とくに昆布出しのよくきいた関東だきを、近所の人達は夕食のおかずにした。

また、ハイカラ筋に面した家の板塀に、川向いの九条茨住吉神社の敷地にあった映画館〈高千代座〉〈住吉館〉から広告のポスターを張りにきた。そしてそのお礼として、二枚の招待券をくれた。私はその一枚を源さんに渡して映画館へよく連れて行ってもらった。

源さんに教えて貰った遊びとして印象に残っているのは、将棋や百人一首もあるが、何といっても中央市場で遊んだことが一番深く記憶に残っている。

〈いよ屋〉のうしろは、中央市場の板塀で地面とのすき間を這って侵入し、〈いよ屋〉の幸雄さんと、

大きな生け簀の鯉をすくいに行った。横の大きな建物で働いてる人々が、帰るのを確かめて、すくいにかかったが、網の柄が短くてすくえず、生け簀へ落ちそうになった。その怖かったことが、今でも蘇ってくることがある。

一九三四年の第一室戸台風にあったのは、四歳の時で、断片的な記憶しか残っていないが、高潮で町を水びたしにした泥水が引き始めると、大人達が集まって魚を手づかみにしていた。今思うと、おそらくこの生け簀の鯉が溢れ出したものだろう。

当時中央市場は、私達の絶好の遊び場だった。毎日学校を終えると、すぐに中央市場へ走った。そして川魚問屋の前の溝を覆っている網目の鉄板をあけて廻った。逃げたうなぎがいることがある。それをつかまえると、私達はうなぎ屋へ走った。当時のお金で五円、結構小遣いになった。

その当時の中央市場への輸送は、西成線、今の環状線内回り線〈野田駅〉を出たところで、中央市場への引き込み線があり、明治時代の玩具のような機関車が、妙見筋を横切って中央市場へ荷物を運んだ。

冬の日には、貨車の上に雪が積っていたりして、踏切で汽車が通るのを待ちながら、幼い心に旅情を感じたことを思い出す。引込線は中央市場の西門のところで東南に別れていた。東の終着駅は野菜、果物、漬物市場、南の終着駅は魚市場であり、そのプラットホームに冷蔵庫があり、夏になると私達

は入口に立って、怒られながら涼をとった。

海上輸送は、漁船が瀬戸内海、紀伊水道を通って大阪湾へ航行し、安治川を東へさかのぼり中央市場の南岸に水産物を運んだ。

夏休みには、安治川を大漁旗をはためかせながら、漁船が西瓜を山のように積んできた。私達は舟を見つけると、競争するようにして、安治川沿いを中央市場へと走った。

そして船が着岸すると、船員が踏み板を渡し、市場から来た人が一列に並んで西瓜を手渡して、運搬車へ積み込んだ。私達は頃を見計らって、一人が西瓜を運んでいる人の間を横切った。リズムを狂わされた人が西瓜を落す。その西瓜が中央市場の人たちをはじめ船員、私達のおやつとなった。それは、なれあいになっていて、夏休みの定例行事みたいなものだった。

富島球場の思い出からスタートした白い帆を張った追憶の舟が、吉田さんの本の追い風をうけて航行を始めたが、次々と起る少年の日の郷愁と、感傷という優しい風に広い海を迷走しだしたようで、針路を元に戻さなければならない。

私は〈十六館〉という妙な名前の寄席があったという中央市場の大冷蔵庫を探さなければならないと思った。

私達が涼を取った記憶に残っている冷蔵庫は、魚市場への引込線の貨車のプラットホームにあって、

運んできた魚や、海産物を一時保管するもので、吉田さんのいう大冷蔵庫といったものではない。

中央市場は、空襲と度重なる改装で、昔の面影はないので、資料によってその位置を確かめるしか方法はないだろう。私は中央市場の二階にある資料室へ出かけた。

管理棟は十六階の建物で、空襲で焼け残った。妙見筋の東側の民家を買収して、一九九二年に建設された。買収した民家の中には、賭場が開かれたという長屋や、門戸君の家もあった。

資料室の図書はさすが野菜、果物、そして魚にかんする図書が多かったが、その中から私は小寺正三さんの【大阪繁栄史】に、中央卸売市場と大冷蔵庫のことがのっているのを見つけた。小寺さんは俳人であるだけに、香気のある文章は魅力があった。

昭和三年十二月十一日の大阪毎日新聞の「日本一の冷蔵庫の開業」という記事を引用しながら、小寺さんは次のように説明していた。

「年が明けると西野田十六町、船津橋の北詰で日本一の冷蔵庫が開業する。大阪市が八十五万円をかけて建てたもので、何しろ延建坪千八百坪の四階建に、三十坪の部屋が三十もあるというべらぼうな冷蔵庫の化け物である。

この冷蔵庫の冷房方法はかん水循環式を採用し、荷物昇降機を二台そなえつけた。

バナナ追熟室は八百平方メートルで、その地下室は九十個の小さな部屋に区切り、各室の上部に出

入口が設けられ、揚水ポンプで自動排水させ、上部上屋は加工室を兼ねて防熱の用をなし、一回の追熟量約六十籠目方にして二、五万キロの追熟能力をそなえていたようである。当時バナナは南九州の一部以外は、台湾より未熟のまま搬入されてセリに付され、仲買人の手に移ったあと、どうしても追熟作業を必要としたからである。

生け簀は鉄筋コンクリート箱形水槽のもので、水深六、七メートルまでいろいろな深さに調節することができた。水源は土地を深く掘って地下水を湧き出させるようにした井戸で、冷蔵庫用水と併用した。この生け簀はおもに鯉、鮒などの一時的な養魚に使われた」

私は冷蔵庫から出る水を生け簀の水として、鯉や鮒を飼う知恵に感心するとともに、この生け簀こそが鯉をすくいにいって、落ちそうになったあの生け簀であり、第一室戸台風の時、私の家の前を泳いでいた鯉や鮒は、この生け簀を溢れ出したものに違いない。そして、その横の大きな建物が、吉田さんのいう、大きな冷蔵庫であり、〈十六館〉という妙な名前の寄席があったところだ。それは〈いよ屋〉の裏、なんと私の家の前といっていい程の距離にあったことになる。そして、八軒道路（当時安治川北通り）から私の家の南側を、斜めに通っているハイカラ筋を延長すると、驚くことに〈十六館〉へ通じる。初代春団治もこの道を、赤い人力車に乗って走ったのだろう。

ハイカラという言葉は、川向うの川口の居留地から広まった大阪弁といわれ、西欧かぶれした人を

ハイカラさんといった。富島球場も、当時の人々にはハイカラなものだったに違いない。

また、ひと昔もふた昔も前のことだが、安治川の開削によって両岸に新地ができ、現在の中央市場あたりは、〈新堀新地〉と呼ばれていた遊里だったという。私の家の付近は、色里の雰囲気が色濃く残っていたのだ。

おそらく、西欧かぶれした女性達が、ハイカラ筋を通って色里へ通ったのだろう。ひょっとすると、源さんはそんな色里で生まれた人かも知れない。さらに飛躍して、源さんは吉田さんのいう〈ジゲのオッサン〉のことではないだろうか。

その理由として、源さんがベレー帽を野球帽にかえて、富島球場のバッターボックスに立った時、〈いよ屋〉の飲み友達が飛ばした野次が、今も私の耳に残っているような気がする。

「野田のクスブリ頑張れ!!」

そんな思い出に浸ったあと、私は十六町（現在福島区野田五丁目）付近を歩いてみた。

その時はじめて、吉田さんのいう大きな冷蔵庫が当時のまま残っているのに気がついた。場所は想像していたとおり〈いよ屋〉の真裏だった。

建物の側面に〈中央冷蔵〉と大きな文字で表示しているにもかかわらず、どうして見逃したのだろう、なさけなくなった。

戦禍と度重なる拡張工事で、私の知っている中央市場の面影がなくなっているという先入観が強すぎたのだ。妻はそんな私を「せっかちの鳥もち」という。なぜ鳥もちなのかわからない。

思い出と現実の違いは、それはそれで置いておこうと思う。

私の生家、百足湯、平田医院、二軒の仕舞屋は、海苔の〈大森屋〉になっている。

監督も驚く大逆転（25試合目）

「こんなゲーム始めて見た」

星野監督がいった八回一挙9点の猛攻。大逆転劇に甲子園は沸きに沸いた。

三回、伊良部、浜中のタイムリーで3点を先取したが、伊良部が野村、前田に変化球をねらわれ、八回表を終わって6点差、テレビはあきらめて球場を後にする人達を写していた。広島はエース黒田を温存しようと、マウンドにニューマンを送った。

片岡の三塁、そして矢野の投手へのボテボテの内野安打、二つ続くと勝負の流れが阪神に向いて来たのかと少々の期待をもった。と同時に伊良部が勝利投手をふいにし巨人戦のことが頭をよぎる。あの時は阪神が6点リードしていた。

藤本が1―1から厳しい球を3球続けてファールにしたあと右中間を深く破った。三塁打で2点を返した。伊代野の代打中村（豊）が移籍後初安打で3点、広島の投手が玉木にかわる。期待された今岡は二塁フライだったが、赤星が、一塁手のグラブを弾く足の二塁打、金本死球で一死満塁。今季満塁で5打数4安打の満塁男浜中に打順が廻った。浜中はカウント2―0からの4球目一塁方向へ

ファールフライを打ち上げた。これを一塁手淺井が目測を誤って落球。浜風の悪戯だろうが、こんなことを甲子園には魔物が棲むというのかも知れない。動揺した玉木は浜中に死球を与えて押し出し、一打同点といったところで桧山、あたっていない桧山は、高目のクソボールを気合いで打った。強烈な打球は投手のグローブをはじき遊撃シーツの左を抜けて2走者が生還した。グローブを出さなかったら、遊撃併殺打に終わっていただろう。一死、二、三塁で代打八木の大きなレフトフライで、浜中が勝ち越しのベースを踏んだ。なお、矢野四球、藤本、中村（豊）の1イニング2安打でこの回9点、3点をリードした。14人の打者がよく粘り、次から次へとつないで行く、本塁打なしの8安打2死球で9点、今年の阪神野球だ。

　カメラは情け無用、広島のベンチを写す。悲しげな大男ニューマンの横で、誰かがうつむいて顔を上げない。泣いている玉木だろう。そんな玉木を黒田がかばっていた。

2003年4月26日
甲子園ナイター
④阪神3勝1敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
3	0
0	4
1	0
0	2
0	0
9	4
×	0
13	10

投
伊良部
藤川
柴田
〇伊代野
Sウイリアムス

打
今岡3　矢野3
浜中2　藤本2
中村豊2赤星1
金本1　桧山1
伊良部1　片岡1
17

下柳いきなり6失点（26試合目）

野球は面白くて怖い。昨夜に引き続いて、今日も八回広島の永川を攻めた。金本が中前打すると浜中が四球、桧山死球で無死満塁。矢野が代打に出た。５３，０００人の大観衆やテレビで見ている人達は、昨夜の一挙９点をあげ６点差をひっくり返した大逆転の夢を見た。一度あれば二度あるという格言もあれば、柳の下に泥鰌は一匹。奇跡は二度と起こらないといった格言もある。

大観衆の目を集めた矢野の打球は遊ゴロ、併殺逃れの１点のみに終った。なお、一死になって、代打の八木が四球を選び、再び満塁。二回右前タイムリーで１打点をあげている藤本に打順が廻ってきた。藤本は昨夜、大逆転の口火となった三塁打を打っている。再びスタンドが興奮した。しかし、そううまくはいかない、最悪の遊ゴロ併殺打に終ってしまった。スタンドの歓声が悲鳴に変る。

スポニチの長池評は厳しい。三回一死三塁で浜中は０―３から淺い中飛に倒れた。シンに当てられないコースだったらスイングをしなくていいカウントだった。四番打者なら、同じストライクでもヒットになる球とそうでない球を見分ける選球眼が必要だという。

敗戦の中で、赤星の２盗塁と藤本の２安打１打点１盗塁。守りでは、安藤、藤川、金沢、吉野のリリー

フ陣が二回以降無失点に抑えた。

一回、下柳が2ランと満塁本塁打で失った6点はあまりにも重かった。3四球と、一塁カバーの自分の拙い守備と、そしてパリーグで経験のない大観衆に、さすがベテランも動揺したのだろうか町田と石原に投げたスライダーは、あまりにもコントロールが甘かった。

本塁打を打たれたあとのクローズアップされた下柳の悲しそう顔を見て、女房が横からいった。「宇野重吉に似ているよ。優しそうな顔」いわれてみればそうかなと思う。今の若い人に宇野重吉といってもわかってもらえまい。寺尾聡のお父さんといえば分かってもらえるだろう。

2003年4月27日
甲子園
⑤広島2勝3敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	広島
0	6
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	6

投
●下柳
安藤
藤川
金沢
吉野

打
金本2
藤本2
赤星1
5

代打八木が勝利打点（27試合目）

ゴールデンウィークの始めに、投打にわたって人気のあるムーアをもってくるあたり、星野監督の営業手腕もたいしたものだ。

そのムーアに、好投していても、1イニングは敵にビッグイニングを与え、そのあと、また好投するという悪い癖がでた。それは六回にやってきた。斉藤に安打を許し、二岡に四球を与えたあと、阿部のボテボテのゴロが内野安打になって、ムーアの表情が変った。案の定ペタジーニに満塁本塁打を打たれてしまった。赤星の足とバントで3打点を稼いでいた金本の好打と片岡の本塁打がふいになって5対4と逆転された。関西テレビで解説していた西本さんは「野球の面白さはこれから始まる」と平然とされていた。そのとおりその裏、桧山の安打と片岡の二塁打で同点、なお矢野のバントで一死三塁、藤本のスクイズが投手フライとなって、チャンスが一瞬にして消えてしまった。流れは巨人へ。代打黒田のファールにできる三塁ゴロを片岡がフェアーグランドでキャッチして一塁に生かしてしまう。川相の犠打のあと斉藤が右前打、浜中の好返球を矢野がポロリとやって再び勝ち越され、なお走者二塁でムーアが降板、中継ぎ陣が活躍する。藤川が二岡を左飛に、吉野が阿部を三球三振。八回は

柴田がペタジーニに二塁左へ強烈なゴロを打たれたが、今岡の好守備で抑え、安藤が福井、仁志を三振に打ちとって勝利投手となった。八回の裏、金本三振のあと、浜中、桧山の安打が続き、二死ながら一打同点のチャンスが矢野に廻ってきた。矢野はスタンドの大歓声に動揺している久保の初球を中前へ、四回二塁への送球ミスでの失点を取り戻し同点とした。続く藤本はスクイズの失敗が尾を引いている。1―3からの好球を見逃して四球。代打の八木が登場する。八木の打球は三遊間のゴロを二岡が横飛びでキャッチしたが間に合わない。阪神が再びリード。九回はウイリアムスが最終打者清原を三振に打ちとって熱戦が終わった。

勝っても、状況判断しない浜中の走塁、片岡、矢野の守備を指摘する監督の目は厳しい。

2003年4月29日
甲子園ナイター
④阪神3勝1分
毎日ＭＢＳ
関西テレビ

阪神	巨人
1	0
1	0
1	0
0	1
1	0
1	4
0	1
3	0
×	0
8	6

投
ムーア
藤川
吉野
柴田
〇安藤
Ｓウイリアムス

打
金本3　今岡2
桧山2　片岡②
浜中1　矢野1
八木1　赤星1
13

水戸っぽ井川（28試合目）

阪神の勝った翌日、朝風呂をわかしてスポーツ新聞を読むのは、私の至福のひとときである。今日のスポニチの一面の写真は、井川の球を投げたあとのダイナミックなフォームだ。昨年のオープニングゲーム巨人戦で、2対1と完投勝利し、我々の感動を呼んだ時の写真と同じである。写真の横には「エースの復活なくして優勝なし!!」と。

テレビが始まったのは、藤本の二塁打を井川が送り、今岡の犠飛で1点を返したところだった。初回、斉藤の一ゴロにベースカバーが遅れたことでペースを乱し、井川は無死満塁でペタジーニを迎えた。ラジオは映像がないのでいろんな事を想像してしまう。一回に4点をとられた中日戦のことが頭に浮んだ。幸いペタジーニを二塁併殺打で打ちとり、最少得点に抑えた。しかし二回には、高橋尚にスクイズをきめられる。

井川の調子の良い時に見せる、あの歯をむき出しにし、額にしわを寄せ、目をつり上げ十二神将のような厳しい表情を見せたのは、四回の表、二死二、三塁から斉藤を2―1から外角低目のストレートで三振を取った時である。それ以後、チェンジアップも決まり、調子を完全に取り戻した。その裏、

打撃陣が井川を援護した。

浜中四球のあと、桧山、片岡の連打で同点として、なお一、三塁。矢野がヒットエンドランを失敗して片岡が二塁で憤死。矢野は2―0から粘って、左翼スタンドへ快心の2ランで失敗を帳消しにした。グランドを廻りながら、矢野は雄叫びをあげていた。

六回には、金本が右中間二塁打、浜中の三遊間安打、桧山の一ゴロで一死二、三塁から片岡の中前打で2点を追加し勝利を不動のものとした。九回はウイリアムスで代打清原を今日も三振。井川は〝水戸っぽ〟。最近話題になった人といえば、ガンでモルヒネを打ちながら亡くなる寸前まで映画をとり続けた深作監督が〝水戸っぽ〟だ。井川も愚直なまでの頑固さを持っている。

2003年4月30日
甲子園ナイター
⑤阪神4勝1分
毎日ＭＢＳ
ＡＢＣテレビ

阪神	巨人
0	1
0	1
1	0
3	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
6	2

投
〇井川
ウイリアムス

打
藤本2
片岡2
矢野①
今岡1
赤星1
金本1
浜中1
桧山1
10

巨人に5連勝（29試合目）

書き出しは、どうしても攻めのことになるので、今回は守りのことから始めよう。それも九回のことから。

初回、またも藪の悪いくせがでて、2安打1四球、一死満塁のピンチを迎えたが、今日の藪は冷静で、後藤の犠飛1点に抑え八回まで好投した。3対1のリードで阪神の勝利の方程式ウイリアムスが登場した。3連投である。今日まで7セーブで防御率0で「自分が投げるという事はチームの勝利を意味する」と自負している。そんな時が危ない。私の心にふと不安がよぎる。代打川相がベテランらしく初球を三遊間安打。続く仁志に初球をぶつけてしまう。あっという間に無死一、二塁。佐藤コーチが通訳を連れて走る。その間、カメラはベンチの中を写す。藪から笑みが消えていた。

ウイリアムスが仕切り直す。彼は仕切る時、口許に顔の筋肉を集めるので、前歯が向き出し下口唇の下の小さな山羊髭が、かすかに動く。鈴木のバントが矢野の前でバウンドした。三塁で走者を刺せる、矢野は素手で取ろうとしてジャグルしてしまい、三塁へ間に合わないとみて慌てて一塁に投げた。ワンバウンドになった球が大きくそれる。今岡が横飛びで捕球した。隠れたファインプレーだ。

一打同点で代打清原が登場し、一塁側へファールフライを打ち上げた。矢野は必死になって追い、ベンチの屋根の上で、ミットにあてながら落としてしまう。

今日の矢野は、1打席で止めたバットに当った打球が顔面を直撃しベンチの肝を冷やした。矢野の厄日だ。清原に打たれるという不吉な予感がする。

ウイリアムスは、あくまで冷静だった。清原を三振、代打福井をポテンヒットになりそうな遊撃フライに打ちとり、8セーブをあげた。打の方では五回、今日も赤星と金本の二、三番コンビと、連日にわたる片岡のタイムリー二塁打で勝ち越した。これで、巨人に5連勝、今年の阪神は、ひと味違う。何かやってくれそうな予感がする。

2003年5月1日
甲子園ナイター
⑥阪神5勝1分

サンテレビ

阪神	巨人
0	1
0	0
0	0
1	0
2	0
0	0
0	0
0	0
×	0
3	1

投
〇藪
吉野
安藤
Sウイリアムス

打
今岡2
赤星2
片岡2
金本1
矢野1
8

関本守備で貢献（30試合目）

タラ（鱈）は北海道といったのは、名将鶴岡監督である。いつまでも負け試合のことを愚痴るなということだろう。悪いタラである。悪いタラもあれば、良いタラもある。どのスポーツ紙にものっていない、そのタラのことを書こう。

5対1とリードしたところで、星野監督は好投の伊良部に代打を送った。五回、稲葉への初球直後、伊良部の右足の指がつった。猿木トレーナーが、マウンドで、スパイクを脱いだ中指をもみほぐした。前代未聞のことである。数分後試合再開。稲葉中飛、宮本中前打のあとはベッツをフォーク、ラミレスを直球で連続三振にとったが、監督は大事をとって伊良部を97球で降板させた。

伊良部の代打に関本が登場した。今シーズン始めてである。三振に終わったが、赤星四球、金本の遊撃内野安打のあと、浜中のタイムリーがでて、駄目押しというべき1点を追加、4点をリードした。いつもの守備がため、三塁田中、一塁アリアスと思ったが、三塁は関本がそのまま守備についた。八回の攻撃に関本の打棒を生かし、投手を六番にいれ、チャンスがくれば代打を送って、なお点を取ろうという監督の魂胆だろう。

伊良部を継いだ金沢は、七回、三人を簡単に打ち取ったが、八回、ラミレス、鈴木を2―0と追い

こみながら、一死二、三塁のピンチを迎えた。チャンスには強い古田の打球は、三塁手の頭上で大きく跳ねた。幸い長身の関本である。飛びついて、ジャグルしながら一塁をアウトにした。田中だったらヒットになっていた。その裏、関本は二塁手のエラーで出塁、そこで代走田中、今岡のバントで二塁、赤星のとどめの左前打で追加点をあげた。この試合はチームの波に乗り遅れている男達が活躍した。右わき腹痛で欠場した片岡にかわり17試合ぶりにスタメン出場したアリアスの2安打1打点。浜中は真中の右飛を背走しながら好捕する超ファインプレーとともに、2安打1打点の活躍をした。

九回、安藤は三人を二塁ゴロに打ち取り、初セーブをあげた。

いいたいのは、いつものとおり、田中が三塁だったらこの試合は、どう転んだかわからない。そのタラはいいタラだといいたいのだ。

2003年5月3日
甲子園ナイター
⑦阪神4勝3敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
0	0
0	0
0	0
3	1
1	0
1	0
0	0
1	2
×	0
6	3

投
〇伊良部
金沢
S安藤

打
浜中2
アリアス2
赤星2
今岡1
金本1
矢野1
9

監督も認めた継投ミス（31試合目）

阪神が負けた翌日は気が重い。気分転換のため、尼崎市の農業公園の牡丹を見にいこうと家を出た。五月晴れの道を自転車で走る。家を出て西へ、176号線、空港線を越えると猪名川に出る。利倉橋を渡って、右岸の堤防をさらに上流へ走る。しばらくすると、左手に園田競馬場が見えてくる。草競馬とはいえ、敷地が広いのに驚く。本馬場にはいってきた馬が左右に散らばって行く。緑の中のカラフルな騎手服が牧歌的な風景を演出する。

農業公園についてみると、盛りである筈の牡丹の花は、ところどころしか咲いていない。四月下旬の雨風で散ってしまったらしい。残り花はゴールデンウィークのために残したらしいが幽艶な美が失われている。「白王獅子」の白色の大輪の花も汚れた塵紙のようだ。牡丹のためにも、早く摘みとってほしいものだ。

野球の話。監督が継投ミスを認めることが、これほど大きなニュースになるのが分からない。スポニチによれば、星野監督がミスを認める発言は中日時代を含めても珍事だという。藤本の三塁打、今岡の犠飛で同点に追いついた直後の守り、先頭のベッツを左の柴田が抑えると伊代野を投入、ラミレ

スを空振りの三振、見事だった。ところが鈴木に右前打を浴び、古田は死球、真中に中越え二塁打を打たれ、城石にも連続二塁打を浴び3点を失った。

名投手だった評論家は、吉野投入の選択肢があったというが、それは素人でも分かっている。監督の心理を探ってほしい。私の珍説を書きたい。

伊代野は星野好みの向かっていく度胸のある投手である。例え打たれてもメゲルような柔い男ではない。大成さすためにも続投、そんな思いがよぎったのだろう。決して継投ミスではない。左封じのシンカーを覚えれば高津のような投手になる素材だ。監督のミスは、下柳が降板した五回、捕手の野口をかえなかったことだ。下柳の時だけしか出場しない野口に情けが移ったといえないこともないが、伊代野のムキになる闘争心をリードするには、矢野の年期が物をいう。考え過ぎということか。

2003年5月4日
甲子園ナイター
⑧ﾔｸﾙﾄ4勝4敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
1	1
0	0
0	0
0	1
1	0
0	3
0	0
0	0
0	0
2	5

投
下柳
柴田
●伊代野
金沢
藤川

打
今岡1　赤星1
金本1　浜中1
ｱﾘｱｽ1　野口1
藤本1
7

ムーア完封（32試合目）

登板する前日、ムーアは自分で頭を剃ることにしているというサンスポの記事を読んで、私は古い映画「ハスラー」を思い出した。撞球の賭博師に扮したポールニューマンが、徹夜の勝負に負けがこみ出し、洗面所で丹念に手を洗い、髭を剃り、鏡に自分の顔を写してネクタイを締め直すシーンのあったことを。ムーアは、自分が瞬間湯沸器のような性格であることを自覚していて、頭を剃ることで禅僧になったつもりでいるのかも知れない。

昨日の試合で唯一のピンチは、五回一死一、二塁、笠原球審の判定に苛立って、冷静さを失いかけたが、宮出をカウント1―3から渾身の140キロの直球で一邪飛。続く代打佐藤真も中飛に抑えた。その結果、3安打9奪三振106球、三塁を踏ませない完封劇を4万8000人の前で披露した。矢野の好打（六回の本塁打）好リードも見逃せまい。

今シーズンの阪神は、野手の層が非常に厚くなったと感じるが、よく考えてみると、補強で活躍しているのは金本ぐらいだろう。野手だから投手は別である。去年活躍できなかった選手が活躍しているだけだ。矢野、赤星、桧山の怪我、藤本、片岡の自信喪失組が復活したことだろう。それと桧山の

一塁転向で、外野が充実し、アリアス、片岡がベンチに控える余裕ができたことが大きい。しかし、守備の不慣れが打棒に影響し桧山の打率は２２５で3試合ノーヒット。昨日は田渕コーチが限定休養という新語を作って、桧山はベンチ。かわって起用した八木が一回いきなり活躍するのだから、監督も笑いがとまらない。初回、一死満塁まで、初スタメンの八木が三遊間ゴロの安打で2点を先取しムーアを援護した。

守りでは、八回無死一塁から代打小野の三遊間のヒット性のあたりを横飛び、素早く二塁へ投げて併殺にした藤本のプレー。七回には鈴木の三塁線の深いゴロを好捕し、矢のような球を一塁へ投げた強肩のアリアス。そのアリアスは三回、二死から一塁に金本を置いて右中間にタイムリー二塁打を打っている。復活の兆しありアリアス。不慣れの一塁守備で、桧山の心労は大変なものだろう。選手会長の故、チームのため、己を殺す桧山選手に拍手を送ろう。頑張れ桧山!!

2003年5月5日
甲子園ナイター
⑨阪神5勝4敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
2	0
0	0
1	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
×	0
4	0

投
〇ムーア

打
赤星2
今岡1
金本1
浜中1
八木1
アリアス1
矢野①
藤本1
ムーア1
10

井川の捨て身のスクイズ（33試合目）

危険球に近い川上の剛速球が井川の顔面を襲った。普通ならば、バット放り出し後へのけぞって逃げるケースだが、二回目のスクイズのサインがでている。一回目はファール。井川はうずくまって、バットを顔の前に立ててボールをあてた。体を張ったスクイズだ。その球は投手の前に転がる。川上は球をグローブに入れたまま谷繁へ、好フィリングだったが、アリアスの足が谷繁のブロックをかいくぐった。川上と投げあって6連敗、谷繁の2ランのうっ憤を井川は二人の目の前で晴らした。スポニチの見出しは〝顔面スクイズ〟とあるが、バットを刀のようにして構えたので〝サムライスクイズ〟というのはいかがだろう。

このあと、左前打の矢野を三塁において、今岡がセンターへ犠打を打ち上げて同点とした。この今岡のバッティングが、調子の良くない井川を助けた。

―七回一死、一、二塁から井川の送りバントの失敗で二死一、二塁。あきらめムードの中、今岡は2―3から川上の失投を見逃さない。真中へはいるスローカーブをセンターへ運んで勝ち越した。打率も3割に近づく。さらに、赤星の足の内野安打で1点を追加、続く金本の集中力と迫力は物凄い。7球

をファールで粘った12球目、二塁左へ痛烈な球を放ったが荒木のファインプレーにあった。金本の真芯にあたったゴロがアウトになり、赤星のあたりそこねのゴロが安打となる。あらためて勝負の運、不運を思う。

このあと、余裕を持った星野監督の采配は見事なものだった。スポニチで解説している前中村監督は、〝采配の切れ〟という。

八回、中日のベンチが矢野を敬遠して、二死一、二塁から藤本と勝負しようとすると代打に八木を送り、遊ゴロ失で出塁すると、井川に代えて関本を送る。その積極的な采配に、関本はレフト左への二塁打で答え、勝利を確実にした。後半、８点を加え10対2の大勝である。

2003年5月6日
ナゴヤナイター
⑦阪神３勝４敗

ＢＳ７

中日	阪神
0	0
2	0
0	0
0	0
0	2
0	0
0	2
0	4
0	2
2	10

投
〇井川
吉野
安藤
ウイリアムス

打
今岡２
赤星２
アリアス２
矢野２
片岡１
関本１
11

エラーで藪の足引張る（34試合目）

雷のまじる激しい雨の音で目を覚ました。

春雷ならば、遠くの音として聞え、すぐに消えてしまう。五月ともなれば、もはや夏の力強い雷の音である。しばらくすると、雷の音も止み小雨になったが、あがる気配がない。初夏にしては肌寒い一日になるだろう。

〝人の振り見て我が振り直せ〟ということか、相手の3失策で大勝した翌日の試合に、今度は3失策で負けてしまった。

三回、一死後大西の二ゴロを、併殺をあせった今岡がファンブルして一、二塁、続く福留の投手強襲安打を藪が一塁へ悪送球して同点、さらに一死二、三塁から、立浪に左前へ2点タイムリーを打たれた。四回には無死一、三塁から、一塁走者荒木のスチールを矢野が二封したと思ったが、藤本がポロリとやってしまった。3失策がすべて失点につながった。

スポニチの対談で、西本さんは、藪にもっと図々しくなれという。三回一死二、三塁で自分のミスの責任を感じ過ぎて、勝負を急ぎ過ぎている。純粋すぎる。ワルになるために投球より気性を、星野

監督に習えと。

阪神は八回途中まで、５安打、今岡の本塁打１点だけ、毎回10三振を奪われ、復調した野口の低目のスライダーに手がでない。完敗である。

ファンとしたら、藪が好投して僅差で負けるより、思い切り負けた方がむしろあきらめもつく。選手達はどんな気持ちだろううか。プロの集団のことである。こんな日もあると水に流しているのだろう。

３番手の捕手淺井が七回、今季初めて藤川とバッテリーを組んだが、大西に本塁打を打たれ、打者二人で投手は交代した。次打者二人が左打者で柴田なのか、藤川へのムチなのか。いずれにせよ、監督は勝負を捨てない。

最後に、強肩好守の高波選手は井原監督好みの選手だそうだ。西武での健闘を祈ろう。

2003年５月７日
ナゴヤナイター
⑧中日５勝３敗

関西テレビ

中日	阪神
0	0
0	0
3	1
1	0
1	0
0	0
1	0
0	0
×	0
6	1

投
●藪
金沢
藤川
柴田

打
今岡①
赤星１
沖原１
片岡１
藪１
５

藤田乱調（35試合目）

「藤田投手は二段モーションから、オーソドックスの投球フォームにかえてますね。キャンプでやることを14日の間隔をあけて改造したのでしょうが無理ですよ。直球も変化球も全然キレがないですよ。一回も持たないでしょう」ＭＢＳで解説している中村さんが驚いている。テレビ放送がないので歯がゆい。

中村さんがいったとおり、アレックスに四球、福留に甘い球を狙い打たれて2ラン。立浪を遊ゴロに仕止めたが、谷繁に四球、穴の多いクルーズにまで右へ二塁打を打たれ、28球一回ももたずに降板した。かわった移籍後初登板の佐久本は森野を左飛に打ちとって、その回は2点に終ったが、その後9安打3本累打9点を献上し、試合は前半で終ってしまった。4月23日の中日戦で、藤田は直球が全く走らず、五回をもたず3点でＫＯされた。それから中14日、球威をつけるため2段モーションをよりオーソドックスにかえたらしい。

入団の年、前野村監督の指示で2段モーションからオーソドックスにかえ、3試合0勝1敗、防御率１４．７３と惨憺たるものだった。２年目の９月３日、広島に完投勝利した時は確か２段モーショ

ンだったと思う。

太陽という名前から、新聞の見出しになりやすい。昨年初勝利をあげた試合のあと次の試合で敗戦投手になった時、M紙は〝半月ぶり太陽つるべ落し〟と厳しい。

藤田は新屋高校出身、新屋は羽越本戦秋田駅から南へ二つ目の日本海沿いのところである。夕日が優しくて美しい。藤田の太陽はこの夕日なのだろう。

自分の道を自分で選ぶのがプロだ。イチローの頑固さを学んでほしい。監督にフォームをかえなければ一軍で使わないといわれて、彼は二軍を選んだ。最後に激励する意味で、ヘミングウェイが〝日はまた昇る〟で引用した旧約聖書の言葉を書いておこう。〝日は昇り、日は入り、またその出し処に喘ぎゆくなり〟

2003年5月8日
ナゴヤナイター
⑧中日6勝3敗

ＭＢＳ毎日

中日	阪神
2	0
0	0
3	0
4	0
0	3
0	0
0	0
4	0
×	1
13	4

投
●藤田
佐久本
藤川
柴田
金沢

打
今岡2
片岡2
淺井②
6

神話再び3連発（36試合目）

昨日の3連発の本塁打に気を良くして、朝から苗床の向日葵を庭に植えることにした。四月の初めにまいた種は20センチ位になっていた。去年は西側のフェンスに沿って植えたため、家が太陽を遮って背丈が伸びなかったので、今回は南側のフェンスに沿って植えることにした。花は女のものというのが常識だろうが、真夏の太陽に向って傲然と咲き誇っている向日葵の花は男の花だと思っている。去年は向日葵の花が咲く頃、阪神は首位戦線から脱落していたが、今年は5球団を大きく引き離して首位を走っていて欲しい。

昨日は今シーズン一番安心して楽しくテレビを見れる試合だった。伊良部に先取点の5点は、試合が決まったようなものだ。一回、今岡二ゴロ、赤星が中前打、金本三振、二死から浜中四球、片岡の技の右前打がきっかけとなった。赤星が帰って先ず1点、そのあと、アリアスの右翼越えの二塁打で3点、さらに矢野が四球、藤本が右中間を破る二塁打で追討ちをかけた。

三回には、先頭の浜中が4球目を中越え、片岡は5球目を左越え、そしてアリアスは2球目を左翼上段にたたきこんだ。

この3連発は、日本一になった85年4月の巨人戦でのバース、掛布、岡田の甲子園バックスクリーン3連発以来の快挙である。

矢野が4連発を狙っている。テレビの前で新記録を期待したが、矢野は四球だった。この四球を足場にして3点を追加して6点、三回までに11点をリードした。中日戦の2連敗が嘘のようだ。

この大量のリードにも、伊良部は慎重さを失わない。一球一球に意味がある。直球にスピードがあるので、変化球が生きる。その緩急自在の投球は打者をほんろうしていく。七回中村（泰）にマウンドを譲るまで、2安打無失点で5勝目をあげた。中村（泰）はコントロール悪く2点を失ったが、どこか魅力ある投手ではある。

2003年5月9日
横浜ナイター
⑦阪神6勝1敗

サンテレビ

横浜	阪神
0	5
0	0
0	6
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
1	0
2	11

投
〇伊良部
中村泰

打
アリアス④
赤星2
浜中②
片岡②
藤本2
今岡1
矢野1
中村豊1
15

コラム／ぜいろく魂

平成のはじめの頃、若いＯＬの間で、ある店の食べ物がブームになった。うだるような暑い日、その店に近い会社に用事ができ、会社の女性から買ってくるように頼まれた。地下鉄堺筋本町駅から東へ数分、昭和初期の仕舞屋を改造した喫茶店だった。その店のアイスクリームが人気を呼んで、店に行列ができた。

なんのことはない、私達少年時代にアイスクリンとよんでいたものだ。大きな樽の中からテッシャーでアイスクリンをすくい、最中のようにして売っていた。

私の少年時代だから、昭和十二、三年の頃、当時はハイカラな食べ物で、少年の口にはなかなかはいらなかった。

味はシャーベット系である。そして、それを新聞紙で包むのは、アイスクリンがとけるのを防ぐためだろうが、店の主人が少年の頃、氷饅頭（かき氷）を新聞紙にのせてもらい、せっかくの甘い蜜にインクの匂いがまじったことを思い出してのことかも知れない。

昔の商売道具を出してきただけなのに、何故こんなに人気を呼ぶのか、主人もきっと不思議に思っていることだろう。

商品には正直いってがっかりしたが、私が屋号に興味をもった。〈ぜいろく〉は、漢字で贅六と書く。西鶴の【日本永代蔵】から引用しよう。

「総じて大阪の手前よろしき人、代々つづきしにはあらず。大方は吉蔵、三助の成りあがり、是れ皆、大和河内、津の國、和泉近在の物つくりの子供が、おのれの性根によって長者になった」

この上方の新興成金を、江戸っ子が軽蔑して贅六といった。上方の商人達は、それでは贅六魂を見せてやると、ますます仕事に励んだ。この店の主人は、そんな意味をこめて屋号にした。初代は、三十日の節季を忘れないようにと〈ぜいろく三十日堂〉と名づけたが、あまりにも長いので〈ぜいろく〉になったらしい。

この贅六魂にふさわしいのは、岸和田生まれの清原選手だが、どうしてあれほど巨人にこだわるのだろう。

ドラフトの前日まで、早稲田大学に進学といっていた同僚の桑田投手を、巨人は一位指名した。そして巨人の約束違反に、彼は激怒した。

西武で森監督に一年生からレギュラーとして使ってもらい、一流打者となった。そして、日本シリーズで巨人に勝った。九回、最後の守りについたファーストで流した涙は一体なんだったのだろう。

吉田監督が「縦縞を横縞にしてもいいから来てほしい」と熱いラブコールをＦＡになった清原選手

に送った。ファンも阪神に来てくれるものと思った。ところが、巨人に残った。

巨人へはいって一年目、目を覆うばかりの打撃不振に、渡辺オーナーから「清原がいない方が、巨人は強い」と侮辱されながら、野村監督による阪神の二回目のラブコールも断った。

最近は、元木選手とコンビを組んで浪華のＭＫコンビとはしゃいでいるが、東京の人は関西人を見下しているものだ。あまり調子にのらない方がいい。それよりも、阪神の選手達にいいたい。阪神タイガースは大阪の球団である。大阪育ちの人もそうでない人も、是非贅六魂を持ってほしいものだ。

屋号を褒めたが、肝心の商品のことにケチをつけてしまったので、この店の珈琲のことを書いておこう。

珈琲に随分凝って、ミルで豆を挽き、素人でも、うまい味を出しやすいサイフォンで、珈琲をたてていたが、年をとると面倒くさくなって、インスタントコーヒーで間に合わせている。

あれほど軽蔑していたインスタントコーヒーも飲み慣れてくると、口に合ってくるから、人間の味覚もいい加減なのかも知れない。

でも、たまに喫茶店でコクのある珈琲を飲む。まずブラックで香りを楽しみ、次いでミルクを落し、コーヒーの表面に浮かぶ雲のような景色を目で楽しみ、最後に砂糖を入れて味を楽しむ。私はこれを勝手に珈琲の三楽と呼んでいる。

最近、少年の頃親しんだパーコレーターで沸した珈琲を飲みたいと思っている。

夕食がすむと、家族全員が茶の間の大きな火鉢を取り囲む。父は珈琲の粉をパーコレーターの濾過装置に入れ、炭火の上に乗せる。私達は各自の珈琲茶碗を出して、珈琲が沸くのを待つ。私の珈琲茶碗は甲虫が目印になっていた。

やがて、沸騰した湯が「ぼこぼこ」と音を立てながら踊り出す。その様子が蓋のガラス窓から見える。私達は順番に缶詰のコンデンスミルクを、珈琲茶碗に入れ、父が祖母、母、姉、私、妹の順番に珈琲を注いでいく。終ると父の合図で飲み始める。その合図は簡単である。「では」という一言だった。

〈ぜいろく〉の珈琲は、その時のパーコレーターの珈琲の味がする。その苦味のとれたまろやかな味は、一家団欒の風景を思い出させた。なにしろ値段が安い。一八〇円である。

バントの3連発（37試合目）

五回、一死走者なしで、赤星が打席に向かった時、毎日テレビのゲスト出演の松村君が掛布の物真似をしながらいった。

「これから赤星劇場が始まりますよ」

期待どおり、赤星は1―2からの4球目を三塁側に転がした。三塁手がボールを捕った時、赤星はすでに一塁ベース上にいた。ホルトは次打者金本に、赤星の足を警戒して2度のウエスト、6度のけん制球を投げる。金本の遊ゴロは、赤星の二盗スタートで動いた遊撃手の逆をつく中前打となり、一、三塁、浜中の三ゴロで赤星がホームベースを踏み勝ち越した。赤星劇場は1点を追う三回すでに始まっていた。藤本が初球を投手の右へ転がした。ホルトは球に追いつけず二塁内野安打。195センチの巨漢ホルトと動作の鈍いウッズを揺さぶろうとの魂胆である。下柳もすかさず初球をバントで藤本を二塁へ送る。続く今岡のバントを誰が予想したか。意表をつくとはこの事だろう。無警戒の内野のグランドに転がって一、三塁。お株をとられた赤星は中前打で藤本をホームへ帰す。バント攻勢で冷静さを失ったホルトは、金本の大きくバウンドする投ゴロを捕ったのはいいが間に合わない一塁へ暴投、

二走者が帰って3点をあげた。藤本と今岡にお株をとられた赤星は五回三塁側へのバントヒットでお返しするのだからたいしたものだ。

守りでは2点リードした三回、二死一、三塁でウッズの三塁ゴロを片岡が一塁走者が足の早い石井であることを忘れ、二塁へ投げて野選とし、そのあと中根に2点タイムリーを打たれて3点のリードをフイにしてしまった。投では、下柳をつないだ藤川が六回、一死二、三塁のピンチを迎え、代打佐伯に対し吉野が登板、カーブで遊飛に打ちとり一人一投。あと最近腕を上げている安藤が七、八回を安打1本に抑え、九回をウイリアムスでしめくくった。

試合終了後、片岡選手に星野監督の雷が落ちたらしい。横でアリアスが震えていたとか。

2003年5月10日
横浜ナイター
⑧阪神7勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
0	0
1	0
2	3
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
0	1
3	5

投
〇下柳
藤川
吉野
安藤
Sウイリアムス

打
藤本3
今岡2
赤星2
金本2
浜中1
アリアス1
11

浜中絶好調6打点（38試合目）

阪神が勝って、空は五月晴れ、女房がいないとなると、毎日が日曜日であるとはいえ、私にとって祭日のようなものである。朝風呂を湧かそうと思った。

五月といえば端午の節句、男の月である。我が家の鬼門の所、東北（ひがしきた）の柊の横に菖蒲の花が満開である。菖蒲湯にしよう。少年の頃、端午の節句の日、銭湯は菖蒲湯だった。少年は菖蒲の葉を鉢巻きにしたり、手首を巻いたりした。男らしくなるための呪（まじな）いだと思っていた。

朝の日射しを浴びながら、湯に濡れないよう、苦労しながら新聞を読む。ほとんどの新聞の一面は浜中である。43打点、2ラン、3ランと大きな活字が踊っている。

一回、今岡が初球を二塁打、赤星の犠打で一死三塁、金本が三振、チャンスが逃げたかと思ったが、浜中が右中間を破る二塁打で四番の責任を果した。いつも助けて貰っている金本を助けたことが、浜中をのせたのだろう。二回は、斉藤のインコースの難しい球を左翼スタンドにほうりこむ。四回は右へ11号3ラン、あわせて6打点。監督も、あれが四番のバッティングと称賛する。

サンスポに阪神の歴代打点王の写真がのっている。4番目にセピア色の背番号5、島倉千代子の亭

主だった藤本選手だ。本塁打王、打点王、それぞれ一回。気のいい選手で、島倉千代子もその優しさにひかれたという。南部高校出身で浜中の先輩である。

和歌山中学出身の西本さんが藪投手を評して、和歌山出身の男は気が優しすぎる、もっとワルになってほしいといったことがある。浜中選手にも、その言葉があてはまるだろう。勝負師には、優しさが仇となる場合がある。幸い、清原選手も一目置く、今までの阪神では見られない金本選手がいる。師事して大成してもらいたい。

夜遅く帰宅した女房が風呂場から呼んでいる。「庭の花は菖蒲じゃない。かきつばたよ」

触らぬ神に祟りなし、私は二階へ上った。

2003年5月11日
横浜
⑨阪神8勝1敗

毎日テレビ

横浜	阪神
0	1
0	6
0	0
0	3
1	0
0	1
0	0
0	1
0	0
1	12

投
〇ムーア
谷中
久保田

打
今岡4
浜中③
金本3
赤星2
矢野2
関本1
ムーア1
16

連日の12得点（39試合目）

井川の立ち上がりは、相変らず不安だった。初回、いきなりチェンジアップを、中前へ2連打された。去年は低目にきまり、打者がよく空振りしていたものだが、今年は高目に浮いている。しかし、バントをしようとする緒方を捕手のフライに打ちとった直球と、前田を3球勝負で仕止め外角低目のストレートは迫力があった。ただ、きわどい球がボールとなり2四球で1点を先取された。それ以後は四回を除いて七回まで、毎回ランナーを出したが、1点を許しただけだった。粘投ということだろう。

阪神は二回に、浜中、片岡が連打、ハーストの阪神ベンチにとびこむ暴投で同点とした。四回、金本、浜中の連打で一、二塁、重盗を試みたが、浜中が二塁で刺されて一死三塁、チャンスを失ったかと思ったが、日曜日の横浜戦は浜中、昨日はアリアスが、ピッチャー返しの安打で勝ち越した。

五回、二盗を失敗した浜中が、金本とのコンビで大量点のきっかけをつくった。井川の左前打と今岡の二塁打で二、三塁、赤星の遊飛で二死となったが、金本は厳しい内角攻めに耐え、際どいコースを選び、かつての同僚佐々岡に精魂を使い果たさせたうえで出塁した。そして浜中はセオリー通り、四球のあとの初球打ち、右への二塁打で2点、つなぎの野球で片岡が2打点、矢野が2打点。この回、

本塁打なしで、二死からの6点で試合を決めた。

阪神が好調なのは、選手が自分中心にスタンドプレーする選手がいないことだ。そして失敗した選手を誰かがカバーしていることだ。浜中は昨日も5打数4安打。

米子市民球場は、ローカル球場らしく広告は〝皆生温泉〟と〝お菓子の壽城〟の二つだけで、それがバックネットの下にあるものだから毎回のようにテレビに映った。

走り梅雨か、朝から雨模様、米子も雨だろう。今日はいいとして、週末の巨人戦は天気であってほしい。打撃が好調な時、8連勝といきたい。皆生温泉の看板を見て、温泉宿裏の海岸で、投げ釣りをし、鰈を釣るはずだったが、かもめを釣った事を思い出し、テレビの前で一人苦笑する。

2003年5月13日
米子ナイター
⑥阪神4勝2敗
ＭＢＳ毎日
テレビ大阪

広島	阪神
1	0
0	1
0	0
0	1
0	6
0	0
1	2
0	2
0	0
2	12

投
〇井川
吉野
久保田

打
浜中4　片岡2
今岡2　金本2
ｱﾘｱｽ2　赤星1
矢野1　藤本1
井川1　桧山1
17

巨人に完封負け（40試合目）

八回まで、8安打を打たれながらも、ベテランらしい投球で、清原の本塁打の1点に抑えている伊良部に代打、関本を送った。関本は、2―0から、ファールで粘り四球で出塁した。

野球が楽しいのは、テレビを見ながら監督になれることだ。私は、星野監督の采配を予想した。今岡がバントで、代走の秀太を二塁へ送る。赤星はラスに内角を攻められて、外角球を引っ掛けるという最悪のパターンにはまっている。ここは、右の八木を代打に送る。巨人は動くか。原監督は、星野監督に似て、失敗した選手に名誉挽回のチャンスをすぐ与えて、奮起さすことがある。中日戦でストッパーに失敗した河原の起用もある。そうなればしめたもの、八木が駄目だったら、左の金本に廻る。と思ったが、私の予想は当たらなかった。

今岡は2球目をヒッティング、強い当たりだったが、投手右へのゴロ、走者を進めることができなかった。監督がサインを出すのを逡巡しているうちに、今岡がヒッティングにでたのかも知れない。秀太が赤星の2球目に二盗に成功して、バントと同じ結果になったが、赤星が2―3から三振、金本は二ゴロに終った。

次は登板する投手の予想である。星野監督は、昔から大きな舞台でいきなりルーキーをよく使う。最近の2試合で二回4三振、無失点の久保田か、それとも、巨人戦である、ファンは最終回を守りきって、サヨナラを期待している。新人では治まらない。だからといって、負けている試合にウイリアムスは勿体ない。最近安定している安藤を送る。私は安藤と決めた。これも予想がはずれた。やはり久保田だった。そして、仁志にスリーランを打たれての試合は決まった。原監督は、安心して河原を送った。九回は、片岡の右前打をはじめ、浜中、アリアス、矢野と1点差だったらと思わせるような大きなフライだった。負けはしたが、敵味方にファインプレーが続出した好試合だった。スポニチは、伊良部、清原の対決を平成の名勝負という。

2003年5月16日
甲子園ナイター
⑦巨人1勝5敗1分

毎日テレビ

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
0	0
0	3
0	4

投
●伊良部
久保田

打
金本2
矢野2
浜中1
片岡1
アリアス1
7

ムーア投打で活躍（41試合目）

七回戦は、四回の清原の本塁打が勝利打点となって、4対0で巨人。八回戦は、この日も四回、ムーアのタイムリーヒットの1点が勝利打点となって、1対0で阪神。不思議な巡り合わせだった。

あの故三原監督の真似をさせていただくと、まさしく、神様、仏様、ムーア様といったところだった。

四回、アリアス、矢野が左前へ連打、藤本のバントが、捕手の飛球となってしまって、一死一、二塁。犠打で投手へつなぐという他チームにみられない作戦は失敗に終ったが、大観衆の声援に送られてムーアが打席にはいった。解説の川藤さんは、ムーアの目付きがすごいという。集中力だろう。ムーアは期待に答えて、木佐貫の高目のフォークを左前へタイムリー、アリアスが帰って1点をあげる。これが貴重な勝利打点となった。

六回に、この試合の山がきた。山田が三塁内野安打、二岡の三ゴロのあと、清原がレフトのライン際の安打で一、三塁。清原でなければ、二、三塁となるところだ。川藤さんは清原を二塁に進めなかったベテラン金本の守備を褒める。この一、三塁になったことが阪神に味方した。阿部の打球は一塁ライナーで、清原は塁に戻れず、あっという間の併殺で、巨人はチャンスをつぶした。ムーアは八回ま

で投げて、４安打無失点。九回は守護神ウイリアムスに継いで開幕７連勝。打撃の方は、この日２安打で23打数10安打。得点打率は６２５。バッテリーの配球を読む、集中力のあるバッティングは、たいしたものだ。

巨人戦に打ってこそ、ミスタータイガースと呼ばれるのだが、浜中は、初回二死一塁で空振り三振。第３打席遊ゴロのあと、八回の一死二塁も三ゴロ。浜中をはじめ、一、二番の打撃不振が気になるが、１球のミスが試合を決める１対０の試合は緊迫感があり、ここ二日間、守りの野球の醍醐味を味わった。

2003年5月17日
甲子園ナイター
⑧阪神６勝１敗１分

読売テレビ

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
1	0

投
〇ムーア
Sウイリアムス

打
矢野２
ムーア２
片岡１
アリアス１
6

ウイリアムス3人斬り11セーブ（42試合目）

前半から飛ばす上原に、五回まで4安打、この2連戦、当たりがとまっているので、嫌な予感がした。それを吹き飛ばしてくれたのが金本だった。六回、上原の初球をレフトスタンドに叩きこんだ。ヤクルト戦で甲子園の浜風に邪魔された男が浜風を利用した。金本に刺激されたアリアスが二死からレフトスタンドへ、一挙に同点とした。テレビに胸のペンダントにキスするいつものアリアスが写った。

阪神ペースとなった七回、藤本が右中間を破る二塁打で出塁。テレビで解説の吉田さんはこの藤本を、二回、金本―藤本―矢野とつなぐ中継プレーで仁志をホームで刺して、3点目を与えなかったことから、この日の殊勲者だという。

無死二塁、ここから監督の腕の見せ所。六、七回を好投した谷中に代打秀太、バントが成功して一死三塁。打席に歩む今岡の集中した厳しい顔を、前監督は見ているのだろうか。ふと、そんな事を思った。今岡は左中間二塁打を打ち、藤本が生還して勝ち越した。内角低目のフォークボールを打った今岡の技術は特筆ものだ。赤星の代打桧山の時、七分間試合が中断した。テレビの画面が少し薄暗くなった。球場近くのアパートの失火で、その煙が球場を覆ったらしい。久しぶりの阪神の快進撃には甲子

園球場も珍事を巻き起こす。

桧山は、それが気になったか無気力な三振。続く金本、浜中の四球で二死満塁。当っている片岡に代打に八木を送る。打席にはいる八木の姿には、ベテランらしい静かな闘志がみなぎっている。八木は、岡島からライト前へ渋いヒット、腰を痛めている高橋がジャックルしている間に2者が生還し、この回3点をあげた。八回、好投する安藤が、清原にこの日2本目の意地の本塁打を打たれたが、その裏、矢野の安打、昨日のバント失敗で、居残りでバントの練習をしたという藤本の犠打と、秀太の右前打で一、三塁、今岡の犠打で1点を取り戻し、九回は、ウイリアムスの三人切り、貯金が最多の13となった。

2003年5月18日
甲子園ナイター
⑨阪神7勝1敗1分

ＡＢＣテレビ

阪神	巨人
0	0
0	2
0	0
0	0
0	0
2	0
3	0
1	1
×	0
6	3

投
下柳
〇谷中
安藤
Ｓウイリアムス

打
今岡2　藤本2
金本①　片岡1
八木1　ｱﾘｱｽ①
矢野1　淺井1
秀太1

11

好事魔多し浜中怪我（43試合目）

野球は面白いといえば、怪我をした浜中に失礼だが、浜中に変わった桧山が3打数3安打と活躍する。しかも、桧山のために用意されていたかの如く、絶好のチャンスが廻ってくるのだから、つい面白いという言葉がでてしまう。

最初は、1点ビハインドの四回、一死、赤星を三塁において、佐々岡の直球を右前にはじき返して、シーツに打たれた井川の失点を取り戻した。次は、同点で迎えた六回、またも、三塁打の赤星をおいて、西川の直球を振り抜き、つまりながら中前に落とす。最近、3試合にヒットのでなかった赤星と、スタメンから消えていた選手会長が活躍した。三度目は七回、一塁右を抜けるような安打で満塁としたが、後続が続かなかった。

右翼の守備位置をとられ、不慣れの一塁で苦労し、揚げ句の果ては打率もさがり、ベンチを暖める羽目になってもくさらず、練習に励んできた賜物だろう。と同時に、ここで打たなければという精神面にあったのだろう。昨日の試合は、メンタルな面が選手に影響する、そんな場面があった。

アリアスの五回、同点9号ソロは「最初の打席の3球三振の怒りをぶつけたんだ」という。

六回無死一塁で、右中間を破る同点三塁打を打った赤星。四回に一塁ゴロを自慢の足で内野安打にし、19個目の盗塁に成功して、気を良くしていたことだと赤星はいう。こんなメンタルな面を無視できない。

浜中の怪我を、星野監督は自業自得と一喝したが、この言葉には思い出がある。小学生の頃、原っぱで落し穴を作る遊びがあった。落とし穴を作ったのは、いいのだが、何処に作ったのか忘れてしまい、翌日、その穴にはまって、足を挫き、親父に自業自得といわれ、その意味を母に聞いた記憶がある。その時、接骨医に捻挫は骨折より時間がかかるといわれた。浜中の怪我が軽症であってほしい。世界の盗塁王福本さんが口やかましくいう、ヘッドスライディングは、格好良くても、怪我のもと、足から滑れと。浜中がそれを実証してしまった。

2003年5月20日
甲子園ナイター
⑦阪神5勝2敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
0	0
1	1
1	0
2	2
0	0
0	0
×	0
4	3

投
〇井川
安藤
Sウイリアムス

打
桧山3　赤星2
矢野2　今岡1
片岡1　ｱﾘｱｽ①
藤本1　淺井1
12

赤星足で投手を崩す（44試合目）

五月といえば、五月晴れ、鯉登り、好天気が続くものと思っていたが、気温も不順で、どんよりと曇った日が多い。今日もそんな日である。歳時記にも、五月雨はあっても五月晴れがない。おかしいと思っていたら、陰暦の五月は今の六月である。梅雨の晴れ間を、五月晴れというらしい。

私が思っていた五月晴れは、わが阪神タイガースである。昨日も、鯉を料理して鯉登りを上げた。スポニチの見出しは〝オーバー30大暴れ〟とある。活躍した片岡、藪、矢野が30才を越えているということらしい。活躍したのは、確かにこの3人だが、藪睨みといわれるかも知れないが、三人の前に赤星のことをとりあげよう。藪睨みとは、〝ひがらめ〟大阪でいう〝ひんがらめ〟のことで、見当違いの見かたをすることである。藪投手だからということではない。

六回、一死から赤星が四球で出塁する。赤星はリードを大きくとって、阪神打線を2安打と抑えている広池をゆさぶる。調子を崩した広池は、3者連続四球を与え1点を失う。なお、二死満塁で矢野。広島の投手は天野に代わり、矢野はストレートで、たちまち2―0に追いこまれたが、3球目の変化球を打って三遊間を破った。捕手出身で解説の有田さんは、ストレートを通すべきで、捕手はゆるい

球の怖さを知って一人前だという。八回に、矢野は西川から2ランを打って、広島のトドメを刺した。

初回いきなり1点を失い、二回にも先頭打者シーツに二塁打を打たれ、薄氷を踏むピッチングだった藪を立ち直らせたのは片岡だった。二回、中前打の桧山をおいての2ラン。ヒットを打たれ、動揺している投手の心を見透かした初球睨いの本塁打だった。

この本塁打以降、藪は完全に立ち直り、七回までテンポの良い81球、1失点、3併殺と見事なピッチングだった。解説の中西さんは、藪に打たせてとるピッチングを薦めていた。

2003年5月21日
甲子園ナイター
⑧阪神6勝2敗

サンテレビ

阪神	広島
0	1
2	0
0	0
0	0
0	0
3	0
0	0
2	0
×	0
7	1

投
〇藪
安藤
藤川

打
矢野②
今岡1
赤星1
桧山1
片岡①
6

金本逆転2ラン（45試合目）

麻雀友達に、戦前からの阪神ファンがいて、連絡の世話をして貰っている。去年は「あかんなあー」というのが、友のあいさつ代りだったが、今年は「負ける気がしない」というのが、彼の口ぐせになっている。実際、連絡をくれる前日の試合は必ず勝っている。

同点で迎えた八回、伊良部をリリーフした吉野が代打町田に死球を与えて、一人で谷中と交代したが、シーツに二塁打を打たれて、3対3の均衡が破れた。

その裏、先頭打者の今岡がセンターオーバーの二塁打で塁に出た。赤星が一球目バントを失敗、代走の秀太が捕手の二塁送球で、タイミングはアウトだったが、二塁手の落球に救われた。そのあと、バントは投ゴロとなり、走者を三塁へ進めることができなかった。嫌な予感がしたが、金本が打ちあぐねていたブロックの内角のストレートを、甲子園球場の一番深い所にほりこんで逆転した。

「とりあえず阪神に来て初仕事やね」

どうして、どうして、移籍後45試合で、これだけチームを引っぱっていく選手も稀らしい。選手会長の桧山と金本の握手や、伊良部とウイリアムスの握手は、チームにとって力強い。解説の中田さんは、

金本の本塁打にお客様は喜んでいるけれど、赤星と藤本のバントの失敗に監督はお冠むりだろうという。芸能人でもお客さんと一緒になって笑っていてはプロでない。醒めた目をもってこそプロだろう。

主役は金本に譲ったが、序盤から燃えたアリアスの二回先制2ラン。四回無死満塁からの左犠飛3打点の活躍も忘れられない。また、森笠に四球を与えて、緒方に痛打を浴びる失敗を繰り返したのは、いただけないが、五回に2ランを浴びた直後、伊良部が木村拓に投げた１５３キロはすごかった。ピッチングにまだまだ余裕がある。

二軍がシダックスに5―0で負けたのは情けない。鳴尾球場に、高級車に乗ったサッチーが、カツノリの嫁と孫を連れての観戦とは全く恐れいる。シダックスの選手がプロ入りする時の事を心配するのは偏見だろうか。古くからの野村ファンだが奥さんだけは、どうもいただけない。

2003年5月22日
甲子園ナイター
⑨阪神7勝2敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
2	0
0	1
1	0
0	2
0	0
0	0
2	1
×	0
5	4

投
伊良部
吉野
〇谷中

打
桧山2
金本②
今岡1
アリアス①
矢野1
7

ムーア47球でKO（46試合目）

ずんぶりと湯の中顔と顔笑う

道後で遊んだ時の山頭火の句である。

古い話だが、戦後世の中が騒然とした時代、松山出身の友と道後温泉に遊んだことがある。古色蒼然とした建物の湯につかり、そのあと、二階の大広間で浴衣に着替え、寛いでいると、何かと荒んだ心が落着いた。

松山東高校出身の友はいう。

「高校の頃、授業をサボッテ、ここで本ばかり読んでいて、大学へ行けなかった」という。

おっとりした優しい友の性格は、この温泉が育てたのだろう。

ムーアもこの町の優しさに闘争心を失ったのかも知れない。二回に降板し、ベンチを叩いて悔しがるムーアに、まことに失礼だが、私は、頭に手拭いをのせて、温泉に浸かっているムーアを想像しておかしかった。

冗談はさておき、ラジオを聞いていたので、どうして打たれるのか、わからなかったが、解説者に

よると、ヤクルトは、ムーアを攻略するため、右打者を並べ、ボールになる内角球を捨て、宮本、飯田、鈴木が四球を選びムーアをいらだたせた、ヤクルトのＩＤ野球だという。

ムーアは、一回2/3で、5安打、3四球で4点を失い、不敗神話は消えた。

おしかったのは、逆転が売り物の阪神の八回の攻撃だ。赤星の三遊間安打、金本のレフト左への二塁打で無死二、三塁。桧山の中前安打で2点を挽回、なお、無死一塁、片岡は三飛に終わったが、長打を警戒する投手が、アリアスのカウントを0―3にする。低目の好きなアリアスは、功を焦り、ボール球を打って、一塁のファールフライ。好球必打とはいえ、それはないだろう。

西武を自由契約となり、今年ヤクルトにテスト入団した元中日の佐藤投手を打てず3対5で敗戦。佐藤投手、星野監督へ涙の恩返しといったところ。今日のスポニチによると、道後温泉へ行ったのは、星野監督だけだったらしい。

2003年5月24日
松山ナイター
⑩ﾔｸﾙﾄ5勝5敗
関西テレビ
毎日ＭＢＳ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
3	0
0	0
1	1
0	0
0	0
0	0
0	2
×	0
5	3

投
●ムーア
久保田
佐久本
中村泰
谷中

打
赤星2
片岡2
金本1
桧山1
アリアス①
7

2死からの逆転劇（47試合目）

悔しそうな、悲しそうな、そして、厳しい古田の素顔がテレビに大写しになった。八回、金本に逆転タイムリーを打たれたあとのヤクルトベンチである。

二死から、今岡、赤星が中前連打のあと、5打席目の打順が金本に廻ってきた。4打席凡退したので、このチャンスを見逃すことができなかった。金本は、河端の146キロの連球を右翼へ引っ張った。一刀両断、ジャストミートした打球は、矢のようになって、右翼線を破り、2者がホームインした。

野村監督のもとでコーチをやったことのある福本さんが、監督と古田の腹のさぐり合い、仕掛け合いを通して、野球のおもしろさ、奥の深さを楽しんでいたと書いているぐらいだから、阪神の打者は、古田にいいように、あしらわれているという風評も、あながち嘘ではあるまい。その古田の深刻な表情は、阪神の強くなったことを証明しているのかも知れない。

金本の決勝打の背影には、片岡の同点打がある。七回、今岡の右前打のあと、左が4人続くということで、ヤクルトは中継ぎに左の山本を送った。これが裏目に出た。赤星が左前打、金本二ゴロ、桧山四球で一死満塁となり、片岡が左前へ、同点2点タイムリーを打った。

今迄リードされると、ヤクルト、中日の強力中継ぎ陣に、阪神は苦杯をなめている。六回終了時までリードされた試合、ヤクルトには4連敗している。中日に至っては、勝ち星なしの5連敗中である。片岡が山本を打って同点としたことで、五十嵐、高津の必勝リレーを封じこめることができた。ヤクルトは、左の石井の故障がこたえている。阪神の中継ぎ陣がヤクルトのお株を奪った。先発の藤川が四回までに4点とられたあとは、谷中、安藤が二回を無失点、そして、ウイリアムスが最後を締めくくった。どうやら、阪神にも勝利の方程式ができそうだ。この試合、赤星の4安打3得点、好打好走を忘れることはできない。

2003年5月25日
松山
⑪阪神6勝5敗

関西テレビ

ヤクルト	阪神
0	1
2	0
1	0
1	1
0	0
0	0
0	2
0	2
0	0
4	6

投
藤川
谷中
〇安藤
Sウイリアムス

打
赤星4
今岡2
藤本2
金本1
桧山1
片岡1
矢野1
12

代打浜中がV打（48試合目）

「どうした井川!!」

去年の井川であることを期待して、テレビの井川に声をかけるが、初回二死から鈴木（尚）に中前打されたあと、毎回安打される始末、二回一死満塁、四、五、六回と3イニング連続で先頭打者に二塁打された。それでいて、六回、今岡のタイムリーエラーによる1失点でおさまっている。

こんな井川をかばってか、アナウンサーが、井川のような真面目な選手は〝虎風荘〟始まって以来という梅山寮長の話を披露すると、解説の小山さんが「そんな選手は、阪神では大成しないんだがな」と皮肉ったあと、今日の井川は球がうわずっていることと、チェンジアップの時に腕があがっていないという。

六回、同点とされたあと、無死一、二塁で、片岡がバントで走者を進めることができないで三振、八木が左前タイムリーで勝ち越し、そのあと、井川に打順が廻るので、浜中がベンチを出たが、秀太の右前打で2点差となり、続投を決めて井川を打席に送った。

2点もらっても、井川は立ち直らない。七回、金城に四球、内川に右前打されて、無死一、二塁。ここで、

安藤がマウンドにあがった。鈴木（尚）は二塁ゴロ、併殺に打ちとる絶好球だったが、秀太の一塁への送球がそれて、一死一、三塁となり、ウッズを右飛に打ちとったが、コックスの、代打佐伯に打たれて同点にされた。その裏、赤星が右中間を深く破って三塁打、金本四球で、一死一、三塁、桧山三振で片岡、ここで、監督は浜中を代打に送った。浜中は期待に答え、三遊間を破って勝ち越した。

八回は、吉野、谷中でしのぎ、九回は例によってウイリアムス。不敗神話は、何時か崩れる。最近、球が高目に浮いて心配しているところへ、今岡がエラーして、無死一塁となったが、落ちついたウイリアムスは、代走の田中を牽制球で刺し、ウッズを投ゴロ、コックスを三振にと打ちとり、ウイリアムスは今日も健在だった。それにしても、内野のエラーが多い試合。

2003年5月27日
甲子園ナイター
⑩阪神9勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	1
1	2
0	0
×	0
4	3

投
井川
〇安藤
吉野
谷中
Sウイリアムス

打
赤星2　八木2
今岡1　片岡1
浜中1　矢野1
秀太1
9

コラム／山野さんのこと

長い人生の中で、思い出に残る人がいる。

東大法科を出ながら、大阪の警察署長で終わった山野さんも、その一人である。

山野さんは、少し給料が高いということで、うかつにも市警に入ったことが、運のつきだと淡々としている。昭和三十年頃、大阪には府警と市警があった。

山野さんと交遊があったのは、二十数年前のことだが、今もはっきり覚えていることがある。

場所は環状線の西九条で、その付近には、一〇〇軒近い飲み屋があるといわれている。桜島線への乗換駅で、その沿線に地元で西六社といわれている大手企業が集中していて、下町の飲み屋にネクタイ姿のサラリーマンも多い。

そんな店の一軒で、山野さんが水上警察署長時代になじみになったという店へ連れて行ってもらった。

山野さんが来たと聞いて、女将さんが大きな音を立てながら階段を降りてきた。

「署長さん、お久しぶりです。よう来てくれはりました。お世話になりましたあの娘も、子供ができましてん。暴走族になり、いっときはどうなるかと思ってましたが、ほんまに署長はんのおかげです。

ほんまにありがとうございました」

どうやら、取り締まる方と、取り締まられる方との見合いをさして、うまくいったらしい。

女将さんと挨拶がすむと、阪神ファンの山野さんが、田渕選手のトレードのことで、熱弁を振るい始めた。

「ブレーザーが言ったからといって、田渕をトレードすることないやろう。フロントは外国人になめられとる。一歩譲ってトレードは仕方ないとしても、あれだけの選手や、なんの説明もなく、しかも夜中に一方的に通告することないやろう。あいつのことや、どうせ悪者になるのが嫌で、社長の仕事やと手をつけなかったんや。あいつ、自分が京大を出てるもんやから、高商出の社長に不満があるのやろう」

話を聞いていると、阪神の球団代表のMさんのことで、Mさんと山野さんは、N高等学校（旧制）で親友だったらしい。厳しいことをいいながら、言葉の端々にどこか愛情がこもっていた。

山野さんの言い分はこうだ。

戦局が厳しくなって、文科の学生の徴兵延期制度がなくなって、文科の学生だったMさんは理系に変り、戦争が終ると文科へ、そして京大の経済を卒業したらしい。山野さんは、そのことを捕えて、保身ばかり考えている人間が上にいると、組織は強くならない。話がさらに飛躍して、Mさんが球団

をやめない限り阪神の優勝はないという。

ところが、一九八五年八月十二日、中埜球団社長が日航のジャンボ機墜落事故で亡くなり、Oさんが念願の球団社長になった。どうしたことか、その年に阪神は優勝した。人生とは皮肉なものだ。

それから二年後、球団史上最低勝率の最下位で、天国と地獄を見た吉田監督が退陣、村山監督が、コーチ人事を、まかしてもらうことを条件で就任した。そして、田渕、江夏をベンチへ入れようとしたが、田渕は球団の反対を察知して断った。

記者会見でM社長が「残念です」と一言だけだった。その言葉は村山監督が横にいるだけに、一層冷たく聞えた。村山監督は「阪神だから帰れないんです」と痛烈な言葉を吐いた。彼はその後、二年間監督をやったあと、阪神タイガースと絶交宣言をした。フロントの間に余程の確執があったのだろう。

一九八八年五月、バースが子供の病気で帰国してしまった。Mさんは六月に退職、Mさんが社長就任以来兼任していた球団代表に、古谷本部長が昇任し、バース問題の解決に当った。そして、古谷さんは、喜びも束の間、就任してわずか三十九日目に自殺してしまった。

Mさんは運の強い人かも知れない。停年後、音信不通になってしまったが、山野さんはどういうだろう。

「要領のいいことと運のいいことは違う」
山野さんは、きっとそうつぶやくだろう。

横浜に10連勝（49試合目）

危うく巨人戦（初戦）の二の舞を演ずるところだった。六回まで、10対3とリードしながら、終わってみれば10対9。

「四回までに10点を取ったんだから、本当は安藤、ウイリアムスは出したくなかったんや。寂しいよ。」スポニチの監督談話である。出したくなかったら、出さなくてもよい。藪でもいい、谷中でもいい、続投させ、たとえ負けたとしても一試合ぐらいと思っては、いけないんだろうか。

ウイリアムスは、ここ10試合で7試合登板。疲れないはずはない。九回、ウッズ、村田に本塁打を打たれて、その差1点、代打小川にも打たれて、二死二塁、一打同点のピンチを迎えたが、代打万永を遊ゴロに打ちとってゲームは終わった。「10点差で勝っていようが、20点差で負けていようが僕の気持ちは変わらない」。ウイリアムス選手は、プロフェッショナルな選手だ。

藪は、六回1/3で7安打3失点だったが、ウッズ、村田を無安打に抑えていたし、自分で稼いだ3点もある。谷中のコックスへの2―2からの外角低目のストレートは絶好球だった。コックスは手が出ず、球を見きわめて、やられたという表情をしていた。ところが審判はボール。無情とは、この事

か。谷中は動揺、四球、そして村田の二本目の本塁打につながった。まだ3点ある。今日の谷中なら、のりきれると思った。

「捨て試合を捨て試合らしくなくやるのが名監督だ」といって、小山、村山のローテーションをきっちり守り、阪神を2度優勝させた藤本監督の古典的な投手起用も見直されてもいいのではなかろうか。当時は、クローザーも、セットアッパーもなかった。投手は完投するものだった。

競争意識をもった阪神の打撃陣の活躍は目覚ましい。チャンスを与えられた控え組が即活躍する。また、二回の二死から、今岡、赤星が火をつけた5連打3点も見事だった。

2003年5月28日
甲子園ナイター
⑪阪神10勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
2	0
3	0
2	2
3	1
0	0
0	0
0	4
0	0
×	2
10	9

投
〇藪
吉野
谷中
安藤
Sウイリアムス

打
今岡3　赤星3
八木3　藪2
久慈1　金本①
桧山1　片岡1
矢野1

16

伊良部13K完投（50試合目）

伊良部の投げた141球。〝一球入魂〟という言葉が、死語でないことを思い知った。13K完投、1失点。三回、中村に本塁打を打たれた一球だけが失投だった。その悔しさを、五回、147キロの胸許をつく直球で、中村を三振にとった。

〝あと一球〟の大歓声の中、最後の最後まで、伊良部は慎重で冷静だった。九回二死一塁。鈴木尚をカウント2―2と追いこんでから、タイムをとって、矢野とサインを確認。最後は、内角低目134キロのフォークで空振り三振に仕留め、笑顔を見せて小さなガッツポーズを作った。ウイニングボールをミットに収めた矢野は、緊張から解放され、跳び上がって喜んでいた。コントロールの良いストレートと、緩急自在の変化球を投げる投手のリードに、捕手冥利を感じているのだろう。最後の打ち合わせ事項は秘密だそうだが、二人は野球年齢からいえば、まさしく熟年である。二人の会話は、熟年夫婦らしく、案外、真面目な顔をして、冗談事をいいあっていたのかも知れない。勝利打点をあげたのも矢野である。初回、金城に中前打を打たれたが、伊良部は絶妙な牽制球で走者を刺した。それに対し、阪神は、今岡がドミンゴの内角高目の初球を今岡ならではのバッティングで、薄暮のレフト

スタンドへ運んだ。

三回、中村の本塁打で同点にされた四回、片岡のライトフライを、ウッズが球を見失って二塁打とした。無死二塁、ベンチは、三塁に片岡を進めて、外野フライでも点をとれる態勢。しかし打者はアリアス、送りバントは無理だ。昨年までのアリアスなら、強引に引っ張っていただろうが、今年は違う。アリアスは二塁へゴロを転がし、走者を三塁へ進めた。そのあと、表の横浜の攻撃で、コックスの三振と同時に内川の三盗を刺して気を良くしている矢野。ドミンゴの直球を右前へ落とした。この1点を伊良部が守った。八回、二死二、三塁、久慈に打ってほしかった。

2003年5月29日
甲子園ナイター
⑫阪神11勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
1	0
0	0
0	1
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
2	1

投
〇伊良部

打
今岡③
矢野3
金本1
片岡1
アリアス1
9

ムーア7失点（51試合目）

初回、今岡の二塁打のあと、赤星のバントは一塁手の正面をつき、今岡は三塁に封殺された。前回、ムーアが二回途中でＫＯされた24日のヤクルト戦（松山）と同じで嫌な予感がした。一回は簡単に三人を凡打に打ちとったが、二回、久々の出場の元木が、左翼線を破る二塁打で出塁。元木のしつこさに、いらいらしたムーアは、斉藤に2ランを打たれ、続く阿部に四球、そして初出場の原に二塁打を打たれて3点を失った。

さらに、四回裏、連打と四球で無死満塁とし、投手の高橋（尚）に手を焼いた。ファールで3球粘られ、最後は押し出しの四球。４点を与えてマウンドを降りた。開幕7連勝が嘘のようだった。体にキレがなく、スピードもなかった。六月になって、急に勝てなくなった去年の二の舞か。２番手の佐久本が、初球を清水に走者一掃の本塁打を打たれて8失点。大勢は決した。

阪神のベンチは、控え選手を出して、実戦に慣れさせる作戦に出た。桧山、片岡、アリアス、矢野、そして今岡も七回の打席で三振に倒れたあと、ベンチに引っ込み、赤星と金本だけが残った。１点差という緊迫した試合で、３連勝した横浜戦のあと、息抜きもいいだろう。長いペナントレースでは、

負け試合を作ることも必要であり、控え選手にとって絶好のチャンスである。

控え捕手の野口が、九回、一死、中前打の淺井を二塁において、中堅フェンスを直撃する三塁打を打って、高橋（尚）の完封を阻止する意地を見せた。

その野口は、七回から、アリアスに代わって一塁を守った。阪神の捕手はよく打つ。淺井の代打４５５の打率は特筆ものだ。

この夜の阪神の戦いぶりを、日刊スポーツは面白い表現をする。勝ちが満点なら、負けは０点、だがこの夜の阪神の負けは〝満点敗戦〟と。

明日の巨人戦を期待しよう。

2003年5月30日
東京ナイター
⑩巨人2勝7敗1分
読売テレビ
ＭＢＳ毎日

巨人	阪神
0	0
3	0
0	0
5	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
8	0

投
●ムーア
佐久本
中村泰

打
野口2
沖原2
今岡1
淺井1
矢野1
佐久本1
8

九回11点の逆転劇（52試合目）

広島戦の八回1イニング9点の逆転劇に、今年の阪神は強いと思ったが、この夜は、九回11点の大逆転劇だ。それも巨人戦だから、たまらない。盆と正月が一緒に来たようなものだ。

先発下柳が、初回に2点をとられたが、六回まで毎回の9奪三振。その好投に、矢野が右前打の桧山を一塁において、右翼スタンドへ同点2ラン。九回、大逆転劇の影の演出者だ。七回、下柳をつないだ吉野が、左の斉藤、阿部を凡打に、安藤が原を三振に打ちとった。八回、片岡の代打浅井が中前打、アリアス四球で一死一、二塁、沖原の三塁フライのあと、ベンチは、安藤の代打に八木を送って勝負をかけた。八木はセンターフライに終わって、勝負は裏目に出た。その裏谷中が、先頭打者の清水に中前打を打たれ、福井のバントで一死一、二塁、二岡四球のあと、腰痛に悩む高橋（由）にセンターオーバーの二塁打を打たれて、負けたと思った。カメラは、目頭を熱くしている高橋（由）をとらえていた。

しかし、勝負は無情である。九回、阪神の大反撃が始まった。久慈が二塁左へ安打。サンスポの〝ノムラの考え〟によれば、内角を要求した阿部のサインに、小兵の久慈にフルスイングされるとは想像し難いのに、仁志が守備位置を右に寄ったからだという。続く今岡が左前打、無死一、二塁からの赤

星のバントが、ドラマの幕開きだった。

バントが投前の小飛球となった。猛然とダッシュしてきた三塁手の福井がポロリとやって、併殺となるところが無死満塁となった。

金本の左前打で4対4の同点、桧山がバントを失敗したあと、一ゴロで走者を進め、片岡の代打浜中が敬遠で満塁。アリアスが初球を右中間に二塁打を打って7点。この時のアリアス、いつもなら、ヒットを打ったあと、ペンダントにキスをするのに、この時は打席にはいる前にやっていた。そのあと関本の2ラン。打者が一巡したあとも三連打。最後は金本の3ランで締めくくった。

2003年5月31日
東京ナイター
⑪阪神8勝2敗1分
読売テレビ
ＭＢＳ毎日

巨人	阪神
2	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
2	0
1	11
5	13

投
下柳
吉野
安藤
〇谷中
中村泰

打
今岡5　赤星2
金本②　ｱﾘｱｽ2
矢野②　久慈2
桧山1　淺井1
関本①

18

打たれても格好いいウイリアムス（53試合目）

高橋（由）に、昨夜のウサを晴らすかのような、サヨナラ2ランを打たれたあと、ウイリアムスの姿をテレビで追ったが、映ったのは、まっさきにベンチを出る星野監督の姿だけで、あとはお祭り騒ぎの巨人ベンチだった。10チャンネルで、解説は長嶋さんとなれば当然のことで、高橋（由）もいい時に打ったものだ。長嶋さんは、スポーツ報知で、打つべき人が打ったこと、中継ぎの河本、前田、眞田投手の頑張りを評価し、2、3勝以上の勝ちがあるという。あの1996年のメイクドラマのことをいわないのも長嶋さんらしい。あの年の巨人は、7月6日に広島との差が11・5ゲームあったのをひっくり返した。また、昨年阪神は6月に8連敗を含む4勝13敗と失速、3位に転落した。阪神ファンはこの事を忘れていない。

話を戻す。スポーツ新聞にウイリアムスの姿を探した。スポーツ報知は、勝利投手の如く胸を張り、スポニチは、地面を蹴り上げてベンチへ帰る格好いい姿をのせていた。ウイリアムスは、打たれて、ますます闘争心を駆り立てるだろうが、ウイリアムスの、一週間の完全休養を与えると宣言して、投手陣を奮起させてはいかが星野さん。

阪神、巨人の新人投手の戦いは、久保より田が多い阪神の久保田が勝った。勝利投手をフイにしたが、六回1失点の好投は、敗戦の中で断然光っていた。一回、二岡に本塁打を浴びたが、五回には一死満塁から、その二岡を１４５キロの直球で空振り三振。さらに続く高橋由も2―3から１３０キロのフォークで仕留めた。六回の二死満塁のピンチも切り抜け5安打1失点。新人として堂々たるものだ。とくに、高橋（由）を打席に迎え、カウント2―1と追いこんだあと、阪神バッテリーはフォークボールを勝負球に選んだ。2球ワンバウンドになったが、矢野が全身で受け止めた。3球目もフォークボール、高橋（由）のバットは空を切った。この矢野との間に生まれた信頼関係は、久保田の大きな財産になるだろう。

2003年6月1日
東京ナイター
⑫巨人3勝8敗1分
読売テレビ
毎日ＭＢＳ

巨人	阪神
1	1
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
1	0
0	0
2×	0
4	3

投
久保田
吉野
安藤
●ウイリアムス

打
赤星2
金本2
今岡1
ｱﾘｱｽ①
沖原1
桧山1
8

ご当地選手八木大活躍（54試合目）

倉敷球場は何かが起きる。去年は広島戦でアリアスが3本の本塁打を打って、ファンを狂喜させたが、今年は発熱で休場、ご当地選手の八木が四番に起用された。その八木選手がアリアスに代わって、3安打3打点かと思っていたが、終わってみれば、5打数4安打5打点の大活躍で、地元ファンにこたえた。カビくさい言葉でいえば、〝錦を着て故郷へ帰る〟といったところ。ベースボールマガジン社の〝猛虎大鑑〟によれば、八木選手は、未完の大器といわれ続けて、気がついたら〝窓際族〟という、もったいない長距離砲。しかし、若手選手に人望があり、記録より記憶に残る選手だという。星野監督は、そんな八木選手を「何をいう働き盛りだ」といい、テレビの解説の藤田さんは、関本をみて、八木のミート打法を学べという。

もう一人活躍した選手は赤星。3安打3打点。とくに今岡が2度敬遠されたあとの赤星らしいピッチャー返しのはかったような安打は、一時はやったセリフを思い出す。

「ナメタラ、アカンゼヨ」

三回には、四球の今岡をバントで送る。藤田さんは、星野監督が赤星を怒るのは、監督という職業

の欲だという。

今年の阪神が強いのは、選手が競争心を持ったことだ。藤本が欠場して、片岡をも含め内野の競争は激しい。昨日、今日と沖原があたっている。関本、久慈には安打こそなかったが、関本には、三回惜しいライト線のファール。久慈は守備で貢献した。七回、井川が打たれて2点を失って降板。安藤が1点を失って、なお一死満塁。代打関川の打球は、センター前にフラフラとあがる。赤星も今岡も懸命に走るが届かない。その時、久慈が横から飛び出して好捕した。大量失点になるところ。

井川が登板するたびに、去年の井川に戻っているだろうかと毎度期待する。今日も立ちあがりからピンチの連続だったが、忍耐強く投げて六回まで無失点。１４０球投げ七回に疲れがでて降板。次回こそ完投を。

2003年6月3日
倉敷ナイター
⑩阪神4勝6敗

サンテレビ

阪神	中日
1	0
1	0
2	0
0	0
1	0
1	0
0	3
4	1
×	1
10	5

投
〇井川
安藤
谷中

打
八木4
赤星3
金本2
沖原2
桧山1
矢野1
浜中1
14

華麗な阪神野球（55試合目）

二回と六回の攻防の明暗が勝敗を分けた。

中日は、クルーズ、谷繁が連打して、無死一、二塁、先制のチャンスに、渡辺の遊ゴロが併殺打となって、チャンスを逃した。その裏、阪神は八木、桧山が連打して無死一、二塁、矢野の二遊間ゴロの安打で先取点をあげた。渡辺の打球が遊撃の正面をつき、矢野の球がほんの少し右へそれる明と暗である。続く片岡の左前打で2点、なお、無死一、二塁、沖原が初球をバント、一死二、三塁、藪は三ゴロに終わったが、今岡がインコースの難しい球を中前にはじき返して追加点をあげる。流れるような華麗な攻撃で4点をあげた。

六回の中日は福留が、あわや本塁打というライトフェンス直撃の二塁打で出塁。アレックスの打球がフラフラと外野へあがった。金本は深く守って追いつかない。ポトリと落ちたらピンチが拡大し、試合の流れが変わる。その時、赤星が二人の間をかいくぐってダイビングキャッチ、チームを救った。星野監督は、無安打でも2、3本打ったよな価値があると大絶賛。阪神は攻撃も守備も華麗だ。その裏、阪神は二死から、片岡が右へ6号本塁打で追加点をあげて明暗をわける。

片岡は巨人3連戦でノーヒット。淺井や浜中代打を告げられる屈辱も味わい、倉敷ではスタメンを

外されていた。次から次へとレギュラーを奪いあう競争が阪神を強くする。

藪は四回、アレックスに、ど真ん中の失投を2ランされてから、変化球から直球に切りかえて立ち直った。テレビ解説の中西さんは「藪は、ボールにする球が真ん中にはいり、井川は、ストライクをとる球がボールになる。それで藪は2―0から打たれたり、井川は四球が多くなる」という。

藪をつないだ吉野は、福留を三邪飛、アレックスを三振に仕留め、名誉を挽回する。ウイリアムスは、連打されたが、代打高橋（由）を三ゴロ併殺打に打ちとった。しかし、キレのあるスライダーはまだ戻っていない。

2003年6月4日
甲子園ナイター
⑪阪神5勝6敗
サンテレビ
ＡＢＣテレビ

阪神	中日
0	0
4	0
0	0
0	2
0	0
1	0
0	0
0	0
×	0
5	2

投
〇藪
安藤
吉野
Ｓウイリアムス

打
今岡2
八木2
片岡②
金本2
桧山1
矢野1
9

素晴らしい伊良部の投球術（56試合目）

伊良部は立ち上がり、井端、大西に打たれて、一死一、二塁で、あたっている福留を迎えた。2球で2ストライク取ったあと、ボール球を振らせようと、2―3。あとは、フォークで攻めた。1球はファールされ、2球目で二ゴロ併殺に仕留めた。

そのあとも、福留に二塁打、右前打と打たれたが、いずれも二死から次打者アレックスに四球、六回は内野安打されたが、計ったように次のクルーズで三振を取っている。3安打されている井端。二塁打、本塁打と打たれている谷繁の前にも走者を置いていない。走者を二塁に置くと、伊良部は物すごい集中力を発揮して慎重になる。9安打されたが、三塁ベースを踏ませたのは、四回と最終回の2度だけで11三振をとっている。

そんな投球術を、伊良部がよく口にする〝ロケーションが良い〟ということだと思っていたが、日刊スポーツの評論家中西さんは、ストライクゾーンを9分割した球の配置のことといい、ピンチでクルーズと2度対決したとき、サイドは間違っても、高低は絶対間違わない細心の注意を払って、2度とも三振に仕留めた配球を解説している。言葉をかえていえば、力と技、緩急自在、細心にして大胆、

両両相持つということか。サンテレビの解説の皆川さんは、〝素晴らしい〟という言葉を連発していた。

一昨日の久慈のプレー。八回裏、片岡が敬遠されて一、二塁。代打浜中につなごうと初球をセーフティバントしたが捕飛。失敗したが、ベテランのチームプレーとして書いておこうと思ったが原稿に余裕がなかった。その久慈が今季初スタメン、二回、一死二塁から初球を左中間へ三塁打。そして、六回、一死二、三塁から、代打八木が敬遠のあと、左翼へ犠牲フライ、全得点を叩き出して伊良部の好投にこたえた。桧山の2安打と、谷繁のブロックをかいくぐった走塁も見事だった。この日は、伊良部、久慈、桧山の同期生が活躍した日だった。

2003年6月5日
甲子園ナイター
⑫阪神6勝6敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
×	1
2	1

投
〇伊良部

打
桧山2
赤星1
金本1
片岡1
久慈1
6

巨人とのゲーム差10（57試合目）

白い紫陽花が満開だ。紫陽花につきものといえば、雨と蝸牛である。蝸牛より、でんでん虫といった方が親しみをます。陸上に住む巻貝のことである。梅雨は、まだ早く、今やでんでん虫を見ることができないとすれば、この白い紫陽花に似合うものは、日没間際の夕暮れだろう。

ヤクルトの六回の攻撃が、丁度その頃だった。ムーアが、ラミレスに2ランを打たれて4対3になったところでポートに代わった。

期待されているポートは、一死をとったものの、浜名に三塁打、飯田に左前打を打たれて同点とされた。ちょうど、紫陽花が夕闇に消える頃で、ヤクルトの勢いから、阪神の白星は消えたと思った。続く宮本に右前打がでて、一、三塁になっていたところ、宮本がオーバーベース、矢野が判断良く宮本を一塁に刺した。これで流れが阪神に来た。

七回、阪神は二死から、金本の二塁打がでたが無得点、その裏、ポートをつないだ谷中は、ラミレスに死球、古田に打たれて一死、一、二塁、宮出の代打、左のベッツのところで、投手は吉野。ベッツを二ゴロ、土橋を三振に打ちとって役目を果した。

八回、先頭打者の桧山が、2―3から三人目の投手鎌田のフォークボールをライトスタンドへ運んで均衡を破った。つづく矢野がレフトオーバーの安打、片岡の大きなセンターフライのあと、藤本の犠打で二死二塁、代打浜中が敬遠されたあと、今岡がバットを折りながら、ライト前に落として1点を追加した。そして、安藤がヤクルトの攻撃を三者凡退に打ちとったあとの九回、桧山が0―3から、2打席連続本塁打を打って勝利を不動のものとした。

ベンチは大騒ぎだった。お立ち台で「公共の電波を借りて申し訳ないですが、今日は息子の誕生日です」というあたりいかにも桧山らしい。矢野の2ラン、安藤、吉野の好投、さらに八木、金本のベテランらしい犠牲フライも忘れられない。

2003年6月6日
神宮ナイター
⑫阪神7勝5敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	1
0	0
0	0
0	2
2	1
1	0
0	0
0	2
0	1
4	7

投
ムーア
ポート
谷中
吉野
〇安藤

打
赤星3　今岡2
桧山②　矢野②
金本1　八木1
ムーア1片岡1
13

下柳一発に泣く（58試合目）

一昨夜桧山は、二回、二死二塁で、飯田の右翼フェンス際の大飛球を、ジャンプ一番、お手玉しながらキャッチして、チームのピンチを救った。それに気を良くした桧山は、八、九回と二打席連続本塁打という離れ業をやってのけた。

三回、赤星がファールで粘りに粘った14球目、レフトポールぎりぎりに大飛球を打ったが、ラミレスが好捕した。次の金本が中前打。桧山がレフト線の惜しいファールのあと、レフトへ大飛球を打ち、背走したラミレスが、フェンスにぶつかりながら、またも、好捕した。打ったのが桧山だっただけに、この時、始めて昨夜のことを思い出した。そして、今夜は、好守備に気を良くしたラミレスにやられるという嫌な予感がした。

下柳と佐藤。ベテラン選手の投手戦となった。均衡が破れたのは六回だった。下柳がベッツに右へヒットを打たれ、ラミレスを打席に迎えた。バッテリーはボールからはいる。２球目、矢野は併殺をねらって、インコースへボールになってもいい球を要求したと思う。それが少し中にはいった。失投を待っていたラミレスがバックスクリーン下へ、２ランをほりこんだ。マウンドの下柳の顔がゆがん

だ。

阪神は佐藤に、松山戦の時と同じ4安打散発で、打線がつながらない。松山で本塁打を打ったアリアスは風邪で休んでいる。

下柳をつないだ谷中が、七、八回とヤクルト打線を抑えて、九回、高津を攻めた、テレビが終わってラジオに切りかえる。

一死後、片岡、八木が連打。そして、2安打とあたっていた矢野が三振、その間に、走者が進塁。パスボールしたのか、ヒットエンドランのサインがでていたのか、ラジオでは、わからない。二死、二、三塁、1打同点のチャンスに、代打浜中、神宮は沸いたが、強いショートゴロに終わって、あと一歩届かなかった。夏男の異名を持つ下柳。脇役から主役に踊り出す。そんな予感のする好投だった。

2003年6月7日
神宮ナイター
⑬ヤクルト6勝7敗
テレビ大阪
毎日ＭＢＳ

ヤクルト	阪神
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
2	0

投
●下柳
谷中

打
片岡2
矢野2
金本1
八木1
6

好投の久保田はドラフト5位（59試合目）

毎月、第1月曜日は刀根山病院へ行く日である。69才、今から5年前に肺の手術をした。病は肺ノーホー。漢字が難しいので、お医者さんは、カルテに〝ブラ〟と書くらしい。小さな細胞がつぶれて、袋になってしまう病気である。

さしたる障害もなく、大きくなってから手術すればよいということで、ほっておいたら、階段を上がるにも息切れするようになり、手術に思いきった。

刀根山病院は、もともと結核療養所で、池田中学校（旧制）に通学していた頃、車窓から療養所を見て、勉強嫌いだった私は、結核になればいいのにと思ったものだ。いい年になって、それが実現するとは皮肉なものだ。

6月のレントゲンとCTスキャン。11月の肺活量と血液検査以外は、先生と雑談するのを楽しみにしている。そんな雑談の中から先生がタイガースファンであることがわかったのは、今年になってからである。独走する阪神に病棟が明るいという話からである。それから、あいさつ代わりに、日曜日の阪神の戦いぶりを話題にすることにした。患者さんが多いので長話はできない。

「久保田は、よかったですね」

九回、６安打３失点、１４０球。

「たいした新人だね、ドラフトは何位だったの」

「五位です」

「スカウトの手柄やね」

「テレビがないのが残念でしたね」

「そうね、ラジオのアナウンサーは、よく絶叫するね……ところで体の調子は」

「阪神と一緒です」

「６月は危ないよ」

それから簡単な診察が始まる。

今岡の２点タイムリー、金本の同点本塁打もあったが、２番手の安藤が延長11回、小野にサヨナラ打を打たれて、３対４で敗戦。延長戦は３敗１分けで、まだ勝利がない。

2003年６月８日
神宮ナイター
⑭ﾔｸﾙﾄ７勝７敗

毎日ＭＢＳ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
0	0
0	0
1	0
0	2
0	0
1	0
0	1
0	0
0	0
1×	0
4	3

投
久保田
●安藤

打
赤星３
八木２
矢野２
久慈２
今岡１
金本①
11

信じられない40勝（60試合目）

ここ三日はテレビ放送がない。ラジオを聞くことになったが、声そのものを文章にできても、声を聞いて文章にすることは難しい。臨場感がでないのである。アナウンサーのグランドの出来事に対する説明や描写が少なく、解説者に頼りすぎる。解説者は、聴取者が映像を見ているものとして、描写より批評が先走ってしまう。

昨夜の中日戦、五回の阪神の攻撃がいい例である。井川の三塁内野安打と今岡の右前打で、一死、一、三塁、金本の投ゴロで、野口は三塁へ暴投、井川が生還した。さらに、最近不調の桧山の代打浜中がライト前に打って同点とした。

スクイズのサインの見落としかと思ったが、金本にスクイズはあるまいと否定する。投ゴロで、三塁を飛び出した井川の凡ヘッドだろうか。そして、この凡ヘッドが好運を呼んだのか。打撃に助けられて、7勝をあげている井川の強運を思った。

スポーツニュースを見ると、井川の凡ヘッドでなくて、野口の考えられないミスである。金本の打球は、投手の前で大きく跳ねて、高い飛球となった。野口が取った時、井川はベースを離れていないし、

一塁へ投げても間に合わない。それなのに、野口が三塁へ投げた球は、走者を刺すといった球でなく、山なりのボールである。

スポニチの野口の談話は「ファールにするか、捕球で焦り、ミスしてしまった」という。テレビでも、この不可解な投手心理は説明できないだろう。しかし、野口が投げても無駄な球を三塁に投げたということはわかる。

昨夜の阪神はツイていた。五回の井川、金本の安打をはじめ二回の沖原の右前打、七回の満塁での金本の遊ゴロ、そして、駄目押しとなった関本の三遊間安打、いずれも好運な安打である。井川は相変わらずだったが、福留を抑えたことが成功した。安藤、ウイリアムスのリレーは完璧だった。

2003年6月10日
福井ナイター
⑬阪神7勝6敗

毎日ＭＢＳ

中日	阪神
1	0
0	0
0	2
3	0
0	2
0	0
0	3
0	0
0	0
4	7

投
〇井川
安藤
Ｓウイリアムス

打
今岡３　関本３
赤星２　浜中２
金本１　秀太１
矢野１　沖原１
井川１

15

コラム／六甲おろし

〈六甲おろし〉の応援歌を、はじめて聞いたのは、戦争に負けるほんの少し前だ。

場所は阪神電鉄の魚崎駅を降りて住吉川沿い、酒蔵の町を通って海へ出る道だった。阪神淡路大震災もあり、その道が今どうなっているのか、でかけることにした。

「この道はいつか来た道」といったところである。

私がその道を始めて歩いたのは、昭和二十年八月五日の夜半から六日未明の空襲で、阪神間の都市が全滅してしまった。それから数日後のことだった。駅を降りると焼野ヶ原で一望千里、夏の海がガラスの破片を散りばめたように光っていて、沈黙した町に、焼け残った松林で蝉だけが鳴いていた。その声は、空襲で打ちひしがれた人間への応援歌のようだった。

その年の四月に、私は関西学院へ入学し、秋まで授業を受けることになっていた。中学三年の夏から、学徒動員で工場が働き場所になっていただけに、平穏な日々が、春の日だまりの中にいるようでありがたかった。英語の授業も多く、配属将校が学校の先輩で、英語を使うのも意外だった。

ある日、机を並べている橋本君から、頼み事を聞いた。彼は広島出身で寮生活を送っている。「空襲で西宮の酒蔵が焼け、酒をわけてくれるらしいけん、かんざめの酒かも知れんが、つきあってくれ

んかの、寮でコンパをやるけん飲みに来てくれや」

私達は昼の授業をさぼって、水筒や薬缶では足りないので、バケツを持って行くことにした。酒蔵の焼け跡では、大きなホウロウのタンクの周りに人が集まり、お酒をさまざまな容器に入れてもらっていた。待ちきれずに飲む人もいて、大変賑やかだった。バケツを持って行った私達には、タンクに梯子をかけ、長い柄のついた杓子で直接すくってくれた。その杓子はふん尿を汲むものと同じ格好をしている。緑色のタンクには白いペンキで〈桜正宗〉と書いてあった。

その帰り道、前を歩いている人が〈六甲おろし〉を歌っていた。その人は国民服に幾つもの水筒をたすきがけにし、大きな声でなんども繰り返し歌っていた。応援歌にしてはいい歌詞だった。「蒼天翔ける日輪の青春の覇気」には、新感覚派の文章の匂いがある。佐藤惣之助の作詞で、そのほか〈赤城の子守歌〉〈湖畔の宿〉〈男の純情〉〈人生の並木道〉等の作詞家であるとともに、本職は詩人であることを知ったのは、戦争が終わってからである。

私は、そんなことを思い出しながら、すっかり整備され、戦争や地震の爪痕がなくなっている松並木の道を、いつか見た人のように、〈六甲おろし〉を歌い、遠くなった日のことを偲びながら歩いた。

その時のお礼に、というのは、いささかオーバーだが、〈桜正宗〉のことも調べる気になった。〈桜正宗〉といえば正宗を名乗る酒の元祖格である。清酒を〈セイシュウ〉正宗と読ませることで、正宗〈まさむね〉

と名づけるお酒が多く出回った。まぎらわしくなったので、明治初年に商標を改正することになった。その方法として、最初に〈宮水〉を発見した山邑酒造が一番はじめに名前をつけることにした。

山邑酒造は、日本の花は桜と、〈桜正宗〉と銘をつけた。二番目の酒造会社は〈菊正宗〉と名付けた。そして今は、住吉川をはさんで甘口、辛口の銘酒づくりに励んでいる。

なお、〈桜正宗〉の誕生の地は、誰もが灘だと思うだろうが、実は大阪市此花区の〈伝法〉というところで、山邑家の墓は伝法の正蓮寺にある。正蓮寺は、鴻池組の菩提寺であり、中内家の墓もある。

藪余裕の6勝（61試合目）

昨夜は女房がいないことを幸いに、テレビ放送がないので、携帯ラジオと、もう一つは缶ビールを風呂場に持ちこんだ。

藪が調子いいうえ、湯加減もいいし、ビールもよく冷えていて、たちまちご機嫌になる。二回、片岡、藤本の安打で、二死一、二塁、自らのバットで先取点を叩き出したことで気を良くし、藪は中日の打戦を、四回まで無安打に抑えた。

藪が入団した時、監督だった解説の中村さんは「低目を心がけ、ストライクを常に先行させ、伊良部の投球術から勉強したんだろう、緩急自在にコントロールされていた」といい、五回、立浪に二塁打を打たれ、ソワソワしだしたとき「伊良部みたいに、ああ打たれたか、まあいいやというような顔をしてほしい」という。中村さんも伊良部の印象が強いのだろう。

藪の今季初完投を期待したが、八回、森野に本塁打を打たれ、関川の中前打のあと、二人を打ちとって福留に廻ったところで降板、吉野につないだ。吉野は徹底した福留封じにこたえて、二ゴロに打ちとる。九回も吉野が続投、荒木、リナレスに打たれたが、無失点で試合終了。テンポの良い藪の投球に、

打線も調子にのる。三回、一死満塁のあと、片岡の右前打と関本の犠飛で2点、四回は、今岡、赤星、金本の安打で1点、さらに五回は、片岡の二塁打を藤本の左前打で帰し、藪の送りバントのあと、今岡の中前打で2点。しめて16安打で7点。猛打賞も3人でた。金本、今季初の片岡、復帰後、2試合無安打だった藤本の三人。競争の激しいポストの藤本も胸を撫でおろしたことだろう。しかし、ベテラン久慈の守備と関本の長打力も捨て難い。まだまだ安心はできまい。投手では、安藤、ウイリアムスを、打では、八木、浜中を温存し、ベテランを適当に休ませながら闘う選手起用も、堂に入ってきた。13日から2位巨人戦に向け態勢はととのった。心配なのは桧山と雨だけだ。

2003年6月11日
岐阜ナイター
⑭阪神8勝6敗

毎日ＭＢＳ

中日	阪神
0	0
0	2
0	2
0	1
0	2
0	0
1	0
1	0
0	0
2	7

投
〇藪
吉野

打
金本3
片岡3
藤本3
今岡2
赤星2
矢野1
関本1
藪1
16

浜中負傷（62試合目）

「梅雨というのに、こんな月です」

昨夜、三回の阪神の攻撃の前に、こういって、甲子園の月を画面一杯に写していたのに、今日は朝から雨だ。梅雨入りして始めての雨である。白から色変わりを始めた紫陽花が生き生きとしている。ワンカップの水に、大さじ一杯の白と、小さじ一杯の赤と水色の絵の具を交ぜ合わせ、隠し味程度に黒を落としたら、その色になると思う。

不幸な出来事から書こう。

五回、浜中が二岡のファールフライをフェンス間際まで追いつめながら、グローブのドテにあて落球してしまった。そのあと、伊良部が本塁打を打たれてしまう。六回、無死から阿部の左翼線安打の打球を取り、浜中の肩を気づかって、近くに来ている今岡に返球したと思ったら、右腕をだらりと下げ、右膝を地面につけ、痛さを我慢している。杉田トレーナーが浜中を抱くようにしてベンチへさがった。五回のエラーが、心にひっかかっていたのだろう。

「将来のある選手だ。一塁しか守れないような選手にしたくない」と監督が慎重を期していたのに

どうしたことだ。すんだことだ仕方ない。肩の筋肉を鍛えて、脱臼を克服してほしい。

伊良部が三本の本塁打を打たれ、3点リードされた七回、左前打の藤本を一塁において、関本が本塁打を打って1点差とし、なお、赤星の安打と金本の四球で、一、二塁。打者中村（豊）の初球に、赤星が三盗して、バッテリーを揺さぶったが、中村（豊）は遊ゴロに終わって、同点にできなかった。八、九回に逆転の希望をつないだ。ところが、八回、谷中が清原に死球、江藤に2ランを打たれてしまって、せっかくの反撃に水を差してしまった。

伊良部が3点取られたが、敗因は、一回、赤星、金本四球のあと、浜中が捕邪球、八木が投ゴロと、高橋（尚）の立ち上がりを崩せず、七回まで投げさせてしまったことだろう。

2003年6月13日
甲子園ナイター
⑬巨人4勝8敗1分

サンテレビ

阪神	巨人
0	1
0	0
0	0
0	0
0	1
0	1
2	0
0	2
0	1
2	6

投
●伊良部
吉野
谷中
佐久本
金沢

打
今岡2
赤星1
浜中1
八木1
藤本1
関本①
7

下柳の好投に片岡のサヨナラ打（63試合目）

摩訶不思議。昨夜の巨人戦を見ながら、つい口から出た言葉である。摩訶とは仏教用語で〝大〟のことをさすらしい。

ヤクルト2連戦で、2ケタ得点されて惨敗した巨人が、1点の攻防に鎬を削る戦いをするのだから、やはり伝統というものだろう。とは、去年までの阪神が、巨人ファンにいわれていたが、今年は、まさにその逆、阪神ファンに至福の日が続く。

手に汗を握る投手戦とは昨夜のことだろう。木佐貫は、威力のあるストレートとフォークで、一、二回、6三振。八回まで、四回を除き毎回走者を出すが、五回、六回と併殺に打ちとる。六回の片岡の三塁ライナーは、いい当たりだったが、正面をつき併殺に終わった。阪神は度重なるチャンスにタイムリーがでない。七回に藤本の二塁打がでた。六回までパーフェクトピッチングを続けている下柳に代打はないだろうと思っていたが、星野監督は勝負に出て、代打に八木を送ったが、二ゴロに終わった。星野監督の大胆な采配にこたえて、安藤が八、九回と6人を凡打に抑えた。九回、アリアスの左中間安打、矢野のバントで一死二塁、藤本が敬遠されると、二回目の勝負、好投の安藤に、関本を代

打に送った。関本が初球の絶好球を見逃すと、監督の厳しい顔が写った。初球から行けと指示していたのだろう。関本は最悪の遊ゴロ併殺。

十回は、久保田が新人らしくない度胸で、二岡を三振、高橋（尚）に四球を与えたが、清原を三振、江藤がよけたバットに球があたるヒットで一、二塁となったが、動ずることなく斉藤を三振に打ちとった。その裏、三塁エラーで出塁した今岡を赤星がバントで送り、金本が敬遠され、桧山がレフトのファールフライに終わったあと、片岡が前田のアウトコースの球を左中間にサヨナラ打を打った。超満員のファンの期待に答えた。完全試合を期待させた下柳のフォーク、スライダーを低目に集める丁寧な投球は素晴らしかった。5月31日の巨人戦から35人連続無安打に仕留めているのだからすごい。

2003年6月15日
甲子園ナイター
⑭阪神9勝4敗1分

ＡＢＣテレビ

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1×	0
1	0

投
下柳
安藤
〇久保田

打
今岡2
赤星1
金本1
桧山1
片岡1
アリアス1
藤本1
下柳1
9

矢野のサヨナラ三塁打（64試合目）

野球の醍醐味とは、昨夜のような試合をいうのだろう。連日のサヨナラ勝ちだ。昨年も確か3連続のサヨナラ勝ちがあったと思う。

「八、九回と敵の好守備で点が取れなかったりすると、投手はツキがないのかと思って不安になるものですよ」

九回、阪神の攻撃が始まる前、解説の上田さんの言葉である。横浜は八、九回と中継ぎの金沢、吉野、川尻の3投手から7安打を打ちながら、阪神の外野陣の好守に1点しか取れなかった。

それは、八回無死一塁から、赤星は鈴木（尚）の中前打を素早く処理し、一塁走者の種田を三塁に刺した。そのあと、ウッズ、佐伯に打たれて1点を失い、小川を左飛にとったが、村田に左前打を打たれ、二塁走者は代走の田中（一）、駄目を押されと思ったが、金本の懸命のバックホームと矢野のうまいブロックで田中を本塁に刺した。九回には、二死満塁から、走塁の失敗を取り戻そうと打った田中（一）の左中間ライナーを、金本は背走しながらジャンピングキャッチ。ファインプレーの連発にスタンドが盛り上がった。上田さんは、赤星を打率に足の付録が、金本には俺について来いという

付録があるという。この好プレーに2点のビハインドを背負っている阪神の攻撃陣は奮起した。

阪神打線を5安打と2本のソロ本塁打だけに抑えて好投していた三浦が、上田さんの予想したとおり、桧山が四球で塁に出た。これで阪神の攻撃陣が色めき立った。昨日サヨナラ打を打った片岡が、一、二塁間を破って、無死一、三塁。三浦がマウンドを降りた。珍しく阪神の応援団から拍手が起きる。無死一、三塁でデニーが登板した。二回に本塁打を打っているアリアスが死球で出塁。ここ数試合あたっていないといえ、チャンスに滅法強い矢野が1―3から、思い切り良く外角の球を前進守備の右中間へ運ぶサヨナラ三塁打。平野区瓜破の出身で、思い入れの深い選手の活躍だけに、達川コーチと同様、ことのほか嬉しい。

2003年6月17日
甲子園ナイター
⑬阪神12勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	1
1	0
0	0
1	0
0	2
0	0
0	0
0	1
3×	0
5	4

投
井川
金沢
吉野
〇川尻

打
アリアス②
金本①
桧山1
片岡1
矢野1
藤本1
7

速攻の阪神（65試合目）

一回、今岡の初球本塁打に次ぐ早い先取点をあげた。今岡が初球を2塁打、赤星が初球を左前打、2球にして1点。そのあと赤星が二盗、桧山のタイムリーで2点を先取した。五回には、矢野が2点タイムリーの2塁打を打って中押し、八回には、三盗の田中をおいて藤本がスクイズをきめて駄目押し、理想的な試合運びで、同一カード13連勝をあげた。横浜は阪神の貯金の約半分という大切なお客様である。となれば横浜のことも書かねばなるまい。

大阪の上宮高校山上監督の門下生、種田選手のことを書こう。先輩に一枝、同期に元木、後輩に黒田がいる。種田選手のガニマタ打法を見ていると、私は悲しい青春時代を思い出す。戦争に負けたあとにやってきたのは、まことに悲惨な食糧難である。我が家の横の天竺川の堤防の空地は、たちまち家庭菜園になった。その肥料は家庭の人糞しかなかった。それを運ぶのに肥担桶（こえたご）を使った。天秤棒の両端に、桶をぶら下げ、長い柄杓（ひしゃく）を片手に運ぶのである。そのために、度々衣服を濡らした。そんなことを経験して、斜めに天秤棒を担いで歩けば、バランスがとれることを覚えた。あの種田のガニマタ打法で歩くのである。その姿は野球帽を麦わら帽子にかえ、スパイクを地下足袋にかえるだけでよ

い。あの顔がうってつけである。今年の横浜は、若手起用の方針で、種田選手の出番は少ないが、この2試合に、スターティングメンバーとして登場した。2試合で4安打、昨夜はセンターへタイムリーを打っている。昨年の阪神戦で私の印象に残っていることがある。三塁に手から滑りこんでアウトになった時の猛抗議である。滑りこんだ手を関本にスパイクされ、その瞬間、ベースを離れたという、まことに無情な判定である。悔しいのか、痛いのか、種田は半泣きだった。このあと数試合出なかったことを思うと、痛いのを我慢していたのだろう。あのガニマタ打法は、いつまでも見たい。

種田選手は私の好きな選手である。

2003年6月19日
甲子園ナイター
⑭阪神13勝1敗

サンテレビ

阪神	横浜
2	0
0	0
0	1
0	0
2	0
0	0
4	0
0	1
×	0
8	2

投
〇ムーア
久保田
ウイリアムス

打
今岡3　赤星3
片岡2　アリアス2
金本1　矢野1
藤本1ムーア1
野口1　桧山1
16

巨人の喜びも束の間（66試合目）

阪神が首位を走っている、オールスター前後に、大人位の背丈になって、大輪の花を咲くことを期待して、四月に種をまいた九本の向日葵の花が咲き始めた。一ヶ月も早く、背丈も一米にも満たない。種をまく時期が早かったのだ。そんな向日葵の花が、梅雨に濡れている紫陽花の横で咲いているのだから、様にならない。阪神が首位であることは期待どおりだが、このままだと、オールスターまでもつまい。阪神ではない、向日葵の花である。昨夜の戦いぶりを見るかぎり、その頃も、阪神は大輪の花を咲かせていることだろう。

阪神が、今岡とアリアスの2本の本塁打で4対2とリードして、七回の巨人の攻撃、二死から斉藤の右前のあと、まさか、まさかの鈴木が伊良部の初球をレフトスタンドへほりこんだ。同点、鈴木が打席にはいる前に、原監督が耳打ちしていただけに、その喜びようは相当なものだった。解説の長嶋さんの声が弾んだ。

試合が振り出しに戻った八回、巨人の投手は、二回を好投した河本にかわって、取っておきの久保が満を持してマウンドに上がった。ところが、いきなり桧山に本塁打を打たれた。それからは、長嶋

さんが試合当初いっていた、ピッチングスタッフの不安が現実のものとなった。出てくる投手が水に油を注ぐように打たれた。打者15人がつないだ10安打10点の猛攻。こんな痛快なことはない。

桧山（中本塁打5点）片岡（中二塁打6点）八木（中二塁打7点）今岡（左二塁打8点）金本（左前打9点）桧山（右前打10点）アリアス（左前打11点）矢野（右本塁打14点）片岡（投強襲打）藤本（中前打）二死からの八連打。解説の荒木さんが、大勝しているのに阪神ベンチが緊張しているのに驚く。

去年、阪神が巨人に大敗した時、巨人ベンチで清原と元木が盛んに、はしゃぎ、翌日のスポーツ紙にのった清原の談話を思い出す。

「阪神の選手は野村監督のことを忘れたらあかん」と。その清原、3安打2打点とはさすがだが、今年の清原には笑顔がない。

2003年6月21日
東京ナイター
⑮阪神10勝4敗
1分
ＮＨＫテレビ

巨人	阪神
0	1
0	0
0	0
1	2
0	1
1	0
2	0
1	10
0	2
5	16

投
〇伊良部
久保田
吉野

打
桧山4
今岡③
ｱﾘｱｽ③
片岡3
金本2
矢野②
藤本2
八木1
20

久保田、下柳の白星を守る（67試合目）

五回まで、巨人打線を1安打に抑え5対0とリードしていた下柳が、六回、清水に2ランを打たれて5対2となった。七回の阪神の攻撃は下柳から。前回の巨人戦で、下柳は六回まで、巨人打線をパーフェクトに抑えながら、七回二死から藤本の二塁打がでて、1点勝負とみた監督に代打を送られている。十回、片岡のサヨナラがでて、久保田が勝利投手となった試合である。

続投か代打か。視聴者が監督気分になるのは、こんな時である。3点差もあり、前回の甲子園の事を気遣って私は続投だろうと思った。予想どおり下柳は打席にはいった。ところが、この続投が仇となって、七回、江藤、元木に連打され、無死一、二塁、ここで交代だろうと思ったが、監督は動かない。阿部にも打たれ無死満塁。前回の甲子園は気の毒だったが、今回は仕方ないだろう、そんな素振りを見せながら、監督はゆっくりと動く。なかなかの役者である。25の貯金もあれば、新人の久保田に試練を与える余裕もでてくるのだろう。

久保田は、新人らしくない度胸のプレート捌きで、斉藤を二ゴロに打ちとったが、バウンドが高く上がって、バックホームできず1点失う。なお、一死一、三塁、打者は勝負強い後藤、2　3からファー

ルで粘る。解説の江川さんは、フォークを投げれば、打者は必ず振ってくるという。勝負球のサインはフォークだった。後藤のバットは空を切ったが、矢野がパスボール、星野の怖い顔がテレビに写る。元木がホームへ帰って1点差で二死二塁、一打同点のチャンスを与えたが、物怖じしない久保田は、清水を一ゴロに打ちとる。九回は、久しぶりのウイリアムスが三人を簡単に打ちとった。

ここ、二、三日、阪神の速攻は見事だ。昨夜も一回、今岡が二塁打、赤星のバントを清原が一塁へ暴投、赤星が一挙三塁。金本のレフトへの本塁打で3点。三回は、二死二、三塁で、矢野が投手足許をぬいて2点をとった。阪神の選手達は、今や巨人を見下している。

2003年6月22日
東京ナイター
⑯阪神11勝4敗
1分
読売テレビ
毎日ＭＢＳ

巨人	阪神
0	3
0	0
0	2
0	0
0	0
2	0
2	0
0	0
0	0
4	5

投
〇下柳
久保田
Ｓウイリアムス

打
今岡2
桧山2
金本①
アリアス1
矢野1
7

井川今季初完封（68試合目）

昨年、夏場に勝てなかった事を反省して、井川は、キャンプの時から、夏場にピークを持って行くといっていた。今季は8勝しても、失点が多く、勝利投手になっても、監督に「あれまでの投手かも知れない」といわれる始末。寡黙な男は、秘めた闘志を燃やし続けていたのだろう。昨夜は、去年七月のヤクルト戦以来の完封である。

四回、町田に左中間二塁打を打たれ、新井に足許を抜かれて無死一、三塁となったが、2　3からファールで粘るシーツを三振、ハーストを遊ゴロ併殺に打ちとった。五回は、二死二、三塁となったが、木村拓を簡単に二ゴロ、失点しそうになったのは、この二回だけだった。井川は攻撃でも三回、四回と四球を選び、藤本の安打を上位打線に結びつけた。三回、藤本左前打、井川四球、無死一、二塁で、今岡の左前打で先取点、赤星が打席にはいる前、監督が赤星の頭を叩いて、笑いながら耳打ちをした。無死一、二塁で、バントを覚悟しながら、打ちたそうな顔をしている赤星を見て、ヒッティングを命じたのだろう。期待に答えて、赤星は投手の足許を抜いた。このあと、金本の一ゴロに、シーツが好守備を見せて併殺、二死三塁となったが、桧山の左前打で、しぶとく1点を追加した。敵ながらシー

ツはいい選手だ。四回は、片岡四球、矢野の右中間二塁打、藤本の2点タイムリーのあと、井川四球、藤本三盗のあと、今岡の犠飛で1点を追加した。

怪我もあり精彩を欠いていた藤本が、井川の四球を生かす2安打2打点三盗と恐怖の8番といわれた活躍を取り戻したのが嬉しい。楽勝とはいえ、初回の井川には驚いた。町田の打席でカウント2-2からの6球目、井川がバランスを崩し、マウンドへ猿木トレーナー、佐藤コーチが飛んで行く。酸欠になったと知ったのは、翌日のスポーツ紙である。私は、その時、井川が大食漢と聞いていたので、登板前に食べ過ぎたのではないかと思った。失礼。

2003年6月25日
大阪ナイター
⑩阪神8勝2敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
3	0
3	0
0	0
0	0
1	0
0	0
×	0
7	0

投
〇井川

打
今岡2
赤星2
桧山2
藤本2
金本1
アリアス1
矢野1
久慈1
12

久保田、數の白星つぶす（69試合目）

梅雨の季節になると、ドームを持たない球団は悩みが多い。梅の実のなる頃に降る雨だから、梅雨というらしい。そういえば、昨日家内が裏庭の梅の木の実をもいでいた。

家内の父が生存中、年の暮になると、梅の盆栽を届けてくれた。白い小石を散りばめた土に、苔に囲まれた拳大の大きさの石、福寿草、梅の木をあしらった盆栽で、正月の玄関を飾った。その役目を終えた梅の木を、家内が裏庭に植え、それが人の背丈ほどの大きさになって、ここ数年、実をつけるようになった。何時頃貰ったものか。家内の父は、東京オリンピックを病室で見たあと亡くなった。結婚した年が昭和34年だから、その間に貰ったものであろう。その年に貰ったとしても、39年経っている。家内は、朝から赤紫蘇と荒塩を買ってきて、小梅を漬けこんでいる。来年の今頃は、小梅の梅干となって、朝のお茶受けとなることだろう。

「梅干婆が梅干を漬けている」

思わず口から出そうになったが辛抱した。

考え過ぎかも知れないが、昨夜の試合も梅雨が影響していると思いたい。六回、桧山、アリアスの

連打で無死一、二塁、片岡が今季始めての投前バントを成功したが、矢野がキャッチフライに終わって二死、チャンスは終わったかと思ったが、これで終わらないのが今季の阪神、藤本が右中間へ三塁打を打って勝ち越した。二死ながら三塁。一昨日は、井川が完投しているし、藪はバッティングもいい、代打はないだろうと思ったが、監督は、ちゅうちょなく代打を送った。八木は四球、今岡が三振して、チャンスは広がらなかった。

ベンチは、三日前、藪が二回まで好投しながら、雨で流れ、中一日で先発、始めからスタミナを心配して、早めの交代を考えていたのだろう。これが裏目に出てしまった。負けなしの久保田が乱打を浴びて、試合が決まってしまった。降板してロッカーへ帰った久保田を、監督にいわれた淺井がベンチへ連れ戻した。お前の後始末をしている投手に失礼だということだろう。

2003年6月26日
大阪ナイター
⑪広島３勝８敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
1	2
1	0
0	0
2	0
0	0
0	5
0	0
4	7

投
藪
●久保田
金沢

打
今岡２
赤星２
矢野２
金本１
桧山１
アリアス１
藤本１
10

阪神の本塁打攻勢（70試合目）

久しぶり、阪神の一発攻勢である。

金本2ラン。桧山ソロ。今岡ソロ。アリアス3ラン。矢野ソロ。本塁打で9点。そういえば、5月9日の浜中、アリアス、片岡の三連発がでたのも、この横浜球場である。どうやら、この球場も浜風が吹くらしい。横からでなく、ホームベースからセンターへの縦の風らしい。

派手なホームランもいいが、五、六回の攻防が面白い。2点をリードしていた阪神は、名手の手から水がこぼれた。投手の斉藤に中前打を打たれ、金城の二ゴロで走者を二塁で封殺したが、石井の一ゴロを、アリアスが二塁へ暴投、今岡が何とか飛びついて、一死一、二塁、続く中根の左前打を、なんと名手金本がトンネル、二者が帰って同点に追いつかれた。そのあとの伊良部の投球は、さすがベテラン、冷静に苦手の佐伯を三塁ファールフライ。巨人戦であたっていた多村を三振に抑えた。

同点にされた六回の阪神の攻撃。桧山が右へ二塁打、アリアス、片岡が凡打して二死となったが、勝負強い矢野が左前打、あたりが強すぎて、ホームは無理だと思ったが、岡田コーチは腕を廻す。タイミングはアウトだったが、返球が少し右へ逸れる。桧山の反対方向への巧みなスライディング。次

打者の藤本が懸命に方向を指示していた。岡田コーチ、桧山、藤本の一体プレーだ。そして六回の阪神の守り、勝利投手の権利を残して伊良部が降板、連投の久保田が名誉挽回のマウンドにあがったが、種田に中前打、古木に死球と無死一、二塁のピンチを迎えた。相川はバントの構え、矢野は久保田に真中のストレートを要求した。種田はその球筋を見て、大きくリードしたが、打者はバントの空振り、矢野の素早い送球に、走者は塁に帰れなかった。そのほか、赤星の四回の好守も忘れ難い。八回、待望のリガンが登板したが、テレビ放送の時間切れで、その勇姿を見られなかったのが心残りだった。

2003年6月27日
横浜ナイター
⑮阪神14勝1敗
毎日テレビ
毎日ＭＢＳ

横浜	阪神
0	2
1	0
0	0
1	1
2	1
0	1
1	5
0	0
0	1
5	11

投
〇伊良部
久保田
安藤
リガン
ウイリアムス

打
矢野④
今岡③
桧山②
アリアス②
藤本1
12

横浜に15連勝（71試合目）

「阪神効果で家庭が明るくなった」とスポニチの記事。とんでもない、老妻は巨人ファンである。六月になれば、昨年の8連敗のような事が起こると高をくくっていたが、阪神の勢いは一向に衰えない。10ゲーム離された頃から、老妻もあきらめたのか、最近は、どうにか平穏無事である。

昨夜は、阪神がデーゲームだったので、夕食後、二人で巨人―中日戦を見た。中日の20年目山本（昌）がプロ入りした年に生まれたのが巨人二年目の林。その両先発投手が白熱した投手戦を演じた。老妻も、やや興奮ぎみで、江藤が三塁を欲ばって、アウトになった時は、年甲斐もなくテレビに罵声を浴びせる始末。そして、八回一死一、三塁で、井端の打球は元木の正面、清原との併殺の間に、三塁の谷繁がホームをついて1点勝ち越し、古女房は、併殺でスリーアウトだから、得点は認められないという。元木が一塁の関川にタッチしようとしたのが失敗だと説明しても納得できないらしい。これで、阪神との差が13・5ゲーム。「つま先でつながる巨人の首」毎日新聞の見出しは、いいえて妙である。

本題に戻って横浜とのデーゲーム。阪神は四回、アリアスの場外ソロホームラン、六回には、金本の二塁打と片岡のタイムリーで1点、矢野の2ラン、今シーズン始めてのベンチ入りした平下の2打

席目のソロホームランで5点。矢野は追い打ちをかけるのがうまい。捕手だけに、打たれたあとの投手心理がわかるのだろう。

打線に引き換え、ムーアは、まさに薄氷を踏む投球だった。先取点を取られ、五回には、二死満塁から、多村の打球が幸いレフト正面をついて助かったが、六回に、再び無死一、三塁で久保田にマウンドを譲った。

久保田は、相川を二ゴロ、佐伯のあたりの左前打で2点を失ったが、いつもの新人らしからぬプレート捌きは見事なものだ。ここでテレビ放送が終わり、あとは、吉野、安藤、リガン、ウイリアムスとつないで、5対2で阪神の勝利。

2003年6月28日
横浜
⑯阪神15勝1敗
毎日テレビ
毎日ＭＢＳ

横浜	阪神
1	0
0	0
0	0
0	1
0	0
2	3
0	1
0	0
0	0
3	5

投
〇ムーア
久保田
吉野
安藤
リガン
Ｓウイリアムス

打
赤星２　矢野②
金本１　ｱﾘｱｽ①
片岡１　藤本１
平下①

9

球団最速の50勝（72試合目）

今年の阪神は、チャンスをものにするのがうまい。昨夜の横浜戦は、一、二、三、五、六回と3者凡退で、九回を除いて四、七、八回のチャンスを、すべてものにしている。選手達が集中力と自信を持っているのだろう。

四回一死から、赤星、金本が連打し、桧山のセンター前のヒットが、アウト、セーフのぎりぎりで、一塁走者の金本が塁に戻りながら、スタートしたため、センターゴロとなって二塁で封殺された。決して凡走ではない。チャンスは潰れたかと思ったが、アリアスが3試合連続18号を左翼席に放り込んだ。本塁打王に手が届きそうな選手がチーム愛を優先するのだから阪神は強い。

五回でテレビ放送が終わって、六回からはラジオ。七回の阪神の攻撃は特筆ものだ。二死走者なし。打者藤本は、塁に出れば、監督は代打を送るだろうと考えて、二塁前へドラックバントを決めた。投手が取れるような球だったが、予想どおり、守備のうまくないドミンゴであることが幸いした。2者が倒れ、諦めかけていた監督は、投手の替え時でもあり、躊躇することなく、代打に平下を送った。平下の痛くもない死球でチャンスは広がった。二死一、二塁、打順は一番に廻った。今岡は、カウン

トを2―1と追い込まれてから、ファールで粘る。ラジオ解説の門田さんは、こんな今岡を絶賛する。

「ファールして、自分のしぼり球を待つことは、一流打者だからできる事で、そう簡単にできるものではありません」

今岡は、センターオーバーの二塁打で、2者を帰した。さらに、その門田さんが、八回、安藤が多村に打たれて、すぐマウンドへ走った佐藤コーチのタイミングの良さを褒める。安藤は後続の二人を三振に打ち取った。

インタビューで「疲れました」と、それ以上いわない先発の下柳も、本塁打は打たれたが、六回まで9三振を奪う好投だった。八回の桧山の本塁打も書いておこう。

2003年6月29日
横浜
⑰阪神16勝1敗
毎日テレビ
ＡＢＣ放送

横浜	阪神
0	0
1	0
0	0
1	3
0	0
0	0
0	2
0	1
0	0
2	6

投
〇下柳
吉野
安藤
ウイリアムス

打
今岡2　片岡2
赤星1　金本1
桧山①　ｱﾘｱｽ①
矢野1　藤本1
10

コラム／若林投手

町の図書館、映画館、そして鳴尾球場は、私にとって格好の場所である。鳴尾球場は阪神タイガースの二軍の球場で、甲子園駅からバスで十五分、なにより無料であることが有難い。デフレといい出してから、いずれの場所も、最近とみに人が増えている。

鳴尾球場のことは、ともかくとして、図書館で【阪神タイガース昭和の歩み】を見つけ、忘れてしまっていた古い記憶を呼び戻すことが出来たことを書こう。

阪神タイガースのオールドファンは、戦後の別当、藤村、土井垣らのダイナマイト打線や、小山、村山、バッキー達投手陣による一九六一年、六四年の優勝を語り、中年の人は一九八五年の掛布、バース、岡田の日本一トリオの打線を話題にした。残念なことに、その優勝を知らない若者が年を追うごとに増えている。

私は、七色の変化球を投げた若林投手が好きで、中学生（旧制）の頃、甲子園球場へよく行った。右腕を頭上にあげ、一塁ランナーを牽制しながら、そのまま投げる独特のフォームが、今も目に浮かぶ。ボークにならなかったのは、牽制の時マウンドをはずし、投げる時にマウンドを踏んでいたのだろうか。今でいうクイック投法の走りかも知れない。それともボークか。

戦争中のことで、試合数も少なく、空襲警報の発令で中止になったこともあった。その頃の若林投手の写真が記念誌にのこっている。戦闘帽の顎紐をしめた勇ましい格好だが、表情は優れない。

一九四三年、戦争の雲行きが危なくなって、政府は戦意高揚のため敵性語の使用を禁止した。ストライクを〈一本〉ボールを〈一つ〉三振を〈それまで〉と、まるで剣道の用語のようになった。

この年の夏には、藤村富美男、景浦、門前が除隊になって復帰したが、阪神は巨人、名古屋について三位だった。

翌一九四四年、日本野球連盟は「日本野球報國会」と改称し、なんとか野球を続けようとしたが、選手達は軍需工場に動員され、西鉄、大和が解散、六球団になってしまった。阪神の選手達は、電鉄車庫、土木車輛部に籍を置いて野球をした。

その年、若林が監督で27勝6敗2分で最多勝利、最優秀防御率、最高勝利投手と獅子奮迅の活躍をし、藤村がチームでただ一人3割を打ち、チームは勝率8割1分8厘の高率で2位の巨人に8ゲームの差をつけて優勝した。

当時から智の若林、情の藤村、両雄並び立たずといわれていた。そこへ、戦後若林が家庭の事情で、球団への復帰が九月に遅れたことと、その間フロントが藤村を正式の監督ではないが、チームを統率する立場に置いたことが、二人の仲を複雑にした。そんなことが二リーグ分裂の時、若林投手を毎日

へ走らせたのだろう。毎日へ走った若林投手は優勝に貢献し、四十八才まで現役だった。

その年の十一月十三日、プロ野球は一時休止することになった。ところが、野球の好きな日本人は、翌年一九四五年正月野球として、一月一日から五日間、甲子園と西宮球場で阪神と産業軍で〈猛虎軍〉。一方阪急と朝日で〈隼軍〉として試合をしている。そのシリーズでの三日間に空襲警報が発令され、試合が途中で中止になっている。私が甲子園で見たのは、たしかその試合だ。

「産業軍」という風変わりな名前と、そのチームだけがゲートルを巻いていたのを今も記憶に残っている。そして、三月十日に東京、十四日に大阪、十七日に名古屋にB29の大空襲があって野球どころではなくなった。

野球の好きだったサトウハチローがこんな詩を作っている。

〈若林忠志〉

色あれど、表にあらわさず
音あれど、むやみに発せず
淡々とみせて
ひょうひょうとかせぐ
私はそんな若林投手が好きだった。

桧山サイクルヒット（73試合目）

桧山デーだった。

初回、1点リードされたあと、四球の金本をおいて、桧山の2ランから、阪神の攻撃が始まった。七回までに11対1、勝利は間違いない。ファンの楽しみは、桧山のサイクルヒットにかかっていた。一番難しいといわれている三塁打が残っていた。五回のチャンスは気負い過ぎて三振、七回の5打席目が最後のチャンスとなった。桧山は、山井の3球目を奇麗なフォームで打ち、球はアレックスの頭上を越える。テレビを見ながら、思わず「はいるな」と叫ぶ。幸い、ワンバウンドしてフェンスにあたって跳ね返った球を、アレックスがジャッグルした。とはいえ、アレックスは、球界随一の強肩の持主である。必死になって走る桧山をカメラが追う。サイクルヒットの完成に甲子園の観衆が熱狂した。

シーズン始めは、守備位置を、若い赤星、浜中に譲ってファーストを守り、不慣れな守備がバッティングに影響し、打率も2割2分台となってしまい、五月には、代打要員となって、ベンチを暖める日が続いた。桧山は選手会長として、チームのために自分を犠牲にすることを、いとわない謙虚な選手である。サイクルヒットは、そんな男への褒美だろう。

二回の阪神、八木の左前打と矢野の四球で無死一、二塁、藤本の犠打で二、三塁、今岡を期待したものだろう。ところが、井川は野口のスライダーを巧みにミートし、前進守備の二遊間を抜いて2人を迎えいれた。

これに気を良くした井川は、前回に引き続き完投で10勝、粘投いや熱投の１５６球だった。それに引き換え、投手に打たれてショックだったのか、野口は早々に降板し、エースが打たれたあとの中日の投手陣は、阪神打線の餌食だった。今岡、桧山の４安打、片岡のスリーラン、矢野の勝負強いタイムリー、得点に結びついた金本の2四球、17安打14得点、４連勝で貯金30という快挙だ。中日は、２０００本安打にあと5本という立浪がブレーキだった。

2003年7月2日
甲子園ナイター
⑮阪神９勝６敗

サンテレビ

阪神	中日
2	1
2	0
2	0
0	0
5	0
0	0
3	0
0	0
×	2
14	3

投
〇井川

打

今岡４	桧山４
矢野２	赤星１
ｱﾘｱｽ１	八木１
片岡１	藤本１
久慈１	井川１

17

二死満塁、今岡のセーフティバント（74試合目）

〝あっと驚く為五郎〟

古い箪笥（たんす）から着物を取り出すようなギャグだが、昨夜の今岡のプレーは、そんなハッスルぶりだった。

初回からシーソーゲームのような点の取りあい、6対4とリードされて迎えた三回、片岡の2点タイムリーで同点とし、二死満塁で今岡に打順が廻った。初球、誰も想像していないことが起こった。ファーストへのセーフティバントである。三塁側でなく一塁側である。かねて、ベッツの守備ぶりを見ていたのだろう。ヘッドスライディングする今岡と、倒れこんでベースカバーにはいる坂元が交錯する中、審判は大きく両手を広げた。雨上がりの土に泥ん子になっている今岡を見て、前監督の今岡評を思い出した。

「あいつのユニホームが汚れているのを見たこともない。ボーっとしていて真剣にプレーしているように見えない」

その年は藪と共に2軍に落とされた。そして昨年は、今岡の活躍ぶりに「今岡に裏切られた気がする。

監督が選手を嫌うというのはあっても、選手から監督が嫌われるのは珍しい」と。その発言を伝え聞いた今岡は「優勝するんです、見といて下さい」と応酬し、一言も弁解しなかった。今年は、なかなか優勝といわないが、裏切り者呼ばわりされたことは決して忘れないだろう。

―

そんな今岡が、さらに五回二死一、三塁で苦手の坂元から中越え2点タイムリー二塁打。２　３から低目の難しいフォークを巧打した。阪神は2敗している佐藤をよく打った。16安打13点。猛打賞は、今岡、赤星、アリアス、片岡の４人。２安打だが矢野は勝負強い。ただ金本の不振が心配だ。

藪はストライクゾーンで、勝負を急ぐくせが直らない。初回４点を貰いながら、三回までに６失点降板は頂けない。あとの中継ぎ陣が好投した。藪のあとの久保田が２イニングを１５０キロの球威を武器に、３者を凡退、ヤクルトの勢いを止めたのが大きい。

2003年7月5日
甲子園ナイター
⑮阪神８勝７敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
4	0
0	2
3	4
0	0
2	0
2	1
0	0
2	0
×	0
13	7

投
藪
谷中
〇久保田
リガン
吉野
安藤
ウイリアムス

打
今岡３　赤星３
ｱﾘｱｽ３　片岡３
矢野２　藤本１
秀太１

16

連日のお立ち台今岡（75試合目）

今岡は今年、優勝を口にしないと書いたが、連日のお立ち台に上がって、七夕にちなんで、アナウンサーに、短冊に何を書きますかと聞かれて、一呼吸おき、思いきって〝優勝〟と叫んだ。誘導尋問にひっかかった嫌いがある。阪神の勝率は７１６の新記録。

乗りに乗る今岡、またもや初球本塁打。このあと、赤星が左前打で盗塁、金本の捕ゴロで三塁、桧山の犠打で、電光石火の先取点だ。四回は片岡のタイムリー二塁打。五回、今岡の右中間二塁打、稲葉がもたつく間に三塁へ。赤星は、インコースに来たら当たろう思っていたという死球。達川コーチの伝授か、当たった右足を大げさに痛がるふりをして、金本の初球に、いきなり盗塁、無死二、三塁で金本が16打席ぶりの三遊間安打で2点の中押し、八回の駄目押しにも今岡がからんだ。矢野四球、藤本の送りバントで一死二塁、代打の八木は三ゴロに終わって二死となったが、今岡、赤星の中前打が続いて2点。今岡は猛打賞、赤星は2安打2盗塁。アリアスも五回の右前打で15試合連続安打を継続、打率も２６５まであがった。監督は、絶好調の時の落とし穴、今岡のハッスルプレーに怪我を心配する。

下柳は粘りの投球で五回２３を７安打２失点で5勝をあげた。毎回安打を許しながらも後続を断っ

ていたが、六回、古田に四球を出し、ベッツに安打を浴びて、二死一、三塁となり久保田の救援を仰いだ。5対1。男っぽい監督だが、投手リレーは極めて慎重だ。久保田は、土橋に打たれて1点を失った。七回は、稲葉に二塁打を打たれたが、2三振を奪って無得点に抑え、八回に左が2人続くので吉野につなぐ。吉野は、左打者を打ち取ったが、古田に死球を与え、土橋一人に安藤をつなぎ、ストッパーにリガン、2安打されたが、球が走っているので心配あるまい。

解説の有田さんは、半袖のベバリンを見て、投手は下柳のように長袖を着用すべきという。でないと汗が指先に伝わって手が滑るという。

V9で有名な元巨人監督の川上さんを評して、人は〝石橋を叩いて渡る人〟いや〝壊す人〟ともいう。星野監督が、そんな川上さんに師事していたことは、案外知られていない。昨夜のリレーは川上流儀だ。

2003年7月6日
甲子園ナイター
⑯阪神9勝7敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
2	0
0	0
0	0
1	1
2	0
0	1
0	0
2	0
×	0
7	2

投
〇下柳
久保田
吉野
安藤
リガン

打
今岡3
赤星2
金本1
桧山1
アリアス1
片岡1
11

アリアス2本塁打、M49（76試合目）

灰色の空に青空が覗き、雲も夏雲らしくなったと思ったのも束の間で、蒸し暑い、どんよりした日になった。

倉敷マスカット球場の幕あきは、今岡の初球ホームランから始まった。2試合連続、3度目である。1シーズン3度は史上初である。戦国時代でいえば、狼煙（のろし）をあげて、士気を鼓舞するといったところだろう。一球にかける集中力の賜である。

スポニチによると、今岡の初回先頭安打した試合が22試合あって、そのうち20試合が勝ち試合だからすごい。まさしく、優勝へばく進する猛虎号のけん引車である。

昨夜は、今岡の初球ホームランのあと、すぐに木村（拓）に本塁打を打たれたが、阪神は負けていない、二回、片岡の中前打と藤本の四球で二死一、二塁、井川は2―0から粘って2―3とし、ブロックの7球目を投手の足許を抜いて1点を取り戻し、そのあと、今岡がレフト前に打って主導権を譲らない。井川のバッティングもなかなかのものだ。三回には、桧山が左前打すると、アリアスが目も醒めるような2ランをレフトスタンドへ、そして、五回にも、右中間二塁打の桧山を、二塁において、ブロッ

クの高目のカーブをまたもやレフトスタンドへ、アリアスは七回に左犠飛を打ち上げ、今季53打点となり、矢野を抜いてチームのトップとなり、16試合連続安打である。金本の不振を、桧山、アリアスがカバーする。

井川は、ストレートに威力なく、12安打を打たれながら、チェンジアップで体をかわし、強力打線に守られて11勝目をあげた。141球、無四球。

テレビ大阪の解説の江夏さんは、恒例の江夏の一球として井川の二回のタイムリーヒットを推奨した。理由は時間制限で聞けなかったが、井川にヒットを打たれたことで、ブロックがペースを乱し、アリアスに本塁打を打たれたことをいっているのだろう。そういえば、井川に打たれた時、ブロックは、マウンドから球審に文句をいっていた。

2003年7月8日
倉敷ナイター
⑫阪神9勝3敗

テレビ大阪

広島	阪神
1	1
0	2
0	2
1	0
0	2
0	0
0	1
0	0
2	0
4	8

投
〇井川

打
桧山3
今岡2
アリアス②
藤本2
片岡1
井川1
11

久保田の一人芝居でサヨナラ負け（77試合目）

阪神は負けたが、西本さんのお元気な姿をテレビで拝見できて、何より嬉しい。確か大正9年生まれの方だから、83才になっておられるはずだ。愛情と情熱で根気良く選手を育てられる手腕に関しては、西本さんの右に出る監督はいないだろう。

試合は二回、2四球で無死一、二塁、藤本、伊良部が凡退したあと、絶好調の今岡が三塁線を破る2点タイムリー。3試合連続の先制点をあげた。そんな今岡を、西本さんは、落合、野村選手に匹敵する域に達しているといって、監督でなく解説の星野さんを驚かした。そして、星野さんが今年の今岡は技術面より精神面が充実しているというと、西本さんは、今岡は、もともと技術の秀れている選手だという。

先取点をあげたあとの阪神は、西本さんの指摘どおり、長谷川の荒れ球にてこずって、点が取れない。阪神は、制球のいい伊良部が四球絡みで2点を失い、同点のまま両投手は降板した。あとは、中つぎ陣による二幕目の幕が上がった。

阪神は八回、吉野が前田に四球を与え、シーツの犠打で一死二塁、野村を敬遠してマウンドを下りた。

三番手の安藤は2人を簡単に打ちとって、九回の攻撃を迎えた。二死から藤本の左前打が出て、盗塁すると、打席に入っている安藤を0―2から平下に代えて勝負に出た。平下四球で、最も期待の出来る今岡につないだが、三ゴロに終わった。

阪神のマウンドには久保田が上がった。いきなり森笠に三遊間を抜かれ、一塁への牽制球が暴投となって無死三塁、ベンチは満塁策をとった。久保田は、151キロの直球と変化球で、新井を遊ゴロ、2―3から広瀬を三振、シーツを一塁ファールフライに打ちとった。

十回の阪神は赤星の左前打だけ、その裏、久保田は、一死一、二塁、併殺にとれる森笠の投ゴロを二塁へ暴投、またもや満塁、木村（拓）を一ゴロに、二死となったが、緒方に初球をぶっつけ、あっけない幕切れとなった。投手は9番目の内野手ということを、久保田は肝に銘じたことだろう。

2003年7月9日
広島ナイター
⑬広島4勝9敗

関西TV・毎日MBS

広島	阪神
0	0
0	2
1	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
1×	0
3	2

投
伊良部
吉野
安藤
●久保田

打
今岡2
赤星1
桧山1
片岡1
藤本1
伊良部1
7

安藤二回パーフェクト（78試合目）

今岡の左前打で始まり、二死満塁と攻めたが、片岡が三振して先取点が取れない。その裏、ムーアは2人を三振に打ちとったが、そのあと、3連打され先取点を取られた。

三回、阪神のお家芸の集中打が出た。赤星が右中間を破る二塁打、当たりの止まっている金本が四球を選んで、無死一、二塁。桧山の進塁打で一死二、三塁。このチャンスに、最近右打ちが出来るようになって、打率を270まであげているアリアスに打順が廻った。アリアスは期待どおり、右中間を破る巧打で2点。すかさず、片岡が左中間二塁打、さらに矢野がセンター前にタイムリー、集中打で一挙4点をあげた。

4点を貰いながら、ムーアのピッチングはピリっとしない。コントロールは悪く、内角への鋭いストレートも影をひそめ、四回は、野村にヒット、森笠に四球、木村（拓）にタイムリーを打たれて1点を失い、町田に死球を与えて二死満塁。新井を遊ゴロに打ちとって事無きを得た。五回には、前田に死球、シーツに四球、佐藤コーチがマウンドへ走る。ベンチで監督がいらだっている。「義行（よし）け!!」監督の叱声が聞こえるような気がする。てっきり交代かと思ったが続投である。勝利投手の権利を気

遣ってのことだろう。このあたりが星野監督らしい。この回は、木村（一）を三振、広瀬を遊ゴロ併殺打に打ちとり、失点を1点に抑えた。ムーアは、五回を8安打5四球で降板、投球はいまいちだったが、二回、自ら安打を放ち、打てば負けない不敗神話は継続中だ。

六回は、リガンが登板、いきなり森笠の遊ゴロを藤本がエラー、犠打と淺井の四球で、一死一、二塁。広島は重盗を試みた。二塁走者の森笠はリガンのモーションを盗んでいたが、淺井のスタートが遅れているのを見逃さなかった矢野は、二塁へ送球、淺井を刺した。この好判断に気を良くしたリガンは、新井を三振に打ち取った。七、八回の安藤は、３Ｋ、パーフェクトのピッチングで、広島の反撃の芽をつんだ。九回のウイリアムスは、四球、死球と走者を出したが、新井の二直が併殺となる好運で無失点に抑えた。安藤が3度目のヒーローインタビューをうけた。

2003年7月10日
広島ナイター
⑭阪神10勝4敗

ＮＨＫ衛生第一

広島	阪神
1	0
0	0
0	4
1	1
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
3	5

投
〇ムーア
リガン
安藤
Ｓウイリアムス

打
アリアス4
今岡2
赤星1
桧山1
片岡1
ムーア1
矢野1
11

四回に一挙8点（79試合目）

四回、8点の猛攻を、それまでのピンチをよく守ったことで、流れが来るのが、手に取るようにわかった。飛ばしていた工藤も、味方が点を取れないので、がっかりしたのだろう。とは星野監督の勝利談話である。

二回、江藤四球、阿部が捕手の打撃妨害で二死一、二塁、仁志の左前打で、江藤が本塁をついたが、金本の好返球が、バッテリーを助けた。四回は、清原の右前打、ペタジーニの四球、珍しい矢野の2度の捕逸で、一死二、三塁、江藤の三塁頭上を越えるようなゴロは、片岡の好捕で内野安打とし一死満塁で阿部を迎えた。バッテリーは、内角をついたあと、外角低目を打たして、遊ゴロ併殺打に仕止めた。この遊ゴロを始め、藤本の送球が再三ショートバントするのを、目立たないが、再三好捕していたアリアスの事も忘れられない。この阪神の好守備に、気落ちした工藤に、その裏、阪神得意の集中攻撃が始まった。

口火を切ったのは、二回の好守備で気を良くしていた金本だ。今迄の不振が嘘のような強い打球が一、二塁間を破った。桧山が右前打、アリアスが四球で無死満塁、片岡一飛のあと、矢野が名誉ばん回のライトへの2点タイムリー二塁打で2点。すかさず、藤本がセンター前に2点タイムリー、ベン

チの強硬策に答えて、藪が投手の足許を抜いて一死一、二塁、今岡の一塁のファールフライで二死となったが、赤星がセンター前のタイムリーヒットで打順が一巡した。

2順目の金本が〝10年ぶりに打った感じ〟という11号3ランで巨人の止めを刺した。11安打8点の猛攻である。この中には、四回のチャンスに併殺打を打ってしまった阿部、2度のパスボールの失敗を取り返そうとする矢野、好守と快打で気を良くしている金本、勝負の流れということは、これ等選手達の心理的な綾が作るのだろう。四回のあとも、沖原の3安打を始め、今岡、アリアスの二塁打、矢野の2ラン等で6点を追加。18安打、14点の大勝だった。

2003年7月11日
甲子園ナイター
⑰阪神 12勝4敗
1分

阪神	巨人
0	0
0	0
0	0
8	0
3	0
0	0
3	0
0	1
×	0
14	1

投
〇藪
佐久本

打
金本③
沖原3
矢野③
桧山2
藪2
今岡1
赤星1
ｱﾘｱｽ1
藤本1
久慈1
18

先発全員得点・沖原4安打（80試合目）

先発のラスには、七回戦で4―0と完封されているので、苦戦を予想したが、初回の明暗が試合を決めてしまった。

下柳は、立ち上がり清水に二塁打を打たれたが、二岡を一ゴロ、高橋（由）、清原に、ボールを振らせて三振に打ちとった。それに反し、ラスは味方のエラーに、足を引っぱられた。今岡の三ゴロを、江藤が悪送球、一死一塁で、金本の二ゴロを、今度は仁志がトンネルしてしまった。このミスにつけこんで、桧山、アリアス、矢野、沖原がヒット、ペタジーニのエラーもからみ、阪神は一挙5点を先取した。二回にも、無死一塁で、赤星の遊ゴロを二岡がトンネル。またもや、このミスにつけこんだ阪神は、二塁打4本を含む8安打、打者13人の猛攻で7得点した。

テレビに写る巨人軍の選手達は、戦意喪失、集中力を欠いている。9点取られて、ラスと阿部の交代を告げ、ベンチに戻った原監督は、帽子を叩きつけていた。ヤクルトにサヨナラ負けを含む3連敗。そして、この阪神2連戦の屈辱的な敗北に、我慢しきれなくなったのだろう。

この日の阪神は、先発全員安打、全員得点。その中でワキ役の沖原が光った。昨日から6打席連続

安打、そして、甲子園初本塁打となる一打をバックスクリーンに打ちこんだ。星野監督も、この控え選手の活躍に大喜びだ。

今日の下柳投手は、九回に完封を意識して3点を取られたが完璧だった。巨人打線は、低目にコントロールされた球を打ちあぐねていた。

この調子でいくと、先発投手全員10勝以上、ムーアが登板の時は全員3割打者というのも、あながち夢ではあるまい。今年の阪神は控え選手をはじめ、全員で戦っているということだろう。後半戦は、〝勝って兜の緒を締めよ〟怪我人なしで戦ってほしい。今日は朝から雨、前半戦最後に、久保田、木佐貫の若手投手の投げあいを見たかったが、甲子園は中止だろう。

2003年7月12日
甲子園ナイター
⑱阪神 13勝4敗
1分
サンテレビ

阪神	巨人
5	0
7	0
0	0
1	0
1	0
0	0
0	0
0	0
×	3
14	3

投
〇下柳

打

沖原④
アリアス3
桧山3
今岡2
赤星1
金本1
八木1
下柳1
片岡1
矢野1
18

リガン、初勝利投手（81試合目）

7月16日、今年初めて蝉が鳴いた。昨年は7月20日だった。それから、梅雨寒といった日が続く。今日もそんな日で、蝉も鳴かない、うっとうしい日である。昨日の広島戦は、幕切れにドラマが待っていた。八回、桧山の打球が高く上がり、風に乗って右中間スタンドへ飛びこんだ。この本塁打で4対3、1点を勝ち越し、後半戦の初戦は、これでいただきと思った。

ところが、ウイリアムスは、ぬかるんだマウンドに足を取られ、コントロールが定まらない。木村（一）を遊ゴロに打ちとり、代打町田に四球、そこまでは安心できたが、木村（拓）、緒方に連続死球、二死満塁で、悪いことに、今シーズン始めての4番で、あたりにあたっているシーツに打順が廻った。4打席、2本塁打と二塁打と広島の全得点を稼いでいる。

二死、貯金35、ウイリアムスのメンツもある。続投かと思ったが、ベンチは素早く動いた。安藤が残っていた。チャレンジャーの姿勢で、一戦一戦を大切に戦おうとするベンチの考えだろう。

安藤は、物怖じしない堂々とした真剣勝負を挑む。直球で2―0とシーツを追い込む。1球はずしたあと、4球目は外角低目にストレート。シーツのバットが空を切って熱戦は終わった。

試合は、藪がシーツの二塁打で1点を失ったあと、今岡の今季5度目の先頭打者本塁打で試合が始まった。二回は、矢野が右前の片岡をおいて、右中間に11号2ランを放って、藪を援護するが、藪はシーツに初回2点タイムリー、三回と五回に本塁打を打たれ、五回で降板した。藪は五回9安打3失点。六回は、谷中が新井に打たれたが、野村を左飛、石原を二ゴロ併殺打に打ちとり、七回、八回はリガンが雨で試合の中断もあったが、被安打1、2三振と好投、来日初めての勝利投手となった。オールスターで優秀選手になったアリアスが、やたらと強振し、4三振はいただけない。

2003年7月18日
甲子園ナイター
⑮阪神11勝4敗

サンテレビ

阪神	広島
1	1
2	0
0	1
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
×	0
4	3

投
藪
谷中
〇リガン
ウイリアムス
S安藤

打
矢野③
桧山②
今岡①
赤星1
金本1
片岡1
9

黒田の前に打線沈黙（82試合目）

今朝、蝉時雨で目を覚ました。熊蝉の鳴き声は、時雨というより驟雨のようだ。学校は、今日から夏休みだ。夏休みに遊んだ昆虫達が懐かしい。甲虫、くわがた虫、髪切虫、玉虫、蜻蛉、鬼やんま、ばった、きりぎりす、からすあげ羽、油蝉、熊蝉、にいにい蝉、身近な昆虫達がいなくなって久しい。そんななかで、熊蝉だけが季節を感じさせてくれる。

阪神ファンが熱狂する甲子園。まさしく四面楚歌といった中で、黒田投手の精魂こめた96球は見事なものだった。１５０キロの速球を内角に決め、低目にフォークボールを落とされては、３割を誇る打線も、３安打11三振と沈黙せざるをえない。黒田投手は、上宮高校、関西出身の選手である。高２の時、部の不祥事で、春の選抜に出場出来なかった甲子園で、阪神に投げ勝つことに、心も高揚していることだろう。

下柳も黒田に負けていない。細心の注意を払って低目をつく絶妙の制球力で、連打を許さない。立ち上がり、広島に1点を失ったが、それ以降八回まで、８三振、５安打の好投である。この熱投する両投手に答えようとする打撃陣、阪神は八回、片岡の二塁打、矢野の犠打と藤本の犠飛で、代走の田

中が生還し同点とした。

―阪神は九回、下柳に代わった久保田が、ベテラン緒方に１５０キロの速球を右へ運ばれ、前田に２３から2ランを打たれ、力のはいった投手戦は終わった。久保田は、広島と相性が悪い。６月26日、４対2とリードしていたのを、八回5点取られ、藪の勝ち星をフイにし、７月9日には、同点の九回、緒方へサヨナラ死球を与えて3対2、伊良部の好投をフイにし、敗戦投手となっている。今日で三回目だ。なんとする久保田。

昨日は、一回の明暗が試合を決めたのだろう。広島が福地を足を生かして2安打で先取点をあげたのに対し、今岡、赤星で無死一、二塁としながら、金本の三振ゲッツーが痛かった。

2003年7月19日
甲子園ナイター
⑯広島５勝11敗

サンテレビ

阪神	広島
0	1
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	2
1	3

投
下柳
●久保田

打
今岡 1
片岡 1
藤本 1
3

ベテラン久慈、健在（83試合目）

「何を、いまさら、ジュンサイな」といわれるのを覚悟で書こう。ほんとに、そう思ったんだから。テレビはゲームの途中で、攻撃チームのベンチをなめるように写す。マジックが点灯していても、選手達の表情は堅い。いつも苦虫を噛みつぶしたような顔をしているのは、星野監督だ。ベンチの中に緊張の糸が張られているようだ。昨夜は、疲れがでているのか、選手達の目はうつろだった。

そんな中で、桧山が珍しく怒りの表情を現にしている。五回、一死満塁のチャンスに、2―3からファールで粘り8球目、ボールと確信した球をストライクと判定され、追加点を取れなかった悔しさだろう。そんな選手がもう一人いた。ベンチの片隅の久慈だ。厳しい目が輝いている。久慈が活躍する。そんな予感がした。

九回、安藤が緒方に打たれて同点とされ、十回にも、ウイリアムスが打たれた。二死一、二塁、木村（一）の打球は三遊間を破った。金本は冷静に捕球、計ったようなダイレクト返球で、二塁走者広瀬を本塁で刺した。気を良くしたウイリアムスは十一回、3者を三振、流れを引き寄せた。アリアスが永川から四球を選んだ。代走田中、片岡の代打沖原が1球目に送りバントを決める。矢野は敬遠、代打を送

るにも、十二回に、遊撃を守る選手がいない。久慈がバッターボックスにはいった。もともと、投手の配球を読むのがうまい選手だ。久慈は、初球を思い切り叩いた。打球は前進守備のレフトの頭上を越えた。打った瞬間、ほんの少し久慈の目が潤んでいるのを見た。昨年、中日を自由契約になった悔しさと、星野監督に呼んで貰った嬉しさが交錯したのかも知れない。すぐ平静に戻った久慈は、選手達の喜びの渦に巻きこまれていった。同期生の桧山も久慈の頭を叩いていた。

現役時代〝牛若丸〟といわれた名遊撃手元吉田監督から教わったという久慈のスローイングの速さは、今も衰えていない。

自由契約になった選手の活躍は、なにより嬉しい。中村前監督をはじめ、１９９２年、ヤクルトと優勝争いをした仲間達も喜んでいることだろう。

2003年7月20日
甲子園ナイター
⑰阪神12勝5敗

サンテレビ

阪神	広島
3	0
0	0
1	0
0	2
0	1
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
1×	0
5	4

投
ムーア
リガン
安藤
〇ウイリアムス

打
今岡2
赤星2
金本②
アリアス①
久慈1
ムーア1
9

井川10連勝（84試合目）

井川投手は、木訥剛毅（ぼくとつごうき）の青年で、ニックネームは〝ダッペ〟、そうだっぺの〝ダッペ〟で茨城県の方言である。口数が少なく、不言実行のタイプだ。言葉少なく強調するのは、粘りの投球。夏にピーク。防御率の3件である。粘りの投球は勿論のこと、夏が近づいた6月25日から、完投4連勝で目標を達成しつつある。防御率は3・09で第3位。一位は味方の伊良部投手の2・52。ライバルというには、大先輩に失礼だ。2位の巨人の新人木佐貫投手には是非勝って欲しい。今日のスポーツ紙は、村山以来35年ぶり10連勝と騒いでいるが、彼は気にしていないだろう。

テレビの解説を聞いているので、井川の好不調は、投球フォームを見ることで分かるようになった。昨夜の井川は、投球後左足が三塁の方向に傾かないし、重心がしっかりしていて好調のフォームだ。2本塁打と鈴木のタイムリーで3点を失ったが、七回の一死満塁のピンチも併殺で切り抜け、安心して見れた。井川には辛口の星野監督も「今季で一番の投球」と褒めた。

打つ方では、一昨日の久慈のサヨナラ打、オールスター前の沖原の6連打から考えると、左投手の場合、いずれかのスタメン起用があると期待したが、スタメンは藤本だった。

その藤本が井川とともにお立ち台にあがる活躍をした。二回、一死一、二塁から石川の内角球を右前へ運ぶ先制タイムリー。３点をリードで迎えた四回も、一死三塁から、ファーストストライクを積極的に打ち左翼へ犠飛を打ちあげた。２安打、２打点の活躍である。

もう一人の秀太は、八回代走にでて、矢野の大きな左飛で、果敢に二塁へ走ってアウトになったが、その積極的な走塁と、九回一死から鈴木健の打球を飛びこんでキャッチ、三ゴロに仕止めた好守備は褒めてもいいだろう。ショートの定位置を確保した藤本も立派だが、腐らず地味だが与えられた仕事をやりとげる３人も立派なものだ。

井川ファンのために、友達が知らせてくれた後援会の住所を書いておこう。

〒311―1300　茨城県東茨城群大洗町大洗町役場内

2003年7月21日
甲子園ナイター
⑰阪神10勝7敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
3	0
0	0
2	1
0	0
0	0
0	1
0	1
×	0
5	3

投
〇井川

打
今岡３
片岡３
藤本２
金本１
アリアス①
桧山１
矢野１
井川１
13

「天晴れ！」と「喝！」

日曜日の朝は、関口さんが司会する〈サンデーモーニング〉を夫婦で楽しみにしている。大沢さん、張本さんご両人の、歯切れのいいさわやかな会話が、日曜日の朝にふさわしい。

私は、大沢さんの現役時代に、お会いしたことがある。

「もはや戦後ではない」という言葉が流行語となった高度成長の走りの頃だ。労働力の不足から、中学校を卒業した多くの若者達が金の卵と呼ばれて、地方から大阪へやってきた。

その頃、地方公務員だった私は、一人でも多くの若者が大阪へ定着するため、大阪弁の使い方や、仕事のマナーなどの研修会の仕事を担当していた。

私はプロ野球の人気に着目して、南海ホークスの後援会の本田さんにお願いして、南海の選手を呼んでもらった。そんな一日に五名の選手が来てくれた。大沢さん、祓川さん、大神さんの名前は覚えているが、あとの二人は忘れている。

大沢さんが、どんな話をされたか、それも忘れてしまってはいるが、仕事がすんだあとの夕食時のことだけは、今もはっきりと覚えている。

予算も少ないのに、上司がいい格好をして、堂島川沿いの〈新大阪ホテル〉へ、選手達を招待する

ことになった。当時一流のホテルである。

「好きなものをいって下さい」

上司は豪華なメニューを選手達に渡した。選手達が聞いたこともない料理の名前を、ささやき合っている声が聞こえてくる。私は内心ひやひやした。

その時、トイレから帰ってきた大沢さんが大きな声でいった。

「おれ!ビールとカレーや!」

私はほっと胸を撫でおろした。

大沢さんの部屋中に響きわたるような大きな声に、みんなも同調した。

「喝!」という大沢さんの声を聞くと、今もその時のことを思い出す。

また、大沢さんは武勇伝の多い人でもあった。私は二度見ている。

その一つは、濃人さんのあと、ロッテの監督になって、オールスター後阪急を猛烈に追い上げている時、西宮球場で三塁の塁審を豪快に投げ飛ばしたこと。

もう一つは、日本ハムの監督の時、阪急の竹村投手が二人の選手の頭部にぶっつけた。大沢さんは、マウンドへ猛ダッシュして、竹村投手に鉄拳をふるったのをテレビで見ている。何より面白かったのは、日本ハムが優勝した時、酒樽につかった大沢さんがいった言葉が愉快だ。

「ケツから飲む酒はうまいなあ」

大沢さんは稚気あふれる愛すべき闘将だった。

コンビの張本さんは、その風貌からして、彼の真面目な正論に、意外と思う人もいるだろう。私は講演会で、韓国人である故に少年時代にうけた差別、そしてそれをバネにして生きてきたことを、とつとつと語るのを聞いて感動したことがある。

その時から、張本さんは、今の日本人の若者が失ってしまった良きものを身につけている、在日韓国人だと思っている。

一球の悪戯（85試合目）

ひと握りの白球が、男達の心を揺さぶる様を書こう。古田は、一回二死満塁のチャンスに打てなかったことを、気にしながら、前半に点を与えないよう、懸命に投手をリードする。一回、いきなり今岡に打たれたが、赤星を遊ゴロ併殺打にとり、あと中前打、桧山四球と、しぶとく喰いさがられたが、アリアスを左飛に打ちとって、事なきを得た。三回、今岡にファールで粘られたあと、内角のシュートを左翼席に運ばれた。この本塁打に気を良くした今岡は、七、八回と好守備で、ヤクルト後半の芽をつんだ。古田は、今岡のフェイントをかけてくるバッティングに舌を巻き、仕方なしと頭を切りかえたが、投手の佐藤は心を乱した。赤星に四球、金本に一、二塁間を破られて無死一、三塁。続く桧山の左翼ラインすれすれのフライを、ラミレスが落球、無死満塁となった。打者はアリアス。２　３から三遊間を抜かれ2点を失った。そのあと片岡にも打たれたが、岩村のホームへの好返球もあって、この回は3点に終わった。伊良部の好投からして、この3点はヤクルトに重い。昨年までは、リードしやすかったが、今年は、ボールに集中してくる阪神の選手に手を焼き、そして、一回のチャンスに打てなかったことが尾を引いて、古田は3三振、それに引きかえ、ラミレスは、三回のエラーに落胆

することなく、5打数4安打、九回、佐藤の暴走がなければ、一死満塁でラミレスのヒットが出たことになり、試合は、どう転んだか分からない。

小さな白球の悪戯は、男を奮い立たせたり、消沈させたり、動揺させたりする。

伊良部の好投については、スポニチの仰木さんの談話を引用させていただこう。

150キロ以上のものを出せる力がありながら、抑え気味にコーナーを狙うから、打者にとっては球持ちが長く見にくい。しかも手元で伸びる。外角にくる地をはうようなストレートは、昔の稲尾をほうふつさせる。

2003年7月22日
甲子園ナイター
⑱阪神11勝7敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
0	0
3	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
×	1
4	1

投
〇伊良部
安藤
ｳｲﾘｱﾑｽ

打
今岡②
金本2
アリアス2
矢野2
赤星1
片岡1
藤本1
11

剛腕、ルーキーの投手戦（86試合目）

阪神、久保田、ヤクルト、高井の剛腕ルーキーが、一球も見逃すことの出来ない投手戦を展開した。高井は球威に加え、緩急をつける制球力が抜群、一回、一死二塁で、金本、八木を空振り三振に仕留めると、八回を6安打無失点に抑えた。サンテレビの解説をしている福本さんは、バッティング、走塁、赤星を盗塁させなかったクイック等、19才とは信じられない素質の高さに驚きのコメント。選手名鑑をみると背筋力300キロ、その数字が能力の高さを示しているのかも知れない。

一方、6月8日以来3度目の先発に挑んだ久保田は、150キロの速球とスライダーで九回を6安打10三振、無失点の好投。圧巻だったのは、五回一死三塁、九回二死二塁で、いずれも当たっている岩村に対してのピッチングだ。五回は、インハイの直球で遊飛、九回は、カウント0―2から、外角低目のストレートを3球続けて三振を取った。解説の中西さんは、ピンチに物怖じしない心臓と面構えを褒める。この大器の意地の張り合いが相乗効果となって、勝敗をこえた見ごたえのある投手戦を展開した。両投手をつないだリガン、五十嵐、石井も好投、十一回、阪神にチャンスが来た。代打淺井が2―0から、ファールで粘って、12球目をセンター前ヒット、赤星の遊ゴロで、代走の平下が二

塁へ、石井の暴投があって一死三塁。おいしい場面が金本に来たが、ベテランも緊張したか、力がはいり過ぎて三振、あと代打の矢野、アリアスが敬遠され、沖原に廻って来た。今までにも、おいしい場面があった。七回、アリアスの左前打と沖原の二塁打で、一死二、三塁のチャンスに、宮本の右翼線の打球を好捕した中村（豊）。久保田を好リードした野口。しかし二人とも、ものにすることが出来なかった。幸運児沖原の強い打球は、一塁手の前でイレギュラー、サヨナラ打となった。矢野、桧山、片岡、藤本の4人をはずし、代わりに出た選手が全員活躍するのだから、監督も満面の笑みだ。

2003年7月23日
甲子園ナイター
⑲阪神12勝7敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1×	0
1	0

投
久保田
〇リガン

打
赤星2
沖原2
今岡1
淺井1
中村1
アリアス1
8

八木大活躍（87試合目）

大阪の人達は、昔から、天神祭の頃が一番暑いという。ところが、ここ二、三日、涼しい日が続く。七月も終わりだというのに、梅雨明け宣言もない。プール、海水浴場も来る人が少なく、ビール、冷房機の売り上げも伸びなやみ、弱っていることだろう。何事も順調にいっているのは、阪神タイガースである。

昨日は、下柳が六回まで、初回、立浪に打たれた1点に抑えた。本人は、ボールが高目に浮いて調子が悪く、矢野のリードに助けられたというが、四回、福留の右前打、立浪に左中間を破られて、無死二、三塁のピンチに、リナレスを空振りの三振、アレックスを三直、谷繁を落ちる球で三振に打ちとった。ベテランらしい粘りの投球は、ファンを魅了した。

打つ方は、野口と相性のいい八木を4番に起用したベンチの作戦が図にあたった。二回、八木、アリアスのセンターオーバーの連続二塁打で同点、桧山は左飛に終わったが、矢野の右前打で一、三塁、沖原の二ゴロで、アリアスが生還して1点をリードした。

三回には、足に自打球をあて、ファンが心配していた今岡がセンター前、赤星がレフト前と続き、

野口にとっては疫病神の八木に打順が廻った。野口は蛇ににらまれた蛙といったところ、八木は再び二塁打を打って、2人が生還、あと、アリアス、桧山の安打が続いて、この回、4点をあげた。

四回は、二、三番コンビが活躍した。二死になりながら、赤星が右前打で出塁、バッテリーの警戒をかいくぐって二盗に成功、金本が、すかさずレフトへタイムリー打を放って、7点目を叩き出した。

下柳のあと、七回は安藤が2三振をとりながら2安打されたが無失点に、八回は、吉野が、当たっている福留、立浪を打ちとり、最後は、先発をおろされた藪が三者凡退に打ちとった。ボールが高いと監督の評価は辛いが、次は先発に戻すだろう。

2003年7月25日
ナゴヤナイター
⑯阪神10勝6敗
ＢＳ7
関西テレビ

中日	阪神
1	0
0	2
0	4
0	1
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	7

投
〇下柳
安藤
吉野
藪

打
赤星2
八木2
アリアス2
今岡1
金本1
桧山1
矢野1
10

師弟コンビの前に大敗（88試合目）

眠れない夜、長いサラリーマン生活で、幸せと思ったのは、いつ頃だったろうかと思う時がある。子供達の成長をはじめ、家族のことを別にしたら、源氏鶏太が書いているように、上司に恵まれた時だと思う。源氏鶏太といっても、知らない人の方が多いだろう。住友系の会社に勤めた経験から、サラリーマンの哀感を書いた作家で、代表作に〝三等重役〟がある。戦後、会社の経営陣が、戦争に協力したかどで追放され、思ってもみなかった人が重役になり。動乱の時代を、会社のために粉骨砕身するさまをユーモラスに書いたもので、自分の利と体面ばかり考えているような、今の経営陣に読んでもらいたいものである。いいたいのはそのことではない。

勝利投手となった平井と山田監督のことである。二人は、オリックス初優勝の時の師弟コンビである。当時、ピッチングコーチだった山田監督は、高校を出たばかりの平井をストッパーとし、巧みな投手リレーで、オリックスを優勝に導いた。平井は、１５０キロ近いストレートで三振を取ることが出来た。その後、肩を痛めて手術、昨年中日にトレードされた。山田監督は、平井のことが気になって仕方ないと人に洩らしていたという。平井は、山田監督をいい上司として、心に刻むことだろう。

山田監督がいつまでも西本さんを尊敬しているように、阪神の選手達も、優勝とともに、星野監督を思い出に残る上司として、心に刻む日も近い。

昨夜は、15点、今シーズン始めての大敗である。今岡の6号先頭打者本塁打と片岡の長打2本以外、いい事はなかった。打者は、谷繁の内角球を有効な見せ球にするリードに手を焼いていた。

スポーツ紙には、吉野の日本ワーストタイ5連続四球、ムーア不調の5失点、佐久本の目に余る乱調とあるが、三回、一死一、三塁のチャンスに、0―3から、併殺打を打った桧山のあせりも俎上にのせねばなるまい。いずれにしても、出る度に好投を続けていた吉野の5連続四球は特筆ものだ。

2003年7月26日
ナゴヤナイター
⑰中日7勝10敗

関西テレビ

中日	阪神
0	1
1	0
4	0
0	1
0	0
3	0
6	0
1	0
×	1
15	3

投
●ムーア
谷中
吉野
佐久本

打
今岡②
赤星2
片岡②
桧山1
矢野1
秀太1
久慈1
10

井川好調（89試合目）

八月だというのに、外を歩いていても、汗を流したことがなく、空を仰いでも、夏雲を見ることがない。今年の夏は、どうなっているのだろう。

井川のピッチングは、昨年の巨人との開幕戦で、清原の本塁打の1点に抑え、完投勝利した状態にまで戻っていない。しかし、夏場になって、調子を上げてきた。これで、チェンジアップが低めにきまりだせば、本調子になるだろう。昨日の配球も、どちらかといえば、ストレート中心で、二回、そこを狙われ、3連打されて1点を失った。下位打線で、完投意識して、手を抜いたきらいがある。それ以後は、2安打に抑え、九回、ウイリアムスにつないだ。これで11連勝、防御率も2点台にのせた。星野監督は、村山さんに比べては失礼やと、相変わらず、井川に辛口のエールを送る。

打撃の方は、初回、今岡が四球、赤星が左前打、金本の投ゴロが送りバントとなって、一死二、三塁。桧山は、前日チャンスに併殺打を打った失敗を、右中間への2点二塁打で取り戻した。フォークを片手で、すくい上げる得意のバッティングだ。続くアリアスのいい当たりが左飛に終わったあと、片岡がレフトへのタイムリー、初回に3点を取って、前夜の15点のショックを払しょくした。

四回は、今岡の右への11号ソロのあと、4安打3点の中押し、今岡の左右に打ちわけるバッティング技術は、18試合連続安打、今季16度目の猛打賞。安打数で、イチローの記録を破るのも夢でない。七回、藤本の四球、井川の送りバントで二塁へ、今岡の中前打で生還、代走の秀太が二盗をきめ、赤星の中飛で二死になったが、金本がセンター前へのタイムリーで、効率の良い2点を取った。七月にはいって打率を落としている金本も、不振続きの中で2本の安打がでた。八月には、シーズン当初の当たりを取り戻して欲しい。右中間を破る強い当たりは、テレビを見ていても、一瞬の清涼剤だ。

2003年7月27日
ナゴヤナイター
⑱阪神11勝7敗

関西テレビ

中日	阪神
0	3
1	0
0	0
0	3
0	0
0	0
0	2
0	0
0	0
1	8

投
〇井川
ウイリアムス

打
今岡③
赤星2
金本2
片岡2
桧山1
アリアス1
藤本1
矢野1
13

伊良部二回KO（90試合目）

薄着をしていると肌寒い。雨は上がったが、どんよりとした空模様で、熊蝉の鳴き声も、不協和音に聞こえてくる。八月にはいれば、梅雨も明け、30度をこえる夏が来るらしい。阪神の優勝は一ヶ月早く、天候が一ヶ月ずれるとすると、真夏の夜の胴上げか。

阪神が負けた夜は、書きづらい。日曜日の午後11時、毎日テレビの〝情熱大陸〟という番組で、矢野捕手が出演していた。美しい奥さん、可愛い娘さんと、そして瓜破の実家のご両親、家族を大切にする現代青年の雰囲気が良く出いていた。その番組で、矢野が、野村監督から「何か感じとれ」といわれていた事が記憶に残っているという。そんな事を思い出しながら、テレビを見ていた。

昨夜の横浜戦、一回、二死一塁でウッズへの2　3からの配球、フォークで、ウッズのバットが空を切ると思っていたが、インコースのストレート、バックスクリーン右へほうりこまれた。濡れた指先が制球を狂わせたのだろうか。二回も、ストレートを狙われ、2四球、2安打、多村の2ランで4点を奪われた。その間、フォークは1球もなかった。湿った空気の日は、フォークは落ちないのだろうか。いずれにせよ、コントロールの良い伊良部の面影はなく、二回で降板した。

6点をリードされたあと、金沢、藪、谷中、吉野の中継ぎ陣が好投、九回までに無得点に抑えた。阪神は六回、藤本の三塁打、代打久慈三振のあと、今岡の二塁打、赤星死球、金本の一ゴロで二死、二、三塁、桧山の右中間二塁打で3点、チャンスは続いたが、アリアスが、代わった山田に、二ゴロで終わった。八回、無死から、平凡な投手へのフライを、捕手と三塁手が譲りあって、今岡が出塁、慌てた横浜ベンチは、代わったばかりの福森をこの一球だけで交代、代わった竹下に、二死から桧山が左へヒットを打ってアリアスにつなぎ、本塁打を期待したが、代わった5人目の加藤に捕邪飛に打ちとられた。九回も、この加藤に抑えられた。

この加藤投手、今年入団した国立東京学芸大学出身の異色の投手だが、なかなかよくやる。

2003年7月29日
甲子園ナイター
⑱横浜2勝16敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	2
0	4
0	0
0	0
0	0
3	0
0	0
0	0
0	0
3	6

投
●伊良部
金沢
藪
谷中
吉野

打
今岡 2
桧山 2
金本 1
片岡 1
藤本 1
7

金本復活か（91試合目）

久保田は一回、２人を簡単に打ち取ったあと、鈴木の一ゴロに、ベースカバーが遅れて内野安打とした。続くウッズに先制打を浴びて、先制点を与えた。それ以後、二回から四回まで４安打、毎回得点圏に走者を背負った。それに引き換え、ドミンゴは、今岡の３球三振をはじめ、３者を三振、三回までに片岡に二塁打を許しただけで、ストレートに威力があった。久保田が投げると、不思議と好運が訪れる。高井と投げあったヤクルト戦、０対０から延長戦になって十一回、沖原の一ゴロが、大きく跳ねてサヨナラ打となった。

この日も四回、赤星の中前打、金本が左中間を破る二塁打で無死二、三塁のチャンスを迎えた。ドミンゴが踏ん張って、桧山、アリアスを三振、チャンスはついえたかに見えたが、片岡の速球に押された打球が、フラフラと上がる内野フライで、石井のヘッドスライディングのクラブの先に落ちて、拾ったような１点で同点とした。五回は二死から、２三振の今岡が四球、赤星が初球をヒット、金本が２球目を左翼線ぎりぎりの二塁打、一塁走者の赤星まで本塁に帰って、２点を勝ち越した。レフトからの返球をカットした石井は、三塁で赤星がストップすると思い、目線を切り、それから慌てて本

塁に送球した。一瞬のすきをついた赤星、岡田コーチのファインプレーが試合を決めた。

七回、久保田は二死を取りながら、金城の当たりそこねの内野安打のあと、石井に四球を与えた。ベンチは左の鈴木に吉野を、横浜は右の小川を代打に送った。阪神ベンチは、吉野が小川に打たれて1点を失い、ウッズを迎えたところで安藤を送った。安藤は、外角低目をつくコントロールの良い速球で、ウッズを三振、そのあと八、九回を抑え、そんな安藤を監督は絶賛した。久保田も安藤には及ばないが、未完の大器であることは、間違いない。お立ち台には、猛打賞の金本が上がった。夏男に、今年の七月は、気候と同じく夏でなかった。

2003年7月30日
甲子園ナイター
⑲阪神17勝2敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	1
0	0
0	0
1	0
2	0
0	0
0	1
0	0
×	0
3	2

投
〇久保田
吉野
S安藤

打
金本3
赤星2
片岡2
7

心のスキをつかれて（92試合目）

同一カードの負け越しは、6月7，8日のヤクルト戦以来である。攻撃陣は6点を取っているのだから、投手陣に心のスキがあったのだろう。下柳は、今岡の7本目先頭打者本塁打を含め、16安打4点のハンディを貰った直後の二回、1犠打を挟んで5本の安打をつるべ打ちされて、一回13でKOされた。4点のハンディと、5連勝から、緊張を欠いていたといわれても仕方あるまい。

中継ぎ陣は、初戦、伊良部が6点取られたあと、無得点に抑えた自信過剰と、初戦の横浜は守る方、昨日は追いかける方で、おのずと勢いに違いがある事を気づくべきだったろう。三回、谷中は、ウッズにストレートの四球。バッテリーのスキを狙ったウッズの積極的な盗塁は、矢野の好送球で阻止したが、小川にライトポールぎりぎりに、相川にも、レフトスタンドへほうりこまれた。四回には、石井に四球を与えて二盗を許したあと、多村に2ランを打たれた。ウッズの盗塁といい、石井といい、積極的な姿勢が、本塁打を呼んでいるようだ。

追う立場になった阪神は五回、石井のエラーで金本が出塁、桧山四球、アリアスが三振の時、二人が果敢に走って一死二、三塁。片岡が左へ2点タイムリーを放って、チャンスをものにした。続く2

安打している矢野に注目されたが、二ゴロ併殺打に終わった。この回、1点差となり、阪神の反撃ムードが高まった。このムードに水を差したのが金沢である。六回金沢は、投手の山田にセンター前に打たれたあと、金城に2ランを打たれて、反撃の火が消えてしまった。

つなぐ打線が、横浜の一発打線にやられた試合だった。初戦をウッズと多村で5点、3戦目も小川らの4発で6点を失った。そんな中で、今シーズン始めてマウンドにあがったドラフト4位の三東が、せめてもの救いだった。一塁走者を得意のけん制球で刺し、落ちついたプレートさばきは特筆ものだ。二回を投げて1安打無失点ＭＡＸ１４６キロ、遅ればせながら登場した新戦力だ。

2003年7月31日
甲子園ナイター
⑳横浜3勝17敗

サンテレビ

阪神	横浜
4	0
0	3
0	2
0	2
2	0
0	2
0	0
0	0
0	0
6	9

投
下柳
●谷中
金沢
三東
リガン

打
金本2
桧山2
片岡2
矢野2
藤本2
今岡①
秀太1
12

甲子園初の連敗（93試合目）

八月になって、やっと夏らしくなった。青空には、夏雲が浮かんでいる。入道雲とは、よくいったものだ。雲が仏道にはいって剃度（ていど）した人に見えてくる。剃度しているムーアは、コントロール悪く、四回、2点を失ってマウンドを下りた。中継ぎ陣は好投したが、藤本のエラーもあり完敗した。

阪神は、9安打10残塁、得点圏に再三走者をおきながら、ここ一発がでない。三回の矢野のセンターライナー、六回の八木の大きなレフトフライは、いずれも不運な当たりだった。六回の大西の頭脳的なプレーは敵ながら天晴れ。2点をリードしていることで、大西は1点を覚悟のうえで、守備位置を下げた。定位置のままだったら、八木の打球は大西の頭上を越えていたであろう。この大西の好判断に、平井の笑顔がクローズアップされていた。オリックスで優勝した時から10年近く経った顔は、少年の面影はすっかり消えていた。

阪神が負けたことで、スポニチの一面は、オリックスが、5日前の25点の記録を更新、29点で大敗したことを報じている。かつてオリックスにいた平井選手は、どんな気持ちでいるだろう。いずれにせよ、地獄を見た選手が、努力して、よみがえることは嬉しいことだ。平井選手の完全復活に、心から拍手を送ろう。阪神にも、ベンチ入りしたばかりの石毛が、下位打線とはいえ、一回を好投した。

一日も早く、巨人戦で投げて欲しいものだ。一体、オリックスはどうなっているのだろう。上田監督がやめて、神戸出身ということで、土井監督になって、巨人選手の首切りを助けるような球団になって縁を切った。3年経って、仰木さんが監督に、山田さんがピッチングコーチになって、再びファンになり、日本一にもなった。石毛監督になっても応援していたが、シーズン始まったばかりに、監督を解任するフロントに愛想をつかし、再び縁を切った。アメリカ流のファンサービスを真似するだけでなく、選手達のいい分をよく聞いて、チームを強くすることだ。野球するのは選手だから。

2003年8月1日
甲子園ナイター
⑲阪神 11勝8敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
0	0
0	2
0	0
0	0
0	4

投
●ムーア
藪
リガン
石毛
金沢

打
沖原3
赤星2
藤本2
金本1
矢野1
9

井川投打に活躍（94試合目）

優勝は間違いない。手を緩めたらという声もあるが、ひいきのチームには、１４０試合全部、勝って欲しいというのが、ファン心理だ。消化試合が多くなろうと、知ったことでない。

今岡の三塁打がでるまでは、井川が好投し、その井川のタイムリー二塁打がでても、攻撃がちぐはぐ、前回の10残塁の続きかと疑った。一回、二死から金本、桧山の2連打、アリアス四球、満塁になったが片岡が三振、二回は、藤本の左前打と井川の犠打で二死二塁となったが、今岡遊ゴロ。三回は、二死から桧山が、あわや本塁打というような、センターオーバーの三塁打を打ったが、アリアスのヒット性の当たりが、ライトライナーとなって、点にならない。四回、またもや一死から、矢野がセンター前のヒット、藤本が左飛、二死となっては、今岡につなげないと、あきらめたが、井川の左中間を破る二塁打が出て、先取点を叩き出した。取れそうで取れない先取点が、思わない所で取れるのが面白い。12イニングぶり。これに刺激されたか、無安打に抑えられていた中日が、五回反撃に出た。立浪は遊ゴロに終わったが、ベテランらしい、ファールで粘った効果が出て、アレックスの三振のあと、関川、柳沢が連打、下位打線とはいえ、甲子園の浜風。ファンは、さい疑心が強い。森野の打球が二ゴロとなっ

て、やっと胸を撫で下ろす。六回、またも矢野がチャンスメーカーとなって右前打、藤本の投ゴロを、併殺をあせった野口が二塁へ暴投、井川は、走者を送れなかったが、今岡の狙い定めた三塁打が出て、二者が生還。そのあとの赤星のスクイズは、今岡のスタートが早過ぎて失敗したが、七回、アリアスがダメ押しの2ランを放って、勝利を不動のものとした。

井川の許した安打は、五回の2本だけ、あとは、赤星、藤本の好守もあって、毎回3人で終える、今シーズン一番の出来だった。「やっぱり井川や!!」試合が終わって、ファンは、そうつぶやいたことだろう。

2003年8月2日
甲子園ナイター
⑳阪神 12勝8敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	0
2	0
0	0
×	0
5	0

投
〇井川

打
金本3
桧山2
矢野2
今岡1
アリアス①
藤本1
井川1
11

勝ってVロードへ出発（95試合目）

甲子園は、間もなく高校球児の夢舞台となる。お立ち台には、Vロードの出発にふさわしい八木と桧山が上がった。

「遠征もこのまま、一つ一つ勝っていきます」選手会長の力強い言葉が終わっても、別れを惜しむファンは、球場をなかなか去らない。虎マークのついた縦じまと黄色いメガホンを叩きながら、〝六甲おろし〟を歌っていた。テレビに写るアルプススタンドには、カメラマンの演出か、女性ファンが多い。若い女性は、阪神のユニフォーム、年輩の女性は法被、そんな中で、虎模様のビキニ姿の女性が一際目立っていた。続いて、カメラは、プラカードを写していく「八木の桃太郎姿」「頼れる選手会長ひーやん」「Vへ向けて行ってらっしゃい」「優勝笑虎」赤い星を掲げている娘さん達。このファンの熱き思いが実現する日も近い。ロードから帰って来た時は、マジックも一けたになっていてほしい。

前回の横浜戦、珍しく二回で6点取られて降板した伊良部はさすがベテラン、二度とその轍（わだち）を踏まない。三回まで、伸びのある速球と、低目に落ちるフォークを多用、3人で片付けた。打線もその好投に答え、立ち上がり見事な速攻を決めた。今岡凡退のあと、赤星が左前打で盗塁、金本四球「四番

一塁」で出場の八木は、左腕の外角球を、おっつけ気味で一、二塁間を破る。赤星が先取点をあげた。続くアリアスも、レフト前タイムリー。桧山三振、二死一、三塁で、なくなりかけたチャンスを、矢野が初球をレフト前に打って引き戻し、3点目を叩き出した。三回には、一死一、二塁で登板したバルデスが沖原に死球、伊良部の投ゴロをハンブル、慌てて本塁へ暴投、阪神は難なく2点追加。四回には、中前打の八木をおいて、アリアスが三振、かつての球友バルデスと目線が会い、笑みを浮かべていた。そのあと、桧山が2ランを打って、さらに2点を追加した。7点を貰った伊良部は、ピッチングを楽しんで、七回で降板。安藤、ウイリアムスにつないだ。

2003年8月3日
甲子園ナイター
㉑阪神 13勝8敗

サンテレビ

阪神	中日
3	0
0	0
2	0
2	0
0	0
0	0
0	1
0	0
×	0
7	1

投
〇伊良部
安藤
ウイリアムス

打
赤星2
八木2
桧山②
矢野2
アリアス1
9

赤星の本塁打も、下柳で敗戦（96試合目）

三回、二死二塁、赤星は中前打の沖原を二塁において、高井が投げた初球の内角スライダーを振り抜いて、スタンドぎりぎりの2ラン。ホームランに、少年のようなあこがれを持ち続けている赤星は、うさぎのように跳ねながら、グランドを一周した。今シーズン第1号である。

その裏、ヤクルトは、土橋が二塁打、飯田の遊撃右のゴロを、沖原が身をていして好捕しながら、一塁へ悪送球して、一死二、三塁、宮本四球で満塁。ベッツの右前打で1点、次のラミレスの中前打で飯田が帰って同点とされたが、勝ち越しランナーの宮本を、赤星が好返球、ホームで刺した。四回、高井が突如コントロールを乱し、八木四球、アリアス死球で、阪神はチャンスを迎えたが、桧山が投ゴロ併殺で二死三塁、矢野は敬遠ぎみの四球で、一、三塁。沖原が名誉挽回の左前打で、再び勝ち越した。

7月31日の横浜戦で、下柳は初回に4点を貰いながら、二回3失点で降板した。その屈辱を晴らすべく、昨日は、トレードマークの無精ひげをそり、気分を一新して登板したが、調子がままならず、味方が点を取っても取り戻される。四回、1点のリードを貰いながらも、古田の本塁打で同点とされ、そのあと、二死を取りながら、投手の高井に打たれ、飯田、宮本に連打されて1点を失い、ベッツの

0―2で降板し、久保田がマウンドに上がった。一歩遅れた投手交代といえなくもない。久保田はベッツを150キロの速球で三振、金沢につないだ。金沢は、佐藤に二塁打を打たれたが、六回を無失点。七回に登板した藪は、一死から沖原のエラーとラミレスの内野安打のあと、古田に読み勝ちの本塁打を打たれた。カメラは、沖原のエラーの時は、ベンチの藤本と久慈を写し、古田の時は、「古田選手おめでとう」のプラカードを写していた。九回は、石毛が3人で抑えたが、阪神は、五十嵐、石井の強力リリーフ陣を打ち崩せなかった。

2003年8月6日
神宮ナイター
⑳ﾔｸﾙﾄ8勝12敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
2	2
2	1
0	0
0	0
3	0
0	0
×	0
7	3

投
●下柳
久保田
金沢
藪
石毛

打
沖原2
赤星①
今岡1
金本1
桧山1
6

コラム／退団する人々

阪神ファンは、巨人のように、お金にまかせてＦＡ選手を補強し、優勝してほしいとは思っていない。チームの中心勢力は、二軍からはい上がってきた選手達が、中心になってほしいと思っている。

こんなファンの声を、アナウンサーが星野監督に伝えた時、監督は例年より多い24人にやめてもらい金を浮かせて補強しているので、巨人ほど金をかけていない。まだ余っているぐらいと返事していた。私は監督に次のような言葉をつけ加えてほしかった。

「今年はやめていった選手の分もみんなにがんばってもらって、シーズンの終りには、彼等と一緒に優勝の美酒を味わいたいものだ」と。

昨年の最後の試合に、引退する三投手が投げた。遠山、伊藤、星野の三投手である。

星野監督の胸で号泣したのは、遠山投手だけで、伊藤、星野両投手は淡々として、監督と別れの握手をしていた。遠山投手は阪神へ入団した年、ルーキーで2完封をふくむ8勝をあげたが、フロントのうけが悪く、ロッテへトレードされ打者に転向し、一九九七年にテストで阪神へ再入団した。

野村再生工場で見事カムバック、リストラ世代の星といわれた。

松井選手を完全に抑え、ファンは〈遠山の金さん〉にちなんで、一件落着と喜んだ。

伊藤投手は、阪急から横浜へ、そして阪神へテスト入団した。在籍6年、右サイドからのクセ球で、中継ぎとして黙々と投げに投げた。

野村監督は継投に困った時は、とりあえず伊藤というほど信頼が厚かった。彼は〈鶴の恩返し〉と名言を吐き、その謙虚な姿勢は、阪神ファンの胸を熱くした。

星野投手は、中島捕手が素手で取ったこともあるという、緩急自在の投球で１８６勝した。阪神の在籍期間は2年と短かったが、強靱な手首と巧みな投球術は若手投手陣へいい刺激になったと思う。

阪急のスカウトだった当銀さんが、目標としていた選手にことわられ、せっかく北海道へ来たからにはと旭川工高の星野投手をドラフト五位で獲得した。星野投手と対決したことのある元近鉄の金村選手が彼を目の前にして、さんざん冷やかしていた。彼はテレビでこういった。

「北海道から出てきた男が、ひょろひょろ球を投げて宝塚出身のミス日本を嫁にするんやから、たいしたもんや、ほんまにあの球は癪にさわった。まだ早いとタイミングを合わすんやけど、やったと思って振っても、ボテボテの内野ゴロやったな」

貴公子といわれた星野は、端正な顔に、穏やかな笑みを浮かべながら聞いていた。ファンはそんな星野のことを、テレビの人気番組から〈細腕繁盛記〉といった。

最後に、阪神タイガースを去った選手達のご多幸を心から祈ろう。

神宮で4連敗（97試合目）

昨年八月にでてきて4勝、夏に強い川尻の印象が残っている。昨夜は丁寧に投げていたが、肝心なところで球が甘くなり、飯田から3ランを浴びたのが致命傷になった。四回、8安打5失点で降板した。点を取られたのが、すべて二死からであり、三回には岩村に、二盗、三盗を許し、川尻の先発は、これでないだろう。とすると、藪のカムバックはあるとしても、ムーア、下柳の不調を誰がカバーするのだろう。6球団随一の先発陣に、ほころびの出来たことが心配である。こんな中で、ここ数試合、金沢、石毛が好投しているのが朗報だ。三東もいれておこう。

上司には、責任はオレがとる、思い切り仕事をやれという上司と、責任はオレにかかるから失敗するなという。大きくわけて二つのタイプがある。星野監督は前者だ。昨日の藤本の萎縮したプレーに、監督は怒っていることだろう。初回、二死からベッツを二塁においた、ラミレスの中前打は、いつもの藤本ならダイビングで処理できたろうし、できなくとも、一、三塁に止めているところだが、それができない。三回、二死三塁から、古田の緩い遊ゴロを、大事を取り過ぎて、足の遅い古田を一塁に生かして1点を失う。中日戦のエラーで、沖原に代えられ、その沖原が2失策した事が意識にあって、

瞬間の動作が鈍るのだろう。昨日は、久慈が代打で2点タイムリー。三人の遊撃争いは熾烈だ。

八回、桧山が腰を痛めて退場した。上坂と曽我部がベンチにはいるらしい。上坂はもともと内野手、打撃を嘱望されて外野手になり、下積みの長い曽我部は、昨年、レフトのフェンスによじ登り、降りた時にアキレス腱を切断、休養を余儀なくされた強肩、好守の選手だ。この二人に中村（豊）をまじえた三人が、遊撃争いのように、良きライバルとなって、禍を福に転じて貰いたいものだ。「どこのチームよりも必死にやっている阪神の選手には疲れが大きい」とは、解説の上田さんの言葉である。

長期ロードが始まったばかりだというのに、あたっている桧山の戦線離脱は痛い。怪我人続出、そんな不吉な予感がする。早期回復を願うばかりだ。

2003年8月7日
神宮ナイター
㉑ﾔｸﾙﾄ 9勝 12敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
3	0
1	0
0	0
0	2
0	0
0	0
0	0
×	0
5	2

投
●川尻
三東
金沢
石毛

打
桧山 2
野口 2
今岡 1
赤星 1
片岡 1
秀太 1
久慈 2
10

今季初の3連敗（98試合目）

台風一過というにしては、滞留時間の長い台風だった。自転車のスピードで、四国の室戸から再上陸して、日本列島を縦断、二日がかりで北海道を出た。阪神は、今シーズン始めての三連敗、貯金37あるとはいえ、台風一過といきたいものだ。

昨日は〝テレビ大阪〟七回の阪神の攻撃の終わったところで時間切れ。解説の江夏さんは、別れ際に、こういった。

「阪神が負けたとしても、ファンの皆様は、伊良部のピッチングに満足するのではないですか。大人の野球を見せて貰いました」

伊良部は、野村のタイムリー、シーツ、新井に2ランを打たれ、5点を失って、六回で降板したが、五回のピンチに、伊良部は真骨頂を発揮した。

木村（拓）にレフト前に打たれたあと、すぐ盗塁され、淺井の一ゴロで、一死三塁、シーツのショートゴロが、大きく跳ね、藤本はよく飛びついて好捕したが、一塁への送球がショートバントになり、アリアスが落球して一、三塁、打者にセリーグきっての好打者前田を迎えた。伊良部、前田のベテラ

ン同志の一騎打ちに、ファンはくぎづけになった。

伊良部は、最後の一球以外、すべてストレート勝負だ。前田は、際どい球を、右に左にファールで返す。その数八回、ホームランに近いファールもあった。

ストレートに的を絞ってくる広島打線に、あえて、ストレート勝負する伊良部の男の意地をみた。江夏さんは、そんな伊良部のことをいっているのだろう。根負けした伊良部は、13球目にフォークボールを投げる。ショートバンドする球に前田はバットを止めたが、わずかにバットが出て三振、続く緒方を4球で三振にとり、この回のピンチを脱した。

新打線は、金本の本塁打の1点だけだった。8安打したが、広島の併殺網にかかった。

そんな中で、先発メンバーにはいった野口、中村がそれぞれ2安打。金沢が好投した。

2003年8月9日
広島ナイター
⑱広島6勝12敗

テレビ大阪

広島	阪神
0	0
1	1
2	0
0	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
5	1

投
●伊良部
金沢
リガン

打
金本②
野口2
中村2
今岡1
アリアス1
8

井川で4連敗（99試合目）

連敗がストップしないで、井川の12連勝がストップした試合だった。初回、赤星がレフト前ヒット。藤本の送りバントが、キャッチャーフライとなり、今岡の遊ゴロで併殺打、3人で終わった時、不吉な予感がした。その裏の広島の攻撃は阪神と好対象。左前打の木村（拓）を、福地がバントで送り、緒方の左前タイムリーで、いとも簡単に先取点をあげた。

二回、金本が四球、二死となったが、野口の中前打で一、二塁、中村のライト右の二塁打になる打球を、初回にバントを決めている福地に好捕され、そのツキのなさに、いよいよ不吉な予感が現実のものとなってきた。

井川は、初回の1点と、前田、シーツの本塁打の3点に抑えた。狭い広島球場のことを考えると、井川は最低の責任を果たしたといえよう。

問題は攻撃陣である。この2連戦のヒット数は、8安打と同数でありながら、阪神が2得点に対し、広島は8得点。本塁打の4本の差が大きいが、もともと阪神は、本塁打より、足と連打で戦ってきたチーム、それが両日にわたって、広島の併殺網と、バッテリーに足を封じこめられてしまった。そのこと

は数字が物語る。併殺数は、広島5に対して阪神は0である。また、チームに、ほころびが目立ち始めた。藤本のバント失敗、赤星のけん制死、さらに、守備には定評のあるアリアスが、四回、なんでもない黒田の一ゴロをミットからこぼし、六回には、二死一塁で一塁走者野村を挟殺しながら、アリアスの二塁への送球がそれて生かしてしまった。この守備のミスが打撃に響いた。六回、二死一塁から、金本が左前打で広げたチャンス、そして、八回、二死一、二塁から、金本が野選で満塁としたチャンス、そのいずれも、アリアスがつぶしてしまった。田渕コーチが提案したといわれている新打順は、再検討されるのだろうか。〝改むるに憚(はばか)ること勿(なか)れ〟と言葉もあれば、朝令暮改という言葉もある。いずれを取るや如何。

2003年8月10日
広島ナイター
⑲広島7勝12敗

サンテレビ

広島	阪神
1	0
0	0
0	0
1	0
0	1
0	0
1	0
0	0
×	0
3	1

投
●井川
安藤

打
赤星2
野口2
今岡1
金本1
片岡1
沖原1
8

確かな素質、久保田投手（100試合目）

久保田の立ち上がりは素晴らしかった。新人らしい外連味（けれんみ）のない速球で飛ばす。二回の佐伯まで5者連続三振。ただ、速球投手にしては、球数が多すぎる。三回にその疲れがでて、中村にセンター前、ホルトの犠打で一死二塁、石井の振り遅れの打球が、レフト前に落ちて二塁打、気落ちしたところを、鈴木に打たれて2点を失った。久保田は、六回2/3を投げて、6安打12三振2失点で降板した。

関西テレビ解説の田尾さんは、七回、久保田が金城に中前打、石井に四球を与えたところで、マウンドに駆け寄る佐藤コーチを見て、北海道育ちの茫洋（ぼうよう）とした、おおらかな風貌（ふうぼう）が選手達の信頼を得ているという。全く同感。北海道に来て、うまい肴で、選手達と一献傾けたことだろう。

二回の阪神の攻撃、二死から藤本が遊撃内野安打を打ったが、次の打者の事を考えて、誰も気にとめない。久保田がセンター前に、プロ入り初安打して、始めてベンチが色めき立った。今岡がきっちり二遊間をゴロで破って藤本が生還、続く赤星の打球が遊撃手の頭上を襲う。石井がグローブにあてて球がグランドを転々として久保田も生還。5連打を狙った金本が打席にはいったが遊ゴロに終わった。しかし、金本は、その悔しさをバネに七回決勝点をあげた。一死から今岡がセンター前にヒット、

赤星がバントで金本につなぐ。金本は2―3から、ホルトの変化球を3球ファールにし、待っていたストレートをセンター前に弾き返す。淺い球だったが、好スタートを切った今岡がホームへ、ヘッドスライディング、久しぶりに、今岡が滑り込んだままファイティングポーズを見せる。

久保田のあとは、ウイリアムスが、七回代打の小川一人を抑え、八、九回は、安藤が1安打無失点完璧だった。

星野監督は、勝っていても渋い顔をする時がある。三回、石井の足から考えて、無駄なホームへの返球で、打者を二塁まで進めた赤星と、六回、バントを失敗した野口に対してだった。

2003年8月12日
札幌ナイター
㉑阪神18勝3敗

関西テレビ

横浜	阪神
0	0
0	2
2	0
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
2	3

投
〇久保田
ウイリアムス
S安藤

打
今岡2
金本2
赤星1
野口1
藤本1
久保田1
8

藪復調、片岡決勝打（101試合目）

昨日までは、半そで、半ズボンで汗を流していたのに、今日は長雨で肌寒く、長そで、長ズボンに着替える始末。天気予報によると、盆に降る雨は、37年ぶりで、午後2時の温度が20・8度、10月中旬なみだそうだ。

避暑をかねての北海道のシリーズ、選手達もこの気候に驚いていることだろう。今日は移動日、2連勝して、札幌の夜を満喫した選手達は、今頃機上の人だろう。

この横浜の2連戦、同一スコアーの僅少差の勝利。星野監督は、伊良部、井川で2連敗のあとだけに、久保田、藪での連勝が嬉しかったのだろう。

「藪はナイスピッチングや。今季初めてじゃない？低め低めに行ったのは。これをずっと続けてほしい」

勝利インタビューに答える星野監督のほっとした表情が印象深い。藪は7月18日の広島戦以後、先発メンバーからはずされ中継ぎ投手として調整、復活を期しての登板だった。六回まで投げて5安打、金城の本塁打1点に抑えた。その間、今季初スタメンの上坂が好守で藪を助けた。五回、二死一塁で、

投手前バントを藪が一塁へ悪送球、上坂が素早いカバリングで一塁走者種田を本塁で刺した。六回にも、鈴木尚の右翼線への大飛球を背走しジャンピングキャッチした。

打つ方では、片岡が四番の責任をはたした。六回、今岡、赤星の連打のあと、金本が倒れ、片岡は、1―3から1球をファールしたあと、ドミンゴの速球を痛打。打球はライト右を破って走者を帰した。片岡は珍しく手を叩いて喜びを表現していた。

北海道で今岡の打撃も復調したようだ。三回、ドミンゴの内角速球をバットを折りながらレフト前へヒット、先取点をあげた。今岡は本塁打も打てるリードオフマン、そして、下位打線が作ったチャンスを継ぐとともに、ポイントゲッターでもある。やはり、今岡は一番が一番良く似合う。

2003年8月13日
札幌ナイター
㉒阪神 19勝3敗

毎日テレビ

横浜	阪神
0	0
0	0
0	1
1	0
0	0
0	2
0	0
0	0
1	0
2	3

投
〇藪
リガン
Sウイリアムス

打
今岡3
片岡2
赤星1
藤本1
7

上原に完封される（102試合目）

試合が終わると、湯舟につかりながら、ゲームを振り返り、取り上げることを決め、一晩寝かして、翌日、スポーツ紙を参考にしながら、８００字にまとめることにしている。昨日のように完敗すると、書くことが無くて困る。巨人以外のチームなら、相手のことも書く気もするが、優等生意識の強いチームのことは、取り上げたくもない。

上原のテンポの早いペースに乗せられて、三塁を踏むことも出来なかったが、数少ないチャンスはあった。三回、野口が三塁内野安打、藤本二ゴロのあと、伊良部の犠打で二死二塁、今岡の痛烈な打球は、三塁線に飛んだが、江藤に好捕された。三塁線を破っておれば、阪神に流れが傾いた可能性はあった。四回、二死から、片岡、アリアスの2連打がでたが、上坂が遊ゴロ。五回は、野口がセンター前に打ったが、藤本の遊ゴロ併殺打でチャンスをつぶし、八回、伊良部の代打沖原が初球をセンター前にはじき返したが、あとが続かない。そして、最後のチャンスが九回に来た。先頭打者の金本が、右中間を突破する二塁打で、上原に一矢を報いた。今シーズン初出場の広沢が二回目の打席にはいった。上原のフォークを狙った広沢の打球は、レフト左へ。数センチでファール。広沢は天を仰いで残念がった。

それを見て、テレビ解説の川藤さんは、これで広沢は三振だという。ベテラン選手でも、あれがヒットだったらという意識がどうしても残って、集中力がなくなってしまうという。川藤さんの予言どおり、広沢は、気のないハーフスイングで三振。アリアスは三塁フライ、代打の久慈は捕邪飛、1点も返すことなく完封された。

四番になって、調子をあげていた片岡が、ヒットを打った走塁で、右太ももに違和感を覚えて途中退場した。浜中、桧山、相次ぐ四番の離脱。不安だが、みんなでためた貯金は、こういった日のためにあると思えばよい。優勝すれば、貯金は無用になるのだから。

2003年8月15日
東京ナイター
⑲巨人5勝13敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
1	0
0	0
2	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
×	0
3	0

投
●伊良部
金沢

打
野口2
金本1
アリアス1
沖原1
片岡1
6

井川完投で15勝（103試合目）

8月5日、サンテレビが珍しく阪神、中日の二軍戦の実況放送をし、その時、虎風荘の梅本寮長のインタビューをしていた。大きく伸びる選手は、小さな事にこだわらず、よく食べて健康管理に気を使う選手だと、梅本さんはいう。そして、中西、新庄、井川選手の名前をあげていた。また、天狗になる選手の鼻をへし折るのも仕事らしい。そんな選手に比べて井川は、大変謙虚な選手だと褒める。梅宮さんは、20年近く寮長をやっておられるので、平凡な語り口に真実味がある。

昨夜の井川は、大胆にストライクを先行させ、心理的に巨人打線を追い込み、135球3安打完投、18年ぶり、巨人に勝ち越した。九回、代打高橋との勝負が面白かった。井川は、外角ストレートで攻める。高橋は5球をファール。解説の江川さんは「高橋は打てませんよ。逃げるのが精一杯、井川は、ストレートで三振を取ろうと楽しんでます」という。

そのとおり、ファールされたあと、一転内角へストレート。高橋は手が出せなかった。今日で、防御率は、木佐貫を抜いて1位に躍り出た。20勝も夢でない。

この井川に打撃陣が答えた。初回、赤星がヒットで盗塁、金本のセンター前ヒットで簡単に先取点

をあげた。三回、二人は死球と右前打、一死一、二塁から二人は重盗を決めた。島野コーチが、ストップウォッチを持っているのがテレビに写る。木佐貫投手の投球タイムを計って、重盗のサインを出したのだろう。動揺した木佐貫は、アリアスの時に暴投、そして四球。野口、中村の初球ヒッティングの安打で、この回3点をあげた。さらに五回、金本、広沢が連打したあと、アリアスに久しぶりの二塁打が出て1点を追加した。赤星と金本は、足に死球をうけながら、5盗塁するのだから、たいしたものだ。打って走った4安打の金本は、575試合連続フルイニング出場、歴代3位。まさに、鉄人金本。清原も一目おくはずだ。

2003年8月16日
東京ナイター
⑳阪神14勝5敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
0	1
0	0
0	3
0	0
0	1
0	0
1	0
0	0
0	0
1	5

投
〇井川

打
金本4
赤星2
中村2
広沢1
沖原1
アリアス1
野口1
12

新人久保を打てず（104試合目）

久保が阪神戦で、始めて先発登板したのは、6月1日の12回戦である。阪神は久保田、新人同志の投げ合いは、試合に負けたが、田が一字多い分、久保田が投げ勝ったと書いた記憶がある。その試合は、九回、ウイリアムスが、高橋由にサヨナラ本塁打を打たれ、始めて敗戦投手となった。久保田が六回まで1点を失ったのに対し、久保は五回まで投げて、金本、今岡のタイムリー、アリアスの本塁打と、3点を失って降板している。

昨夜の阪神は、七回まで、5安打に抑えられ久保から点が取れない。3点をリードされた八回、12回戦に活躍した面々が、最後のチャンスを作った。不振の今岡が、久保の外角スライダーを、3試合13打席ぶりに、右翼線へヒット。続く金本の右翼線二塁打で一死二、三塁。八木の初球に、久保がワイルドピッチーして、今岡がホームへ、ヘッドスライディングして1点を返した。ヘッドスライディングもいいが、なにより怪我をしないでほしい。これで今岡まで怪我すればどうなる。

そのあと、八木が四球、八木の代走に秀太、一死一、三塁でアリアス。ベンチは初球に秀太を走らす。ヒットエンドランで一打同点を狙う作戦だ。絶好球だったが、アリアスが打ち損じてファール。ベン

チは、あくまで積極的だ。秀太が走ったが、盗塁死。アリアスは三振に終わった。その裏、リガンが連続タイムリーを打たれて3点を失ったが、これは付録みたいなものだ。

昨夜は下柳が、初回二岡に本塁打を打たれたが、12回戦の時も、久保田が初回二岡に本塁打を打たれ、九回、二岡の安打のあと、高橋由にサヨナラ本塁打を打たれている。昨夜の試合は、攻守とも、12回戦によく似た試合だった。16・5ゲーム差の余裕だろうか、それとも疲れか阪神の攻撃は、お茶漬けの味のような、淡泊なものだった。

2003年8月17日
東京ナイター
㉑巨人6勝14敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
2	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	1
3	0
×	0
6	1

投
●下柳
金沢
石毛
吉野
リガン

打
今岡1
赤星1
金本1
アリアス1
野口1
中村1
沖原1
7

広沢の一発だけ（105試合目）

久保田の立ち上がりは、前回の登板時と同様、上々だった。三回まで5三振、三者凡退。二回には、広沢がレフトスタンド中段への本塁打で、幸先の良い先取点をあげた。ベンチで八木が仲間と喋っている。

「広沢さん、ほんとに41才」

とでもいっているのだろう。

阪神が良かったのはここまで、後は全く中日ペースだった。中日は、安打数4本で4得点、阪神は、7本打ちながら1点しかとれない。今まで、好調な打撃陣でカバーしていた拙守、拙攻が目立つようになった。久保田も拙守に足を引っぱられたとはいえ、ランナーを出した時、セットポジションに問題がありそうだ。四、六回に、四球を出したあと、長打を浴びている。

四回、関川に四球を与えたあとの福留のあたりは、二塁打となっているが、広沢の拙守によるもので、立浪の犠飛で簡単に同点にされた。五回には、アリアスのエラーと谷繁の左前打で無死一、二塁。荒木がバントを空振り、アレックスが塁を飛び出し、野口が二塁へ送球したが、藤本とのタイミング

がずれ、球はセンター前へ転がって二、三塁。荒木の遊ゴロで1点リードされた。その裏、阪神は藤本のセンターオーバーの当たりが三塁打となった。スタンド観戦のご両親が立ち上がって手を叩いて喜んでられた。久保田の二ゴロのあと、今岡がライトライナー、藤本がリードを大きく取っていたため、ベースタッチが遅れ、福留の好返球で、本塁1メートル手前でタッチアウトとなり、阪神に来つつあった流れを止めてしまった。気を良くした福留は、六回中前打、立浪四球、リナレスは、バントできず、2―0と追いこまれながら、レフトオーバーの二塁打を打って2得点。あとは、つながりのあった阪神打線は影をひそめ、反撃の力はなかった。ポイントゲッターの今岡も得点圏で2度凡退。朗報は、八回代打の矢野が二塁打を打ったことと、連日に渡る石毛の好投。

2003年8月19日
大阪ナイター
㉒中日9勝13敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
1	0
0	0
0	1
0	1
0	2
0	0
0	0
0	0
1	4

投
●久保田
吉野
石毛

打
藤本2
金本1
広沢①
野口1
中村1
矢野1
7

ロード負け越し（106試合目）

残暑と呼ばれる季節になって、夏らしくなった。夏雲が昨日と同じところに居座っている。枝を切り過ぎて、花をつけるかと心配していた百日紅も、遅まきながら、新しい小枝の先に、淡紅色の花をつけた。青空によく似合い、天の簪（かんざし）百日紅とは、よくいったものだ。百日紅というより、〝猿滑り〟といった方が親しみがあるかもしれない。

同期の久保田に先を越され、内心じくじたるものがあるだろう杉山が、初登板だった。初回、先頭打者井端を歩かせ、関川のバント安打などで、一死一、三塁、立浪の一ゴロ併殺崩れの間に1点を失った。テレビで見た限り、藤本の一塁への送球は、間に合ったと思ったが、セーフのコール。今日のスポニチに〝これがセーフ〟と、その瞬間の写真を大きくのせていたのが、せめての慰めで留飲を下げる。三回には、打撃で定評のある投手の山本に打たれ、関川の嫌らしい内野安打のあと、福留に二塁打を打たれて2点を失い、五回、一死二塁から、井端に中越二塁打を浴びてKOされた。四回13を5安打5失点。2四球がいずれも得点に結びついた。三東も、一回2/3で、3安打2四球で2点を失い、新人には試練の日だった。そんな中で、ベテランの石毛が、今日も二回投げて無安打に抑えた。

好調時の阪神は、投打がカバーしあっていたが、今の阪神は、投打とも不調になっている。この2日間、広沢一人が気を吐いている。昨夜は四回広沢の本塁打と、六回、代打上坂の左前打、赤星の二塁打、金本の一ゴロで1点を、あげただけだ。

四番打者だった三人の欠場に、各選手が打たなければと、自意識過剰となり、〝力み〟となっている。自意識過剰は文学青年のものでスポーツ選手には無意識過剰がいい。集中力ということは、無心になることだろう。スポニチで西本さんがいっている。不調の打線を立ち直すには、一時的にフォ・ザ・チームという考え方を捨て去り、各人が自分の打撃を心がけるべきだと。

2003年8月20日
大阪ナイター
㉓中日 10勝 13敗

サンテレビ

阪神	中日
0	1
0	0
0	2
1	0
0	2
1	1
0	0
0	0
0	0
2	6

投
●杉山
三東
石毛
安藤
ウイリアムス

打
広沢②
赤星1
金本1
野口1
藤本1
上坂1
7

2度目の4連敗（107試合目）

麻雀は、若者からすっかり見放されてしまった。麻雀屋は、長い老後生活を送る年寄りの社交場となっている。碁、将棋は、強い者が強い。ところが、麻雀はツイたら、初心者でもベテランに勝てるから面白い。このツキは、説明が難しい。簡単にいうと、ツクとすべてがいい方に、ツカないとすべてが悪い方に廻るということだろうか。勝ち過ぎて、手を緩めたいとすると、このツキが逃げてしまい、勝つチャンスの確率の高い手が、最も確率の低い手に負けたりする。取り戻そうとしても、なかなか元に戻らない。そんな時、忍の一字、心の上に刃と焦らず、ツキが来るまで我慢する。

今の阪神の状態である。昨夜の試合、監督のいうとおり、審判と相性が合わないといって、熱くなってもしょうがないのだが、必勝を期した試合の伊良部が、そんな審判に出合ったことが、そもそもツキのない始めだと思いたい。三回、死球、四球、四球で招いた満塁のピンチ、リナレスのタイムリーで2点を追加された。その裏の攻撃で打席に向かって歩く伊良部が真鍋球審に、何かいっている。ベンチから監督と佐藤コーチが慌てて割ってはいって事なきを得た。大リーガーで円熟味をましたとはいえ、伊良部も人の子、集中力を失って、6四死球と乱れ、五回までに5失点、試合は前半で決して

しまった。

金本が2本の本塁打で一人気を吐いたが、いつもならいるランナーが前にいない。これもツキがない。それに反して、この日2打点猛打賞の中日の荒木には、捕前安打や、広沢のエラーを誘うなどのツキがあった。阪神の唯一のチャンスの七回、藤本の右前タイムリーで1点を返し、二死一、二塁で、上坂の初球を狙った打球が、50センチ内にはいっていたら、それもツキのなさだろう。そのあと、上坂三振、今岡四球、二死満塁のチャンスを八木に託したが三ゴロに終わった。いずれにせよ4安打では勝てない。ツキ云々は、悔しさの戯言（ざれごと）か。

2003年8月21日
大阪ナイター
㉔中日 11勝 13敗

サンテレビ

阪神	中日
1	1
0	1
0	2
1	0
0	1
0	0
1	0
0	0
0	2
3	7

投
●伊良部
金沢
リガン
石毛
吉野

打
金本②
中村 1
藤本 1
4

井川で5連敗（108試合目）

〝井川、お前もか〟

投打がかみ合わないと、何が起きるか分からない。立ち上がりに、自己ワーストの一回6失点。二回でKOされた。一回、先頭の金城にストレートの四球。続く石井のバントを、三塁アリアスが悪送球して、無死二、三塁、多村を三ゴロに打ち取ってから、ウッズの二塁打、村田の3ランを含む4連打で6点を失った。テレビは、まだ始まっていない。毎日放送で解説している中村さんは、こんな井川は珍しい。ストレート、チェンジアップが真中に集まっているという。物ごとに動ぜず、常にマイペースの井川も、連敗の重圧に押しつぶされたのか。中村さんは、井川は気分転換がうまく、ストレスをためない選手だから、次はきっと好投します。投手には、こんな事もあり、心配いりませんと、ファンを安心させてくれる。二回、エラーして責任を感じているアリアスの本塁打、三回には、野口の三塁打と今岡のタイムリーで2点を返したが、二番手の金沢が、相川、石井に本塁打を打たれて追いつかない。こんな試合になると、ベテランの選手達は、つい緊張感を失うもの。ところが阪神の選手達は違った。本塁打がでても、エラーした責任から、アリアスは、インタビュアーに、ものもいわ

ないらしい。途中出場の野口の真しなプレーは感動を呼ぶ。中日戦で走りまくられたが、昨日は六回、金城の盗塁を阻止した。打つ方では、三塁打をふくむ2安打。そして、捕手のあとはライトを守り、八回、右翼フェンスぎりぎりの大飛球を背走しながら好捕した。

8点リードされた九回、金本、八木の連続二塁打、アリアスの右への安打で2点を返す。最後の打者となった久慈は、2―3からファールで粘る。ベンチでは、2安打で気を取り直したアリアスと井川が声援を送る。ファールする度に、久慈の表情は厳しさを帯びてくる。11球目バットは空を切ったが、このムードは明日につながる。明日は必ず勝つ。

2003年8月22日
横浜ナイター
㉓阪神19勝4敗
毎日放送
関西テレビ

横浜	阪神
6	0
1	1
1	1
1	0
0	0
0	0
0	0
1	0
×	2
10	4

投
●井川
金沢
吉野
三東

打
アリアス②
野口2
今岡1
赤星1
金本1
八木1
8

コラム／少年の目

サラリーマンの幸せは、上司と同僚に恵まれた時でその期間はごくわずかであるといった作家がいる。

私もそんな時期があった。同僚の富田さんは先輩だがなんとなくうまがあった。富田さんは大阪市の野球部のキャプテンで、さすがチームワークをとるのがうまく、私は彼のおかげで思う存分仕事をすることができた。

私達は富田さんが試合に出る時は、できるだけ多くの者が応援に出かけるようにした。

まだ、おおらかな時代である。

そんな富田さんの所へ、市の野球部の人が集まってきたので、自然と私もその仲間入りするようになったそんな仲間にプロ野球で活躍していた人がいた。

辻さんと栄屋さんである。

辻さんは海草中学（旧制）の捕手だった。海草中学といえば、豪速球の嶋投手、小学校五年生の頃、面白い名前の島田商業の一言多十投手とともに、私達野球仲間の話題の中心だった。そして辻さんがプロ野球にはいってからは、今でいうおっかけをしたようなこともあった。そんなことがあって、初

めて会った時は変に胸がときめいた。

海草中学は一九三九年の25回中学野球大会で、嶋投手は四試合を全部完封。しかも、準決勝で島田商業を、そして優勝戦で下関商業をノーヒット・ノーランで完封するというものすごい記録を残している。

その嶋投手は、明治大学へ進学し学徒出陣で、一九四五年六月、仏印沖の海戦で不帰の人となった。そのあと、三塁手だった真田選手が投手となって全国制覇しているが、辻さんはレギュラーでなかった。辻さんが甲子園へ出場したのは、戦争で最後となった17回の中等野球大会で、辻（源）―辻（功）の同姓バッテリーで出場し、優勝校となった徳島商業に、準決勝で1対0で惜敗している。

そのあと辻さんは予科練へ入隊、戦後は、いち早く坪内監督の率いる金星スターズへ入団、プロ野球で最年少の選手として活躍した。その頃、若い辻選手を応援に球場に足を運んだ。辻さんとバッテリーを組んだ投手を今も覚えている。林、内藤、須田各投手だ。須田投手はスタルヒン投手の日本名である。

野球を止めてから、辻さんは住込みの現業員として大阪市の施設で働き、そのかたわら書道を学び、人を教えるほどの腕前になった。その間、市での昇進を無視した。そして、停年後は小学生を教えていたが、数年前鬼籍にはいってしまった。

栄屋さんは、一九五四年阪神へ入団、その年7勝をあげたが、打球が眼鏡にあたって負傷し、選手生命は短かった。怪我がなければ、名投手として、阪神球団の歴史に名をとどめただろう。

同じ年、打点王となった阪神の三番打者の渡辺さんが桃山中学出身で、富田さんの野球部の先輩であったことから、渡辺さんのことと、もう一人の渡辺さんとともに、よく話題になった。

もう一人の渡辺さんとは〈省ちゃんボール〉といった超スローボールを、王さんや長嶋さんに投げた渡辺省三投手のことである。

渡辺さんは、むっつり助平で飄逸な人だったらしい奥さんを仕とめるために、月給全部はたいて化粧品をプレゼントした。野球は超スローボールでも、恋は剛速球といわれた。

技術屋さんだった栄屋さんは大阪市で努力を重ね、下水道局の部長で定年退職した。

プロの世界から身を引いて、辻さんと栄屋さんの生き方はちがっていたが、バッテリーを組んで野球をする時は、二人の目は少年の目のように輝き、真剣そのものだった。

また、スポーツ選手にとって、優勝ということがどれだけ嬉しいことか、二人の話しぶりからよくわかった。

辻さんは三重交通で、栄屋さんは鐘淵化学で優勝している。

栄屋さんの了解をとるため、原稿を見て貰った時、読み終わった彼は、誰にいうともなくつぶやいた。

「二人とも自殺するような人でなかったのになあ、魔がさしたということだろうか」

栄屋さんは、悲しそうな顔をして、二人の渡辺さんのことを思いだしていた。

渡辺投手のお嬢さんは、お父さんの自殺が信じられないと、本を出版されている。

ベテランの活躍（109試合目）

前日、大量点のリードをされながら、ベテラン達は、試合を捨てなかった。それが、昨夜の勝利を導いた。苦しい時に、頼りになるのはベテランだ。初めての5連敗という嫌なムードを、金本、広沢の攻撃陣、下柳、野口のバッテリーが振り払った。

初回、今岡の右飛のあと、赤星がセイフティバントを決め、金本が右翼スタンドへ2ランをほりこんだ。七月に2割8分まで打率を下げ、悪戦苦闘していた金本は、八月にはいって、やっと夏らしくなると、が然調子を上げてきた。この先制点が連敗を続けている下柳の気持ちを楽にした。日本ハム時代から、下柳とバッテリーを組んで6年目になる野口は、引くところは引き、徹底的に低目で攻め、ほとんど内野ゴロと三振で打ちとり、三塁ベースを1度も踏ませなかった。六回、二死、73球投げて交代。佐藤コーチが、下柳から球を取ると、下柳は両手を広げる。もう少し投げたい下柳の気持ち、それが分かる佐藤コーチは、お互いに苦笑するだけで、微笑ましい風景だ。あとは、投板間隔のあいているリリーフ陣のリガン、ウイリアムス、安藤が好投、シャットアウトした。

もう一人は、球界きってのベテラン広沢選手の活躍。力強いスイングは、41才になっても衰えてい

ない。二回、二死一、二塁、田崎の速球を打った球は、左中間を破る2点タイムリー二塁打となった。二死からのタイムリーだっただけに、横浜ベンチに与えるダメージは大きい。ベテランらしい効果ある一撃だった。

ベテランというには、早いかも知れないが、アリアスもあげねばなるまい。前日、エラーの責任を感じて打った本塁打が契機となって、昨夜も六回、赤星、金本の連打のあと、右翼の頭上を抜く二塁打で、駄目押しの2点をあげ、八回には、左翼スタンドへ、アリアスらしい本塁打がでた。大勝だが、相手の投手は二線級だったことを忘れてはなるまい。

2003年8月23日
横浜ナイター
㉔阪神20勝4敗

大阪テレビ

横浜	阪神
0	2
0	3
0	0
0	0
0	0
0	2
0	0
0	1
0	0
0	8

投
〇下柳
リガン
ウイリアムス
安藤

打
金本③　赤星2
ｱﾘｱｽ②　野口2
今岡1　広沢1
秀太1　藤本1
八木1

14

ロード最終戦も黒星（110試合目）

やはり、ジンクスは生きていた。今年の強い阪神には、死のロードはない、Vロードだ。マジックをヒトケタにして帰って来るだろうといったが、最終戦の〝お得意様〟横浜に2対5で敗戦。これで長期遠征は4勝11敗、２６７の勝率、９年連続の負け越しだった。桧山、片岡、矢野の2度目の怪我が何より痛い。

幸いなことに、4勝しかしていないのに、追いかけるチームの共食いで、マジックは、「29」から「17」に減り、2位巨人との差は12．5ゲームある。厳しい監督も、トータルで見て、今まで頑張ってきた選手に感謝しなければという。しかし、弱い阪神と長い間つき合ってきたファンは、優勝間違いなしと思っていても心配なものだ。

明26日の巨人戦から、今季36勝10敗、勝率７８３の本拠地での試合。負け越しが決定しているとはいえ、巨人は最後の意地を見せるだろう。今の巨人は強いが、徹底的に勝ってファンの積年の恨みを果たしてほしい。

八月は負け試合の記事ばかり書いているような気がする。昨夜も、久保田の速球を打てないとみた

金城が、叩きつけるバッティングで、嫌な内野安打を打った時、負ける予感がした。決して結果論でいうのではない。続く石井のあてるだけのバッティングがヒットになる。一死一、二塁で、苦手のウッズを打席に迎えた。心臓の強さで定評のある久保田も、不運な安打にイライラし、顔が強ばっている。ストレート一本に絞っているウッズにコーナーをつく直球が真中にはいった。打ったあと赤星は動かない。高く上がったセンターフライかと思った。ところが、赤星は遠くへ飛んだ球を見失っていたのだ。この3ランが致命傷となった。四回に金本の本塁打で1点を返し、六回には、今岡の左前打と赤星の右中間三塁打で1点差として、なお無死三塁、逆転のチャンスを迎えたが、打線がつながらない。七回のチャンスにも、今岡のタイムリーがでない。八回に安藤が打たれて万事休した。

2003年8月24日
横浜ナイター
㉓横浜5勝20敗

サンテレビ

横浜	阪神
3	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	1
0	0
2	0
×	0
5	2

投
●久保田
リガン
安藤
吉野

打
今岡1
赤星1
金本①
広沢1
アリアス1
藤本1
6

久々の甲子園で勝利（111試合目）

最終回、二死から巨人最後の攻撃、二岡を一塁においてペタジーニ。ウイリアムスの外角球を打った球は、三塁ファールフライ。観客席ぎりぎりの所へ、高く上がった。沖原が倒れながら、グラブを差し出した。総ての目が沖原に集中し、一瞬の静寂が流れる。そして、沖原が捕球したグラブを差し上げると、うねりのようなどよめきが起こった。選手達ははじけるような姿を浮かべながらベンチへ、ベンチはお祭り騒ぎだ。この1勝は大きい。

選手達は、4勝14敗のロードの雪辱を、この巨人戦に期したのだろう。勝利監督インタビューをうけた星野監督も、開口一番「興奮した」と顔を赤らめていた。阪神一色のパフォーマンスや、女性のファッションは、一層派手になっているようだ。

最近の金本の活躍に「鉄人金本」「金本筋肉」「兄貴金本」と金本に関するものが多い。その金本は、猛打賞と4打点。伊良部が初回、4安打を打たれて2点を失い、巨人ペースになりかかってたのを、その裏、四球の今岡、中前打の赤星をおいて、金本が桑田のカーブを完ぺきに捕らえた本塁打が、阪神に流れを引き戻した。

伊良部は、この本塁打と、二回、藤本を二塁において、自らが打ったタイムリーに気を良くして立ち直った。金本は五回にも、中前打の赤星が盗塁のあと、一、二塁間を破る巧打で、さらに1点をあげて、伊良部を援護した。六回、斉藤の嫌な投ゴロヒット、川中の遊ゴロをアリアスがエラー、代打後藤にコーナーをつく投球がボールとなって四球、一死満塁となった。微妙な判定にも冷静を失わなかった伊良部は、代打江藤を3球勝負で三振、二岡を二ゴロに打ち取ってピンチを脱した。七回にその疲れからか、清水、清原に本塁打を打たれ、1点差に追いつかれて降板した。八回のタイムリー三塁打で初めて登るお立ち台の中村（豊）が初々しい。吉野、安藤、ウイリアムスが2点をきっちり守りきった。値千金とは、一回裏の金本の3ランのことをいうのだろう。

2003年8月27日
甲子園ナイター
㉒阪神15勝6敗
1分

阪神	巨人
3	2
1	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	2
1	0
×	0
6	4

投
〇伊良部
吉野
安藤
Sウイリアムス

打
赤星3
金本③
今岡1
藤本1
中村（豊）1
伊良部1
10

41才の青春（112試合目）

お立ち台で〝六甲おろし〟を歌ったのは、井川が投げて1対0で勝った試合だったと思う。昨夜、お立ち台に上がった広沢は、インタビュアーの機先を制した。「今日は歌いません。日本シリーズで優勝したら、みんなでやりましょうや」日本一に目標を切り替えたるあたり、さすが優勝経験のあるベテランだと感心した。初回にバックスクリーンへ、40才の工藤から先制2ランを放つと、三回には左翼へ4号3ラン。五回の中前タイムリーと合わせて6打点。青春真っ盛りといったところで、ユーモアも忘れない。「オレ、広沢か？」と放送記者に聞き、相手が目を白黒させていると、「オレ金本やでー」といったとか。それにしても、金本の3戦連続本塁打といい、今夜の広沢、そして、もう一人アリアスの2本塁打4打点と一発攻勢は、すさまじい。

打撃が低迷していた頃、西本さんが8月24日のスポニチで「チーム全体の調子が落ち込んでいる時こそ、各人が自分の打撃を心掛け、いい形で打つことに専念すべき」と評論、つなぎのチームバッティングを強調していた田渕コーチが、西本さんと同じ様なことをいって、指導方針をかえた。お二人の炯眼（けいがん）に恐れ入る。

七回以外、毎回ランナーを出しながら、七回まで無失点に抑えていた井川にも、そんなところがあった。四回、高橋（由）、ペタジーニに連打され、清原に四球で無死満塁となり、佐藤コーチが走った。井川は心配無用とばかり、江藤を一邪飛、斉藤を投ゴロ、村田を空振り三振に。五回は一死二、三塁で、高橋（由）、ペタジーニを連続三振に、３アウト目がいずれも１４５キロ以上の直球で空振りの三振に打ちとるのだから格好がいい。これが井川だといっているようだ。八回以降は、吉野、三東が左打者を、石毛が右打者を完ぺきに抑えた。今岡が久しぶりに2安打、前回初めてお立ち台に上がった中村（豊）も2安打し、片岡も代打で出場、赤星も盗塁成功、チームは復調の兆しあり。

2003年8月28日
甲子園ナイター
㉓阪神 16勝6敗
1分

阪神	巨人
2	0
0	0
4	0
0	0
4	0
0	0
1	0
0	0
×	0
11	0

投
〇井川
吉野
石毛
三東

打
アリアス④
広沢③
今岡2
中村2
11

下柳完封（113試合目）

お立ち台に、九回3安打でヤクルトを完封した下柳が呼ばれていない。野球は、守りより攻撃が重視されるのかと思っていたが、翌日の〝スポニチ〟を見て理解した。

「これから練習があります。3度目の完封はみんなのおかげです。感謝しています」といい残して、下柳はロッカーへ去ったとのことで、4月20日、移籍初勝利のお立ち台の前に「これが最初で最後です。一回でいい」とすでに関係者に告げていたという記事をのせていた。下柳は〝含羞（がんしゅう）の人〟平たくいえば照れ屋である。毎日新聞は、時代おくれの男の完封と表現していた。

熱燗や寡黙の男口開き

酒でも呑まなければ、自分の事は喋れないということだろう。

九回無死一塁、岩村の本塁打性の当たりが、早川の好捕で右飛に終わると、下柳は心の動揺を沈めようとして、マウンドの回りを歩き出した。それを見て、横浜戦で六回二死、無失点のまま降板を命じられたことの意地と、セ・リーグ初完封への下柳の執念を思った。そして、ラミレス、度会を連続三振で打ち取り、完封勝利。最後まで、ひざ下のゾーンで、速球、フォーク、スライダーが、よく決

まっていた。試合は、この下柳の好投と、二回アリアスの2ランと三回金本を二塁においてのタイムリー、おまけに古田の二塁への悪送球がついて、球が外野を転々とする間に、アリアスが一挙ホームイン。この4点で試合が決まった。

この試合で、3試合連続先発起用された早川が、本塁打を含む3安打と期待に応えた。26日に1軍昇格して、すぐチャンスをつかんだが、その後、5打数無安打だった。この3安打の影には、名伯楽水谷2軍コーチの指導と、星野監督の「2試合で判断するのはかわいそう。これで2軍に落としたらあいつの人生終わりや」という愛情があった。早川が本塁打を打った時、カメラは中村を映した。二人は同年齢30才で守備位置も同じ、境遇も似たもの、手を叩いて祝福している中村の心情や如何。

2003年8月29日
甲子園ナイター
㉒阪神13勝9敗

サンテレビ

阪神	ﾔｸﾙﾄ
0	0
2	0
2	0
2	0
2	0
0	0
0	0
0	0
×	0
8	0

投
〇下柳

打
早川③
赤星2
アリアス②
今岡1
金本1
矢野1
10

戻ったつなぎ打線（114試合目）

夏休みの終わりになって、青空に居座っていた入道雲が消え、秋雲といわれている筋雲が流れているが、とにかく暑い。

昨夜の甲子園は、雨が予想されていたので、早く点を取って、ゲームを早く進めることだ。一回、今岡の右前打、赤星の三塁内野安打、金本四球で無死満塁。アリアスの遊ゴロ併殺崩れの間1点。最小点で不足だが、雨を考えると貴重だ。二回には、早川が昨日に引き続いてセンターオーバーの本塁打を打ち、続く藤本のセイフティバントと久保田の送りバント、今岡の左中間を破るタイムリー二塁打で2点をあげた。雨で流れないよう早くゲームを進めることだと思っていたところ、久保田が1点を失った。鈴木に打たれたあと、自らの暴投とベッツのタイムリーという、やらずもがなの1点で嫌な気がしたが、その裏、タイミングよく矢野の本塁打がでた。矢野が本塁打を打った試合は負けないとうジンクスがあるらしく心強い。

久保田が五回を三人で打ち取って、ゲームが成立。あとは雨を心配することなく、じっくり攻めればよいと思っていたら、早速、5安打4点。ロード前の強い阪神が戻った。一死から赤星が右翼線へ

三塁打、金本のあたりそこねの打球が内野安打となって1点、この安打で気落ちした佐藤を阪神のつなぎの打線が攻め立てた。片岡がセンターオーバーの二塁打、アリアスが左翼線越えの二塁打、続く矢野の右中間の三塁打で4点をあげた。いずれも長打、チャンスに一気にたたみかける攻撃が復活した。矢野の復調で打線のつながりがよくなり、得点が倍増した。

久保田は、9安打3点を与えて、八回マウンドを降りた。11三振を取る力投をみせながら、ベンチの久保田は厳しい顔を崩さない。八回、二死を取りながら、鈴木に四球を与えたあと3連打されて2点を与えたのが悔しいのだろう。久保田の課題は、完投能力をつけること。

2003年8月30日
甲子園ナイター
㉓阪神14勝9敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
1	0
2	0
0	0
1	1
4	0
0	0
0	0
1	2
×	0
9	3

投
〇久保田
リガン

打
アリアス3
今岡2
赤星2
矢野②
早川②
藤本2
金本1
中村1
片岡1
16

福原復活（115試合目）

ウイリアムスから、ウイニングボールを貰った福原が、お尻のポケットにしまいながら、同僚達の祝福を受けているのをみて、こんなことを思った。

野球は筋書きのないドラマとよくいわれる。確かに、野球観戦で一番楽しいのは、カクテル光線に映えている芝生のグランドに、選手達が散って、これからどんなドラマが始まるのか、胸をわくわくする時である。

昨夜のヤクルト戦は、選手達が作った〝福原復活〟というシナリオのあるドラマだった。舞台は、うまく進行し、福原への神様の褒美かと思うほどだった。

福原がグランドから去る前の試合は、昨年8月16日の昨夜と同じヤクルト戦、6対1の負け試合の八回、中継ぎに登板し、渡会、ラミレスの二人を打ち取ったのが最後である。その後腰を痛め、そのことを話題にした記者に、星野監督は激怒した。「何もしとらんのにギックリ腰。そんなの記事にするなよ」。その後9月21日2軍戦に登板したが、今度は右肩痛を発生して10月18日に手術。03年6月から鳴尾浜でリハビリにはいった。福原は、1998年、速球投手としてドラフト3位で入団した。

背番号は江夏のもの、球団の期待が伺える。昨夜の福原から155キロを記録した速球は影をひそめ、矢野のリードのもとスライダーを多投、六回まで4安打、無四球、無失点と好投した。シナリオというのは五回の攻撃である。二死から福原自らが三遊間を破る。今岡が左前打で福原と同期生の赤星につなぐ。赤星は単打で福原はホームまで帰れないと読み、思い切り引っ張った。打球は右翼線を破る二塁打となり、福原は生還した。金本は2―0と追い込まれながら、5球をファール10球粘って出塁し片岡にバトンタッチする。福原の努力を鳴尾浜でみている片岡は、金本で力を使い果たした鎌田の初球を叩く。打球は一塁右を破る走者一掃の二塁打となった。あとは吉野、安藤、ウイリアムスが完ぺきのリレーで福原を祝福した。

2003年8月31日
甲子園ナイター
㉔阪神15勝9敗

サンテレビ

阪神	ヤクルト
0	0
0	0
0	0
0	0
4	0
0	0
0	0
0	0
×	0
4	0

投
〇福原
吉野
安藤
リガン

打
赤星2
片岡2
今岡1
矢野1
早川1
藤本1
福原1
9

アリアス2発4打点の活躍（116試合目）

阪神の四回の攻撃が終わったあと、カメラが応援団のプラカードを写した。

〝常時アリアス〟

ファーストネームのジョージをもじったもの。昨年ペタジーニをとるために、アリアスを解雇する話があったので、いつまでも阪神の選手であってほしいということか、それとも、アリアスはスランプの期間が長いので、短くしてほしいという願いをこめているのだろうか。そのアリアス、ロードは絶不調だったが、ここ5試合は20打数13安打で打率6・50、打点も13と絶好調。昨夜も5打数4安打、その内の2本が本塁打という大活躍だった。広島からまだ勝ち星のない伊良部は、初回、緒方に二塁打を打たれ1点を失ったが、二回に、アリアスが高橋の内角スライダーをレフトスタンドにほり込んで同点とし、四回には外角シンカーを右中間への技ありの一発でリードした。その裏、伊良部は二死から森笠に打たれて同点とされたが、この広島を突き放したのは五回である。赤星四球、金本の右前打、片岡の一ゴロで走者を二、三塁に進め、アリアスがレフト前に、2点タイムリーを打ち、伊良部は勝利投手の権利をもってマウンドを降りた。伊良部は、さすがベテラン、五回、走者2人を出したが、

続く打者を2三振に打ち取り五回を7安打4四球で2失点。「粘り強く投げられたと思う」と、コメントどおりだった。

アリアスは、さらに七回、四球の金本、中前打の片岡を一、二塁において、レフトオーバーの二塁打で2点を稼いだ。また、アリアスは昨夜の2発で、本塁打王争いでトップのラミレス、ウッズと1本差に迫った。優勝と本塁打王、両手に花も夢ではない。不調だった矢野が、このアリアスに誘発されたのか、4打数4安打と調子をあげてきた。

リリーフ陣は、リガンが六、七回を1安打、吉野が八回を無安打に抑え、九回、初めてストッパーを任された金沢が2ランを打たれ、安藤に助けを求めたのが残念だった。

2003年9月2日
広島ナイター
⑳阪神13勝7敗

大阪テレビ

広島	阪神
1	0
0	1
0	0
1	1
0	2
0	0
0	3
0	0
2	0
4	7

投
〇伊良部
ｳｲﾘｱﾑｽ
吉野
金沢
S安藤

打
ｱﾘｱｽ④　矢野4
片岡2　金本1
秀太1　藤本1
久慈1伊良部1
15

片岡の意地の一打が石毛を勝利投手に（117試合目）

阪神を1点に抑えていた長谷川を、広島ベンチは、六回のチャンスに代打を送るために代えた。阪神の1点は、今岡に代わって初先発した秀太の三年ぶり2本目の本塁打である。ベース1周が速くて初々しかった。

投手交代は、長谷川の荒れ球を打ちあぐねていた阪神に幸いした。七回、二回を無失点に抑えた石毛の代打広沢が、三遊間を破る安打で口火を切った。秀太が走者を二塁に送ったが、赤星中飛で二死となり、金本が敬遠された。これをみた片岡の打席に歩む姿は、テレビをみていても、四番の意地と闘志がみなぎっていた。そして、片岡の気合いをこめたひと振りは、右翼手の頭上を超え、2者が生還した。続くアリアスに、片岡の闘志溢れる後姿をみて、打ったという本塁打がでて、この回一挙4点をあげた。アリアスは、この一打で、ラミレス、ウッズに並んだ。

片岡の二塁打で逆襲した時、カメラは、チラッと、勝利投手になれる石毛を写していた。オフに近鉄を解雇され、テスト入団した、かつての巨人の守護神、3人の子持ちで33才の男の静かな笑顔があった。

福原、石毛の好投には、かつて１５０キロで阪急の日本一に貢献した、山口２軍コーチの指導もあってのことだろう。最終回、ウイリアムスの思わない不調で、1四球2安打で1点を返され、なお、無死一、二塁、幸い新井のバスターが投ゴロ併殺となって事なきを得た。ウイニングボールを持って、赤星が嬉しそうにベンチへ走る。ベンチでは、選手達の祝福に石毛が頭を下げていた。

井川がシーツの投ゴロを背面で捕球しようとしてバランスを崩し、膝を痛めて16球で降板した。このことが、いろいろなドラマを呼んだ。ベンチは、前日九回に2ランを打たれた金沢に登板を命じた。金沢は1点を与えたものの好投、石毛も五、六回を無失点に抑え、この両投手の力投が七回の反撃を生んだ。

2003年9月3日
広島ナイター
㉑阪神 14勝7敗

サンテレビ

広島	阪神
1	0
0	0
0	1
1	0
0	0
0	0
1	4
0	0
1	0
4	5

投
井川
金沢
○石毛
リガン
安藤
ウイリアムス

打
赤星２　秀太①
金本１　片岡１
ｱﾘｱｽ①　矢野１
広沢１

8

下柳の力投報われず（118試合目）

昨日は、大きな熊が立ち上がったような、メリハリのある夏雲が青空に居座って、夏の再来かと思った。季節の変わり目は、寄せる波のように、行きつ戻りつ到来するのだろう。今日は、綿菓子のような夏雲が数片、青空に漂っている。短い命を訴えるように、せわしく鳴いていた熊蝉は、落ち蝉となって、散歩道でみかけるようになった。そして今朝は、語尾を伸ばして悠揚と鳴くミンミン蝉のひと声を聞いた。残り試合23試合。今年の秋は楽しみだ。

阪神最後の攻撃、野口、沖原、中村（豊）の連打が出て、二死ながら満塁のチャンスを迎え、代打八木が打席にはいった時、テレビは八回降板し、ベンチの片隅に座っている大きなブロックを写した。昨夜の敗因は、初回と七回にこのブロックを打ち崩せなかったことだろう。初回、初めて一番を打った藤本が、いきなり右前打で出塁。金本の四球で、一死一、二塁となり、続く片岡、アリアスの強い一塁線への当たりが、いずれも野手の正面を突いた。七回は、先頭打者の片岡が左中間を破る二塁打で出塁、アリアスには長打を警戒して四球、野口に死球を与えて無死満塁。ブロックは、バットを振る仕草をして審判に抗議、イライラし始めた。いつもの悪いくせに、逆転のチャンスと思ったが、昨

夜のブロックが体を動かすことで逆に集中力を高めていたのだ。代打の矢野に2―3から、ファールで粘られながら、速球で一塁ファールフライに、続く代打の広沢を二ゴロ併殺打に打ち取り、六回、自分の死球と緒方の本塁打でものにした2点を守った。ブロックは六回、ムーアなみのヘッドスライディングで三盗し、下柳を揺さぶった。下柳は、緩急で両コーナーを突き、広島打線に的を絞らせなかった。惜しまれるのは六回、先頭のブロックに与えたストレートの四球だ。打線の援護がなく勝利投手になれなかった事は悔しいだろうが、完投して投手陣を休ませたことは大きい。野口が初ホームランを打って、下柳を盛り立てた。

2003年9月4日
広島ナイター
㉒広島8勝14敗

サンテレビ

広島	阪神
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
2	0
0	0
2	0
×	0
4	1

投
●下柳

打
藤本1
赤星1
片岡1
アリアス①
野口②
沖原1
中村（豊）1
8

矢野サヨナラ本塁打（119試合目）

九回一死から、脇腹の痛みから8月8日に登録抹消され、この日一軍登録された桧山が、ギャラードの150キロに近い直球を、ライト前にクリンヒットした。選手会長の一打をみて〝よし‼いける、あとに続こう〟と矢野は思ったに違いない。変化球はない、矢野は真中のストレートを思い切りふり抜いた。金城の動きからセンターフライと思ったが、打球は外野スタンドの前列に飛び込んだ。金城がカモフラージュしていたのだ。矢野もだまされていたのだろう、入ったとみるや、こぶしを甲子園の夜空に突き上げ、雄叫びをあげながら、飛び跳ねるようにしてダイヤモンドを一周、ベンチの前で待っている仲間の輪へ、両手を上げて飛び込んで行った。あちこちから出てくる手で、矢野は仲間の荒っぽい祝福を受けていた。そんな中で久保田が矢野の手を握っている。〝六甲おろし〟とメガホンを叩く音がこだまし、スタンドは興奮の坩堝（るつぼ）に化し、2度目のジェット風船が舞っていた。カメラは、女性達が掲げているプラカードを写していた。〝瓜破の星〟〝男前矢野〟

テレビに写る、そんな風景をみながら、私は6月17日、矢野が無死満塁から、ライトの奥深く逆転サヨナラ三塁打を打って、仲間達の手荒い祝福を避けるため、三塁の方向へ逃げ廻っていたことを思

い出した。その時も、昨夜と同じ三浦が先発で九回に降板し、デニーから打ったサヨナラ打だった。一度あることは二度あるということか。

ドラマは一人で作れまい。おぜん立てした選手達がいる。守りでは、2番手の石毛が6人を抑え、九回はリガンの2三振を奪う力投があった。六回、多村の難しいレフトフライを好捕した金本のファインプレーもあげねばなるまい。走では六回、内川の一塁への悪送球で二塁へ、金本の安打で1点を返した赤星の好走塁もあった。打つ方では、八回代打沖原の中前打、赤星、金本の連打でその差1点とし、九回のフィナーレを迎えた。金本の好守にわたる活躍が印象的だった。

2003年9月5日
甲子園ナイター
㉖阪神21勝5敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	0
0	0
0	0
0	3
1	0
0	0
1	0
2×	0
4	3

投
久保田
石毛
○リガン

打
金本2
桧山2
赤星1
矢野①
沖原1
7

杉山惜しい黒星（120試合目）

七回、村田の左翼への飛球が、金本の頭上を越えて金網にあたり、グランドを転々とした。金本は、必死になって球を追い、村田は懸命に走った。ところが、急に二人の動きが止まった。小林三塁塁審が右手を廻している。金本があきれた顔をして審判に詰め寄り、赤星も食い下がった。ベンチから、星野監督が飛び出して来て抗議したが判定は覆らない。翌日のスポニチの写真を見れば誤審は間違いないだろう。打球は、フェンスの最上部より30センチ下にあたり、グランドに跳ね返っている。首位争いに鎬（しのぎ）を削っている時だったら、ファンを巻き込んで、大変なことになっていただろうが、貯金が40もある阪神、星野監督もうすら笑いを洩らしながら引き下がった。余裕である。上田監督の長時間に渡る熾烈（しれつ）な抗議を思い出した。日本シリーズで、ヤクルトの大杉選手の打った左翼ポールぎりぎりの球が、ポールを巻いたか、巻かないかの抗議である。その日が甥の結婚式で、トイレに行くふりをして、式場をぬけ出して、成り行きを見守った。辞任を覚悟している上田監督は、金子コミッショナーの説得に応じる気配もない。男の生き様を見る思いがした。甥が阪急ファンであり、テーブルスピーチで、その事を話したら、意外とうけた。その甥の長女が大学生だから、随分古い話だ。昨夜の試合は、

誤審といい、横浜の7人の継投策に、たびたびゲームが中断、だらだらした試合だった。負け投手になったが、ルーキーの杉山はよく投げた。最速143キロのストレートに108キロのカーブを、うまく交ぜて好投した。四回、ウッズの二ゴロで併殺になるところ、沖原の一塁への送球が走者にあたったが、守備妨害を認められず1点を失った。六回、2連打され、走者を二、三塁において吉野と交代した。吉野は鈴木（尚）を今まで完全に抑えていたが、自信が過信となったのか、2　2から外を狙った球が甘く入って、打たれた2点タイムリーが試合を決めた。

2003年9月6日
甲子園ナイター
㉗横浜6勝21敗

サンテレビ

阪神	横浜
2	0
0	0
0	0
0	1
0	0
0	3
0	1
2	1
0	1
4	7

投
●杉山
吉野
金沢

打
赤星2
片岡2
アリアス1
矢野1
広沢1
7

コラム／渡辺オーナー　御許に

いつでしたか、東京ドームの貴賓室で、巨人の戦いぶりを観戦しておられる渡辺さまをテレビで拝見いたしました。

巨人が勝っていたせいでしょうか、笑みをうかべておられるあなたさまのお顔は、誠に頼もしく、お若い時はさぞかし女を泣かされたことでしょう。

その時お隣におられたのは、まぎれもなく、元総理大臣の中曽根さまではございませんか。竹下内閣のリクルート事件以来、総理大臣がころころと変わり、日本の値打ちもその後随分さがりました。

中曽根さまのことはまたと致しまして、あなたさまはお若い頃、政治記者として、田中番をやっておられるだけに、『文芸春秋』三月号の「小泉総理に友情を持って直言す」を拝見さしていただき、なかなかお達者な、そして、若々しい筆運びに、さすがと感心いたしました。

辛らつな批判をなさったあと、病院見舞いに小泉首相からパジャマをお貰いになったことをご披露され、「純ちゃん最高権力者は言葉にこだわらず、国民経済を守るため、君子豹変していいんじゃないか」とご忠告されるあたり、長年政治の世界を見てこられたお方だと思ったのでございます。

そういえば、あなたさまは商業主義になってしまったオリンピックには、巨人の選手を送らないと、

あれほど強くおっしゃっていましたのに、今度のアテネのオリンピックの監督には、長嶋さんと推薦され、オーナーにはいい選手を出すよう、さぞかし、ご要請なされることでしょう。

また、横綱審議会の委員長もされているあなたさまは、貴の花の七場所の休場を厳しく非難されました。

捨て身になった貴の花が千秋楽まで優勝戦線に残った時、さすがのあなたさまも、困った顔をなさって、「あの人は神秘的だ」とおっしゃっていました。

神秘的とは、どういうことを仰っているのか分かりませんが、正直に申し上げまして、あなたさまは貴の花の人気と、女性がほれぼれする寡黙な男の美を、お見逃しになったようでございます。

今の男は饒舌になり過ぎです。外国人の何ともいいようのない土俵入りばかり見せられている女性にとって、久しぶりに見る貴の花の土俵入りは、まことに美しゅうございました。

知らぬ間に、相撲の話となってしまいましたので、野球の話に戻さしていただきます。

日本選手権がすむと、毎年十一月のドラフト会議はプロ野球ファンにとって楽しみのひとつでございます。

くじを引く人の悲喜こもごもは、さながら人生の縮図でございました。ドラフト制度の功罪は、いろいろございましょうが、ドラフトの上位の選手が、必ずしも活躍するものではございません。各球

団が優勝するチャンスができることですから賛成でございます。一九八九年のリーグのお荷物といわれました広島の優勝は、まさしくドラフト制度の賜物でしょう。

若い人の人権の問題と大袈裟にいう人もございますが、どの球団に指名されても、野球することには変わりないのですから、拒否することは、多額の契約金を考える時、贅沢というものではございませんか。

ところが、いつの間にか、大学生と社会人の二名を自由枠とし、ドラフト制度が形骸化されました。制度のことは12球団のオーナー会議で決まるのでしょうが、その内容は私共にはわかりません。

常識的には多数決ということでございましょうが、それで決まるはずはないのでございます。この制度が観客動員数の多い人気球団に有利なことは、明々白々でございます。財政力の豊かな球団にいい選手が集まり、ますます強くなるのでございます。なにより視聴率が第一の民放は、それに拍車をかけるのでございましょう。

観客動員数が多いのは、セでは巨人、阪神、パではダイエー、西武が他球団を引き離しております。どう考えましても、賛成4、反対8で、多数決ではこの制度は決まらないはずなのでございます。それがどうして決まってしまうのでございましょうか。人気球団にオンブしてもらおうと、考えているオーナーの方もおられるかも知れませんが、私は会議を強引に牛耳るお方がおられるからだと思う

のでございます。

まさしくそれは渡辺さま、あなたでございます。川島コミッショナーは会津出身と聞いております。会津のお方は、やはり江戸のお人渡辺さんに弱いのでしょうか。それとも、官房副長官をなさっている時、読売の記者だった渡辺さんに借りでもあるのでしょうか。そんなことを勘ぐりたくなります。

一九九三年、ＦＡ制度が導入されました時、各球団が人件費の高騰を心配しているなかで、あなたさまは積極的でございました。ドラフト制度で戦力が均衡化することを、ご心配なさったあなたさまは、ＦＡ制度で有力選手をジャイアンツに集める計算だったのでございましょう。

二〇〇一年には、金に糸目をつけず他球団の四番打者、エースを集められ、大方の人が巨人の優勝を予想いたしました。ところが、予想に反して優勝したのはヤクルトでございました。そして、皮肉にもその翌年若手選手をうまく起用した原監督で、日本一になったのでございます。狂喜されたあなたさまは「原君は若い。あと十年はいける」と、おっしゃっていらっしゃいました。

二〇〇三年は、あなたさまが有利だとお思いになって導入されたＦＡが、裏目に出ました。それは、松井選手が大リーグに行くことになってしまったことでございます。

あなたさまは、人気と待遇を考えれば、巨人から出ていく選手はいるはずがないと、自信にあふれておられただけに、ショックだったと思います。

松井選手は記者会見で「裏切り者といわれるかも知れないが、ぼくは大リーグに行く」と、沈痛な表情でございました。

私は、推測するのでございます。あなたさまではないかも知れませんが、恐らく、幹部のどなたかが、日本一の四番打者に育ててやって、6億近い給料を与えているのに、恩を仇で返すつもりか、というようなことをいわれたのでございましょう。そうでなければ、賢明な松井選手が、あんな発言をするはずがございません。さらに驚きましたことは、選手会との交渉で決まった代理人制度について、こんな風にいわれたのです。

「巨人にはくだらん代理人を連れてくる奴は、いないだろう。連れてきたら、おれが球団代表に給料をカットしろという。いやなら自由契約だ。うちに入りたい奴はいくらでもいる」

まるで恫喝(どうかつ)ではございませんか。

政治の世界には〈影の実力者〉という言葉がございますが、あなたさまはプロ野球の世界では、影どころか白昼堂々とした実力者でございます。

そんなあなたさまだからこそ、私はお手紙をしたためた次第でございます。

お願いごとの一つは大リーグのように〈セ〉〈パ〉の交流試合を、やっていただきたいのでございます。あなたさまは、かねがね一リーグ制をいっておられますので、賛成されるはずはないと思うのですが、

一九五〇年のリーグ分裂の時の、正力松太郎さんになっていただきたいのです。

読売、毎日新聞の血みどろの販売合戦を、知っている人々は、まさか毎日球団の加入が認められるとは、思ってもいませんでした。ところが、正力さんはプロ野球の発展のために、あえて加入を認められたのでございました。

それと私にも奇策がございます。それは交流試合を実施する球場のことでございます。私は松山生まれ、大阪へ嫁に来た者でございますので、なんとか故郷をよくしとうございます。

松山は、日本へ初めて野球を広めた正岡子規の生誕の地でございます。〈坊ちゃん球場〉もできました。また、四国は数々の名選手を排出し、野球の好きな者がわんさとおります。そんなわけで、交流試合のすべてを〈坊ちゃん球場〉でやってほしいのです。政府は四国へ三つもの橋を架け、赤字で悩んでおります。

交流試合を〈坊ちゃん球場〉でやっていただけば、地元の人は勿論、多くの人々が橋を渡って来てくださることと思います。道後温泉もございます。温泉、球場、橋をセットにした割引券の発行も、可能でございます。

いかがでございましょう。お褒めいただけるでしょうか。

もう一つのお願いは、消化試合を止めていただきたいのでございます。閑古鳥の鳴いている球場で、

個人記録のための試合は、全くつまらないものでございます。

川崎球場が健在でした頃、閑古鳥が何羽いるか、バードウォッチングの専門家を呼んで、数を数えているテレビを見たことがございます。たしか一〇〇羽もいなかったかと記憶しております。

夫にこのことを申しますと、彼は秋風の吹きはじめた、祭りの後のようなうらぶれた球場の消化試合もいいもんだ、と申すのでございます。仕方のない天の邪鬼ではございません？

消化試合と申しますのは、個人記録のための見え透いた達成、阻止の繰り返しで、みにくいフォアボール合戦がまかり通るものでございます。大阪弁で申しますと、女のいけずのやり合いみたいなもので、試合とは申せません。外国人選手どころか、女の私さえ怒りたくなるのでございます。赤字を出してまでやる必要はないと思うのです。正々堂々という言葉は死語になったのでございましょうか。

衛星放送で朝早くから、大リーガーの試合を見ることができます。このままいけば、日本のプロ野球は魅力を失ってしまうのではないでしょうか。

オーナーとして、Ｖ９、Ｖ10をお考えになるのは当然のことと思いますが、あなたさまのようなスケールの大きなお方は、小泉首相に進言なさったように、まさしく君子豹変していただいて、12球団の繁栄のことをお考え下さいませ。かさねがさねお願い申し上げます。

アリアス満塁弾（121試合目）

今岡の欠場でプロ入り初めて一番打者になった沖原が左前打で口火を切り、赤星が四球、幸先よしと思ったが、続くクリンアップが簡単に凡退した。相手の吉見投手は、三月の開幕投手で、井川に投げ勝って、山下新監督に初勝利をプレゼントした。この嫌な予感を払しょくさしてくれたのが、福原の好投である。

一、二回を3者凡退に抑え、三回は、投手に二塁打を打たれ心配したが後続を絶ち、四回も二死から走者を出したが村田を三振、五、六回は、片岡のエラーによる走者を出しただけで、3者凡退に退けた。

手術前、味方のピンチに登板、１５０キロを超える速球を投げながら痛打され、顔をしかめていた福原が嘘のようだ。力味（りきみ）ない投球フォームは、１４０キロ台前半のスピードしか出ないが、よくコントロールされた球が低目をつき、キレのある球で三振を取る。六回投げて2安打無失点、星野監督が大事を踏んで降板を命じた。

解説の小山さんも「福原は変わった」という。投球フォームの事をいっているのだろうが、落ち着

いたプレートさばきに、顔まで老けてみえる。まだ20代だと思ったが、念のために選手名鑑をみたら、やはり27才だ。斉藤、槙原が引退後、若手投手陣が伸び悩んでいる巨人に位べ、阪神の将来は明るい。井川、安藤、久保田に福原が加わった。

この福原の好投に、攻撃陣がこたえた。五回、再び沖原が中前打、赤星が四球、広陵高校の先輩金本が、打ちあぐねていた吉見から左前打を打って先取点をあげた。この1打で動揺した吉見は、片岡に四球を与えて無死満塁。続くアリアスは、投手の動揺を読み、四球のあとの初球を見事レフトスタンドへグランドスラムを叩きこんだ。さらに七回、金本は、ライトスタンドへほり込んだと思った打球が、フェンスにあたって、グランドを転々とするのをみるや、スピードをあげて三塁打とした。足を痛めていても、表に出さない金本の男の美学だ。

2003年9月7日
甲子園ナイター
㉘阪神22勝6敗

サンテレビ

阪神	横浜
0	0
0	0
0	0
0	0
5	0
0	0
3	0
0	0
×	3
8	3

投
〇福原
リガン
安藤
石毛

打
沖原3
桧山3
金本2
藤本2
赤星1
アリアス①
矢野1
13

伊良部五回に崩れる（122試合目）

昨夜も、沖原が初回いきなり、センター前にヒットした。続く赤星四球、高井のストレートのコントロールが悪く、古田が懸命にリードする。このチャンスに、打者に集中する高井のすきをついて、金本の2―3の時、重盗を試みたが、三振ゲッツーとなって、一挙にチャンスをつぶしてしまった。勝負事は、えてしてこういう時、ツキが相手に回るものと心配したが、アリアスを一塁において、桧山のセンターオーバーの本塁打がでて、ひと安心した。四回には、桧山四球、矢野、藤本の中前打で1点を追加、伊良部の要所を抑えるベテランの投球術からみて、優勝に一歩近付くと思った。ところが、その裏、ラミレスを2―0と追い込みながら、すっぽ抜けたフォークボールをレフトスタンドにほり込まれた。そして、五回の裏、想像できない事が起こった。二死としながら、2安打1死球で満塁とされ、岩村にレフトスタンドへ狙い打ちされた。2年前、優勝を目の前にして、苦労した経験が岩村の意地となったのだろう。

スポニチで解説している鈴木さんは、宮本に与えた死球が原因で、伊良部がセキを切ったように崩れていったのは、精神的なスタミナの不足を強調する。独断と偏見かも知れないが、伊良部の心の片

隅に、ラミレスに本塁打を打たれ、本塁打争いをしているアリアスに悪い事をしたという思いが残っていて、それが尾を引いたのではないかと思う。伊良部は、見かけによらず、優しい心の持ち主だと聞いている。

中日の山田監督が解任になった。作り笑いの中に男の無念さが惨んでいた。どうして、シーズンの終わりまで待てないのだろう。惰性で消化試合をやることは、来季の為にならないということらしいが、オーナーの権威みたいなものをしめしたいのだろう。その日、オリックス時代からの愛弟子の平井が、プロ初完投、初完封したが、「監督されている時に恩返しがしたかった」と悔しい胸の内をいっていた。

2003年9月9日
神宮ナイター
㉓ﾔｸﾙﾄ 10勝 15敗

関西テレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	2
0	0
1	1
7	0
0	0
1	0
1	0
×	0
10	3

投
●伊良部
金沢
吉野
杉山

打
桧山②
藤本2
沖原1
矢野1
6

11回、変なサヨナラ負け（123試合目）

「2点に抑えても、勝てない時は勝てないもんだなぁー」

解説の小山さんは、独り言のようにつぶやいた。井川は打たれながらも、要所を締め、岩村に打たれた2ランだけに抑えていたが、打つ方がさっぱり、初見参の館山から、桧山の二塁打とアリアスのタイムリーによる1点と、片岡の同点本塁打の2点を奪っただけだった。そして、2対2のまま迎えた最終回にゲームの様相が一変した。

九回阪神は、四球の片岡を一塁において、矢野の目のさめるような痛烈な当たりが、三塁正面を突き、併殺となってチャンスを逃した。その裏、井川は、代打の志田に初ヒットを打たれ、飯田を三振にとったあと、宮本に左中間を破られ、岩村を敬遠して満塁策をとって、ラミレスと勝負。ラミレスは3三振とレフトフライ、当たっていないとはいえ、現在の二冠王だ。絶体絶命のピンチとはこの事だろう。しかし、腹をくくった井川は、ほほ笑みさえ浮かべている。井川はチェンジアップを連投、その5球目を打ったラミレスの球は、矢野の前で弾んだ。なんとキャッチャーゴロ、矢野は、ホームを踏んで一塁へ送球して併殺。井川は、九回、12安打12三振でマウンドを降りた。十一回の裏、再び阪神に試

練が訪れた。安藤が城石、真中に連打され、飯田に送りバントを決められ、宮本を敬遠して満塁策をとった。左の岩村を迎え、安藤と交代したウイリアムスは、外角へのスライダーで岩村を三振。そして、再びラミレスを迎えることになった。投手はリガンに交代した。何故か〝そうは問屋が卸さない〟そんな言葉が浮かぶ。初球を打ったラミレスの詰まった打球は、一、二塁間に飛んだ。

秀太が好捕した。そのあと、テレビは、躊躇しながら、一塁でなくホームへ投げている秀太を写した。リガンが一塁のカバーには入っていないのに気がついたのは、相当時間が経ってからだ。

リガンがカバーに入っておれば、秀太のファインプレーだったのに残念だ。

2003年9月10日
神宮ナイター
㉖ﾔｸﾙﾄ 11勝 15敗

サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
0	0
0	0
0	0
0	1
0	0
2	0
0	1
0	0
0	0
0	0
1×	0
3	2

投
井川
吉野
●安藤
ウイリアムス
リガン

打
沖原2　片岡②
赤星1　桧山1
ｱﾘｱｽ1　矢野1
8

延長12回ドロー（124試合目）

わずか10センチが試合を面白くした。

八回、五十嵐がアリアス、片岡に四球を与えたところで、中指の痛みを訴えて降板した。救援した佐藤も矢野に四球、無死満塁のチャンスが阪神に来た。藤本の犠飛で1点、なお一死一、二塁。そして、代打の八木が三振で倒れた時、走者の片岡と矢野がスタートした。今季盗塁ゼロの2人が、ダブルスチールを決めた。

ここ数試合、今までのうっ憤を晴らすかのような活躍ぶりの沖原に打順が回った。沖原は、外角のスライダーに泳ぎながらバットを出した。フラフラと上がった打球は右翼ライン線へ、魂の乗り移った白球は、生きもののように、白線のわずか10センチ内側で高く弾んだ。同点打だ。延長十二回にも、二死二塁で沖原に回ってきたが、右飛に終わって、両手に花ということにならなかった事も書いておこう。

初回に、片岡のエラーから1点を失い、二回にアリアスの2ランで逆転したが、先発の下柳はピリっとしない。その裏、城石に同点の本塁打を打たれ、四回、アリアス、片岡の安打で無死一、三塁、矢

野の併殺打の間に1点を取って、再びリードしたが、下柳は依然立ち直らない。五回、4連打を浴び3点を失って降板した。そして、六回にリガンが七回に石毛が、岩村、ベッツに本塁打を打たれて4対7、そんな時に沖原の一打が出て、流れを阪神に戻した。

十回、二死一、二塁のチャンスがあったが金本三振、前夜、延長戦で敗戦投手となった安藤は、その雪辱戦とばかり、三回3Kパーフェクト救援、十一回、安藤のバトンを受けたウイリアムスが十二回に、一死満塁の危機を迎えたが、渡会の二ゴロを秀太が落ち着いて、代走の三木をホームで刺し、志田を空振りの三振に切って試合が終わった。4時間48分、両軍39人の選手を投入した総力戦だった。最後に、星野監督が決めたかったという九回、アリアス、矢野を三振にとった古田の好リードも書いておこう。

2003年9月11日
神宮ナイター
㉗ﾔｸﾙﾄ 11勝15敗
1分
サンテレビ

ﾔｸﾙﾄ	阪神
1	0
1	2
0	0
0	1
3	0
1	1
1	0
0	3
0	0
0	0
0	0
0	0
7	7

投
下柳
藪
リガン
石毛
安藤
ウイリアムス

打
沖原3　ｱﾘｱｽ③
藤本3　桧山2
矢野2　片岡1

14

九回の反撃届かず（125試合目）

阪神ファンは、心の底から楽しんでいる。そして、楽しみは一日でも長い方が有難いと思っている。残り試合を全部負けても、優勝出来ると思うのだが、選手達は、マジックと戦っているようだ。

九回表の二死満塁、一打同点のチャンスに、三塁のファールフライに終わった金本が、バットを叩きつけて悔しがっているという。テレビ放送が終わって、ラジオを聞いていたので、その度合が分からない。翌日のスポーツ紙を見て驚いた。ベンチの前で、バットを思い切り振り上げ、帰り仕度をしている選手達が手を止めて呆然と見ている。左足を痛め、ここ数試合ブレーキになっていたが、昨夜は、ヒットも打ち盗塁もした。しかし、逆転出来なかった最後の打席が、余程悔しかったのだろう、自分を責め立てる怒りは、生半可なものではない。

「あいつは、休めといっても、松葉杖をついて、レフトを守りよるで」

星野監督のセリフもうなずける。この金本選手のプロ根性が、今迄、人気に溺れていた選手達の意識を変えて、見事闘う集団となった。いくら書いても、書き足りない。この金本選手をとる事に、一番執着されたのが、野崎球団社長だと聞いている。その炯眼は、たいしたものだ。外柔内剛、上を向いて仕事する人が多い中で、社長は現場中心に仕事されるお方だとお見掛けするが如何。

五回に、久保田が右ヒジの違和感を訴えて降板、急きょリリーフした石毛が、森野のタイムリーで失った1点と、吉野が福留に打たれた1点を、中日の強力リリーフ陣が守った。負けたとはいえ、阪神は九回に、大塚を攻め、見せ場を作った。代打の野口が二塁打、矢野が粘って、10球目をセンター前へ、執念のヒットで1点を返し、藤本の犠打で二塁へ、広沢のセンター前ヒットで一、三塁、沖原の代打片岡が良く粘ったが三振、赤星が四球でつないだが、金本の無念の一打で試合は終わった。

新幹線が開通した頃の話である。管理職になった私を、当時の上司がいきつけの居酒屋に招待してくれた。上司は、女将から三本の割り箸を貰い「これが新幹線、その次が〝つばめ〟一番下が鈍行」とカウンターに箸を横に並べた。そして、「我々はこの〝つばめ〟のクラスや」といって真中の箸を下に向けた。そして、「鈍行に7，新幹線に3の気配りをする。そんな生き方が、料理でいう、いい塩梅というものだろうなあ」。今になって、含蓄のある言葉と思うようになった。野崎社長を拝見するたびに、その上司を思い出す。お顔がよく似ているのである。

2003年9月12日
ナゴヤナイター
㉖中日 12勝 13敗

サンテレビ

中日	阪神
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
1	0
×	1
2	1

投
久保田
●石毛
吉野
藪
ウイリアムス
金沢

打
藤本 2
金本 1
野口 1
矢野 1
広沢 1
6

アリアス、松山大暴れするも（126試合目）

大阪人気質を説明するために、タイガースファンの心理を例にした〈大阪学〉が、タイガース人気にあやかって再版されている。日本中、町は沢山あるが、町の名を冠した学問は珍しいと思っていたが、大宅荘一の「日本の人物鉱脈」によれば、水戸学が最初で、幕末の志士達が学び、明治維新の原動力となったといい、水戸は戦後も、藤田東湖百年余など催され、戦災にあった常磐神社の復旧をはじめ、義烈館、回天館などが完成した。町には、東武館などという剣道場が大繁昌し、青少年男女が竹刀をかつぎ、意気揚々として闊歩（かっぽ）している。その点で、この〝水戸火山〟は、三原山などと同じように、愛国心が生きている町であると大宅荘一はいう。

いいたいのは、久保田投手のことである。相当重傷らしく、登板の機会もないと思うので、この際、書いておきたい。久保田投手は、富山県出身で、滑川高校で甲子園を経験している。卒業後は、何故か野球では無名に近い、水戸の常盤大学に入学している。久保田投手の物怖じしないプレート度胸は、常盤大学で学んだ水戸精神によるものと思う。将来の投手は、井川、久保田そして兄弟のように似ている安藤が中心になるに違いない。新人賞がとれなくて残念だろうが、１５０キロ台のスピードボー

ルの魅力をファンは忘れないだろう。焦らずに、一日も早くファンに元気な姿を見せてほしい。試合は、アリアスと桧山が大暴れ、アベックホームランもあり、五回までに、二人で6打点と活躍したが、8月1日以来の登板となった先発ムーアが、5安打3失点で、一回も持たずに降板、以後の中継ぎ陣が12四球を連発し崩れてしまった。そして、1点リードして迎えた五回、藪が3四球を連発、珍しく星野監督がマウンドへ駆け寄って気合いを入れたが、代打の井上に走者一掃の二塁打を打たれ、続く吉野、石毛も四球を連発して試合をつぶしてしまった。

2003年9月13日
ナゴヤナイター
㉖阪神 13勝 13敗

サンテレビ

中日	阪神
3	2
0	0
1	2
0	1
5	0
0	2
0	0
0	0
×	0
9	7

投
ムーア
谷中
●藪
吉野
石毛
金沢

打
桧山③　ｱﾘｱｽ③
藤本1　赤星1
金本1　矢野1
沖原1

11

4 安打シャットアウト負け（127試合目）

初回、無死一、三塁のピンチ、福原が福留に投じた3球目を、矢野がパスボール、三塁走者の森野が生還。アレックスの右前打で、もう一人が帰って2点を失い、福原の12イニング連続無失点記録が消え、五回3失点で降板した。パスボールしたあとの矢野をみて、心身ともに疲れている。翌日のスポニチで〝丸〟のコマーシャルで有名な俳優の矢崎さんが、野口の起用を書いておられたが、優勝がきまるといった試合は、やはり矢野だろう。矢野だけでなく、選手達は疲れているのだろう、ミスの多い試合だった。百戦錬磨の金本までが四回、関川のライナーを前で取ろうとしたが、わずかに届かず、おまけに蹴飛ばした打球がファールゾーンに転々とし、一塁走者の森野にホームインを許した。そして、六回にも、筒井のレフト前の球をお手玉して、二塁打とし失点につながった。八回は、あたっている沖原が四球で出塁、赤星が左飛を放つと、沖原が三塁附近を歩いている。球は一塁へ送球され併殺となった。カウントを間違えたのだろう。そんな精彩のない試合の中で、六回のチャンスを逃したのが惜しかった。六回まで、平松の軟投に無安打で抑えられていたが、藤本がセンター前に初ヒット、代打の八木が三ゴロに倒れたあと、沖原がライト右へ、藤本が一塁から長駆ホームをついたが、福留

の強肩に本塁寸前アウトになって、チャンスをついえたと思ったが、赤星の内野安打、金本四球で二死満塁のチャンスを迎えた。続く桧山の打球は、センターの頭上を越えて行く、はいれば逆転、抜けても同点、しかし、その喜びは束の間だった。アレックスが好捕した。胴上げを阻止しようとする中日の選手達の勢いに負けて6連敗、完全優勝の夢は消えた。最後にスポニチにのった世界チャンピオン徳山選手の言葉で締めくくろう。

「終盤戦の優勝争いはボクシングに似ている。一戦一戦が勝負です。そして、今こそ開幕の頃を思い出したい。守るものは何もなかったじゃないですか」

2003年9月14日
ナゴヤナイター
㉗中日 14勝 13敗

サンテレビ

中日	阪神
2	0
0	0
0	0
1	0
0	0
2	0
0	0
0	0
×	0
5	0

投
●福原
谷中
吉野
藤川

打
沖原 1
赤星 1
アリアス 1
藤本 1
4

夢に日付をいれた日（128試合目）

〝夢に日付けをいれることが出来ました〟

星野監督は、あいさつがうまい。ますますファンが増えることだろう。優勝できたのは、監督の愛と鞭（むち）で選手の競争心を引き出す操縦法と、強いリーダーシップが、フロントを始め、コーチ、選手達の間に強い信頼の絆が生まれたことだ。解説の西本さんは、すべての選手が殊勲選手だという。私は、星野監督の選手達への愛情が、かつての西本さんのように本物だったということだろう。

一、二回と、藤本とアリアスの好守備が、不安な伊良部の立ち上がりを助けた。しかし、三回二死から、淺井に内野安打、盗塁され、伊良部のフォークの制球が甘くなって、シーツに本塁打を打たれて、2点先行された。阪神は、適当に荒れる河内を打てない。五回、矢野の初安打と沖原のタイムリーで1点を返した。伊良部は三回以降、円熟した投球技術で、広島打線を抑え、六回で降板した。八回、途中出場の片岡の研ぎすまされた一振りの打球は、ファンの大声援の中、白い弧を描き右中間スタンドに突き刺さった。解説の田尾さんは、シーズンの始まる前、人伝てに、星野監督が一番期待しているのは、片岡だと聞いて涙を流したという秘話を披露した。この片岡の一打が九回のサヨナラに結びついた。九回、一死から、藤本中前安打、片岡が右前打でつなぐと広島は満塁策をとった。

「僕の読唇術によれば、前進守備を敷いているから、思い切り引っ張れといっているのでしょう」

解説の田尾さんがいい終わらない内に、赤星は鶴田の初球をフルスイングで叩いた。打球は右翼手朝山の頭上を超えた。シーズン当初は非力な打力から、代走守備用員だと思われていた赤星を、監督はこの日まで一試合もはずさなかった。その赤星が優勝を決めるだろう一打を放った。少年時代、星野中日ファンだったという赤星が、監督の熱い胸に抱かれている。このあとの2時間後、午後7時33分、横浜が勝って阪神の優勝が決まった。

本ならば愛読者だが、テレビはどういったらいいのだろう。〝愛テレ〟とでも、いったおこうか。そんな番組に〝ちちんぷいぷい〟がある。なんとふざけた名前だと思っていたが、角さんを始め、飾らない人柄の人達のトークが魅力となって、今や、晝の人気番組となっている。マジックが減る度にクス玉を割ってきたが、阪神優勝。今日は一番大きなクス玉を割る日で、角さんのコメントが今から楽しみだ。

2003年9月15日
甲子園ナイター
㉓阪神15勝8敗

関西テレビ

阪神	広島
0	0
0	0
0	2
0	0
1	0
0	0
0	0
1	0
1	0
3	2

投
伊良部
リガン
〇安藤

打
赤星2
片岡②
沖原1
八木1
矢野1
藤本1
8

井川には次がある（129試合目）

優勝が決まった15日から16日の朝まで、テレビは阪神タイガースの特番をしていた。めまぐるしくチャンネルをかえながら楽しんだ。〝熊さん〟との愛称があった後藤さん、80才になっておられるそうだが、とても元気だった。後藤さんは15代（１９６９年）監督で、２位の成績を残しておられる。当時１位で入団した現在の田渕コーチを、辻捕手という２人のベテラン捕手がいながら、貧打線克服のため抜擢し新人王を獲得させた。２位の成績を残しながら、１年で村山実に交代したことと、その人柄から〝仏の熊さん〟といわれた。１９７８年に２度目の監督となったが、球団初の最下位に沈み１年で退団した。その後、サンテレビで長い間解説された。もう一人、１９８５年、中西清起とＷストッパーを組み、強力打線を支えたが、８月にアキレス腱を断裂し、優勝の一瞬だけベンチ入りし、ナインに胴上げされて、涙を流していた山本さんのお顔も拝見できた。現役選手は、グループを組んで各局を廻っていたが、広沢、下柳さん以外は、どの選手も緊張していた。井川選手だけが、明日の登板を控え、ナインがビールかけで盛り上がっている最中に、１人祝勝会を後にした。

「ビールかけ？残念ではないですよ。だってぼくには次があります」

この次はどの次だろう。投手の三冠王を狙う明日のことだろうか。それとも日本シリーズ、いや、今シーズンだけでない、若者には未来があるということだろうか。

防御率トップ、完投数8でトップに並んだエースに消化試合など存在しない。

井川は、朝山の本塁打で1点を与えたが、無四球、3安打、完投勝利だった。打たして取るピッチングは見事だった。打つ方では、アリアスの100打点目の35号ソロ、優勝の日に生まれた男の子と会うため、24日に一時帰国するらしいが、後11試合には本塁打を狙ってほしい。六、七回には、昇格したばかりの関本、早川がダメ押しの1点を取って完勝だった。

2003年9月16日
甲子園ナイター
㉔阪神16勝8敗

サンテレビ

阪神	広島
0	0
0	0
0	1
1	0
0	0
2	0
1	0
0	0
×	0
4	1

投
〇井川

打
金本2
藤本2
関本②
アリアス①
早川①
8

ムーア復調？（130試合目）

毎年11月の中頃から12月になると、落葉かきが、私の日課となるが、９月になると、毎年週に一度、桜の落葉を掃く。桜の花は散るのが早く、人は称賛するが、葉っぱも他の樹に先駆けて散る。落葉色の中に緑の残った枯葉は痛ましい。その頃になると、去年は4位争い、ここ数年は最下位争いだった。桜の満開の頃は、よくてAクラス争いと思っていたのだが、なんと今年は優勝してしまった。こんな嬉しいことはない。

これからは、日本シリーズを見越しての選手起用と、記録に挑戦している選手達の起用、そして、若手選手の発掘ということだろう。

昨夜は、ムーアが日本シリーズで起用できるかどうか、首脳陣は見極めたかったのだろう。そのムーアは、初回、朝山に三塁打を打たれ。木村（拓）の二塁打、犠打で2点先取された。その裏、ホームラン争いの渦中にあるアリアスのために、チャンスを1打席でも多く与えようと、ベンチは一番に起用した。アリアスは、優勝の日に誕生した第3子ニコラス君と面会するため、24日に一時帰国する。この粋な計らいに、アリアスは初回いきなり本塁打を打ってベンチの期待に答えた。これでウッズと

並んだ。

ムーアは、そのあと五回に、投手というより打者で競っているブロックに本塁打を打たれ、3失点で七回に降板した。ムーアの調子は一時にくらべて良くなっていると思ったが、スポニチの仰木さんは、下半身で投げていないため、伸びのある球が来ていないと手厳しい。ムーアの後をつないだ金沢、吉野は好投した。今シーズン始めてスタメンでマスクを被った淺井が、藤本の右中間二塁打のあと三遊間を破るタイムリーを打った。その感想を聞くアナウンサーに「リードに集中したいのでノーコメントにしてほしい」と答えたとのこと。いつもベンチで監督の聞き役に廻っている淺井に、星野イズムが浸透してきたのだろう。関本、早川の昇格組から快音は聞けなかった。

2003年9月17日
甲子園ナイター
㉓広島9勝16敗

サンテレビ

阪神	広島
1	2
0	0
0	0
0	0
1	1
0	0
0	0
0	0
0	0
2	3

投
●ムーア
金沢
吉野

打
藤本2
アリアス①
淺井1
4

どうした巨人軍（1）（131試合目）

渡辺オーナーは〝君子豹変す〟をモットーにされておられる方だから「阪神に3連敗したら、来季、原監督の続投は分からない」といわれたといって、本気にする必要はあるまい。ところが、このオーナーの一言で、読売本社は右往左往、試合開始の直前に報道陣が、東京大学前の本社に集結したというのだから、たいしたものだ。フロントの人達も、本社7階の社長室を頻発に出入りしたらしい。消化試合にならないようオーナーの叱咤激励と分かっていても、ご機嫌伺いにいかねばならないのが、サラリーマンの悲しい性だろうか。騒ぎをみながら、オーナーは悦に入っていることだろう。権力を持った者は、えてして、人事をもて遊ぶ。オーナーの言葉は、激励というより恫喝に近い。

松井は大リーガーに移籍し、代わりにとったペタジーニは、シーズン半ばに故障してアメリカへ帰国、シーズン当初には、元木と仁志の衝突事故、工藤の指の骨折、後半は、高橋（尚）、高橋（由）、阿部、村田の故障等、怪我人の多かったことを考えると「お前の来シーズンはないぞ」と脅かすより、もっといいようがありそうなものだ。最近の原監督の憔悴した顔はみておれない。〝君子は九度思いて一度言う〟ということわざもある。九度思うことで考えたのが、〝蚊取線香〟では洒落にはならない。選

手を怒ることはいいとしても、侮辱する言葉を、選手に投げつけるのはいかがなものだろう。鹿取コーチも巨人を去るだろう。

日本シリーズのベンチ入りを競争するすべての選手達が活躍した。4月11日の6点をリードした巨人戦の九回戦、後藤に同点スリーランを打たれて以来登板のなかった藤川が、五回まで完封した。六回以降は、吉野、リガン、ウイリアムスのリレーで完封。打では、関本の本塁打を含む猛打賞、九回その関本を一塁において、2ランを放った平下等、最近ベンチ入りした選手達が活躍した。昨年、好投した藤川を小山さんが、コントロールの良い投手になるといっていた事も書いておこう。

2003年9月19日
東京ナイター
㉔阪神17勝6敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
0	0
0	2
0	1
0	0
0	0
0	1
0	0
0	0
0	2
0	6

投
〇藤川
吉野
リガン
ウイリアムス

打
関本③
赤星2
桧山1
平下①
藤本1
藤川1
アリアス1
10

阪神に消化試合はなし（132試合目）

日本シリーズへの参戦権をかけて、阪神には消化試合はない。競争意識を植えつけられた選手達が、必死になってグランドで火花を散らす。投手では、右の中継ぎ投手陣の明暗がはっきりとした。先発の谷中は、初回3安打を打たれたが、金本の本塁への好送球もあって、無失点に抑えたが、三回、斉藤にタイムリー二塁打を打たれて2点を失った。四回には、一死から4連続安打を浴びてKO。結果を残すことができなかった。気落ちした谷中の顔がテレビに写る。2番手の金沢は、四回の一死満塁から登板、清原を速球で見逃しの三振に仕とめ、二回2/3で許した安打は1、谷中と明暗をわけた。3番手の石毛は、いきなり清原に本塁打を打たれた。片岡の2ランで、1点差にせまり、好投している上原に疲れがみえていた時だけに、監督がベンチで吠えていた。古巣を見返すことのできない石毛に怒っているのかも知れない。八回は、安藤が3人と格の違いをみせつけた。

前夜は、4号ソロを含む3安打、2打点の活躍をみせた関本が、五回二死から、パーフェクトピッチングだった上原の内角速球を左翼線二塁打で気炎を上げた。関本の長打力は定評があったが、遊撃の定位置争いに遅れをとったのは、守備力だった。そんな関本が、昨夜は守備で魅了した。

四回、３点目を奪われ、なお二死満塁のピンチに、斉藤の放った打球は、鋭い二遊間のゴロ、誰もが失点を覚悟したが、関本はダイビングキャッチ、素早く起き上がって二塁へ送球、追加点を防いだ。まだ試合は残っているが、今のところ、金沢、関本は、日本シリーズへのベンチ入りは間違いなさそうだ。

巨人のことだが、サンスポによれば、原監督の「辞任しない」の一言で、後任監督までうわさされた茶番劇は終わったそうだ。

オーナーは、東大時代から、政治運動の荒波をくぐってこられ、権謀術数は人後に落ちない人だろうが、スポーツはフェアープレーでいきたいものだ。

2003年9月20日
東京ナイター
㉕巨人7勝17敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
0	0
0	0
2	0
1	0
0	0
0	0
1	2
0	0
×	0
4	2

投
●谷中
金沢
石毛
安藤

打
アリアス1
金本1
桧山1
片岡①
関本1
5

どうした巨人軍（2）（133試合目）

先発の福原は、初回、四球から1点を失ったが、二回、3連打と福原の意表をつくスクイズで、3点をとったが、三回、高橋（由）、斉藤に2ランを浴びKOされた。復帰一、二戦の低目にコントロールされた球が高目に浮いていた。続く新人の江草は、清原を三振に打ちとり嬉々としていたが、五回、元木にタイムリー二塁打を打たれ、六回には、清原にアウトコース低目のボールになるような球を本塁打され、プロの厳しさを味わった。七回には金沢が2三振と好投、八回は、吉野が乱れて3点を失った。攻撃では、七回、二塁打の藤本をおいて打ったアリアスの37号本塁打で、工藤が動揺し、四球と内野安打で二死満塁のチャンスを迎えたが、片岡は一ゴロに終わった。

ここ二、三日、スポーツ紙をにぎわしている原監督の去就問題を、魚住昭著の〝渡辺恒雄メディアと権力〟を引用しながら、考えてみよう。

「渡辺と氏家は読売入社以来、ともに手を携えながら出世階段を駈けのぼってきた。一方で二人は最大のライバル同士であったから、社内での地位が上がるにつれ、二人の仲に亀裂が生じることもあった。とくに氏家が日テレ副社長に転出した直後、その亀裂は傍目にもはっきりわかるほど広がった。

二人の友人で中曽根の秘書だった小林克己が語る。あの二人はどこまで仲が良くて、どこまで反目しているのかわからないところがあると。氏家さんは広告局長になった後、渡辺さんに頭が上がらない様子だったけど、日テレの副社長に転出を命じられたときは渡辺さんの画策で出されたと思ったらしい」

今回の件も、球団の顧問にすぎない日テレ会長の氏家さんが、読売の社長でありオーナーである俺をさしおいて人事に口ばしをいれるのだということで〝留任〟と思っていながら〝3連敗〟の発言になったのだろう。お二人とも、トップの老害に苦労されたはずだ。「オレたちの仕事を軽く見られている気がする」という星野監督の発言も、もっともだ。

2003年9月21日
東京ナイター
㉖巨人8勝17敗
1分
読売テレビ

巨人	阪神
1	0
0	3
4	0
0	0
1	0
1	0
0	2
3	0
×	0
10	5

投
●福原
江草
金沢
吉野
石毛

打
片岡2
藤本2
赤星2
アリアス①
桧山1
関本1
矢野1
10

ムーア好投（134試合目）

ごま粒のような種から芽を吹いた、かぼそい苗をみて、はたして育つのかと心配していた鶏頭の花が、今や秋空と対峙（たいじ）している。梅雨の頃、この鶏頭をみて、俳句の門外漢が一句作ったことがある。

鶏頭の赤一寸の色気かな

俳句に熟達している友にみせると、鶏頭は秋の季語、秋の鶏頭が蕾であるのは、おかしいと鎧袖一触（がいしゅういっしょく）、そんなことを思い出しながら、一句作ってみた。

鶏頭の燃ゆる夜道の夫婦かな

阪神の優勝祝いに一献を傾けながら、友にみせるのを楽しみにしている。

対戦相手のダイエーの強力打線に左打者が多い。六回から伊良部を継いだムーアが、日本シリーズ先発入りを強力にアピールした。

六回、３人を４球で処理する等、四回を１安打３奪三振、無失点で抑えた。テレビにはムーアの真剣な眼差しと、ベンチで腕をあげながらムーアを指導している監督が写った。

先発した伊良部は、関本のエラーに近いペタジーニの安打で２点を失った不運もあったが、ストレートが高目に浮いて、五回を８安打４失点ＫＯされた。仰木さんはスポニチで、これから秋にかけ、甲

子園の浜風は、左翼から右翼へ強い風が吹くことを考え、左に強打者の多いダイエーの投手陣には、伊良部の内角を攻める球と技術が必要であろうという。

打線は、木佐貫に4安打に抑えられ、10勝を献上してしまった。九回に、金本、平下の本塁打で完封をまぬがれた。16日1軍に昇格したばかりの平下の本塁打は、今季3本目で日本シリーズのベンチ入りも間違いなさそうだ。

巨人騒動のことだが、スポニチによれば、渡辺社長の子飼いの政治記者出身、三上球団代表と原監督との対立は相当ひどいらしい。長嶋茂雄終身名誉監督が、事態の早期収拾に向けて、原監督と直接会談を持つ意向を明らかにしたとのこと。阪神ファンだけでない、巨人ファンも、とんだ茶番劇と思っていることだろう。

いくら敏腕記者とはいえ、職場が変われば、しばらくは様子をみるものだ。〝慌てれば事を仕損じる〟〝能ある鷹は爪を隠す〟ということわざもある。

2003年9月23日
甲子園ナイター
㉗巨人9勝17敗
1分
サンテレビ

阪神	巨人
0	0
0	1
0	2
0	0
0	1
0	0
0	0
0	0
2	0
2	4

投
●伊良部
ムーア

打
金本②
桧山1
平下①
4

どうした巨人軍（3）（135試合目）

福留の本塁打による1点に抑えて好投していた下柳が、七回、藤本のエラーから乱れ、柳沢に右前打を打たれた。幸い一塁走者の走者の判断ミスでめずらしいライトゴロとなって二死。ほっとしたところを筒井の右前打で一、二塁となりリガンに交代した。リガンは、関川にしぶとくタイムリーを打たれて1点を失った。八回は、ウイリアムスが2三振で3人を抑え、九回、安藤が登板した。

沖原の2安打3打点と、片岡のタイムリーで、4対2のリード、誰もが楽勝と思った。ところが、アレックス、大西に連打され、犠打をはさんで、代打谷繁に二塁打を打たれ、同点とされ、下柳の9年ぶりの10勝が消えた。十回は、いつもの安藤に戻っていた。打撃陣は、九、十回と天敵岩瀬に手も足も出なかった。十一回、金沢が七回矢野のけん制球に刺されチャンスをつぶした筒井に名誉挽回（ばんかい）の3ランを打たれた。十一回、野口の左前打のあと、初ベンチ入りの喜田が初安打を打って1点を挽回する役割を果した。

18日の〝3連敗したら――〟というオーナーの発言に端を発した巨人の騒動は私の予想に反し茶番劇でなかった。今も新聞記者の良心と良識で活躍されている元大阪読売の記者大谷さんの〝日刊スポー

ツ〟でのコメントが一番当を得ている。

「巨人の長い歴史の中でも、最悪の監督交代劇だ。来季のコーチングスタッフなどを巡って新しい球団代表と原監督は意見が合わなかったようだが、渡辺オーナーの虎の威をかって現場の意向を無視した三山球団代表に原監督は怒りを心頭に発し、たまりかねて辞表を叩きつけたとしか思えない。その意味で、現場を知らない者に振り回された原監督は男の意地を通したし、ファンも彼を責めるころはしないだろう。今季はトラに敗れ、さらに虎の威をかりるキツネにもやられたダブルショックしか残らない」大谷さんは、左傾化しているとの理由で、読売を追われた故黒田社会部長と行動を共にされた人である。

2003年9月27日
甲子園ナイター
㉘中日 15勝 13敗

サンテレビ

阪神	中日
0	0
2	0
1	0
1	1
0	0
0	0
0	1
0	0
0	2
0	0
1	3
5	7

投
下柳
リガン
ウイリアムス
安藤
●金沢

打
沖原2　金本2
関本2　喜田1
赤星1　片岡1
藤本1　野口1
11

今岡選手について（136試合目）

昨夜は、テレビもラジオも放送がなかったので、いいたいことを書かせていただこう。

今岡選手ほど、前野村監督のダシになった選手はいまい。昨年は裏切り者呼ばわりされたが、今岡選手は「優勝するんで、見といて下さい」と大人の対応をしていた。そして、優勝した今年は〝文春10月号〟で、今岡誠は、ある意味で、僕が育てたようなものです。彼が頑張っているのは、僕への反骨ですと。ものはいいようとは、このことだろう。今岡選手もたまったものでない。〝文春〟で、今岡はプロの自覚がないから二軍に落としたと、まるで言い訳するかのように書いているが、すべて正論である。ただ、スポーツ記者に「あいつは、いつも、口をポカンとあけて何を考えているのかわからん」といわれたことはいただけない。叱るというより、侮辱していることになる。野村監督が退陣してからも、今岡は一言も反論しなかった。ただ、優勝したあとテレビでいったセリフに、今岡の思いがこもっている気がした。星野監督が、就任あいさつで、5年連続最下位のチームの選手に、みんなで優勝しようといった監督に驚くとともに、同時に感激したといい、最下位を低迷しているチームに、チームプレーをいっても仕方ないでしょうといって言葉を濁した。今岡選手は、人気に甘えてい

る球団の姿勢や選手達に、うんざりしていたのを、野村前監督は見抜けなかったのだろう。そして、藤田元監督に叱られて、野球を止めるといった新庄選手を、素質があると、投手までやらせ、おだてたのだから、やる気のある選手達がそっぽを向いてしまい、三年間、低迷を続けたということが考えられないだろうか。昨夜のヤクルト戦は、〝ズポニチ〟から引用さしていただく。

阪神は2点を追う七回に二死から一、二塁の好機を広沢の左中間二塁打で同点。さらに赤星が右翼線二塁打で逆転した。先発の井川は18勝目。チームの連敗は4でストップ。ヤクルトは先発の高井が六回1失点と粘ったが中継ぎ陣が乱調で3位転落。

2003年9月30日
神宮ナイター
㉘阪神16勝11敗
1分

ヤクルト	阪神
2	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	1
0	3
0	0
0	0
3	4

投
〇井川
リガン
Sウイリアムス

打
広沢3
赤星2
藤本2
金本1
桧山1
関本1
10

桧山の16号満塁本塁打（137試合目）

参観日とは、うまくいったものだ。ダイエーの選手が47人も乗りこんでいるらしい。

伊良部投手は、五回まで投げて、被安打8、4失点。スポニチで解説の三村さんは、シーツに三盗を許す等、走者を出すとタイミングが崩れて投球が甘くなり、痛打されているのが心配だというが、新井に打たれた2本の本塁打は、高目のストレートで、追い込んでから投げていた。フォークボールは一球もなかった。テレビで解説している川藤さんは、参観日にお土産の渡し方もあるという。伊良部は、五回、5対4、1点リードで降板した。後続の下柳は六回、味方の失策も絡み、2点を失ったが、八回に桧山の満塁弾がでて逆転、2イニング投げた下柳に、10勝目になる白星がころがりこんだ。これで、井川、伊良部、ムーアと、21年ぶりの10勝カルテットが完成した。伊良部は、日本シリーズで見事変身して、ダイエーの強力打線を完封、下柳は古巣へ恩返しといきたいものだ。大舞台には、この二人のベテランがいることは心強い。

川藤さんのいうもう一つのお土産は、新井の2ランでリードされた三回だ。先頭、赤星が左前打、前田がもたつく間に二塁へ、金本の2球目に、完ぺきのスタートと、バットを止める金本の援護で三

盗に成功、その金本が四球で出塁、続く桧山が左前タイムリー。関本、片岡が倒れたが、矢野が左中間へ2点二塁打で逆転、そして藤本が中前打で続き、4点目をゲット、恐怖の下位打線をみせつけた。

初回、右前打を好走塁で二塁打とする足をみせたアリアスが、四回に本塁打を、八回には、桧山が2線級投手からだが、満塁本塁打を披露した。

この日、2軍戦のプレーオフで、後期優勝の阪神が、前期優勝の広島を5対3で下し、3連覇を果した。4月11日の巨人軍との初戦、九回、後藤に同点本塁打を打たれ、星野監督に激励され、十一回まで歯を喰いしばって、投げぬいた藤川が勝利投手になった。

2003年10月4日
広島球場
㉖阪神17勝9敗

読売テレビ

広島	阪神
0	0
2	0
0	4
1	1
1	0
2	0
0	1
1	4
0	0
7	10

投
伊良部
〇下柳
福原

打
矢野3
アリアス②
桧山②
藤本2
赤星1
片岡1
秀太1
平下1
13

井川20勝へ王手（138試合目）

昨夜の広島27回戦は、放送がなかったので、試合の記録は、阪神が5対1で広島を下し、今季初の中4日で登板した井川が19勝目をあげ、最終戦で20勝に挑戦することになったことだけとし、二人の監督について、思いついたことを書かしていただこう。

麻雀に、〝大三元〟という最高の役がある。〝白（はく）〟〝発（はつ）〟〝中（ちゅん）〟のパイをそれぞれ3枚を揃えることで、最高の人間は〝智〟〝情〟〝意〟の3拍子が揃っているということらしい。そこで、どのパイが智情意にあたるのか、勝手に考えてみた。智は人前にさらし過ぎると、座が白けることから〝白（はく）〟とし、情は、からむと何かと複雑になることから、こみいった字の〝発（はつ）〟とし、緑色が情を表しているような気もする。意は、赤色で、物をつらぬいている字の格好からして〝中（ちゅん）〟とした。

このことから、野村、星野監督のことを考えてみた。意は、両者とも強いリーダーシップを持っておられるので同格とした。とすれば、誰もが、智（白）は野村監督、情（発）は星野監督と考えるだろう。いいたいのは、星野監督は、三拍子を揃えることは至難の業と考え、コーチ陣をうまく使った。それに反し、頭のいい野村監督は、コーチ陣を自分の意のままにしようとし、情を補佐するコーチが

いなかったことだろう。三顧の礼で招いたであろう井原コーチは「任せたといっておきながら、あれだけぼやかれたら堪らない」といって一年で辞めていった。

文春10月号の〝わしが育てて星野が勝たせた〟を読まれたのであろう、久万オーナーが珍しくスポニチのインタビューに応じておられる。「今岡の使い方でね。私がもっとおだてるやり方を考えてはどうか？というと、できませんと受け入れなかった。人間は機械じゃない。感情があります……組織の上に立つには情に厚い人間でないといけません。組織のため、部下のため、死ぬ気でやれる人間でないといかん」と。

2003年10月5日
広島球場
㉗阪神18勝9敗

広島	阪神
0	1
0	1
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
0	3
0	0
1	5

投
〇井川
リガン

打
片岡2
藤本2
赤星1
金本1
平下1
矢野1
井川1
9

原監督、甲子園で引退のあいさつ（139試合目）

夢に日付をいれた人から、夢の続きを温める人への花束贈呈。引退会見にも涙を見せなかった原監督が、星野監督の胸で泣いている。試合より、終了後のセレモニーと原監督のあいさつが、ファンの感動を呼んだ。

「思い起こせば、昨年のこの時期、甲子園球場におきまして、宙を舞うことができました。その時のジャイアンツファンの歓声、最後まで見守ってくれて祝福してくださったタイガースファンの姿を忘れることができません。そして本日、私ごときのために、阪神球団のご厚意で、このような時間を作ってくださって大変感謝申し上げます。何より、尊敬する星野監督から、最後はねぎらいの言葉までいただきまして、どう自分の気持ちを説明していいかわからないぐらい感動しています。タイガースはこれから日本シリーズという大きな舞台が待っています。必ず日本一になって下さい。プロ野球はファンの皆様のおかげであります。プロ野球、タイガース、そしてジャイアンツ、これからも温かいご声援をよろしくお願いします。私は夢の続きをしっかりと胸の奥にしまいこんで、大切に温めて、宝物にして、あすからしっかり生きてまいります」

試合のこと。ムーアは、五回二死から4連打されたのは、いただけないが、球のキレからして、春先きの調子を取り戻しつつある。だからといって、日本シリーズに通用するかどうか、ファンの心配はつきない。阪神はリリーフ陣がしっかりしている。彼らをいい状態で使うには、イニングが短かくしなければならないが、そのためには、ムーアを始め、先発陣の活躍にかかっている。打撃の方は今岡が心配だが、もしもの場合は、あたっている沖原がその役をこなしてくれるだろう。赤星、矢野が元気なのも心強い。心配なのは守備。昨夜も四回藤本の悪送球で走者を生かし、清原の本塁打で2点を与えた。タマギワに強いが送球に難のある藤本が心配だ。久慈の起用もあるのでは。

2003年10月7日
甲子園ナイター
㉙巨人 10勝17敗
1分

阪神	巨人
1	0
1	0
0	0
0	2
0	4
0	0
0	0
0	0
0	0
2	6

投
●ムーア
石毛
吉野
安藤

打
赤星2
桧山2
矢野①
沖原1
金本1
広沢1
野口1
9

井川20勝、藤本3割（140試合目）

最後の最後で、阪神タイガースの選手達は、お家芸のつなぎの野球を披露、有終の美を飾った。53，000人の大観衆は「2003年の優勝は、みなさんとともに勝ち取った優勝です……日本シリーズはみなさんとともに日本一の美酒を味わいたいと思います」桧山選手会長のあいさつと、選手達のサインボールの投げ入れが終わっても、帰る人はいなかった。いつまでも〝六甲おろし〟の大合唱が、スタンドに、こだましていた。

有終の美を飾った八回の攻撃は、テレビ一杯に満月が写ったあとに始まった。一死のあと、金本が猛打賞となる右前打で出塁、代打平下が中前打、本塁打を狙いすぎて、凡打を続けるアリアスが、左中間に二塁打を放って金本、平下が生還した。桧山の四球で、なお一死一、二塁、矢野と交代して初打席の野口が右中間二塁打を打って、アリアスが生還。続く久慈の犠打で桧山が帰り、さらに、沖原の右前打で野口が生還。5連続得点をあげた。

井川が立ち上がり1点を失ったあと、死球の赤星と右前打の金本を一、二塁においた、広沢のタイムリー二塁打と、矢野の3点タイムリー二塁打で、20勝をかけている井川を援護した。赤星の死球は、

ヘルメットをかすったもので、危険球と判定され、いきなり先発の河内は降板した。赤星は二回、三塁走者となった時、広沢の強いファールボールが足にあたり、大事をとって退場するという赤星の厄日だった。

大量点に守られた井川は、３点を与えて六回で降板、あとリガン、ウイリアムスが好投し、井川の20勝に協力した。３割を狙っていた藤本は初回を三振、大丈夫かと心配したが、三回と五回にヒット、見事念願の３割を達成した。残念だったのは、９月２日以来、37試合ぶりの今岡にヒットが出なかったことがとても残念だった。

有終の美を飾った最終戦は、同時に日本シリーズへ向けての最高の壮行試合となった。

2003年10月10日
甲子園ナイター
㉘阪神19勝９敗

サンテレビ

阪神	広島
4	1
0	0
1	0
1	0
0	2
0	0
0	0
5	0
×	0
11	3

投
〇井川
リガン
ウイリアムス

打
金本３　藤本２
沖原２　広沢１
平下１　ｱﾘｱｽ１
桧山１　矢野１
野口１
中村（豊）１
14

あとがき

有難いことに、阪神タイガースの試合で放送のなかったのは、優勝の決まったあとの2試合だけだった。今年は阪神の選手達から沢山の感動を貰った。そして、残り少なくなった日々を充実して過ごすことが出来た。

このことは、監督、コーチ、選手を始め、球団職員の皆さん、サンテレビ、スポーツニッポンを始めとするメディアの関係者に、お礼を申し上げねばなるまい。

なんといっても、18年ぶりに優勝を決めた日は感動した。平成15年9月15日、神宮球場でヤクルトが横浜に負けて、阪神タイガースの優勝が決まった。午後7時33分、53，000人のどよめきの中を、選手達がはじけるように飛び出した。一番乗りは背番号39、二番手は背番号24。あとは、叩く、跳ねる、抱き合う、狂喜乱舞とは、このことだろう。選手達は、この一瞬のために128試合を闘ってきたのだ。

ベンチを出た星野監督は、扶沙子夫人の遺影を抱いた島野コーチを振り返った。二人の目頭が熱くなっている。星野監督は、喜びを噛みしめるように、ゆっくりと選手達の輪の中にはいって行く。たちまち、1メートル80センチ、80キロの体が宙に浮く。一度、二度、三度……星野監督は、満面に笑

を浮かべ、大の字になって七度宙に舞った。

「ファンの皆様に感動を与えた選手達を褒めてやって下さい」

ああ、しんどかったに始まる星野監督の見事なあいさつが終わったあと、田渕コーチが星野監督に抱きついた。監督はコーチの肩を叩きながら抱擁する。優勝の感動が二人の羞恥心を放念させたのだろう。扶沙子夫人の遺影を抱いた島野コーチが二人を見ている。カメラマンも感動し、映像が止まったままだ。

野球を愛する三人の男の無垢な友情と、青竹を割ったような男気が、コーチ達を、選手達を、そしてフロントの人達の心を一つにしたのだろう。優勝は、そんな男達への神様の贈り物かも知れない。

廣岡　明
1929 年　大阪市福島区生まれ
1945 年　池田中学校（旧制）卒
1950 年　関西学院大学経済学部卒
1984 年　大阪市役所退職

住所　大阪府豊中市服部南町 2
TEL(06)6864-2918

野球　捨てがたく候　阪神、優勝への記録

2003 年 12 月 20 日　紙版発行
2021 年 05月 20 日　電子出版発行

著　者 —— 廣岡　明
発行者 —— 桐生敏明

紙版発行 —— 株式会社かんぽうサービス
電子出版 —— 編集工房ＤＥＰ　TEL 0745-60-2696

©2003 Akira Hirooka Printed in Japan